
大地主と大魔女の娘

冴草みつな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大地主と大魔女の娘

【Nコード】

N8567N

【作者名】

冴草みつな

【あらすじ】

ある所に大地主がおりました。彼の所有する森の大魔女が亡くなり、後に残された娘が泣き暮らしていると聞き、彼は不承不承訪れてみました。そこで壊れたように泣きじゃくる黒髪黒目のカラスと呼ばれる娘に、大地主はこう言い放ちました。「大魔女が納めてこなかった足りない税金の分、しっかり役に立て。魔女の娘」不器用極まらないオトナのはずの男と同じくらい不器用で純粋な少女の物語です。

1 大地主（前書き）

二人の物語の、はじまり、はじまり

1 大地主

ボタンっ！！

という荒々しい音で目が覚めた。

何の音か。

思い当たるよりも早く、身体が動いていた。

[illegible]

扉を押し開いたらそのまま押しのけられたらしい、彼女が床に伏していた。

カランと乾いた音を立てて杖が転がった。

もう随分前から大魔女の娘が、杖無しでは歩けなくなっていたのは知っていた。

森の中で逃げ惑った挙句、崖から滑り落ちたのだと――。

娘の右足は足首からふくらはぎまでに掛けて、大きく引き^つ攣^りれて
いた。

それがまた、投げ出された足の白さを際立たせるのだ。

目のやり場にいささか困って視線を上げる。

$$\begin{array}{c} \vdots \\ \circ \end{array}$$

それはそれで、どうかという状況だった。

けしからん造りの部屋着の肩紐は外れ、浮き出た鎖骨にkarouji
て引っかかっているという状態だった。

なぜか普段は貧弱だと評して物笑いの種にしていたはずの、少女
の胸元から目が外せなかった。

確かに貧しいのは間違いが無い。

だがそれは貧しいのではなく、未だ幼いためなのだというのが正
しい気がした。

きっとこれから膨らみ行く命の輝きを秘めており、そこは眩いば
かりだった。

目も眩むとは正にこのこと。

少女は無防備すぎるほどに無防備で、まるで男の視線に晒される
事に何の疑問も抱いていない様子なのは明らかだった。

きっと男が女の何に目が行くのか等とは、考えも及ばないのだろ
う。

（誘っているのか）

そう都合良く解釈したくなるほどのあどけなさだった。

踏みにじりたくなるのは男の性さがだろう。

わからないままにその不穏な眼差しに、隠すべきところも隠さな
いまま彼女は身をすくめた。

首をすくめるから鎖骨が浮立ち、余計に胸元が強調されている。

この少女は成長過程にある、少女なのか？

本当に？

今まで相手にしてきたどんな女よりも漂う色香に、戸惑いが隠せなかつた。

•	•
○	○
•	•
	*
• •	• •
•	○
•	•
• •	• •
*	*
• •	• •
•	○
•	•
• •	• •
*	*
• •	• •
•	○
•	•
• •	• •
*	*
• •	• •

成長に回せるほど栄養が足りていないのだらうというのは、一目瞭然だった。

元よりか細すぎる手足に、頼りない胴回り。
眼下は落ち込み、頬だってこけ削がれている。

それがこのひと月の間で、彼女の心労具合を指し示す物差しだ。

この少女の祖母こと森の魔女が亡くなったという訃報は届いていた。

残された孫娘が泣き暮らしているという話とともにだ。

ただ泣きじゃくるだけで、食事はおろかろくに睡眠も取らずただ泣き暮らしているという。

そのうち溶けてしまうのは時間の問題だと。

嫌に大仰ぶつて伝えてくる側仕え達に腹が立った。

あまりの鬱陶しさに根負けしたのと、売り言葉と買い言葉の果てに、件の家を訪れるはめになったというワケだ。

そして知った。

何も大げさではない話だったと。

ただ寝台に身体を預けたまま、涙を流し続けている姿はただの精巧な人形が涙を流しているようにしか見えなかった。

従者が慣れた足取りで少女へと歩み寄る。

ただその後黙って続いた。

1 大地主（後書き）

『大地主』

今回のヒーローです。

よろしくお願いします。

短めでさくさく、日記（代わり？）のように、行きたいと思います！

※ 魔女っこの 足の描写を付け足しました。

2 魔女の娘（前書き）

魔女っこ目線

2 魔女の娘

戸口を塞いでしまうほどの大きな影が、今日はいつもより一つ多いようだ。

一人はいつものオトコノヒト。

おばあちゃんが亡くなってから、今日までずっと毎日訪れる人。

「大魔女の娘よ。食事はとりましたか？」

いつも同じことを同じ調子で繰り返してくる。

その間ももう一つの見慣れない大きな影は戸口に突っ立ったまま、動かないでいる。

戸口から差し込む光を遮ってしまうから、室内が暗く、また肌寒く感じられた。

彼は背に光を浴びたままなので、逆光でその表情は窺えないが何かしらあまりよい感情ではないのだけは伝わってくる。

それが室内を冷やすのだ。

コワイ。

恐怖を覚えて目を見張っていると、いつもと違うその人は、ぐいと私の手首を引っ掴んで引き上げた。

「立て。大魔女の娘。泣いている暇があるくらいなら、足りない税金の分しっかり働け」

そう早口に一息に告げると、私が返事をする間も待たずに担ぎ上

げてしまった。

そのまま、荷の様に馬に乘せられて連れて来られた。

そうして放り込まれた部屋で一夜を明かした。

いつの間にか眠り込んでしまっていたようだ。

しかし、荒々しく開かれた扉の音に驚いて逃げ出そうとし、向こうから押し開けられた扉に跳ね飛ばされていた。

「痛……っ」

うずくまって見上げた先に、大きく覆いかぶさるような人影に言葉が出てこなかった。

久方ぶりに間近で見た。

大地主様だ。

とても身体が大きくてがっしりとしており、いつも上等と解る服を着ておられる。

今日だって朝からとてもきっちりとした物を御召しになっている。

下着一枚の私とは雲泥の差だ。

おそろおそろ、その濃紺の瞳を窺うように見上げる。

そこにあるのはただ侮蔑の色。

険しい表情をしておられる。

髪とお揃いの薄茶色い、整えられたお髭のあるお顔。

それは、とっても偉そうに見えて、私はただただ平伏すしかない。

この方には気に入られていない。

それどころかむしろ盛大に嫌われている。

「お、おばあちゃんに心配をかけるといけないので、お暇やすみします」

転がった杖をこちらに寄せようとして、それから止とどまった。
言ってから思い出した。

おばあちゃんはどうもないのだった。どこにも。
この世のドコにも。

守りたい、ずっと守ってくれていたヒトはドコにももういない――
。

そう思い当たったら視界がぼやけた。

おばあちゃん。

この人、怖いよう……。

せつかく、止まっていたと思っていた涙が溢れた。

怖いのは何故だろう。

この方はワタシの事を百万回だってすり潰せるであろう、財力をお持ちだ。

それに抗う財など、生まれてからこの十七年間の間に一度だって持ち合わせた事の無いワタシ。

誰に軍配が上がるかなんて、あえて言葉にするまでも無い。
今だって庭先にたくさんの犬たちが見えた。

皆、訓練されたであろう狩猟犬であった。

どんな犬が狩に向いているかの知識があることを呪う。
嫌でも現況が絶望的と知れるではないか。

首輪は威嚇的なとんがりを首周りに持たせた造りであった。
しかも投げられた肉らしき塊を、互いに引き千切りあうという過
酷さだった。

こんなのがうようよしている庭に出たら最後、どうなるかなんて
考えたくも無い。

だからと言って抗う術も無い。

悔しい。屈辱以外の何物でもない。

(でも、もういいや。構うもんか)

どうせ家も土地もこの人に取られるだろうから。

そうしたらこの地を出て行くだけの話だ。

悔しいけどそうするより他は無い。

だからせめて泣き顔は晒すまいと顔を俯けた。

「このまま村に戻っても生きてはいけまい。持参金が無くては、嫁
の貰い手だってなからう」

「あの、お嫁さんに行けない？」

「そうだ」

それもそうに違いない。
だって。

こんな大きな家にたてつき続けたのだ。

しかもついに不興を買ってこうやって連行されてしまった。
噂はもうくまなく広がっているだろう。

何せ小さな村だもの。

誰だって厄介ごととは避けたいに決まっている。

それどころか明日からは村八分とやら決定だろう。

へタしたら野菜も売ってもらえないかもしれない。

それくらいならまだ可愛い方だ。

やはり、この土地を離れて遠くで生きていかなければあるまい。

おばあちゃんのお墓を放置したくは無かったが、致し方あるまい。その事でまた新たな痛みを覚える。

	○
•	● ○
	• • ✱ • •
	● ○
	● ○
• •	✱
• •	● ○
	●
• •	✱
• •	● ○
	●
• •	✱
• •	● ○
	●
• •	✱
• •	● ○
	●
• •	✱
• •	● ○
	●

「あの、私はお嫁に行くのですか？」

「いつか行くだろう」

「いいえ」

「何故だ？」

「魔女ですから」

何をおかしなことを言い出すのだろうかと思つた。

そうだ。魔女は魔女らしく、森の中で一生を慎ましく過ごすのだ。

一生着飾ることもなくひっそりと、ただ静寂に包まれて過ごす。

一生を喪に服しているようだとと言われても、それが通例だ。

もう一度首を捻ったら、物凄く睨まれた。

このヒトすごく煩わしそうで、私ごとき何か相手にするのめばかしいって態度に滲み出ている、やるせなくなるから辛い。

何もかも持っているヒトから、そういう目で見られるのは辛い。

自分の惨めさが浮き彫りになるから。

早く解放してくれないかな。

それだけを願った。

2 魔女の娘（後書き）

『大魔女の娘』

今回のヒロインです。

ちょっと

どころか かなり 後ろ暗くて すみません！

まだ、ショックから立ち直れていないんだもの。

※ 魔女っこ アイテム（↑？） 『杖』の描写追加しました。

3 大地主と大魔女の娘（前書き）

連続で さくさくと

3 大地主と大魔女の娘

最初の内、彼が何を言っているのかなんてさっぱり理解できなかった。

普段おばあちゃんとは古語でやり取りしていたせいだ。

公用語も一応は習得済みだったが、思考までもが古語といわれる言語よりの私には、いっかな彼の言葉は浸透してこなかったのだ。

だからただ怯えた。

その言葉の持つ響く余韻に苛立ちを感じ取って、狼が空腹で苛立つのと同じだと思った。

現状に不満がある。

彼の言葉の持つ響きは盛んにそう訴えていた。

どうやらそれは私に起因するものらしい。

ますますうろたえるしかなかった。

「おまえの祖母は生前、一度たりともまともに税金を納めた事が無いと村長から報告があった。大魔女の恩恵に預かる代わりに特例としてそうしていたのだな。だがこれからはそうもいかない。そもそもそれ自体、地主の俺には何の報告も無く、勝手にまかり通っていた事だ。おまえにも同じ事が言える。だからその分は働いて納めろ。言っている意味が解るな？」

何とか頷いた。

言っている事は解る。

でも全く浸透してこない。それだけだ。

彼がイライラしながらも、根気良く繰り返して言うという事は理解せねばなるまい。

その度に真似て、実際に言葉にして発した。

『魔法の娘、税金を納める、まだ、だから、その分、働く』

何の呪文かと切り替えされてもおかしくない。

何せ古語だから。

古の言の葉。

今の公用語に通じてこそいるが、今ではそれも薄らいでいる。

何せその言葉自体が持つ威力があまりに色濃くて、わざわざ薄めるために今の言葉に訛らせた……鈍^{なま}らせたという逸話があるくらいだ。

一応魔法としての知識としては基礎の基礎だ。

それにかつての公用語は上流階級の間でも、教養知識として嗜んでいる人が少なからずいるらしい。

その言葉によるかつての取引や、未だに暗黙裡の取引ごと等にそれらは暗号としてもってこいなのだ。

一般人との境目を引くために、この言葉使いの習得は一種の身分の象徴でもある。

要は上流階級でそれが許された生まれであるか、学者であるか――
――魔女であるか。

私自身馬鹿らしいとは思うものの、それもまた歴史の生み出した文化なのかもしれないとも感じている。

3 大地主と大魔女の娘（後書き）

「大地主と大魔女の娘」 今語。

『大地主と大魔女の娘』 古語。

……って事で お願いします。

（もうちょっと したら 詳しく説明出てきます）

4 魔女のほくろ（前書き）

4 魔女のほくら

「返済の意味はあるのだな」

「はい」

目線を合わせるように、片膝を折った地主様の目つきは鋭かった。私の発した言葉に嘘が無いかどうかを、見極めようとしておられるのかもしれない。

深く濃い藍色の双眸に、私の夜闇色はどう映るのだろうかと思ふと正直とても怖かった。

それでも精一杯、誠意を表すためにも見つめ返す。
引き寄せた杖を両手で握り締めた。

「……」

「……」

気まずい沈黙が続いた。

不意に彼の手が伸び、私のあごを持ち上げる。

思わず顔を背けようとしたが、許されなかった。

彼の骨ばった親指が唇をぐいとなぞる様に動き、口元で止まる。

左の下唇の少し、下。

そこに大きいという訳ではないが黒子ほくらがある。

彼の親指が何度かそこを行き来した。

汚れか何かと思われたのだろうか？

そう思い当たったら恥ずかしくて仕方が無かった。
もう放してほしくて、彼の手首にそっと手を重ねた。

「あの、」

「カサついている」

「はい」

それだけではない。

唇は乾ききってひび割れている。

少し大きく口を開くと裂けて血が滲んでしまう。

恥ずかしくなって視線を落とした。

目に入る腕も同じようにカサ付いている。少し痒い。

ここ一月ほど泣いてばかりいた。

だから体中の水分が足りなくなったのかもしれない。

身体を捻って腕をさすった。

私がいとも頼りにしている木を削った杖。

これも少し乾いた感触なのだが、それとはまた違った。

同じようできて違うその手触りを、何となく不快に感じた。

地主様も同じ事を感じて不快なのかもしれない。

眉頭は寄ったままで、表情には苦々しいものが浮かんで見える。

「まずは身支度を整えろ。そして食事を取れ。用意させる」

「お氣使いいただきまして、ありがとうございます。ですが恐れ多いので、お氣持ちだけいただきます。身支度を整えたらすぐに帰ります」

頭を下げる。

上げたとたんに、飛び込んできたのは一層顰^{ひそ}められた眉だった。

「オマエは働いて返済する意思があると言っただろう」

「はい」

「おまえは人の話を聞いていたのか？」

「はい。働いてお金を返さねばならないのですね。ですから、森に帰ります」

「だから、何故そうなる？」

何故、なぜ等と尋ね返されるのか。

驚きと戸惑いから目を見張る。

「魔女だからです。魔女は森の恩恵に預かっております。森の恵みが無ければ、私はお金を用意する事ができないと思います」

そう。

大魔女の娘の私ができる事は、傷薬を作ったり効能のある薬草のお茶を作ったり。

それを商って、お金を作って行くしか無いと思う。

「……その前に一人で大丈夫な訳がなからう」

「今までだって一人で大丈夫でしたが？」

ちっと鋭く舌打ちされた。

本気で何が言いたいのか分からない。

これなら、狼たちの気持ちの方がまだ理解できる。

4 魔女のほくら（後書き）

『つんでもそれほどにをこんせぷとに。』

何、この仮タイトル。

二人とも、ぎこちなくて先行き不安です。

そして言葉が足りない。

いつも他愛のない話をした。

最後に、税を納めていないのはこの家だけだと言い置く。

すると魔女は笑いながら、小瓶に詰めた軟膏やら薬草やらを手土産にと持たせてくれた。

時折り――木々の間、視界の端を闇色が掠めたような気がして、振り返りながら森を後にする。

そんな事を数年、繰り返した。

最後にしたやり取りは一ヶ月と少し前。

「あの子にはすべて伝えてきた。思い残す事など何も無いよ。あなたが森の恩恵に預かりたいというのなら、それは森に尋ねるがいいさ」

「ばあさん」

「わたしやもう行くよ。あんたが森をつぶそうが、どうしようが好きにしたらいい。ただ森は応えるだけだ」

「そういい残して大魔女は去って行った——逝ったのだ。」

.	
.	
o	
.	.
.	.
*	.
.	.
.	o
.	.
.	.
*	.
.	.
.	o
.	.
*	.
.	.
.	o
.	.
*	.
.	.
.	o
.	.
*	.
.	.

返済の意味はあるのかと訊いたら、あるとはつきり答えた娘。

その深い夜闇を湛えた瞳を逸らさずに言い切った。

気に入った。

それは俺の元に留まり仕える気があるのだという意味表示だと解釈した。

それなのに、娘は森へ帰るのだと言い出した。

不可解に思い尋ねれば、ますます頑なに自分は魔女であるからと言いつ張るのだ。

全くもって理解できない。

魔女はどこにしようと魔女だろう。

「おまえは働いて返すと言ったではないか」

「はい。だから、森に帰らないと材料を用意する事もままなりません」

「何か必要な物があればこちらで用意させる」

「それでは意味がないのです」

そのような堂々巡りを繰り返すうち、段々腹が立ってきた。
元より気が長いほうではない。

「税を納めずにいた者の土地は元より、家もこのロウニア家の所有物だろう。おまえはどこに帰ると言っているのだ？」

隙あらば這いずってでも、戸口に向おうとする娘の両手首を掴みあげる。

「森に……あそこが私の生きる場所」

なのに、と娘は心底悲しそうな呟きを漏らした。

堪え切れ無くなったらしく、涙が溢れ頬を伝った。

夜闇から零れる雫であっても、透明なそれは夜露を思わせた。

静かに涙を溢れ続ける姿に、何がもうそんな事を繰り返さないようにするだ、と思った。

どの口がそれを言う。

「おまえみたいなのが泣くと腹が立つ！」

思わず大きな声が出てしまっていた事を、悔やんだがそれは後悔でしかなかった。

要するに、遅かった。

出す前に悔やむべきでなければならなかった。

気がついて、次回に実行を回すしかない反省点だった。

「っ、う・・・えっうくー！」

恐怖に歪んだ表情のまま、少女は盛大にしゃくり上げた。

小さな獣が仕留められ最期の時に上げるような声は、こちらの胸までが締め上げられる。

泣かせたのは俺で間違いが無い。

「泣くな！」

狼狽がそのまま声に現れていて、情けない事この上なかった。

もちろん少女は泣き止まない。

5 魔女の涙（後書き）

『な〜かした〜な〜かした〜』

何この仮タイトル。

『なか せた』ではなく『なか し た』になっている辺りが、

作者の脳内までもが訛っていると物語っているようです。

あ〜あ〜。 いいオトナが〜。

6 魔女と美女と

バターンン……ンッ！

という余韻も残るほど、すさまじい勢いで扉が開け放たれていた。

何事かと二人思わず顔を見合わせた後、扉方向を見た。

そこにあるのは一目見て怒りとわかる雰囲気をもった、迫力ある美女の立ち姿だった。

まつげの長い色っぽい眼差しが、きつくこちらを睨み据えている。それが目の前の彼と同じ色合いをしている事に気が付いた。

艶めく巻き髪も、地主様と同じ色だ。

あまり似ていないが、地主様の血縁者かもしれない。

そんな文句のつけ様のない美女により、扉は全開にまで開け放たれている。

その後ろに控えめに立つ若い男性の姿もあった。

毎日のように、森の家を訪れてくれていた人だった。

彼に見覚えがあっただけに、色んな意味で驚いた。

これだけ怒りを巻き散らかしている美女は、それだけで恐れ多いものだ。

何も悪い事をしていなくても謝り倒したい気分させられる。

（それは私が下賤の者で、小心者だからかもしれないが。）

そんな美女の後ろに、平然といつもと変わらぬ様子で控えている彼は従者なのだろうか。

単純に、凄いと尊敬してしまう。

美女は迷い無く、こちらに歩み寄ってきた。

地主様が立ち上がって出迎える。

私は情けなくも怖くなって、俯いてしまった。

[illegible]

ベチンツという平たい乾いた音と共に「なっ!？」という素つ頓狂な声が上がった。

その声が先程まで、私を叱責していたのと同じ声だったので思わず顔を上げていた。

「ああ。この子が例の！　ありがとう。あんたはもういいから下がつて良いわ。見ちゃいけない」

しっしつと追い払うように、美女は右手をひらつかせる。

「姉上。――リヒヤエル」

側に仕えていた男性は頭を下げた。

「おはようございます、レオナルド様。ジルナ様をご案内致しました」

「オマエ……。」

「ちようど妹が欲しかったのよ。こんな可愛げのない弟じゃなくて」

見上げるといくらか左頬が不自然に赤い地主様と、艶やかに赤い唇を笑みの形にした美女が睨みあっていた。

「姉…うえ？　地主様のお姉さまでいらっしゃるのですか？」

思わず正直な感想が漏れてしまっていた。

どう見たって地主様の方が年上に見える。

地主様は恐らく40歳になるかならないくらいだろうか、と適当に見当つけていた。

彼の落ち着いた雰囲気や容貌、口ひげと顎鬚がいかにも大人の男性だと思っていたから。

にっこりと笑い掛けてくれる美女も、大人の魅力に溢れているが若々しい。

どう見たって25歳くらいにしか見えない。

「あら、ありがとう。レオナル、あなた相当、老けて見られているみたいね。ひげを伸ばすの止めて剃っちゃいなさいよ。そうしたら少しは年相応に見えるかもしれないよ？」

美女はほほと機嫌良く笑い声を上げて、地主様をからかう。

「……。」

地主様はむすつとして押し黙っている。

ますます機嫌を損ねてしまったようだ。

恐縮してしまう。

男の人は怖い。

この目の前のオトコノヒトは抜きん出て怖い。

あまりの衝撃に涙も引っ込んだのは言うまでもない。

6 魔女と美女と（後書き）

『魔女っこナチュラルに10代らしい目線。』

地主様、ドンマイの巻。

ザカリア・レオナル・ロウニア が 彼の正式名です。

ナディン・ジルナレッド・ロウニア が お姉さまの正式名です。

ジルナ様、姉という生きもの全開であらせますな。

7 魔女の名前（前書き）

『古語』なるものは作者の創作ですので、ご了承くださいませ。

7 魔女の名前

呆氣に取られている私に、美女は屈んで両手を取ってくれた。すべすべしている。

私のささくれた指先が、この綺麗な手を傷めやしないかと冷や冷やした。

不安が顔に出ていたのだろう。にっこりと微笑みかけられる。

改めて、と美女は仕切りなおすと私の頭を撫でる。

「はじめまして。わたくしはナディン・ジルナレッド・ロウニアよ。長いから、ジルナと呼んでちょうだいね」

「はじめまして、ジルナ様。大魔女の娘でございます」

頭を撫でてくれていた手が止まる。

ジルナ様が不思議そうなお顔をされた。

当然、名乗られたら名乗り返すのが礼儀だろう。

「あの、申しわけありません。魔女の定義で名前はその、名乗れないのです。便宜上『エイメ』でもお呼び下さい」

「古語で娘の意味ね。そのままなのね。そう……じゃあ、こう呼んでもいいかしら？ 『フィルナ』では失礼かしら。かわいいから、あなたにぴったりだと思うのだけど」

『フィルナ』とは雫という意味だ。

泣いているところを見せたからだろうか少し気恥ずかしかったが、嫌味は感じない。

迷い無く頷いて見せた。

「え、と、その。恐れ多いです。どうぞ好きなようにお呼び下さいませ」

「そこに突っ立っているのが弟よ」

「はい。地主様でいらっしゃいますね」

「……。」

「レオナル！ 貴方は挨拶もちゃんと出来ないの！」

いきなりジルナ様が振り返って地主様をなじった事に驚く。

「……ザカリア・レオナル・ロウニアだ。おまえの事は『カルヴィナ』と呼ぼう、大魔女の娘」

『カルヴィナ』は夜露を意味する古語だ。

正直、驚いた。

何故かしら鼓動が大きく跳ね上がった。

やはり、この瞳の色と泣いてばかりいるからだろうか。

ジルナ様とは違って、カルヴィナと呼んで良いか？ 等とは訊かずに決定を言い渡されたのだと思う。

反対する気など無かったが、ここはどう答えるべきなのだろうか。気まずい沈黙が続く。

かと思ったら、明るい賞賛の声が上がった。

「あら！ レオナルにしてはやるじゃない」

「ええ。意外でした」

「リヒャエル。貴様は先程から何を言いたい」

そのお付の人は地主様に凄まれても、意味ありげに唇の端を持ち上げて見せただけだ。

彼もゆっくりと片膝を折ってから、胸に手を当てて私を見た。

透明な空色の瞳は綺麗な青空みたいだ。

私の夜闇を映す瞳とはまるであべこべだ。

彼が頭を少し傾けると、一緒に灰色の髪も一すじ頬に流れる。髪の色は曇り空のようだな、とぼんやりと思う。

「改めて、よろしくお願いします。リヒヤエル・エルンデです。長つたらしいのでエルとでもお呼びください、『エイメリイ』様」

『エイメリイ』それは少しくだけた、お嬢さんという呼び掛けだ。

「お嬢さん、さま？」

「ええ」

『変なの。様、いません』

思わず古語のまま返して、くすくす笑ってしまった。

「ええ、『エイメリイ』様」

なおも繰り返されて、おかしかった。

久しぶりに笑った気がする。

にこにこしてくれるエルさんは、とても優しいそうだ。

「レオナル。貴方、負けてるわよ」

ジルナ様が振り返って地主様に声を掛けたが、意味がわからなかった。

ちらと見上げて、様子を窺うと地主様と目が合う。

彼は何も答えず黙って立っているだけだった。

。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

名乗りあってから、暇いそぎを告げるとやんわりと拒否きひされた。

「まずは着替えて、朝食にしましょう？　ね？　私と一緒に嫌かしら」

「そんな事ありませんが、恐れ多いです」

「嬉しいわ。じゃあ早速、着替えましょうね。さあ、男どもは出て行きなさい！」

びしりと扉へと指差され、二人は素直に出て行った。

パタンと扉が閉まったのを見届けてから、ジルナ様はそりゃあいい笑顔で微笑み掛けて下さった。

少し怯んで、引きつった笑顔で何とか応えたつもりだ。

ジルナ様は私を慎重に立たせると、うきうきと鏡の前に引っ張っていく。

鏡の中で虚ろな瞳とかち合った。

泣いたから瞳は赤く、目蓋は腫れている。

黒い髪はぱさついて、まとまりも無い。

頬はやつれ、目の大きさだけが嫌に目立つ。

唇もひび割れていた。

全体的にひどい有様だった。

久しぶりに自分を見た気がする。

7 魔女の名前（後書き）

『エイメ』 むすめ。

『フィルナ』 しずく。

『カルヴィナ』 よつゆ。

『エイメリイ』 お嬢さん。

こんな調子でちらほら出てきます。

誰がどうみたって、エルのリードの巻。

8 魔女の食事

魔女の娘に施す食事など無い。

そのスープはそう訴えていた。

怖かった。一口くちにしたらたん、思わずむせた。

申し訳ないから堪えて飲み込んだら、胸もお腹も痛みだした。

苦しい。

歓迎されていないのをこうやって身をもって知るの辛いと思う。

身動き出来なかった。

二口目を口に運ぶ勇氣は無かった。

「お願いですから一口でも多く召し上がって下さい」

そう泣きそうな表情で訴えられて、驚きに目を見張った。

（どうして？ 私があまり食べないでいるだけで、泣きそうな顔をするの？）

ここのお屋敷に勤めている女の人たちは、出会ったばかりの私にとても優しくしてくれる。

いつも着替えや食事の事をあれこれと世話を焼いてくれるのだ。申し訳なく思っていた。

きっと仕事を増やしているに違いないから、なるべく大人しくし

ていようと決めている。

もちろん、彼女たちの意向に沿いたい。

すっかり湯気の上がらなくなったスープを見下ろした。

これを全部飲み干したら、彼女たちは安心してくれるだろうか。

でも飲み干した後の体調に自信は無かった。

「どうして食事を取らない。口に合わないと言っても言うのか」

「ええと。そんな事はございません。ただ、あの、こんなに豪華な物を、私が食べて良いのかと恐れ多く感じるのです」

先に食事を終えられた、地主様の表情が険しくなる。

重苦しいため息と共に、また何を言い出すのかと問われた。

「誰かに何か言われたのか？」

「いいえ」

そうとしか言えなかった。言えるわけが無い。

「ならば変な遠慮などせずにしっかり食事を取れ。おまえはまず、真っ当な生活を送れるようになるのが仕事だ」

「はい、地主様」

意を決して、恐るおそる匙を口に運んだ。

何とか飲み込む。

「げほっ、げほっ……っ」

やはりむせてしまった。

クルシイ。

情けなくて涙が滲む。

申し訳なくて顔を上げられずにいると、背中に温かなぬくもりを感じて振り返った。

いつも世話を焼いてくれるお姉さんが、背をさすってくれていた。

また、泣き出しそうな顔だった。
慌てて頷く。

「地主様。お嬢さまは食べたくてもまだお体が弱ってらして、受け付けないのだと思いますわ。ですから、どうか無理に急かしたりはされませぬように、お願い申し上げます」

「……そのようだな」

「どうかお嬢さまは、わたくし共にお任せいただけませんか？」
元氣になれるような、あまい果物なども用意して参りますわ」
「わかった。任せよう」

地主様は勢い良く立ち上がると、背を向けた。

大またで扉の方へと向うと、出て行く前に大きなため息をつく。

「まったく、面倒な娘だな」

本当にその通りだと思う。

$\bullet$

$\circ$

$\bullet$

$\bullet$

$\bullet$

$\dots$

$\times$

$\dots$

$\bullet$

$\circ$

$\bullet$

$\dots$

$\times$

$\dots$

$\bullet$

$\circ$

$\bullet$

$\dots$

$\times$

$\dots$

$\bullet$

$\circ$

$\bullet$

$\dots$

$\times$

$\dots$

主が連れ歸つたという魔女の娘。

森のあばら家に住んでいたという。

そんな貧相な小娘が、地主様と同じ食事の席に着くと聞いて腹が立った。

魔女の娘に食べさせるために、俺は料理人になった訳ではないのだ。

痩せこけたあの娘に何とか食事を摂らせようと、女達は必死の様子だった。

今日は私の作ったものは召し上がったの、お礼を述べてから謝られたのだとひっきりなしに意見交換をしている。

なぜ、料理人の俺のは受け付けず、女どものならいいのか。

（きつと魔女だからあんまり高級な食事は口に合わないんだろうさ！）

確かに女達の素朴だが愛情こもった家庭料理の方が、魔女の娘にはなじみが良からう。

俺の作ったものにケチを付ける魔女など、目障りだと思った。

[illegible]

あ、
と思つて自然に頬が緩んだ。

雨の降る気配がする。

ふるふる、降る降る、振る振る、ふるふる。

静かに細かく大気が揺れて、芽吹き始めたばかりの植物達が歓喜

「そうですね。しいて言えば人間だからだと思いますよ。そこに困っている人がいたら、誰だって手を差し伸べたいと思うものですよ」

「誰でも？」

「はい。そうですよ」

「私の事、面倒だって言ったあの人も？」

「あの時のアレは……あの方ときたらもう！ そんな言い方しか出来なんでしょうからね。それは、」

そこで彼女は誰もいないはずの部屋を見渡すと、声を落としてこう囁いた。

——それは真逆の意味ですわ。言葉通りに受け取られませぬよう。

意味が解らなかった。

魔女にとっての言葉は発されたそのままの意味、すなわち力を持つのだ。

8 魔女の食事（後書き）

『魔女っこの人の感情に敏感』

あれあれ。

厨房にもどうしようもないのがいそうですね。

お姉さんたちは魔女っこの味方です。

9 魔女へのご機嫌伺い（前書き）

9 魔女へのご機嫌伺い

鮮やかな色彩の洪水に飲まれて泣きたくなる。

カラス色が嫌でも強調されてしまう。

鏡に映った自分の黒髪だけが、その色調を訴えているかのように見えた。

この黒い髪は何もかもを飲み潰す、闇色なのだ。

「まあ！ ほら、思ったとおりで赤と淡い黄色がよく似合う。かわいいわ！ ……どうかした？」

鏡の中覗き込まれて、一緒に映った人物の持った鮮やかさに気後れする。

あの、あのお方と同じ明るい茶の髪と濃紺の瞳がすぐ側にあった。思わず瞳を固く閉じてしまった。

「あの、お気使いありがとうございます。でも、その、あんまりにも分不相応で恐れ多いです。私よりジルナ様がまとうべき色です」

「どうして？ 何か言われたかしら。あの愚弟に。言われたのね」

質問どころか、既にそう決めつけた発言に慌てて首を振る。

「あの、その、着慣れなくて。だから違和感があった」
「少し待っていてね？」

「はい」

待っていてもなかなか帰ってこれない。

このまま、こんなに身にそぐわない服装をしているのも気が引ける。

そう思ったから着替えにかかった。

まさかいつまでもドレスで居る訳に行かない。

綺麗にシワにならないよう、細心の注意を払って寝台に置く。

[illegible]

ためらいがちにしすぎたせい、ノックの音に返事は無かった。

しばらく間を置いてからもう一度してみたが、中からは何の反応も返ってこない。

「入るぞ」

一応声は掛けたから良しとしてそつと窺つて見れば、娘は寝台にもたれかかるようにして眠っていた。

下着姿で。

「ちよつと、レオナル！」

ノックとほぼ同時に部屋の扉が開いた。

「姉上。俺は今忙しいのですが」

「だから何？」

読み進めていた資料をひったくるように取られ、ようやく姉を見上げる。

「何用でしょうか？」

「今すぐに、あの子の所へご機嫌伺いに行きなさい」

「何故、俺が」

「貴方が悪いからよ」

意味がわからない。

しかしこのまま無視すれば、仕事に戻れそうもない事だけはわかった。

寝台に頭だけを乗せる格好で少女は目蓋を閉じていた。

華奢な肩紐も腕と同じく、くったりと滑り落ちている。

この娘が元より華奢すぎるせいだ、規制の物では少々大きすぎるようだ。

館に子供用は見当たらないし、間に合わせではこのようになるの
 だろう事は初日から気がついていた。

やはり、至急仕立て屋を呼ぼうと決意する。

それよりもまずはこの現状をどうするかが問題だった。

「……。」

声を掛けようとして躊躇う。ためら

まず、間違いなく娘が怯え慌てふためく様が浮かんだからだ。

細心の注意を払って、娘を抱え上げる。

とたんに手のひらに伝わるまるやかさと温かさが、愛玩動物を思わせた。

くったりと身を預ける身体は、小さいながらもしっかりとした熱を持っている。

あたたかい。

それは生まれたばかりであった愛犬を抱き上げた時の感覚に似ていた。

浮遊感に僅かに顔をしかめた娘に内心焦りながらも、どうにかシートにくるんでやる事に成功する。

意味はあまり成さない肩紐も指先で掛け直し、やっと落ち着いて少女をまともに見ることが出来た。

ご機嫌伺い。

こんなにも無防備に眠っておきながら、ひとたび目を覚ませばコレは心底怯えた眼差しをこちらに向けるのだ。

『エイメリイ』とでも呼んでやれば良いのだろうか。

そうしたらこの娘は笑顔を見せるのか？

リヒヤエルに『エイメリイ』様と呼ばれて、くすぐったそうに笑い声を上げていた。

「……。」

何故かそこで不愉快だと思った。

無性に苛立つつとも言えいいのか。

不可解だった。

見下ろす娘はよく眠っている。

ふと気が付けば、娘の口元のほくろをなぞっていた。

そのまま首筋をたどる。

鎖骨の下、胸元にもほくろがあった。

それがかえって白い肌を際立たせているようにも見えた。

——娘はよく眠っている。

。。*。。*。。*。。*。。*。。*。。*

コ・ココン！ という軽やかなノックと同時に扉が開け放たれていた。

「レっ……！」

姉が何か言葉を発しようとして、すぐに慌てたように引っ込めた。

おそらく発されるはずだった、罵りの言葉の代わりにクツションを顔に当てられたが。

9 魔女へのご機嫌伺い（後書き）

『魔女っこドレスを脱いでうたたね』

ずっとドレスでいるという感覚が、この子にはありません。

ジルナ様が着てみて、と言ったから着てみました。

着終わったから、終了という感覚。

レオナル、間違いなくむつつり何とかですな。

10 魔女と客人（前書き）

新登場
＼

10 魔女と客人

「ああ、その君」

突然声を掛けられた。

振り返ると、これまた見たことの無い男性がこちらを見下ろしていた。

石柱に寄りかかるようにして、彼はこちらを眺めている。

（いつのまに？）

中庭を眺める事に気を取られていて、まるで気配に気が付かなかった。

金糸で刺繍された上着の襟元をゆったりと緩めて着崩しているが、一目で上等と解る身なりのよさだった。

明るい日差しがより一層、この男性の金髪を軽やかなものに印象付けている。

少しくせがある、ふわふわと空気をはらんでいる髪が風にさらわれる。

コツコツと石床に当たる靴音すら、軽やかなステップのように聞えるから不思議だ。

雨に濡れた葉っぱと同じくらい鮮やかな、明るい緑色の瞳に見つめられる。

「ふうん」

しげしげと見定められたが、よくある事なのであまり気にならない。

確かにこの色合いは珍しい。

私も、自分以外のこの色の持ち主を知らない。

「珍しい色合いだね」

彼はさざりと言った。

まるで「珍しい毛並の子犬が産まれたね」というのと同じ調子で。

「聞きしに勝る見事なカラス娘だ。何故こんな所に君がいるのかな？」

「私のほうが知りたいです」

「うわ！ 口を利いた！ 賢いんだな！」

「……。」

馬鹿にしているのだろうか。

それともこの彼自身が馬鹿なのだろうか。

馬鹿にされたような気がしないでもないが、あまりに真剣な表情で驚くから本気のようなだ。

おつむは大丈夫なのだろうか、この人。

そんな心配に気が行っていて、彼の何やら楽しそうな企み顔にまでは気が回らなかった。

かざされた手のひらに怯む間もなく、頭と顔をもみくちにされていた。

「あはは！ かわいい、かわいい！ お利口さんだな、君、名前は？」

「……。」

答えていいものかどうか真剣に悩んだ。

告げたところで彼に理解できるのだろうか。

地主様たちと同じようなやり取りをした所で、彼が納得するとも思えない。

しまいには「名乗れない？ 何、名前が無いの？ だったら名づけてあげるよ！」と本気で言い出しかねない。

ご勘弁願いたい。

きつともものすごく、とんでもない名前になる気がする。

黙ったまま訝しげな視線を向ける。

彼の唇の両端がぐっと持ち上がる。

「うっわあ、いい手触りだね。さすが大地主様の所のコは、みんな毛並がいいなあ」

みんな？

他に誰を指して言っているのだろう。

そこで、地主様に飼われている猟犬たちが浮かぶのは何故だろうか。

ぐわっしゃ、ぐわっしゃ、と頭を盛大に撫でられた。

これ、絶対に嫌がらせだ。

「ねえ。君、名前は？」

「名前、は、すみませんが名乗れないのです」

「そう」

意外にも彼はそれ以上の追求はしてこなかった。

ただ、ふんと鼻を一つ鳴らしたくらいだった。

「誰にも名乗らず、呼ばせもしないのならば、君は名無しと同じやないか」

「まあ、あるにはあるのですが……便宜上、エイメとお呼び下さい」
『娘！？』

「はい」

「何それ」

「便宜上ですから」

この方も古語の意味が解ったようだ。
ひとまず馬鹿では無さそうだと安心する。（アホウかもしれないが。）

大げさに右に左にと、頭を撫でさする手が止まった。

しかし彼の大きな手のひらは頭に置かれたままだ。

窺うように見上げると、何やら考え込んでいるようだった。

そうか——などと呟いている。

「よし！　じゃあ君の事はフルル、と呼ぶことにしよう」

「ふるる、ですか？」

「嫌？」

何故。

そう思ったが黙っていた。

しかし視線がそう訴えていたのだろう。

彼は再び、私の頭を盛大に撫でながら説明しだした。

「君さー、ふるふる震えてるみたいに歩いていたし、子犬みたいに全部がふるふるしてて可愛いから！」

私の瞳を面白そうに見つめ返しながら、彼はそうのたまった。

やっぱり！　彼に心配りを期待してはいけないようだ。

それに心使いの方も欠けている。

「……。」

手にしていた杖を、思わず振り上げてしまいそうになったが堪えた。

ぎゅっと力を入れて杖を握ったせい、身体が小刻みに震え出す。

「じゃあ、ケインだ」

イキナリ強そうな名前だ。

「前にボクが飼っていた黒い獺犬の名だよ。かつこいいだろう？」
頷けるものか！ 頷いたら最後、彼からはケインと呼ばれるだろう。

それ以前に彼の元・飼いだの名前って!?

とんでもない二者択一だ。

恐らくここで選ばねば、いつまでも彼のおもちやからは解放されないだろう。

消去法でいくならばしぶしぶフルの方で、と呟かずにはいられなかった。

その答えに満足したのか、彼はにっこりと満面の笑みを見せた。

ぽん、ぽんと頭を軽く叩かれる。

どうあっても彼にとって私の位置は飼犬のようだ。

ただ尻尾が無いだけで、人の言葉を話す犬にしか見えていないの
だろう。

「じゃあ、フルル。ご主人様のお部屋までお茶とお菓子をお届けし
て、お客様のおもてなしをしてね？」

そう言い置くと片手をひらひらさせながら、立ち去って行った。

その背をぼんやりと見送りながら、髪を撫で付けて整える。

せつかくお姉さん達がきれいにまとめ上げてくれていたのに、台無しだ。

[illegible]

見た目も口調も軽やかな方だ。

そしてふるまいも。

きっと何もかも思うように、自由にして良いご身分なのだろうと推測する。

適当に名乗れば良かったのだ。

あんなお方に生真面目に対応してしまった己こそ、馬鹿だと思った。

10 魔女と客人（後書き）

『魔女っこは結構気が強い。』

馬鹿にされたらきちんと腹を立てます。

でも堪えた様子。

弱気と強気を行ったり来たり。

11 地主と友人（前書き）

地主と 自称、友人。

「ははは。ひどいなあ」

11 地主と友人

「来たよ」

「呼んでない」

「嫌だなあ。だからこそ、氣を使って来てあげたんじゃないか」

いつも通り予告もなく、ふらりと勝手にやってきた男を睨む。

のらくらとした口調に騙されてはいけない。

コイツの持つ隙の無い身のこなしと、優しげな顔立ちで惑わされやすいが、目つきの鋭さは油断がならない。

相変らず、笑みを浮べているくせに目は笑っていない。

奥底で何かを見逃さないよう、見極めようと光らせている。

胡散臭い奴だ。

こちらに歩み寄ってくる男に、椅子に腰掛けたまま視線を投げた。

「本当に何をしにきた、スレン？」

「ん？ 見に来た」

ニンマリと笑いかけられて、ゲンナリした。

この男に笑いかけられると、経験上ろくな事が無い前触れだ。

「何を」

「決まっている。あのコだよ！ フルル」

「フルル？」

「ああ。名乗れない、エイメとか呼べとかいうからボクが直々に名前を付けてあげたんだ。ぴったりでしょ？」

「話したのか？」

「うん。ね、ぴったりでしょ。フルルで」

おどけて言い放つスレンの神経を疑った。

勝手に目の前の椅子に腰掛け、足を組んで伸びをしながらこちらを窺ってくる。

いつまでも娘に対して口を割らない俺に対して、シビレを切らし始めているのだろう。

かすかな苛立ちを感じた。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「……。」

確かに彼女を表すには適切な気がしたが、娘の扱いとしては不適切だ。

彼女の身体が頼りなげに揺れるのは、彼女のせいでも望みでもないはずだ。

足を引き摺りながら歩くたび揺れる、空気を孕んだ黒髪が浮かぶ。その娘の瞳はいつだって潤んでいた。

「珍しい事もあるものだと思って」

「何？」

「地主様が大魔女の娘を引き取ったって聞いて、興味を覚えない人間なんているのかな？」

「くだらん」

「ふふ。彼女の事、大魔女に託されたの？」

「まさか！」

「そう。ならやっぱり気に入ったんだ」

「何でそうなる！」

「ムキにならなくてもいいと思うけどー。じゃあ何で側においてお

くのさ？ フルルは森で生活してたんでしょ？ そのままにしておけばいいじゃないか。魔女の娘には森が必用でしょ」

「オマエに関係ないだろう」

「あるだろ。おおありだね。だってさ、お嫁さんにするために攫ってきたって噂が立ってるよ」

「……は！？」

何でそうなるのか理解できない。

しかも、どこで立っている噂なのか。

大方、スレンの知る範囲内のごくごく狭いものだろうが、釈然としなかった。

「フルル、可愛いよね。控えめで、でも度胸があるみたいでこつちをまっすぐ見てくる様が……気に入った」

言い切った男を見上げる。

「まっすぐ見てくる？ 人違いじゃないのか」

「フルル、大きなおめめでじつとこつちを見上げてきてくれたけど。何？ 君には懷いてくれないんだ」

「……。」

「手触りも良かったな。何？ 毎日ちゃんとブラッシングしてあげてるの？」

「そんなわけあるか」

「同じことでしょ」

「何がだ」

本当にこの男の言う事はいつだって不可解だ。そして不快だ。

「綺麗に髪を梳ってもらっていたね、あの子。そして仕立てられた

服を着せられていた。それは地主様、君の配慮があつたからだ。例え召使の世話だとしても、君がやってやったのと変わらないって事やあ！」

「何が言いたい？」

「やあゝ！ めでたいなと思ってさ！ やつと地主様も身を固める気になったんだな」と、友人代表としてお祝いに来た」

「勝手に決め付けるな！ あんな發育不全の小娘に、誰がなびくか。しかも足を引き摺って歩く障害者の、みすばらしい小娘だ。しかもカラスだぞ？　くだらん」

腹立ちに任せて言い放ち、立ち上がった。

コイツとはこれ以上、話していても時間の無駄だ。

そう思い扉を勢い良く引く。

がちゅん、と大きな音がした。

扉の前で茶器をのせたワゴンを押した娘が、震えながら立っていた。

「だってさ。聞いた？
ヒドイよねえ、フルル？」

やあ、まちくたびれたよ。

咽喉が渴いたからお茶を早くね？

スレンが手招きしながら、娘に命じるのを忌々しい思いで聞く。

「は、
い」

答える娘は声までが震えていた。

11 地主と友人（後書き）

『スレンはくせ者・食わせ者』

あああゝ。

やっちゃったね、地主様。

どうオトシマエつけるんだよう！

スレンは面白がってますね。

12 地主と娘と客人と

「だってさ。ヒドイよねえ、フルル？」

やあ、まちくたびれたよ。

咽喉が渴いたからお茶を早くね？

$\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\times$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\times$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\times$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\times$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$

さつきから促がす、男の人の声もどこか遠い。

「はい」

それでも何とか返事をした。

呼吸を整えて努^{つと}めて平静を装う。

ここで震えでもしたら、もつとからかわれるだろう。

私ではなく地主様の方が、だ。

そうだったら彼はもっと気分を害するに違いない。

扉のまん前で立ったまま動かない地主様の肩に手を掛けて、押しよけるようにすると、招き入れられた。

立つたままの男の二人に囲まれて見下ろされたまま、お茶を淹れる。

いい香りがしたが、少し弱かった。

せつかくの淹れたたのお茶も、ここに来るまでに冷めてしまった
ためだろう。

「ずいぶん遅かったんだね？ まあおかげ様なのか、ちょうど飲み頃だけどさ。でもちよっと飲み頃過ぎ？」

お茶は冷ましながらか飲むのがいいんだよね」

立ったままでごくごく飲み干した彼が、そう言いながらカップを差し出してきた。

「もうしわけあり、ありませんでした」

謝りながら二杯目をついだ。

手元が少しぶれた。

立ったままで給仕をするから、右足にあまり体重を長く掛けていられないせいから、だと思う。

（不安定だから）

手元が震える。

それもまた飲み干される。

地主様の分も淹れたのだが、彼は黙ってこちらを見下ろしたままで動かない。

少しこぼれてしまったお茶がカップを濡らしてしまっていた。

それを慎重に手布で拭いたが、地主様は手を伸ばされてこない。

「客人はしっかり御もてなしするのが礼儀だよ、フルル」

「……はい」

小さな焼き菓子を小皿に取り分けて差し出した所で、がくんと右足が膝から折れた。

大きく身体が後ろに崩れる。

しまったと思ったがどうにも出来なかった。

ただ目を閉じて、腰を打ち付ける瞬間に備える。

「おっと！ フルルはまともに立ってもいられないんだね」

後ろから抱き止められていた。

早く解放されたくて、一息に言い放っていた。

むしろさり気なく、力を込められた事に言いようの無い恐れが、
身体を駆け巡る。

「フルル、今日から僕の屋敷のコになるんだよ」

ぞつとした。

そういう方向で話が決まっていたという事なのだろうか？

めの相談をしていたのか。

地主様の押し殺したような低い声に、私の方が緊張する。

「嫌だね。放したらこの子は転ぶ」

「聞こえないのか、スレン。放してやれ」

「フルルは可愛いなあ。子供みたいな身体で、震えながら歩くんだもの。ずっとそのままでないよね。フルルの良さが解らない誰かさんとは違って、僕が可愛がってあげるから」

「かわ、かわいいがる？」

犬みたいに？

何の事なのか。

気がつけば腰にがっしりとした腕が回され、頭のとっぺんに口付けを落とされていた。

もがいたが逃れようが無い。

「うん、そう。うんと綺麗に着飾っておくでしょう。ちゃんと栄養のあるものを食べさせてあげるから、まるまると太るといい。そして夜は一緒に眠ろうか」

「……い、や」

嫌だ。

怖い。

気持ち悪い。

「いい加減にしろ、スレン！！」

バタンツと扉が開け放たれていた。

地主様が客人の横つ面を殴り飛ばしたからだ。

当然の事ながら、抱えられていた私の身体ごと吹っ飛んだ。

浮遊感に目を閉じかけたが、次の瞬間には驚きから目を見開いていた。

地主様は客人の腕の緩んだ隙について、私の身体をもぎ取るようにして抱きかかえてくれた。

そしてすぐさま、椅子に腰掛けさせてくれたのだ。

地主様は私に大きな背を向けて、怒りの声を客人に鋭くぶつける。

「スレン、外に出ろ」

「言われずともそうするよ。またね、フルル。ボクは諦めないからね」

（諦めない？ 何を言っているの、この人）

ざあっと体中の血が引き下がった感覚に、大きく身体が震え上がった。

「オマエはしばらく部屋から出るな。そして余計な事をするな」

振り返らずにカラス風情がと吐き捨てられたのが、耳に届く。

咄嗟に頭を下げ、深く詫びる。

視界の端で彼の表情が歪むのが見えた。

普通だったら不興を買った召使いは、急いで退室するなりするの
だろうが、いかんせん私の足では時間がかかる。

だからか。

彼のほうが出て行った。

そういう事かもしれない。

杖は――？

杖は厨房に立て掛けたまま、忘れてきていた。

12 地主と娘と客人と（後書き）

『お茶出し魔女っこ。』

だから何、この仮タイトル。

魔女っこ、色々とショックで思考も行動も麻痺しています。

いきなり、ド修羅場にますますショックを隠しきれません。

うん。

これからもどんどん、君はこういう場面に出くわすんだよ。

13 召使いと料理人

厨房に現れた少女に誰もが注目した。

この所ずっと噂の中心人物なのだから、誰でも驚くというものだろう。

今先程までも、今日は何をこさえ、召し上がっていただこうかという話で厨房はわいていた。

女たちは嬉しさに驚いた声を上げ、男どもは気恥ずかしさからか、しかめっ面になった。

「あの、お忙しいところ申しわけありません」

意を決したような表情ではっきりそう述べると、頭を下げる。

何故か私が結い上げたはずの髪が、崩れ掛けているのが気にかかった。

それよりも顔を上げた彼女の、縋るような瞳の方が訴えてくるものがある。

（うん。いるよね、勇気。知らない人ばかりの中に来て、声を掛けるのって）

少女は杖をついて立っていた。

その様子があまりに健気で胸が締め付けられた。

「いいえ、いいえ、構いませんよ、お嬢さま。どうかされましたか？」

「あの、地主様のお客様にお茶とお菓子の用意をするように言いました」

「お客様？」

今日、来客の予定があったとは聞いていない。

と、言う事は……。

皆の表情が「ああ、あの方か。またふらりと勝手にやってきて地主様にケンカでもふっかけにきたのだろう」と物語る。

「失礼ですがその、地主様に命じられたのですか？」

「いいえ。そのお客様という、背の高い金の髪の方にです」

「……。」

一同、顔を見合わせた。

「わかりました、お嬢さま。私たちがすぐに参りますから、お任せください」

笑顔で請け負うと、彼女は遠慮がちにゆるゆると首を横に振った。

「ありがとうございます。でも、私にやらせていただけませんか？」

「……わかりました」

一瞬ためらってしまったため、返事が遅れた。

彼女の足では負担が大きかろうと思ったからだ。

だが、それもどうだろう。

彼女に対して失礼ではないか？

このコが役に立とうと色々と必死であることを、私は知っている。「役に立て」と地主様に言われ連れて来られたのだそうだが、具体的にはまだ何も示されていない。

せいぜい「きちんと食事を取れ」くらいのものだった。

だからこそ、自分の立ち位置があやふやで少女は途惑っている。

言葉も配慮もいまひとつ足りない主がまた、余計な事を言うものだからなお更だ。

素直に「側にいてくれるだけで充分だ」と伝えればいいものを……。

そんな想いは胸に秘めて、お茶とお菓子の仕度を整える。

お茶菓子程度の重さだが、そこは夕食用などを載せる頑丈なワゴンを選ぶ。

少しばかりかさ張るが、この方が彼女の体重も支え易かろうという配慮からだ。

彼女に茶葉の説明をしてから送り出した。

その背を見守る。

少しばかり、足の運びがうまく行かない時もあるようだ。

その度に体勢を立て直しながら進んでいるようだ。

彼女が廊下を曲がって姿が見えなくなるまで、そっと見送り続けた。

振り返ると、何食わぬ顔で野菜の下ごしらえをしていた男と目が合った。

すぐさまふり払うように視線を引き剥がされたが、私は彼の様子をじっと見つめた。

いつも私たちが「お嬢さまに何をお出ししようか?」と相談していると、「魔女には適当にそこの野草で充分じゃないのか?」等と憎まれ口を叩いて、無視されている料理人だ。

彼女が自分の作った料理を、受け付けられないでいる事も知っている。

きつと色々、気になって仕方が無いに違いない。

	○
●	
	○
●	●
● ●	*
● ●	●
	○
● ●	*
● ●	●
	○
●	●
● ●	*
● ●	●
	○
●	●
● ●	*
● ●	●
	○
●	●
● ●	*
● ●	●

しばらく皆で他愛ない話をして、お茶を飲んだ。

誰も彼女の事を口に出さないでいるが、気になって仕方が無いのだと思う。

何となく気もそぞろで、そわそわと落ち着かない。

「ああ、いけない！ お嬢様のワゴンに代えのお湯を準備するのを忘れていたわ！」

いそいそと立ち上がって、ティーポットにお湯をたつぷりと準備した。

もちろん、方便である。

「まあ、たいへん。早くお届けしなくっちゃね」

「頼んだわよ」

そんなわざとらしくもありがたい言葉を背に受けて、ワゴンを押し進める。

そんな疑問を口にするよりも早く、バンッと乱暴に扉が開け放たれる音がした。

急いで向かう途中で、主の怒鳴り声が聞こえてくる。

「スレン、外に出ろ！」

「オマエはしばらく部屋から出るな。そして余計な事をするな」

ああ、案の定である。

男二人の諍いいさかの渦中で、彼女は怯えているに違いない。

主の部屋の前に駆けつけ、頭を下げて控える。

「カラス娘に余計な事をさせるな。面倒が増えるばかりだ」

お茶の準備をした事が余計な事だとしても言うのだろうか。
納得いかなかったが、黙って頭を深く下げるしかない。

「いいのかな？ そんなこと言って」

「スレン、おまえはいい加減黙れ！」

「フルルが可哀相で黙ってなんていられないよ」

言い合いながら遠ざかる二人に、もうおよし下さいと叫んでしま
いそうだった。

「失礼いたします！ お嬢さま、大丈夫でございますか？」

開けっ放しの扉の向こうに飛び込む。

⋮

椅子に身を縮めるようにして、少女は静かに涙を溢れさせていた。

	○
●	
	○
●	
● ●	*
● ●	
●	○
● ●	
* ●	
● ●	
●	○
●	
● ●	*
● ●	
●	○
●	
● ●	*
● ●	
●	○
●	
● ●	*
● ●	
●	

主と客人には近く天罰が下るに違いない。

そう確信した。

13 召使いと料理人（後書き）

『召使いの優しいお姉さんと厨房の無愛想なお兄さん。』

時折り、このように二人（地主と魔女っこ）以外の

周りの人たちの目線でお送りします。

あんまり、話を中断しない程度で補足したい所は彼ら任せ。

※ → そんな予定は拍手小話の方でUPする事に。すみません。

お付き合いありがとうございます！

14 魔女と男の子

私が森に捨てられた娘らしい、というのは物心付く頃には知っていた。

「オマエは黒髪^{カラス}だから、親にも気味悪がって捨てられたんだろう？」

尋ねるような語尾上がり、赤ん坊の頃の記憶を持たない私は答えられずにいた。

あえて尋ねるまでもない。そうに違いない、とその口調は告げていた。

親にも捨てられるほどのカラス娘。

鳥の方のカラスに生まれてこれれば良かったのだが、残念ながら人間の娘だった。

ならばカラスは森に返すのが道理というものだろう。

恐らく私の生みの親とやらもその道理に従ったらしい。

そうして私は大魔女の娘になった。

カラス カラスー まっくろ 黒い カラス むすめー 森に
帰れー

小さい頃、よく村の男の子たちにそうやってはやし立てられた。

その後、決まって一人取り残された。

走り去って行く後姿を見送りながら、何ともいえない気持ちに襲われるのが常だった。

カラスは人の子の仲間には入れないらしい。

その度に不安になって、おばあちゃんに尋ねたものだった。

「私は、おばあちゃんの本当の娘ではないの？」

少し声が震えたのを今でもはっきり覚えている。

「おまえは森から授かった娘だ。誰のものでもありはしない。でもね、おまえは私の宝に違いないよ」

おばあちゃんはいつもそう言って、優しく頭を撫でてくれた。それだけで充分だった。

そう。私は森の恵み。大魔女の娘――。

そう思えた。

	○
•	•
• •	○
*	•
• •	• •
•	*
○	• •
•	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	• •
	*
	• •
	•

自分の感情を表現するのに、相応しい言葉が見つからない。

だからだろうか。何だか自分自身を持って余したままだ。

あんなに悪し様に罵られるのは予想の範疇だったはずなのに、どうにも胸が痛みを訴えるのだ。

どうしてだろう？

今まで何回も何回も色んな人から言われ続けて来た事なのに。

「カラス娘」

「障害者」

「不具の娘」

「みすぼらしい」

「貧弱」

それらは全部オトコノヒトたちから言われてきた事だ。

きっと私のような女は欠陥だらけで、異性からは眉をひそめずにはいられない存在なのだろうと窺い知れる。

同性は同性のよしみでなのか、同じ女としてあまりに取るに足らない存在であるからなのか、あまりあからさまに攻撃された事は無い。

己をじっくり分析してみるが、これといった解決策は浮かばなかった。

あえて言えば相手に妥協してももらうより他は無い、という結論に達した。

妥協点。

『不吉なカラス一色の娘』

『足を引き摺って歩く障害者』

「……。」

足はこれ以上、治り様が無いから一生このまま引き摺って歩くし、髪も瞳も色味を変えようが無い。

駄目だ。妥協点が見つからない。

だったら、導き出される答えはひとつだった。

出て行こう。

それがいい。

行方をくらますのだ。

明け方にはそのような結論に至っていた。

何ていい考えだろうか！

どうしてそれを思いつけなかったのだろうか。

私らしくも無い。

きつと、色々な事がありすぎて思考も麻痺していたに違いない。

地主様はお客様と、私をどこか他所にやる相談をしていたのかも
しれない。

でも私をフルルと呼んだあの人の家の子になっても、きっと彼は納得しないだろう。

何となく、あの様子を見ればそれは解った。

だからといってあの調子では遅かれ早かれ、ここに身を置く事もなくなりそうだな、と思えた。

地主様は魔女の使い道を、思いあぐねておられるのだと思う。

魔女から森を取上げたら何も残らないというのに、あの方はそれを解っていないのだ。

足りない税金は少しずつでも何とか納めよう。

そのためにはどこか、魔女の力が揮^{ふる}える場所を目指そう。

あてがわれた豪華な部屋の衣装棚の隅に、たたんで置いた私の服に着替えた。

薄い灰色の布地は地味で目立たない。

それでいて、今この部屋にあるせいか変に目だっている。

まるで今の私みたいだ。

それでもこれは私の服だ。

そりゃあ、裾は少し繕ってあるが頑丈だ。汚れも目立ちにくい。何より軽くていい。

着慣れているから身動きも取りやすい。

魔女の作業にはもってこいの、昨年手縫いで仕立てたばかりの私の服。

それなのに。

地主様にそれは捨てろ、と言わしめた一品だ。

冗談じゃない。

これを捨てたら、あとは残してきた服を入れて二着しかなくなる。私にずっと下着のままでいろうと言うのか。

そう泣いて訴えたら唸るような声で、好きにしろというお言葉をもらった。

地主様と違ってこれから先、たくさん衣服を用意できる訳が無いのに。

どうしてそんな事もわからないのだろう？

やはり、財力に恵まれた方は感覚も違うのだとつくづく思った。

魔女の正装はこれくらい軽やかでちょうど良い。

あんまり裾が長くても、飾りが多くてもよろしくない。

私にはこれがとても良く似合う。

ジルナ様も地主様も、解ってはおられないのだ。

ここに来てから、いくらでも暇があったので、こさえた肩掛けの鞆が役に立つ時が来た。

いつか薬草採取のお許しが出た時のためにと、一緒に用意していたショールを頭から被った。

大きめに作っておいて良かった。

日除けにもなるし、何よりこの黒髪を覆い隠してくれる。

さあ、準備は万端だ。

いつまでも泣いている自分なんかではありたくない。

優しくしてくれたジルナ様やお姉さんたちには、申し訳ない思
ったから手紙を残す事にした。

『お世話になりました。』

ありがとうございました。

生涯 忘れません。

これ以上 ご迷惑をお掛けしないためにも出て行きます。』

そう、ジルナ様とお姉さんたちを思いながら綴った。

「……。」

最後に地主様へも一言添えるべきだろうと思ったので、こう付け
足した。

『足りない税金は、働いて必ず納めます。 さようなら』

うん、これでいい。

自分の言葉で伝えたかったので、あえて古語で書いた。

その分しっかり気持ちを伝えられた気がして、すごく満足できた。

よかった、よかった。

これ以上、煩わしい想いをさせないためにも、しないためにも、早く出て行こう。

ふらふらとお勝手の裏口を目指し歩く。

もう答えが出る前からここを目指していた気がする。

あえて言葉による変換をせずとも、自ずと答えは出ていたというワケだ。

「おはようございます」

早朝、野菜を届けに来てくれるおじさんとは幾度か言葉を交わし、すでに顔見知りだ。

「おお、おはよう！ どうしたね、お嬢ちゃん？」

「あの、地主様のお使いで街に行きたいの。一緒に乗せて行ってくださいな」

「ああ、いいよ！ なんだい、早くに？ 買出しかい？」

「そうなの。でも内緒のお使いだから、これ以上は教えられないの」

そう。内緒で出稼ぎに行く。嘘は言っていない……としよう。

「いいけれども帰りはどうするんだい？ 誰か迎えに来てくれるのかい？」

「……ええ、大丈夫。心配いらないわ」

にこっと笑って見せたら、おじさんは安心して信用してくれたようだった。

そのまま荷馬車に乗り込んだ。
がたごと揺られているうちに、街だ。
街に来るのは久しぶりだ。

お礼を言って馬車を降りる。

せめてとけなけなしの小銭を差し出したが「ついでだからいらないよ！」と受け取ってもらえなかった。

何度も頭を下げて、馬車を見送った。

おじさん、ありがとうございます。助かりました。

街も賑いだしていて、お店がたくさん出ていた。

人もたくさんたくさん、行き交っている。

ぶつからないように注意しながら歩く。

いい匂いのする焼き立てのパンをひとつ屋台で買って、半分だけ食べた。

残りは包んでかばんにしまって歩き出す。

胸がいっぱいだと、お腹もあんまり減らなくて経済的かもしれない。

これからどうやって生きていこうかなあ、とだけ考えながらあてもなく歩いた。

途中、にぎやかな歓声が後ろから迫ってくるなあとは思ったが、それ以上追及はしなかった。

——気が付いたら転んでいた。

はやし立てる笑い声は幼く、真に悪意が込められているものでは

なかった。

だから気にもならない。

杖を突いて歩く女が物珍しいのだろう。

街に出ればままだることだ。

別段怒りもせず、泣きもしない私を気味悪く思ったのか「行こうぜ！」という声が上がった。

身を起こすと目の前に杖を差し出されていた。

「ん！」

見上げた先にあったのは、唇をひん曲げて思いつきり不機嫌顔だった。

年の頃は十二、三歳といった所だろうか？

いかにもやんちゃそうな、よく日に焼けた少年だった。

赤味の強い茶髪に、輝きの強い琥珀の瞳が眩しい。

いつかどこかでこんな事があった気がするなあ、とぼんやりしながら受け取った。

「ありがとう」

礼を言うのも変な気がしたが、言わないのもどうかと思ったのでそう口にしていた。

ますます少年の表情が険しいものになった。

「バカじゃないの！ あんた！」

「こら——！！ 悪ガキどもっ、何をご婦人に悪さしてる！！」

商店街のおじさんが大声で怒鳴ってくれた。

少年達は散り散りに一目散で駆けて行ってしまった。

14 魔女と男の子（後書き）

『魔女っこをからかう歌。』

あああゝ出て行っちゃったよ。

思い切りが良くていい感じですよ。

地主様とは大きく感覚が違う……というより、
色々と伝わっていないよ！ レオナル！

魔女っこは、どこにいても男の子の格好の餌食のようです。

15 魔女とごろつき

『きちんと食べないから貧相な体つきなんだ。しっかり食事を取れ！』

そんな言葉が蘇って思わず辺りを見渡してみた。

大丈夫。地主様の影は見えない。

ちらと、道行く人たちをショールの影から窺ってみる。

「……。」

皆、女らしい自信に溢れて見えた。

それに比べて自分の体つきの何と頼りない事か。

確かに地主様の仰るとおりで間違いが無い。

ショールを深く被り直して、前身ごろを合わせた。

歩きながら言われた言葉に真実を見出す。

少しでも対処できないものかと考えてもみる。

たくさん食べればどうにかなるだろうか？

そもそも、食料調達すらままならない状況だ。

そういえば、今までどうやってきたのだったかしら？

いつも、いつも、与えられてきたのだったと思ひ当たる。

森からも、村の人からも。そして地主様の所でも、同じだった。与えてもらってきたのだ。

それを当たり前のように受けてきたただ何て、バチ当たりなん

突然声を掛けられて振り返ると、やせぎすの男の人がこちらを見ていた。

格好はあまり上品とはいえない様な、着崩したシャツの胸元は肌蹴ている。

編み上げた長靴で足音を立てないまま、私をじろじろ見ながら近付いてきた。

「仕事、探してるんだろ？　なあ」

頬はこけていて、その眼光だけが鋭く嫌に目立つ。

地主様と同じような髪と瞳の色なのに、酷くくすんで見える。ここがあまり日が射さないせいばかりではあるまい。

「ついて来な」

腕を掴まれた。

驚きのあまり、振りほどけなかった。

そのまま強引に引き摺られるようにして、路地裏に入った。

ごみごみした薄暗い路地裏は、家が隙間無く立っていた。

それなのにまるで人の気配がしなかった。

いや、あるにはあるのだが面には現れず、深く潜んでいるような気がした。

一番、奥の奥、突き当りのドアをガンガンと、男は蹴った。

しばらく、何の応えもなかった。

男は黙って立っていた。

すると、音も立てずに扉が開いた。

そこからぬっと腕が伸びてきたから、声にならない悲鳴を上げた。

「!？」

しかも男は、私をその腕の前へと押しやったのだ。
今度はその扉の向こうの腕に手首を掴まれる。

掴む手の感触は柔らかく肉付きの良い、女の人のものであったので少し気が抜けた。

「何だい！ 骨と皮ばかりじゃないか！ しかも杖をついて歩くのかい？ そんな足を引き摺っている子に、うちの客相手が務まるもんか。それに足の悪い子はあそここの具合も悪い子が多いんだ。使い物にならないに決まっている。他をあたりな！」

「まあまあ。黒髪黒目は珍しいから、変わった者が好みの客にはいいんじゃないかと思っただけだな？」

「冗談じゃない。これはカラスと忌み嫌われる色だよ。縁起でもない子を寄こすんじゃないよ」

手だけを覗かせていたおかみさんは、そう言い捨てるとボタンと扉を閉めてしまった。

「……。そうですよ。私はカラスと忌み嫌われていますから、関わらない方がいいですよ」

そう声を掛けると、彼は押し黙った。
がしがしと自身の後ろ頭を掻き筆ってから、首を横に傾けると言った。

「あんた、おかしいってよく言われるだろ？」

——意味が良くわからない。

•		•
○		•
•		○
• •	•	
*	• •	
• •	*	
•	• •	
○	•	○
	•	
	• •	
	*	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	*	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	*	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	*	
	• •	

馴染みのない潮風の香りに誘われて行くと、港にぶち当たった。
海だ。

潮風が心地よく頬を撫で、シヨールの裾も攫われて踊る。

ここから先は船でなければどこにも行けない。

海を渡る。

渡った先には何があるのだろう。

少し胸が躍った。

そうだ！ここを出て、遠い、遠い場所で生きて行こう。

誰も私を知らない場所で一から出直そう。

それがとてもいい考えに思えて、希望が持てた。

ふらふらと停船している船着場へと、誘われるように近付いていった。

こんな時、おぼつかない足取りが恨めしい。

気持ちだけが逸る。

ふらつくのは身体が前のめりになって、足が付いて行けないからだ。

足取りはおぼつかないが、気分は軽やかで本当は駆け出したいくらいだった。

「あ、う。この船に乗りたいたいのですが」

「ああ。出発は一刻ほど後だよ。その前に手続きが必要だから、あ
そこの商工会議所の建物に行つて乗船券を発見してもらつてくれ。
船賃は先払いだからね」

「あの、おいくらかるのでしょぅか？」

「5000・ロートだよ」

5000!

今、髪を売った金額とちょうど同じだ。何て、ついているのだろう。

どうにか足りる。何とかなるだろう。パンだって、後半分もある。

「ありがとうございます！」

喜び勇んで受付場へと向った。

[illegible]

「この船はどこに行くのでしょうか？」

「なんだい？ 知らないのに乗ろうとしているのかい？ この船はね
……。」

「あの船はローダリアに行く船だ。山を挟んで向こうだから人の行き来は船になる。今は停戦中とは言え、まだいつ戦火が上がってもおかしくない状況だ。そんな所に自ら行こうとするのは傭兵どもか、身内を残してきた者だけだ。この馬鹿！」

言いよんだおじさんの視線が私の背後を捉えていると思ったらしい。これまた淀みの無い答えが聞き覚えのある声で返ってきた。

泣きたくなる。というよりも、その場にしゃがみ込んで人目も憚らず、泣き出してしまった。

「どこへ行くとしていた!？」
勝手に屋敷を抜け出して! 帰るぞ!

「嫌、嫌、嫌——っ!!」

何が何だかわからないまま、恐怖に駆られて泣き叫ぶ自分が止められなかった。

15 魔女とごろつき（後書き）

『うわあ。あゝあ……。』

だからなんだの仮タイトルです。

魔女っこ、見ちゃおれません。

色々、やらかしております。

レオナル、遅いよー！

16 地主とその姪っ子（前書き）

レオナルド……。

（遠い目。）

16 地主とその姪っ子

館全体が忙しない雰囲気包まれている。

仕え人たちが忙しく動き回るのはいつもの風景だ。
ただその者達の心が騒がしいのだと思う。

それが館全体に流れる空気までも、落ち着きの無いものにするのだ。

例えば行き交う靴音や、扉を開け閉めする音に荒々しさを感じる。
日常から耳にしているだけに、違いが嫌というほど伝わってくる。

（何か、あったな）

動揺するような、何かが。

急ぎ身支度を整えていると、リヒヤエルがいつになく慌ただしい様子で扉を開け放ってきた。

こちらの返事も待たずになので、よほどの緊急事態だと覚悟した。

「失礼致します！」

「何事だ？」

手袋をはめながら問い掛けた。

「エイメリイ様がお部屋にいらっしゃいません」
「何？」

「館をくまなく探させてはいるのですが、どこにもお姿が見えません。そして書置きがありました」

差し出された書置きを奪う。

『足りない税金は、働いて必ず納めます。』

少し空けて書かれたその一文は、俺に当てたものなのだろう。
娘のためらいがそのまま伝わってくるかのような、か細い文字だった。

『さようなら』

その一言が、何より胸に突き刺さった。

何故かしら、止めを刺された気がする。

確実な一撃をくらった気分の悪さにも匹敵するほどの、この威力は何なのだ。

(……カルヴィナ・ヴィチイズ夜露の魔女め)

夜露は朝日と共に消えたとしても言うのか。

「……………」

「失礼ながら、エイメリイ様の足ではそう遠くへは行けないと思ったのですが……。どこにも姿が見当たらないという事は、外に出られたと考えた方がいいようです。森に戻られたかもしれないと思って、馬を飛ばさせました。何名かで搜索させ、一人は森の家に待機するようにと命じてあります。レオナル様？」

「ああ。ご苦労、リヒャエル」

いぶかしむ様に名を呼ばれ、意識を手紙から引き剥がす。リヒヤエルを見ると、そこには責めるような眼差しがあった。

「レオナルド様、お覚悟を」

「何の覚悟が要するという？」

「色々でございます」

ばか丁寧にそう告げられ、苦々しい想いでもう一度娘の書置きを見つめた。

[illegible]

「レオナルド！　あなた、最低っ！！」

朝一番で乗り込んできた（間違いないリヒヤエルの手配だろう）姉に張り倒された。

当然だと思う。

姉は書置きを読んだとたん、激昂した。

そして泣き出した。

それを慰めたのは、姪のリディアンナだ。

自分の母親と俺とを代わる代わる見上げる。

その深みのある鳶色の瞳にも、動揺が見て取れた。

だがそればかりではない、強さがあるのもまた確かだった。

姉によく似た、気の強さがそのまま現れたかのような切れ長の瞳は、少女を大人びて見せている。

それは彼女の瞳が、人よりも多くのものを見せてしまうせいかもしれない。

しない。

リディアンナは遠視が出来るのだ。

遠くにいる者の姿を視たり、失せ物の在りかを視たりといった稀な能力の持ち主のリディアンナ。

それはロウニア家に時折り現れる、血筋によるものだった。

無闇に能力を使ったりしない、頼りにもさせないのが彼女の決めたルールだ。

そんなリディが進んでここに来たという事は、頼らねばならない状況だと嫌でも知れる。

「落ち着かれてください、お母様。さ、そのお手紙をわたくしに見せになって？」

姉は無言で書置きを差し出した。

代わりという訳ではないが、俺が頷いて見せる。

「頼む」

リディアンナはしばらく書置きを眺めてから、くるくるとよく動く子リスのような瞳を伏せた。

心持ち、俯くように頭を垂らす。

彼女もまた、髪を結わずにここに駆けつけて来てくれた。

姉とおそろいの茶髪が頬をかすめ、書置きに毛先が触れる。

集中している時のリディのまとう雰囲気は、厳かで犯し難い何かがある。

姉が少女だった頃とまるで同じリディの姿は、いつ見ても不思議な気持ちにさせる。

その横顔を見つめた。

リディの邪魔をしないように、大人三人は黙り込み、待つしかない。

気配すらも押し殺すようにする以外、何の手伝いも出来ないのは不甲斐ない。

突然、リディアンナがひっと息を飲み、慌てたように瞬く。

「大変です！ 叔父様、お急ぎになって。叔父様の夜露はガジルールの港、ローダリア行きの船に乗りうとしている所が視えます！」

「ローダリア、だと！？」

山一つ挟んだ隣国の名に、背筋が凍った。

今は停戦中とは言え、いつまた戦火が上がってもおかしくない状況の国なのだ。

何だってそんな所に向おうというのか。

娘の無謀な行動は、まるっきり自殺行為でしかない。

「馬の用意をさせろ！ 俺が港まで飛ばす。リヒヤエル、引き続きここで指揮を執れ。森へも念のため待機させたままでおけ。三刻しても俺が戻らないようなら、街におまえも来てくれ」

「かしこまりました。まずは、お一人で向われるのですか？」

供を付けずに行くのか、と言っているのだろう。

「ああ。その方が早い。リディアンナの遠視は確實だから、捜し歩く必要もなからう。人手は他に回せ」

「私も行くわ。馬を用意なさい、レオナル！」

「お言葉ですが、姉上」

「聞こえなかったの、レオナル！？　こんな気持ちにさせたまま、この子を行かせて良い訳が無い！」

髪も結わず、家を飛び出してきた姉に返す言葉が見つからなかった。

「……。」

「何とか言ったらどうなの、レオナル？」

「もちろん、このままローダリアになど行かせる訳が無い」

「ええ、そうですね！　叔父様。もちろんですわ。ねえ、お母様？」

リディアンナが気を使いながら、姉の手をそつと取った。

「お母様。わたくしたちでは足手まといですわ。叔父様の乗馬の腕前をようくご存知でしょう？　大丈夫。叔父様はちゃんとカルヴィナを無事に連れ帰りますわ。ですから、待ちましょう？　そうして叔父様がカルヴィナにイジワルをしないように、見張るとしましょうよ。ああ、そうだわ。彼女が帰ってきた時のために温かい食事と、おいしいお菓子を用意してお待ちしましょう？　ちゃんと、わたくしの事を紹介してくださいね」

娘に慰められて姉は落ち着きを取り戻したようだ。

こくと子供のように頷いて見せた。

「あの子はちゃんと帰ってくる……。それも遠視なの、リディアンナ？」

「さあ、どうでしょう？　わたくし叔父様を信じておりますから、視る必要がないと判断いたしましたの。ですから、そこから先は視

「ておりません。ねえ、叔父様？」

リディアンナも安堵したように微笑んで応え、こちらに目配せを送ってきた。

ここは任せて早く行け、という事なのだろう。

急ぎ、がいとう外套を羽織り部屋を飛び出した。

「恩に着る、リディ」

齡十三の姪っ子には、いつも頭が上らない。

[illegible]

館から馬を飛ばして大よそ一刻後に、ガジルールの港町に着く。

街中では馬は飛ばせない。

預かり屋に任せて、港までは走った。

辺りを見渡すと、ふらふらとおぼつかない後姿を見つけた。

大きなショールを頭から被っているが、間違いが無い。

商工会議所の建物へと入って行った。

もちろん、追いかけた。

「この船はどこに行くのでしょうか？」

——この馬鹿！

乗船券を求めるついでに、行き先を確かめる娘に思わず怒鳴りつけていた。

しまったと思ったが、何もかもが遅かった。

「帰るぞ！」

「嫌、嫌、嫌——っ！！！」

娘は大声で泣き出し、今までに無いほどの拒絶ぶりを見せている。俺の伸ばした腕を振りほどこうとしてバランスを失い、その場で座り込んだまま泣きじゃくる。

やはり、姉も同行すれば良かったかも知れない、等と考えている場合ではない。

娘の傍らに膝を付いた。

「何だ、何だ？ 人さらいか？」

「いや、痴話げんからしい」

「かわいそうに。女の子、怯えちゃってるじゃないか」

「ありや、男が悪いよねえ」

「ブキヨウなんだろう。旦那、がんばれ！」

「およしよ、全く！ お嬢ちゃんの本気で怯えてるよ。かわいいそうにね」

そんな野次馬達の言葉に晒されながら、非難の視線をいつせいに注がれた。

「いいから、行くぞ！　立て、これ以上面倒をかけるな」

勢い良く引っ張り上げると、娘の手に使っていた杖が転がった。娘はたちどころにバランスを失い、立っていられなくなった。

己の体重を支えきれないのだから、当然だろう。

掴みあげられた左手首だけでどうにか身体を起こしている状態は、誰がどう見ても不自然極まり無い。

自分で満足に立つ事も出来ない娘に立てと、面倒をかけるなと声をかける方がどうかしている。

それでも娘は、かろうじて自由な方の右手で杖を取ろうとしていた。

恐らく俺が命じた事を実行するために。

立てと命じられたから立とうとして杖を求める。

しかし片手を男に囚われているから、右手は空を切るばかりだ。

その両脇をすくい、抱き上げようとした途端、ぱん！ と小気味良い音が響く。

良い音がした。

娘から平手打ちをくらったのだ。

驚いた。

俺以上に娘の方が驚いたように、瞳を見開いていた。

「……。」

「っ！」

野次馬たちからも「おおおお！？」という、どよめきが上がった。

。。。
。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。*。。*。。

嫌、嫌、放して、帰らない、構わないで、ちゃんとお金は返しま

すから。

娘は泣きながら、たどたどしくも訴えを止めなかった。
腕を引き抜こうと必死で、身を引くのも止めない。
声がかすれ始めても、止めようとしなかった。

「……悪かった。俺が悪かった。頼むから泣き止んでくれ」

そう詫びた途端、周囲からはまた感嘆の声が上がった。

いくつかの拍手とともに。

16 地主とその姪っ子（後書き）

『焦る地主とその姪っ子。』

まんまの仮タイトルです。

まずいな、レオナル、へたれじゃん！

でも、素直に謝る事が出来るのは美点だと思うよ。

すぐ、怒鳴るからマイナスだけど。

17 地主とおやっさん達

「こら——っ！ 何、ご婦人に乱暴を働いているんだ！ そのおっさん！」

ガン！ ガン！ と手にした鍋底に、棒を打ち鳴らしながら、少年が怒鳴った。

『フロリウム所の悪ガキだ』

『飴屋のルボルグが来たよ』

赤味の強い茶髪の少年は、そう呼ばれているらしい。

野次馬たちが何かしら期待のこもった眼差しを向けている。

控えめながら野次と賞賛が入り混じる。

要はこのガジールのガキ大将といった存在なのだろう。

年は甥っ子とそう変わらないだろうか、と考えながら眺めた。

「……。」

「アンタだよ、おっさん！」

少年はそう言い放つと、棒をこちらに突きつけた。

娘も驚いたため、抵抗を忘れたらしい。

そして小さく「さっきの」と呟いて、少年を見上げる。

「乱暴などしていない」

「嘘つくな！ だったら何でその子は泣いているんだよ。嫌がっているじゃないか、オマエの事！」

「だから今、謝罪をしていたところだが」

「いいから！ 放してやれよ。おっさんの馬鹿力で、その子の手首が折れそうだ！」

少年が娘の腕を掴んだ。

その途端、娘の身体がびくりと跳ね上がった。

「あ……っ、いや」

悲鳴のような拒絶の声に、少年の表情が歪む。

「何だよっ、助けてやろうとしているのに！ こっちに来いよ！」

少年が泣きそうな顔で怒鳴った。

娘は大きな声に怯えて、身を小さく丸めてショールを深く被り直してしまつた。

何とも嫌な気分に襲われる。

見ていられない。

少年から庇うように間に割って入り、慎重に娘の顔を覗き込んだ。

「もう泣くな、カルヴィナ。どこか痛むか？」

名づけて以来初めて、彼女の名を呼んだ。

娘は驚いた様子で面を上げた。

やはりその夜闇を映す瞳からは涙が溢れている。

何がフルなものか。

やはりこの娘はカルヴィナに違いあるまい。

[illegible]

ばん、ぱんつと二度、手を打ち鳴らす音の方に皆が注目する。

人ごみを掻き分けるように、突き進んできたのは一人の女性だった。

きっちり結び上げられた髪は、少年と全く同じ色合いだ。

ただ、瞳の色は違う。

ここからではよく判別できないが、深い紫のようだった。珍しい。

「はいはいはい！ 皆、散った散った！ あんまり騒いでると自警団が駆けつけるよ！ 仕事に戻りな」

やたらに大きく響く声に野次馬たちは顔を見合わせながら、名残惜しそうに振り返りながらも散って行った。

「ルボルグ、それくらいにしておきなよ？」

「母ちゃん」

「そ。後は母ちゃん達に任せな」

女性はそう言うのと、少年の頭に手を置いた。

その後ろに立つ、同じような年のおかみが二人頷いて見せる。

「自警団の兄ちゃん達は呼ばなくてもいいのか！？」

「アホか。痴話げんかにそんなモン呼んだら、余計にこじれるわ！」

少年の母親はそう言って笑い飛ばすと、こちらを見上げた。

「旦那、どいてなよ」

「そうだよ。お嬢さんは私たちに預けてさ。何、この子が落ち着いてちゃんと身のフリを自分で判断付けられるまでだよ」

「そうそう。もうちょつと頭を冷やして、素直になったら迎えにおいでよ。でなきゃ、同じ事を繰り返すに1000・ロートだね」

るようなそぶりは無かった。

さっさとカウンターに戻ると、注文を聞きだし始めた。それに答えながらめいめい勝手に椅子を戻し始めると、どっかりと腰を落ち着けだす。

そのまま酒盛り。まだ日も高いというのに。

男三人は杯を高々と掲げてから、ジョッキの半分近くまで一気に飲み干す。

「――で、お若いの。どうしたんだよ？ 嫁っこに家出される理由は何だ？ 金か。他の女か。それとも、ナニか」

「オマエん所と一緒にすんなよ！」

「バカ言え！ どこも一緒なんだよ、こういう問題は！ なっ、旦那！」

親身なのか、面白がっているだけなのか、わからない。

「あれは嫁じゃない」

「え？ そうなのか。俺はてつきり」

「何がてつきりなのかわからん」

「だってさあ、浮気がばれた亭主みてえなツラしてたんだもんよ。なあ？」

そうだ、そうだと同意の声が上がる。

「浮気も何も、あれとは何も無い」

「じゃあ、何なんだよ？ お二人さん」

「アレは亡くなった知人の娘だ。それを引き取っただけだ」

『嫌、嫌、放して、帰らない、構わないで、ちゃんとお金は返しますから』

突然、赤毛の男が、甲高い声で先程の娘の訴えを真似る。
気色が悪い。思わず咽^{むせ}た。

「正直、普通の関係じゃねえと思うに充分な涙だったな。そうかあ。お嬢ちゃんのご両親は、高利貸しの旦那に借金したまま亡くなっちゃったのか。そいつは無念だったろうなあ！」

「大事な娘を借金のカタに嫁っこにされちまうんだからなく浮かばれねえなあ」

「旦那、悪徳高利貸しから足を洗え！ 今すぐに！」

誰が高利貸しだ。

俺か？

しかも、何だそのでたらめな作り話は！

誰が借金のカタに娘を嫁にしたという。

俺が？

酔っ払いのたわ言など、本気で相手をした方が負けだ。

それに、いちいち説明して身分を明かすのもどうかと思う。

ここは黙って解放されるのを待つことにする。

「あのお嬢ちゃん、年はいくつだい？」

「十七」

「若っ！ 幼な妻じゃねーか！ ちくしょう、うらやましいぜ！」
「だから妻ではない」

酔っ払いは、あまり人の話を聞いていないというのは本当らしい。

「で、旦那はいくつなワケ？」

「二十九になる」

「ええ！ 思ったより、若っ！？ その割に落ち着いているもんだからさ」

「でも、一回りも年下かあ。そりゃあ、お嬢ちゃんの戸惑いもわかるなあ」

「戸惑い？」

「そりゃあ、そうだろう。自分よりもずっと年上の、しかも昨日まで見ず知らずの男に、いきなりアレコレ言われたら萎縮するに決まっているだろうよ、旦那！ しっかりしてくれよ！」

「しかも、言い方がなあ。……見ちゃおれなかったしな。旦那、あんな言い方は無い。ますます溝を深めたいなら止めないが」

「そうそう。うちのぼうずが、嬢ちゃんが可愛くてだな。ちょっといだして、転ばせちゃったらしいんだわな。……悪かった！ 悪かった、旦那！ そう睨まないでくれ。ルボルグにはよく叱ってきかせたから許してくんな！ で、その嬢ちゃんにも謝らせようと探してたら、あの騒ぎだろう？」

「……。」

「なあ、旦那。嬢ちゃんは、あんたをものすごく誤解していると思うぞ？ ちゃんと、物事を順序だてて説明してやったのかい」

中年の男三人の気遣う様な、好奇心から探るような視線に黙り込むしかなかった。

17 地主とおやっさん達（後書き）

『我ながら 素敵な サブタイトルだなあ （ヤケ。）』

余計にこじれさす人たち いっぱい。

おせっかいなの。

カテゴリ、追加しよう。 ラブ・コメデー。

本人たちはいたって真面目ですが、所詮、あっしが書くものなので
す。

※ 「だんな、よいてなよ」

←

「だんな、どいてなよ」

「よいて下さい」 〓 「どいて下さい」

標準語じゃないんですか——！？

そんな風に叫びつつ、修正しました。

魔女とおかみさん達

神殿前の広場には市も出ているんだよ。
通ってきたって？

道々、歩きながら色々説明してもらった。

扉を開くと、カラランと鈴が鳴る。

ささくれ立っていた心も少し落ち着いた気がする。

「わたしは店番しとくから。まずは二人とも、お嬢ちゃんを任したよ」

「当然！」

三人いるおかみさんのうち、一人のおかみさんはそういつて手を振った。

「さっきはうちの息子があんたに失礼をしたってね。怪我はしなかったかい？　ルボルグ、ほら！　ちゃんと謝りな」

一番うしろを黙って付いてきていた少年は、戸口に背を預けてむすつと押し黙ったままだ。

やはりぶつかった後、杖を差し出してくれた少年に違いなかった。少しそばかすの散った鼻の頭を搔いて、黙ったまま口を開こうとはしない。

この少年も怒っているのかもしれない。

何であれ、助けようとしてくれたのに嫌だなんて言ってしまったから。

先程、地主様を勢い良くなじった勇氣には驚いた。

「あの、ありがとう。助けようとしてくれて。さっきも杖を拾ってくれて、ありがとう」

私の方も悪かったし、御礼がまだだったのでそう口にした。

「オマエ！　ばかじゃねえのか？　さっきのは俺らがわざとやったんだ！」

「……。」

やっぱり、そう、わざとだったようだ。

カラス色が不吉に映って不快にさせたに違いない。深々とシヨールを羽織って頭を隠した。

「ルボルグ？　いいのかい、そんな言い方して。あんた、あの旦那を見て何か学ばなかったのかい？　後悔するのはアンタだよ」

「痛い！　痛えって母ちゃん、耳引っぱるなよ！」

「お嬢ちゃん、うちの子もあんたに悪さをしたらしい。申しわけないよ。しかも、あいつ！　逃げやがった。今日は夕飯抜きだ」

「いえ、あの、そんな……。私は大丈夫ですから、頭を上げてくだ

「さい！」

慌てて立ち上がろうとして、うまく足に力が入らなかった。
そのまま、またバランスを失って後ろに倒れこむ寸前で、少年が
回りこんでくれていた。

少年とは言えさすが男の子だ。
難なく私を支えてくれている。

「ありがとう」

「
…
別に
」

「でかしたルボルグ」

「ああ、大丈夫かい？」

優しい少年と、おかみさん達だ。

ありがたいな、と思った。

[illegible]

「お嬢ちゃんを迎えに来た旦那、謝ってたね」

そこも不思議だった。

私が謝るべきだろう。

咄嗟の事とはいえ、彼を叩いてしまった。

私の方こそ、叩かれるべきだろうに。

憂鬱な気持ちで俯くと、頭をぽんぽんと優しく叩かれた。

「もう一度、訊くよ。お嬢ちゃんはどうして出てきちゃったのか、自分で答えが出ているんだね？」

「はい」

どうしてそんな事を訊くのだろう？

そう思ったのが顔に現れていたらしく、氣使うような笑みを向けられ、優しい口調で宥められた。

「うん。初対面でこんな事きいてごめんよ。たださ、あの旦那は今ひとつ解っちゃいないようだったからね」

「そうそう。どうしてお嬢ちゃんが、自分の元を出て行くなんていう行動に出たのか。ちよっと、よく解らない顔をしていたように見えただけさ。あれはよろしくないよ。これから先が思いやられるね」

「？」

どうして「よろしくない」のだろうか？

ますますワケがわからなくなって、首を傾げるより他に無かった。やはり私が馬鹿だということなのだろうか？

「あのさ……。お嬢ちゃんは、どうして旦那を置いて一人で出てきちゃったんだい？」

遠慮がちに尋ねられた声に、きっぱりと答える。

「私がみつともないカラス娘で、彼には目障りでしかないからです」

そう。この一言に尽きる。

「ええええええ！」

「はあああああ？」

とかいう声で叫ばれた後、正気かと尋ねられた。

「それでも一応は夫婦なんだろう？ あんた達」

沈黙が降りた。

[illegible]

地主様と、ただの貧しい村娘の私が並ぶと、その差が際立つと思うのだが……。

やはり、彼の側を離れて正解だったと強く確信した。

地主様のお友達の方も、甚だしい誤解をされていたようだったもの。

あれはご友人が地主様をからかう話のタネなのだと解釈していた。しかしどうやら、彼の側にたとえ貧相であろうとも年若い娘がいれば、他人はそうに見てしまふものらしい。

初対面のおかみさん達ですら、そのような見方をするのだ。

世間というものは全くもって理解できないし、難しい。

でも、そういうものなのかもしれない。

私が世間に疎いだけなんだと思う。

それはさぞや地主様の体面を傷つける事だろう。

地主様がお怒りになられる訳だ。

全力で否定されたのも頷ける。

「彼にお金を返さなければならぬのですが、私はお金がありません。ですから、働かなくてはなりません。足りないお金の分、役に

立てといわれたのに。でも私は何もうまく出来なくて、面倒だとよく言われました。だから出てきました」

「ええと。お嬢ちゃん。ちょっとばかり、はしより過ぎじゃないかな？」

「そうそう！ その結果に至るまでの経緯をおばちゃんたちに話して聞かせて！」

これ以上、うまく説明できなかった。

今まで話したそれが全てだ。

それでも決定的な何かが足りないらしい。

必死で言葉を探った。

「私が彼の側にいると、あらぬ誤解をされてしまうようで、迷惑をかけるのです」

「誤解？」

「はい。私のような娘に、誰がなびくかと仰っておられました」

「旦那はそんな事を、言ったのかい。まさか！」

「足を引き摺って歩く障害者で、みすばらしいと」

「……。」

「ええと。それでなくとも私は、真っ黒のカラス娘なので、くだらないそうです」

ふいに涙が零れてしまった。

ぽろ、ぽろと。

慌てて頬に手を添えた。

涙が零れるたび、胸が痛い。

胸が痛むから、涙が零れ始めたのだろうか？
胸にも手を当てる。

「はてさて、困ったね。ためらいなく頷かれちまったよ」

「足は悪いから走れませんが、歩けます！ 一生懸命働きますから」

「ああ、いやいや。違うんだよ。あんたに困ったと言っている訳ではないんだよ」

「あの若旦那に、後であんたを迎えにおいでつて言っちゃったからね」

「大丈夫です。私の身のふり方を聞いてもらったら、きっと納得して置いて行ってくれます！」

「あやや……。言い切るんだねえ」

「はい」

「あのね〜？ あのだ旦那にとってお嬢ちゃんがただの召使いだっ
としたら、最初から迎えになんて来なかったと思うんだよね。おば
ちゃん」

「それは、お金を納めないまま逃げ出したと思われたから、探しに来ただけだと思います」

[illegible]

カララン、と少し遠く鈴の音が聞こえた。

お客様だろう。

皆、そう思つてあまり氣に留めなかつたようだが、足音がこちらに近付く。

「母さん！」

金髪に薄灰色の瞳という、もう一人のおかみさんとよく似た少年が飛び込んできた。

「ルイ！ おまえは今頃〜！ 女の子に悪さして、そのまま逃げたあいい度胸だ。情けない！」

確かに先程の集団で見かけた気がする。

しかしすぐに走り去っていったので、あまりこの少年には見覚えが無かった。

「悪かったって。ごめん」

「まあ、戻ってきて謝ったから、よしとして……やっておくれね？」

「はい。もう気にしないで下さい。大丈夫ですから」

頷いて微笑む。

ルイという少年が、恥ずかしそうに視線を逸らせる。
何やらルボルグ君と小突きあい始めた。仲良しだな。

「ルイ、おまえ慌てていたみたいだけど。もう用は済んだのか？」

「そうだ！ ルボルグ、母さん達、大変だった！」

「何が大変なんだい？」

「さっきのおっさんと父ちゃんたちが、酒場で暴れているんだよ！ マスターにあんまり騒ぎになる前に、母さんたち呼んできてくれて言われて俺、走ってきたんだ！」

「え？」

ぽかんとしてしまう。

地主様が酒場で暴れている？

また何か私の事でからかわれて、我慢なら無いくらい頭にきたの
だろうか。

動揺して、思わず立ち上がってしまった。

「それ、本当？」

「本当。何か若い兄ちゃんが来てから、殴り合いになったって」

「何、やってんだ昼間っから！ もう！」

「ったく、男衆はこれだから、世話が焼けるったらないよ！」

おかみさん達は、盛大にため息をついて腰を上げた。

18 魔女とおかみさん達（後書き）

『これ書き始めた日付、今年の四月になってましたよ。』

ネタ（だけ）は 早い段階で出来上がっていた様子です。

書き足し、書き足し、全然別物に変化。

あゝ。

こちらも負けじと世話焼きがそろっております。

こういう、下町人情的な所を書くのが好きです。

おっさんと少女は、周りから色々構われる運命です。

19 地主と色男

「またキサマか！」

「だってさ。障害があつた方が燃え上がるでしょ？」

何の話だ。

問い掛けるのも馬鹿らしい。

コイツを面白がらせるだけだ。

憤りに任せて立ち上がった。

「もう一度言う。呼んでいない。何をしにきた！」

諸悪の根源ともいえる、スレンを睨む。

「だから来て上げたんじゃないか。フルルはどこにいったの？ 何、
帰らないって言ってごねてるの？」

「貴様には関係ないだろう」

「おお？　なんだ、なんだ。色男は恋敵ってやつか？　旦那」

オヤジたちが控えめながら野次を飛ばす。

いつ何時でも他人の事情に興味津々らしい。

目線だけで黙るように促がすと「おお怖い怖い」と、言いながら
首をすくめて見せられた。

しかし視線を逸らす様子は無かった。

それを忌々しく思いながら、今はスレンへと向き直る。

「何の用だ」

「決まっている。フルルを迎えに来たんだよ。きつと君の所には帰らないって、泣いて拒否するだろうなって思ったからさ。……年頃の娘の容姿をとにかく言う男の側に、とてもじゃないが女の子を置いてなんておけないよ。ねえ？」

スレンがふざけた口調で飲んだくれのオヤジ共に尋ねた。

「旦那、そいつは本当の話なのか？」

「嬢ちゃんに何て言っちゃまったんだ」

「旦那！」

「……。関係ないだろう」

「フルルのこと、みつともないカラス娘で貧相だって言わなかった？ あ。そうそう。あと、確か足を引き摺って歩く障害者って言うってたよね」

「旦那！」

赤毛の男が立ち上がった。

そのまま胸倉を掴みあげられるが、そのままにしておいて睨み返した。

「何だ」

「齒あ、食いしばれ！！」

近距離で拳を振るわれた。

だが殴られたのは右頬の方だった。

男は左利きなのか、加減したのか。

それでも血の味が口中に広がる。

「旦那、本心か？　つい、からかって言っちゃったんだ。そうだろうか？」

「アレが貧相なものも足を引き摺って歩くのも、事実だから口にしたまで」

「旦那！　しっかりしてくれよ！　そりゃ、嫁っことも愛想を尽かすに決まっているだろうがよ」

今日はよく張り倒される日だ。

当然だと思う。

何故かこの男に殴られた右頬よりも、娘に張り倒された左頬がよほど疼いて仕方が無い。

このオヤジには一発、黙って殴らせたが好きにさせる気は無い。無抵抗な俺に反省の色を読み取ったのか、男の腕が離れた。唇を拭うと、スレンに向き合う。

「それをわざわざ娘に聞かせるようにしたオマエも同罪だろう」
「あれあれ？　八つ当たりはみつともないな、レオナル」

言いながら、スレンも上着を脱いでいた。

「何故、アレをフルル等と名づけた？」

「ん？　だって震えながら歩くんだもの。産まれたての子犬みたいだね。可愛いじゃないか。ぴったりでしょ？」

「うわああ！　色男も大差ねえな！　旦那、やっちなえ」

言われるまでも無い。

そのまま殴り合い。

スレンの足癖の悪さも加わる。

腕より足のほうが長さがある分、攻撃範囲が広がる。

だが安定さは若干失われる。

そこをつくべき隙として拳を振るう。

「やだなあ、レオナル。素直に無様に転がれば良いのに」

「断る。オマエこそ大人しく殴られろ」

「ボクだってお断りだよ！」

酒場の亭主は諦めたように、目配せをひとつ送って寄こした。

それを合図と受け取ったのか、オヤジどもはテーブルと椅子を端に寄せだした。

酒場の亭主は亭主で、ジョッキに酒を注ぎ客に回すという手際の良さ。

明らかに手馴れている。

かくして野次馬たちも駆けつけて賭けが始まる、みせもの乱闘騒ぎとなつていた。

• • ○
 ○
 •
 • •
 ✱
 • •
 • ○
 •
 • •
 ✱
 • •
 • ○
 •
 • •
 ✱
 • •
 • ○
 •
 • •
 ✱
 • •
 • ○
 • •
 ✱
 • •
 •

ガン！
ガン！
ガン！
ガン――――！

先程と同じように大きな音が鳴り響く。

同じように少年が鍋底を棒切れで打ち鳴らしていた。

「そこまで——！！」

これ以上騒ぐなら、自警団の兄ちゃん達を

呼ぶ！」

『ルボルグだ！』

『フォリウムん所のおかみも来たぞ！』

つかみ合っていたスレンと距離を置くべく、蹴り飛ばしてやった。鳩尾を狙ったのだが、ヤツは腕ですかさずガードしてきた。

それでも充分、間合いが取れた。

さつき頭の方に一発お見舞いしてやったせいか、奴の足元はふら付き始めていた。

反撃の威力も弱まってきているなら、勝負はもう着いている。

そろそろこの騒ぎを収める頃合だろうと考えていたから、ちょうど良かった。

それでもまだスレンの瞳を見れば、引く気などさらさら無いのは明らかだ。

やや離れた所で見守っていたリヒヤエルに、目配せを送る。

リヒヤエルは素早く頷いたと同時に動いていた。

奴を後ろから拘束する。

「何のまね？」

「そこまでです、スレン様」

「もういいだろう、スレン。勝負はついたはずだ」

「嫌だ。まだだね」

「スレン。いい加減にしろ」

顎をしゃくって、観客たちへと視線を促がした。

皆、一様に頷き合って見せる。

「色男、もう充分闘っただろ？　もうこれ以上は、よしなつて」
「そうだ。無益な闘いは深追いしちゃなんねえ！　なあ、マスター？」

この騒ぎの中、黙々と一人カウンターで働いていた酒場の亭主は静かに告げた。

「どちらもお見事。よい、引き分けでした。次があるなら、うちの店以外の場所でお願ひしますよ」

「っ……くそっ！！」

悔しそうに毒付く奴に、いつもの取り澄ました様子は見られなかった。

「ったあつく！！　アンターー！！」

おかみの怒声に、ばつが悪そうに赤毛の男は立ち上がった。

「アンタが付いていながら、騒ぎを起こさせて。何やってるんだい！」

「いやあ、コレはだな。嬢ちゃんを巡つての男同士の真剣勝負だからな！　邪魔せず見守ろうっていう計らいだ」

「やかましい！　昼間っから赤い顔をしている奴に、説得力も何もあつたもんじゃないよ！　旦那たち、そこまでだからね。これ以上騒ぐなら他所でやりな。もっともそうするって言ふのなら、お嬢ちゃんはどうで預かるからね？」

おかみからも念を押されて、スレンも渋々頷くしかないようだ。

わかった、わかった降参したと、両手を小さく上げて見せた。
リヒヤエルの拘束する腕をふり払うと、亭主の差し出す杯を受け取る。

「何だよ、水かよ!？」

スレンは口を付けた途端、亭主に食って掛かっていた。

「当たり前でしょう。流血しておられるんだから、やけ酒はもう少し待ちましょう」

「誰がやけ酒だって!？」

「まあまあ、兄ちゃん！ 後で俺たちが奢ってやるからよ。旦那に賭けて勝った金で」

「色男。てめえに賭けて負けた分、こっちに奢りやがれ！」

「ふざけるな！」

酒場の亭主と野次馬との掛け合いのおかげか、どこか緊張も溶け始める。

そんな喧騒が一瞬で止んだ。

「おい、見ろよ」

誰彼と無く酒場に現れた、場違いにも程がある華奢な人影に注目していた。

相変らず人目を気にしてか、ショールを深く被っているが一目で少女と解る。

杖を突きながら、ゆっくりと俯き加減だった視線を上げた。
その途端、この場に集まった者達が息を飲む。

「あの……。」

よせ。

止めろ。

しやべるな。

そう願ったが口にするワケにも行かない。

そんな事を口走ろうものなら、また差別だ何だと横つ面を張り倒されるに決まっているからだ。

歯がゆかった。

別に殴られる事に対しては、どうということはない。

そのせいで、娘に要らぬ想いをさせたくは無いいという気持ちの方が強かった。

心地よく吹き抜けるそよ風にも似た響きが、予想通り辺りに清涼感を撒き散らかす。

「うわあ、今日の騒ぎの噂の、お姫さんの登場かい!？」

「大のオトナの男二人を、狂わせちゃったお嬢さんの登場だ」

「旦那の幼な妻のお嬢さん！」

「若いっていいなあ、ちくしょー！ 羨ましいぜ」

娘がためらいがちに何かを言いかけた途端、一気にまた騒がしくなつた。

嫌な予感がして、
急ぎ娘の側に歩み寄る。

[illegible]

「お嬢さん！
恥ずかしがっていないで、その花の顔かんばせ拝ませておく

んなよ！」

酔っ払って調子に乗ったオヤジの一人が、娘のシヨールに手を掛けていた。

「あのっ！ 嫌っ、やめて！」

娘が困惑し、拒絶の声を上げたが遅かった。

強引にシヨールは取り払われ、娘は身を震わせて目蓋を閉じ、身体を小さく丸めてしまう。

杖が転がる音が、嫌に甲高く響くのはどうしてだろうか。

娘の頬の線を、ゆるやかに波うつ黒髪が覆った。

「!?!」

（何——？ 髪をどうしたという……!?!）

まとめ上げられていたとはいえ娘の髪は、解き放てば背の中程までの長さがあったはずだった。

今日一番の衝撃を覚える。

娘の髪が記憶にあるよりも、遥かに短く切り揃えられていたせいだ。

気が付けばそのオヤジに一撃食らわせた後、シヨールを奪い取り、娘を庇うように頭から抱え込んでいた。

19 地主と色男（後書き）

『ケンカは両成敗です。』

手馴れている酒場のマスターが、この話の影の主役のような気がしてなりませんでした。

そんなことはどうでもいい。

おやっさんたちが、しょうもない。

レオナルは意外に強い。

スレンも案外強いほうです。

なのに二人とも、女の子に対してなっちゃんない。

拳で語り合えない人種は苦手なようです。しょうもない。

20 魔女と暴れる男達（前書き）

20 魔女と暴れる男達

視界がショールで遮られ、身体が浮き上がる。
つま先が不安定にぶらんと揺れた。

何がどうなったのか――。

そんな疑問は囁きこまれた言葉で解決した。

「髪を、切ったのか」

「……。」

無言のまま、頷く。

何事かとそつとショールを払いのけて、彼を見た。
同じ目線よりも、少し見下ろす高さで視線が絡み合う。
間違はなく地主様に、抱きかかえ上げられているのだ。
他の誰でもない事に驚いてしまう。

何故、彼はこんな事をするのか解らない。

煩わしいなら関わらねばいいだろうに。

それで済む話だと思う。

ふいに彼のものと思われる感情に晒され、思わず眉をしかめた。
痛い。

彼の今一番感じているのであるのは痛みだった。
よくよく見ればそれも当然だと気が付く。

彼の唇は切れて血が滲み、眉尻の方もかすり傷が見える。

『痛い？』

思わず、自分の慣れ親しんだ言葉で問い掛けていた。

『それほどでもない』

すかさず返された言葉も馴染みの良い古語で、私はどこか安心してしまう。

『ぶたれたら、痛いです』

そつと、指先で切れた唇を指し示す。

『ああ』

『ぶつても、痛いです』

続いてショール越しに頭を支えている、彼の腕に手を掛けてみた。

『そうだな』

『……痛い？』

『それほどでもない』

嘘だと思う。だってさっきから、彼から強く伝わってくるものは痛みだもの。

何だろう？ 男の人というのは、こうやって強がるものなのだろうか。

大きな手のひらで頭をすっぽりと覆われて、逸らそうにも目を逸

らせないので彼の瞳を覗きこむ。

不躰かと思ったが、別段お怒りではないようだ。

『カルヴィナ』

『はい』

『帰るぞ』

『いいえ』

間髪いれずに首を横に振る。

ますます彼の瞳の鋭さに射抜かれるかと思った。

『……いいえ』

それでも頑として拒否の構えを表す為に、首を横に振る。振り続ける。

何故、帰らねばならないのだろうか？

そこは譲れない。でも怖い。彼の機嫌を損ねるのは、とても怖い。睨みつけて視線だけで責めて来る、彼の放つ感情の波に攫さらわれるのは、とてもじゃないが生きた心地がしない。

怯えて目を固く閉じて、身を縮める。浅く呼吸を繰り返す。しばらくそうしていた。

『カルヴィナ？』

ふいに名を呼ばれ、遠慮がちに頬に手を掛けられた。俯いていた顔を上げさせられる。

触れられた事でより一層、彼が感じているであろう疼きにもう一度尋ねずにはいられなかった。

『どこが痛いのですか？』

シヨール越しに彼の吐息が額の上、前髪の生え際を掠めた。

途端に周りから大きな声が上がった。

「おおおおお!!!
何だよ、何だよ!
旦那——!!!」

「俺が悪かった！ 旦那の大事な嫁っこには、触らせませんってか
！？」

なあ、みんな？」

「羨ましいぜ、こんちくしょう！」

「若いっていいなあ」

その時は本当に周りの目を忘れていた。
きつとシヨールに包まれていたせいだと思う。

[illegible]

「おや旦那。男つぷりがあがつたじゃないか」

おかみさんが陽気に笑った。

おそらく旦那さんなのだろう。赤い髪のおじさんも一緒に笑っている。

そつと窺う地主様はといえば、左の唇の端は切れているし頬だつて腫れている。

いい加減、下ろしてはくれないのだろうか。

まるで子供扱いだ。異を唱えようにも、それもそうかと思った。彼にしてみたら、自分は手のかかる子供と一緒にだろう。

よくよく考えてみれば、ジルナ様の私に対する扱いもそうだった
 と思ひ当たる。

確かに子供が身寄りも無く、一人でふらふらしたら少しは気に掛けるものだろう。

そう推測し納得したので、大人しく彼に抱きかかえ上げられていた。

いくらか身を任せる事にした方が、この場も早く収まるかもしれない。

そうも思ったからだ。

「はいよ、これ。酒場のマスターから請求書」

「ぼったくりすぎだ。見世物にしてやった分、観客どもからしつかりせしめただろう。それで充分つりがくる」

ぽい、と請求書を放る地主様に驚いた。

「スレンに回せ」

少し離れた所から「ふざけるな!」という怒声が届いた。

「これだけ離れているのに、耳の良い奴」と地主様は、ぼそつと呟いていた。

•	•
••	○
*	•
••	••
•	*
○	••
•	•
	○
	•
	••
	*
	••
	•
	○
	•
	••
	*
	••
	•
	○
	••
	*
	••
	•

抱えられたまま、おかみさんのお店に戻った。

さつき案内してもらった、お店の奥の部屋に皆でお茶を飲んでい

何ともいえない雰囲気だった。

地主様とスレン様とが増えただけで、部屋が狭く感じる。

「そう。フルルはここのおかみさんの所で、住み込みで働くんだ？」

「はい！」

こくこくと頷く。

「何をして働くの？」

「えっと、お菓子や飴を売りに行ったり、色々。できる事、全部です！」

決意も新たにそう力強く言いきった。

地主様が見ている。

しっかりしなくては、いけない。

なるべく、気を強く持って言い切ったつもりだ。

その途端、スレン様とやらはものすごく綺麗に笑った。

寒気がした。

嫌な予感が身体を貫く。この感覚は見過ごしていい物ではない！

一刻も早く、引かねばならない。

本能がそう告げてくる。

「そう。ボクは毎日、買いに行くとするよ」

「……いえ」

「何？ 未来のお得意様を拒否しちゃうの？」

「い、」

手を掴まれた！

それだけで冷水を浴びせかけられたかのように、凍りつく。

「さっそく可愛い売り子さんをお買い上げするでしょう」

腕を掴まれ、引き寄せられる。

椅子から転げ落ちる手前、またもや抱え上げられていた。

「嫌です」

「ん、かわいい」

「スレン！！」

助けて、と叫ぼうとして声が出なかった。

恐怖もあったが、誰に助けを求めようというのかと思ったからだ。

誰に？

そう思ったから耐えるべく身を固くした。

「ぐっ」

「スレン。何ならここで完全に勝敗をつけるか？」

驚くほどの素早さで、地主様はスレン様のわき腹に拳を当て込んでいた。

スレン様の腕がゆるんだその隙に、すかさず足払いまでお見舞いし、あっさり私をまた抱きかかえた。

そうして密着してしまうと、私もまた同じように繰り返してしまう。

『まだどこか、痛いのですか？』

地主様は小さく「いいや」と答えるだけで、やはり認めようとはなさらなかった。

どうしてこの方は痛みを認めないのだろう。

やはり、人前では弱みを晒さないと決めておられるのかもしれない。

「え、フルル？　そう尋ねる相手を間違っていないかい？」

スレン様がこちらに両手を広げながら言う。

それに対して地主様が背を向けて、私を庇うようにして無視した。

「カルヴィナ。これで解つただろう？　このおかみの所で奉公することは許可できない」

「だって、働かないといけません。いいえ、ここで働きたいのです」

「許可できない。聞き分けなさい」

「えゝ？　何でゝえ？　横暴だな、地主様はさ」

そうだそうだ。横暴だ。こっそり頷いてみた。

スレン様もたまには良い事を言う。

というよりも今、初めて良い事を言った。

「スレン。オマエは黙れ。そして何故ここにいる」

「え。フルルがいるから」

地主様はまた私を椅子に落ち着けると、無言でスレン様の胸倉に掴みかかる。

その度におかみさんが「うちの店で暴れるな！」と取り成してくれる。

店番しながら、戸口で覗いているおじさんは「若いっていいなあ」と楽しそうに繰り返す。

ルボルグ君はむすっと押し黙っている。

しかし手元には、先程打ち鳴らした鍋と棒を持ったままだ。

そんなやり取りの繰り返しだ。

20 魔女と暴れる男達（後書き）

『ある意味勝敗を決めるのは君だ！』

何だこの仮タイトル。

毎度どうもでございます。

少しは歩み寄れた気がします。

歩幅にして、一步の二分の一くらい。

一步にも満たない、微妙な距離を二人は行ったりきたりするようです。

21 魔女と菓子屋の親子

「何だって？　あろう事かロウニア家の若様かい！」

地主様がお名前を告げた途端、おかみさんの表情が見る間に険しくなった。青ざめたと言ってもいい。

なんて事だ。

大地主様の影響はやはりとても大きい。

彼の前に私ごときの意見など、吹かれて飛んでしまったようだ。

「ああ。世話をかけたな。これはもうじき公の場に出さねばならない娘だ。色々と礼儀作法なども学んでもらわねばならない、見習い中の娘だ。俺の不手際で逃げ出されてしまったが、好きにさせておく気は無い。……要らぬ騒ぎの元になるのは目に見えているからな」

騒ぎの元。

テーブルを挟んで目の前に座る地主様は、気のせいかもしれないが少なからず言われた。

言葉を慎重に選んでいるように感じる。

何だかそれすらも居たたまれなくて頭を下げた。

そんな様子の私を気使うように、おかみさんの手がショール越しに頭のとっぺんに置かれた。

温かい。

「まあ、同感だねと言うしかないね。確かにこのお嬢ちゃんは目立つよ」

「母ちゃん！　そんな言い方って」

「お黙り、ルボルグ。母ちゃんは地主様とオトナの話をしているん

だ。子供が口を挟んでいい事じゃ無いよ。ロウニアの若様よ、知らぬ事とはいえ度重なる無礼をお許しくださいますよう」

おかみさんはぴしゃりと言いつつ、ものすごく丁寧に頭を下げた。

地主様はそれを苦いお顔で見守り「構わない」と軽く手で制される。

「無礼ついでに地主様。お嬢ちゃんと最後に二人きりで話をさせてもらえないかね？ なあに。余計な事を吹き込んだりなんてしないよ。ただ、女同士で話がしたいだけだ。いいかい？」

「ああ。許可する。ただし半刻以内だ。早く、館に戻らねばならん」
「心配には及ばないよ、旦那っと、地主様」

地主様とおかみさんが話している間、ルボルグ君がずっと手を繋いでくれていた。

地主様から許可を取ったおかみさんに誘われて、二階の部屋へと案内された。

当然、少し時間が掛かった。

気持ちばかりが急いた。何せ許された時間は半刻と僅かだ。歩みの遅さで取られるなんて、何てもったいないのだろう。

「悪いねえ。ここは流石に、地主様をお通しするにはいささか庶民的過ぎなものだから」

おかみさんはそう言つて悪がったが、そんな事はけっして無かった。

「いいえ。私はとても落ち着きます」

二階がおかみさん達の生活の場であるらしい。

開け放たれた窓からは洗濯物が風に揺れている。

気持ち良く吹き込む風は、先程港で吹かれたものと同じで、少しだけ海の香りがして目を細めた。

床には大きな木箱が置かれ、乾いた土のついた芋が山積みでいくつかは直に落ちていた。

真ん中に置かれたテーブルには、カップが三つ置かれたままだった。

促がされるまま椅子に腰掛ける。

「ルボルグ。ちょっと向こうに行つてな」

「……。」

「ルボルグ」

物凄く不服そうに、ルボルグ君はふてくされた顔をした。

でもおかみさんの真剣な表情に押されたのか、素直に私から手を離すと階段を下りて行く。

扉が閉まる。

おかみさんも目の前の椅子に腰を下ろす。

足音が完全に遠ざかってから、おかみさんは私に向き合って口を開いた。

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

「まずは謝らせておくれね、お嬢ちゃん。あんたがどこの誰かも知りもしないで、期待させるような事を言っちゃまってさ」

謝らねばならないのはこちらの方だ。
慌てて頭を下げた。

「いいえ。そんな事ありません。むしろご面倒お掛けして申し訳ないです」

「なあに。何てことないよ。よしとくれ！」

「本当に親切にしてください、すごく、助かりました」

ありがとうございますと頭を下げる。

上げた時には、涙も一緒に飛び散っていた。

せっかく良い人たちと出会えたのに、残念でならなかった。

「ああ、ああ！ 泣かないでくれよ。悪く思わないでくれね、お嬢ちゃん。うちみたいな平凡な菓子屋が、地主様の所のいいことを預かる訳には行かないんだよ。あんたも薄々気が付いちゃいるだろう？ さっきの色男みたいなのから、身代金目当ての不埒者にあんたを攫われたら、うちはどう責任負ったらいんだい！？」

堪えきれずにまた泣き出す私に、おかみさんは辛抱強く言って聞かせてくれる。

「旦那つと、地主様は最後の手段としてご自分の身分を明かされたんだよ。そうでもしなけりゃ、お嬢ちゃんはウチの子になっていたもの。地主様はそれがお嬢ちゃんのためにならないとお考えになったから、そうしたんだよ。あんたが思うよりも、地主様はあんたを大事にしておられるよ」

優しい。お母さんみたいだ。そうか。ルボルグ君のお母さんだったな、と思いながらただ聞いた。

「また必ず遊びにおいで。抜け出してじゃなく、地主様とご一緒に」

おかみさんが優しく髪を梳いてくれる。

正直、一緒は不可能だと思ったが黙って頷いてみせた。

•	
• •	•
*	○
• •	•
•	• •
○	*
•	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	• •
	*
	• •
	•
	○
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○

ルボルグ君が下から呼びにしてくれたので、階段をゆっくりと下りる。

登るより下りの方が苦手だ。

身体をほぼ手すりに預けて、転げ落ちないように必死に足を運んだ。

杖はおかみさんが持ってくれ、ルボルグ君が付いてくれるから心強い。

そんな様子のこちらをちらり、ちらりと見上げる地主様の視線を感じる。

正直、身の竦む思いだ。確かに気が気ではないが、今は構う所ではない。

足運びにだけ集中する。

一瞬見下ろした地主様といえば、すっかり帰り支度を整えているようだった。

上着を着込み、マントも羽織られている。

そして手にはお菓子がぎっしり詰められた籠を持っていた。

その可愛いものは、彼にはちよつと不釣合いだった。

「リヒヤエル。先に馬を飛ばして帰ってくれ。姉上たちが心配して

いる」

お菓子の入った籠をエルさんに差し出しながら、地主様が言う。
なるほど。ジルナ様へのお土産としてお求めになったのか。

「ええ、解りました。リディアンナ様もお待ちですよ、エイメリイ様。ジルナ様も館の皆も待っております」

それを受け取りながら、エルさんがこちらを見上げて、優しく声を掛けてくれる。

リディアンナ様？

「え！ リディアンナ、来てるって？」

初めて耳にする名前に、それは誰かと問い掛ける前にスレン様が声を上げていた。

「しょうがないなあ。じゃあ俺も先に戻って、この格好どうにかしないとなあ」

「リディはオマエの事は呼んでいない」

「煩い叔父様だね。リディアンナも生意気だから、こんな格好見せられない。また叔父様自慢につき合わされるのはゴメンだし」

だからじゃあ先に戻るよと言うと、スレン様はひらひらと手を振りながら店を出て行った。

「スレン。相変らず勝手なヤツ」

「色男らしいっちゃ、らしいな」

ルボルグ君のお父さん、赤毛のおじさんが感心したように呟きを漏らす。

「その色男が一目おく、リディアンナ様というのは旦那の？」

「姉の娘だ」

「姪っ子かあ」

ジルナ様の娘。

私はその一言で、何となくスレン様の様子に納得した。

•	
• •	•
✱	○
• •	•
•	• •
○	✱
•	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	✱
	• •
	•
	○

登った倍の時間を掛けて、階段を下り切った。

いつものように、地主様たちからは見下ろされる位置に戻った。

おかみさんとルボグ君に改めて御礼を言う。

「ありがとうございます」

「元気でね。また必ず遊びにおいでよ」

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ 0 \end{array} \right]$$

ルボルグ君はただ強く手を握ったまま、離そうとはしない。

私も何だか離れ難くて、ぎゅっと握り返した。

ルボルグ君は目を見開いて、それから顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「エイメリイ様。それではお先に失礼します」

遠慮がちに声をかけられて振り返る。

そういえば、エルさんは先に帰ってしまうの？

できればエルさんには行って欲しくなかった。

行かないでと眼差しで縋ったが、エルさんは困ったように微笑む
と行ってしまった。

——行ってしまった。

その背を見送り、絶望的な状況だと思った。

地主様と二人切り。

泣き出さない自信がなかった。

•	
• •	•
* •	○
• •	•
•	• •
○	*
•	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	• •
	*
	• •
	•
	○
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○

何度も何度も心の底からお礼を言い、おかみさん一家を後にする。

急がねばますます不興を買うのは目に見えていた。

そんな彼を目にしたくは無い一心で、ただひたすらに足元だけを
見つめて進む。

ただ、急がねばと焦れば焦るほど足がもつれて仕方が無かった。

おかみさんたちの言葉もあつてか、彼は声を荒げる事はなかった。でも、きつと言いたいことが山とあるに違いない。

それをこれ以上増やさないためにも、急げ、急げと歯を食いしばって前に進んだ。

泣きそうになりながらも足を引っ張るうちに、乗り合い所の看板を見つけた。

ほっと一息つく。

これからは一人で戻れば良いから、少しの間だけこの重苦しさから解放される。

地主様は先に馬でお戻りになるだろうから、ここで見送れば良いだろう。

当然のことと頭を下げた。

「乗り合い所はあちらのようですので、それでは一旦失礼します」

「!？」

告げたとたん、彼の動きが停止した。

その様子に私も固まる。

21 魔女と菓子屋の親子（後書き）

『いよいよ次回二人きり？』

食い違いの大きさは増すばかりですな。

レオナル、強硬手段に出た様子。

そういえば、おじちゃんたちにも名乗ってませんでしたね。

ルボルク君は 淡い初恋だった事でしよう。

22 魔女と地主とその愛馬

「乗り合い所はあちらのようですので、それでは失礼します」

「!？」

そう告げられた。

思わず耳を疑った。

自然、表情も険しくなってしまったようだ。

カルヴィナは泣き出す一歩手前で、どうにか踏み止まっているようだ。

蒼白な顔色の中、噛み締めた唇だけが嫌に赤い。

「おまえは今、何と言った？」

けして責めたつもりなどなかったのだが、尋ね返した声は自分でも驚くほど鋭かった。

「え？ 乗り合い所はあちらです？」

「だからなぜそうなる！」

「地主様の、お手をかける訳にはいかないからです。私は、馬に乗れません。ですから、すぐその乗り合い馬車に乗ろうと思います。ええと、乗り合い馬車、ガジルール港。出発は四刻ごと、料金、850・ロート」

どうにか堪えた様子で、カルヴィナが乗り合い所の看板を読み上げ始めるのを呆然と聞く。

「来い、カルヴィナ」

これ以上聞きたくなくて、遮った。

カルヴィナは大きく目を見開く。

唇をわななかせ、言葉にならない小さな悲鳴を上げた。

「悪かった。怒ったわけではない。俺を頼るといふ気はおまえには無いのだな？」

「はい」

何を当たり前の事を言うのかと言わんばかりに、すぐさま頷かれています。

「あの、乗り合い馬車で帰るので地主様は先に行かれて下さい」

「オマエは……。それ以前に金がないのだろうか？」

「いえ、あの。少しだけあるのです」

「そういうば船に乗ろうとして乗船券を求めていたな？」

「はい。あの、髪の毛を売ったので少しまとまったお金になりました」

「髪を売ったのか？」

「あの、わずかばかりですがお金を作りましたのでお納めください、地主さま」

精一杯、得意げに微笑む娘に掛ける言葉が見つからなかった。

[illegible]

シヨール越しに伝わる体温が心なしか高くなった気がする。

そのまま足早に馬を預けた所まで戻った。

[illegible]

カルヴィナを先に馬に乗せてから自分も乗る。

馬が揺れるたびに身体がどうしても傾く。

落馬されては大事だ。おおごと

そう考えたから何のためらいも無く、カルヴィナの腰に右腕を回した。

そうして抱えると一瞬驚いたように顔を上げ、見る間に悲壯感を漂わせられた。

苦々しい気持ちでその表情を見下ろせば、カルヴィナは不興を買ったと思ったのか、泣き出す手前か。唇を引き結んでから俯いてしまう。

「はっ！」

構わず、短く声を掛け馬の腹を蹴った。

傾くたびに俺に寄りかかざるを得ない。

ますます身を固くして、必死でどうか体勢を保とうとするのが解る。

その度に忌々しい気持ちになる。

娘を見ないように目指す先へと視線を向けるのだが、上手くは行かない。

馬が揺れるたびに、涙が飛び散るのだ。

おのれ夜露で俺を惑わす、忌々しい魔女の娘め――。

等と悪態を心中で呟いてみても、それは何ら気まずさを紛らわしはしない。

つつい彼女の様子を窺いながら馬を進める事となる。

そうなれば自然と、乗り手の視線がぶれる。それが乗馬を不安定にさせる。

当然、馬にも不安定さが伝わる。

乗馬に不慣れでぎこちが無いだけならまだしも、思い切り陰悪な二人が乗っているとあれば流石の愛馬もぐずりだした。

首をいやいやと振りながら、こちらを窺うのだ。

愛馬にすら気を使わせてどうする。

そうも思うがどうしようもない。

少し歩を緩めて、ゆっくり慎重に進む事にする。

――館が見える頃には、既に日も暮れていた。

22 魔女と地主とその愛馬（後書き）

『ぐったりきた。』

地主、魔女っこ、愛馬の共通の感想です。

馬にまで『旦那、大丈夫ですかい？ 嬢ちゃん、泣いておりませうと、気を使わせているようですね。』

髪を売った店……で済ませた用事は、次回に。

23 魔女と地主とその身内

正門が見えた所で人影も見えた。

The sequence of diagrams illustrates the construction of a 3D object from a 2D net. The diagrams are arranged vertically and show the following steps:

- A single dot.
- A dot and an open circle.
- Two dots.
- A six-pointed star (hexagram) with dots at its vertices.
- Two dots.
- A dot and an open circle.
- A dot.
- Two dots.
- A six-pointed star (hexagram) with dots at its vertices.
- Two dots.
- A dot and an open circle.
- A dot.
- A dot and an open circle.
- Two dots.
- A six-pointed star (hexagram) with dots at its vertices.
- Two dots.
- A dot and an open circle.
- A dot.

「お帰りなさい！」

いち早く、リディアンナの大きな声に迎えられた。

「姪のリディアンナだ」

抱えていたカルヴィナに説明するように話し掛けると、小さく頷いたようだった。

「リディはおまえに会うのを楽しみに待っていた」

「え？」

カルヴィナが驚いたように声を上げ、俺を見上げた。

それは本当なのかと問いたげに見つめられる。

もしくは何故、自分に会いたいのかと尋ねたそうにも見えた。

どちらにせよ、少しでも尻込みしているのが伝わる。

恥ずかしさもあるのかもしれないし、スレンや姉の様子から何かを予想しての事かもしれない。

「ああ。リディアンナは優しい子だ。きっとおまえとも話が合う」
「リディアンナさま」

安心させるように言ってやると、カルヴィナはその名を丁寧に呼ばわった。

その声は近くでなければ、聞こえる大きさでは無かった。だが、リディには伝わったらしい。

手を大きく振って、嬉しそうに笑顔を見せている。

馬を近づけると腕組する姉から睨まれたが、無視してやり過ぎし馬から下りた。

すぐにカルヴィナも下ろしてやる。

馬からは下ろしてやったが、地面には下ろしてやらない。

そのまま再び彼女を抱き上げる。

「お帰りなさいませ、レオナル様」

「ああ。世話を掛けたな。馬を頼む」

命じられるよりも早く、リヒヤエルは既に馬の手綱を持っていた。そのまま軽く一礼して見せ、馬屋へと歩き出した。

カルヴィナを抱え直し、駆け寄ってくるリディ達へと向った。

「一人で歩きます」

「杖が無いだろう」

小さく抵抗したカルヴィナに、すかさずそう返す。

そこでやっと、自分を支える杖がない事に気がついたらしい。

慌てて辺りを見渡し始めたが、もう遅い。

杖は渡し忘れたふりをして、他の荷と一緒にそのまま馬の背だ。

馬は既にリヒヤエルに預け済みだ。

カルヴィナの困惑が伝わってくる。

「一人で……。」

言い掛けて、カルヴィナは口を噤んだ。

杖が無ければ、彼女は長くは立ってられないのだ。

いくら口で「歩く」等と訴えても、それは虚勢にしかないだろう。

「動かれると危ないから、ちゃんと？まっっている」

そうたたみ掛ける。

このまま大人しく運ばれているしかない諦めたのか、おずおずと肩に手を置かれた。

。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

「やあ、やつとのお姫様の到着だ。待ちくたびれたよ」

スレンがぼやく。

「おまえはまだ居たのか」

ぼやき返しながら、スレンに背を見せるようにする。

「じゃあ、レオナルが王子？　というよりもいかにも攫さらってきましたという風情は拭いきれないわね」

「お母様ったら」

嫌味を言いながらも、姉は安心した様子で笑みを浮べている。

「お帰りなさい、カルヴィナ」

「お帰りなさい、叔父様。はじめまして、カルヴィナ。リディアンナよ！」

「……ジルナ様。リディアンナ様。カルヴィナでございます」

両方から両手を開いて囲まれ、カルヴィナは恐縮しきった様子で頭を下げた。

その拍子にショールが滑り落ちてしまった。

カルヴィナの両手は俺の肩にあるのだから当然だ。

「カルヴィナ、その髪っ!？」

姉が悲鳴を上げた。そうして、その場でわっと泣き出した。リディアンナは再び母の取り乱した様子に慌てて宥めだす。

「お母様、どうなさったの？」

「ジルナ様。ええと、あの。申しわけありません」

カルヴィナも姉の嘆きぶりに困惑している。

まさかここまで泣かれるとは思いもしなかったろう。

出来ていたら、切らずにいてくれただろうか。

だが、何もかも遅かった。

カルヴィナの髪は今や肩に届くか、届かないかといった辺りで揺れている。

「レオナル！ 早くカルヴィナを部屋に案内しなさい！ それから表に出なさい！」

予想通りの展開だ。心構えはしていた。

・。・・＊・・。・・＊・・。・・＊・・。・・＊・・。・・＊・・。・・＊・・。

姉に命じられた通りに、カルヴィナを客間へと落ち着けた。

「カルヴィナ、レオナルにはもう一発お見舞いしておきましょうか？」

「め、滅相もございません！」

尋ねるよりも早く拳を構えて見せた姉に、カルヴィナが首を横に振った。

いきり立つ姉をリディとカルヴィナが取り成し、俺もどうにか腰を落ち着ける事が許された。

ただし、カルヴィナからは遥かに離された、隅にいるようにと命じられたが。

大人しく従う。

「出て行っちゃ、嫌よ」

「……はい」

「すぐく心配したんだから」

「申しわけありませんでした」

「カルヴィナは行動力があるのね。叔父様も驚いたと思うわ！」

「リディアンナ様」

「でも二度としないでね。危ないから」

「申しわけありません」

「約束よ」

かしましく、しきりに二人からどれだけ皆が心配したかと延々と告げられ、カルヴィナはただただ恐縮しきっている。

時折り、こちらを氣使ってか見てくる。

「レオナルが悪い」

「レオナルの言葉が足りなかった」

「レオナルの言葉が余計だった」

「叔父様がイジワルだった」

「叔父様が説明不足だった」

「叔父様が勝手だった」

——— 等等、俺に唇という銚先はしが向う度にカルヴィナがそつとこちらを窺う。

それに加えて、この状況をどうしたものか答えをくれ、と懇願されているようにも見えた。

残念ながら、それは彼女らの氣が済むまで解放ならないと答えるしかない。

實際声に出して尋ねられたワケではないから、答えようがないが、恐らくどんな怒りの説教よりも堪える事だろう。

少なくとも俺はそう感じている。

目が合うたび黙ったまま頷いて見せると、カルヴィナも微かに頷くように見える。

その様子を眺めながら、カルヴィナの部屋を二階に移そうと考えていた。

杖も取上げたままにしておこうかとも考える。

「毎度の事ながら、女のハナシってのは長いねえ」

「おまえも長居しすぎだろう、スレン」

ぼやくスレンには確かに同感だが、そこは黙っていた。

23 魔女と地主とその身内（後書き）

『前回の前書きの次回に～。は、どこ行った!？』

長くなったので、切り上げました。

今度こそ次回に～!

連続レオナル目線にぐったりきている作者です。

華やかさプリーズ。& カモーン。

お付き合いありがとうございます。

次回もレオナルターンになりそうです。

男が言葉を最後まで続ける前に、素早く髪を奪い取っていた。

我が物顔で黒髪を梳く、その無骨な指先を切り落としてやりたい。

物騒な衝動に駆られる前にそうしていた。

あまり艶が無いからとカルヴィナには買い叩いておいて何を言うかと、腹が立って仕方が無かった。

「これはじきに公の場に出さねばならんのに、大切な髪をここで売ったのだというが間違いないな？　わずか5000・ロートばかりで」

かろうじて怒りに我を忘れずに済んだのは、カルヴィナを連れていたからだ。

女の前で暴力沙汰はしないと決めている。

[illegible]

『旦那の後ろから小さな影がおずおずと姿を現した時には、この世の見納めかと思いました。』

「以上がよろず屋の主からの一言でした。旦那、あんまり庶民をからかわないで下さいよ。かつかつに生きてりゃ、ガツガツするのが商売人。誰もがまっとうに商いしている訳じゃないこと、理解しておくんナ？」

「心する」

「ありがたい」

それから二人、無言で杯を呷る。

菓子屋の店主とはどういうわけか、また一緒に酒を飲んでいる。別に待ち合わせた訳ではない。偶然に居合わせたからだ。

スレンとの乱闘騒ぎの侘びも兼ねて、酒場のマスターに用もあったから顔を出した。

そこで声を掛けられたのだ。

「お。旦那。一人かよ」

「あんたもか」

「まあね。カカアと坊主は夢の中なもんでね」

カルヴィナを連れて館に帰ってから二日目の夜である。

。。。
。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。*。。

髪を売った経緯を聞いて寒気がした。

何だって？

知らない男に「仕事を世話してやる」と路地裏に引っ張られて行き「身体が駄目なら髪を売ってみるか」と勧められた、だと？

気が付けば菓子屋の店主――カレード（今初めて名前を聞いた）に、あの後の顛末を話していた。

「旦那のせいだけじゃなから。そんなに思いつめないでくれよ？」

「いや。俺のせいだ。アレが髪を切ったのは俺がアレを……侮辱して傷つけたからだ」

「何!?! 気にしてんのそっち!?! あ、いや。うん、重要な事だけどさ。そっか。女の子傷つけて泣かせちゃったのか。うん、うん。旦那、俺だって覚えがあるよ。物凄い罪悪感でどうにかなっちゃまいそうなんだよな。でもさ。いざ、謝ろうと思って固まっちゃま

って表情陰しくなるんだよな。だから向こうさんは本気で怯えだすんだよな。あああ、なんというく辛い思い出」

菓子屋の店主は大きさに頭を抱え、カウンターに突っ伏した。
正直、鬱陶しい。

「それでどうしたんだ？」

「え？」

ちろりとこちらを窺う男の目が、好奇心で輝いてるのを俺は見逃さなかった。

「あんたは怯えられてどうしたんだ」

「ああ、なんだ。それか。そんな事決まっている！」

もったいぶるようににやりと笑いを飲み込むように、酒を呷る男を見据えた。

「誠心誠意を込めて謝り倒した。おかげで彼女は俺の側にいてくれる。俺はがんばったのだ」

「そうか」

「で、今はアレだぜ。旦那をも怒鳴りつけるカカアになったよ。やつぱ、女は子供を持つと強く変わるのな」

「そうか。子供を持つと変わるのか」

「……ええと、旦那。突っ込み所はそこかい？ あんなに泣虫でたおやかだった少女が、いまやあのカカアだぜ？」

「いいと思うが？」

「嬢ちゃん見てると懐かしいよ。ちょいと羨ましいな、旦那が」

「俺は互角に物を見て、言ってくれる方が羨ましい」

「そっか、そうだよな。旦那、がんばれ〜！」

「何故だろう。ちっとも励まされている気がしない」

。。
。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。*
。。

酒場のマスターとも少し話した。他愛のない事だけ。
弁償する金額をはっきりさせ、交渉も済ませた。
そう深酒する事もなく港町を後にする。

夜の闇は深いが、見事な満月のおかげで足元は比較的明るい。

寝静まる気配の中、馬屋へ愛馬を戻した。

そのまま裏手へと回り、勝手口から戻ろうと考えた。
馬屋から自室へはそちらの方が近い。
回り込み、角を曲がった所で思わず声を上げた。

「カルヴィナ!？」

勝手口の石段に腰掛け、月を見上げていた横顔がこちらを見た。
驚いたのだろう。

手にしていた杖が転がった。

まさか主人たる人物が、このような裏手に来るとは思わなかった
のだろう。

そう思い込み、すっかり油断していたに違いない。

カルヴィナは明らかに動揺していた。

それは俺も一緒だった。

まさかこんな時刻に、こんな所に居ると思わないではないか。

しかも薄い夜着に、シヨールを羽織っただけという格好に眉をひそめた。

この娘に自衛心や警戒心というものは無いのか。
思わず問い詰めるような調子で、言葉が滑り出る。

「何をしている？」

カルヴィナの部屋は二階の奥へと移動させたはずだった。

ここまで来るのには長い回廊を渡り、階段を下りねばならない。
そんな距離も面倒にも彼女は怯まないようだ。

やはり杖も取り上げるべきか。

「あの、月があんまりにも綺麗だったものですから」

「部屋からでも見えるだろう？」

「すみません。お部屋だと木に遮られてしまつて……月の光を浴びたかったのです」

「何故、そんな必要がある」

「魔女ですから」

「魔女には必要なのか」

「はい。太陽と同じくらいに必要な光です」

説明しながら、カルヴィナはさり気なくシヨールを頭から被り直してしまつた。

それこそ見事な満月が、雲に隠されてしまつたかのような感覚を覚えた。

その艶めく髪と肌を隠されてしまつたのだ。

「寒いのか？」

「いいえ。そんなには寒くありません」

「ならば何故……。」

言い掛けて言葉を飲み込んだ。

月の光を浴びにわざわざ出てきたのに、ショールを被ってしまった意味が無いはずだ。

そう言おうとして留まった。

深く身を隠すようにしながら、彼女は身体を小さく丸めている。かろうじて覗く手指だけが月光に白く浮かぶ。眩しいほどだった。

カルヴィナは俺の目に自分の色を晒さないために、そうしたのだと気が付く。

俺が来たからそうさせたのだ。

一気に酔いが醒めた気がした。

石段に腰掛けたままのカルヴィナと、視線を合わせるために膝を折った。

「悪かった」

「え？」

「おまえに暴言を吐いた。おまえは気に病まずとも良い。もつと自由に堂々としていてくれ」

「何を仰って……地主様？」

「悪かった」

「あの、謝らないで下さい」

心底困り果てたように娘は慌てていた。

俺の差し出す指先に怯えるように身を引きながら、ますますショールをしっかりと被りこむ。

俺の指先が、ショールを払い除けようとしているのを避ける。

カルヴィナは固く瞳を閉じて、こちらを見ようとはしなかった。

「あの、その、地主様が何故、わたしごときに謝られるのですか？
そんな必要はありませんでしょう？」

言葉に詰まる。

誠心誠意を持って謝り倒した。

その言葉を励みにもう一度、繰り返す。

「いや、俺が不適切であった。オマエを傷付ける権利など俺にはない。あの時はどうかしていた。許して欲しい」

「許すも何も、わたし、最初から地主様のこと、許さないと思った覚えがありません。怒っていませんから、どうか、気に病まないで下さいませ。あの、本当に地主様が謝られる事は無いのです。だって、本当の事を仰られただけですわ？」

「……。」

俺はとんでもない間違いをしでかしたのだけは、嫌というほどわかった。

こんなに心身ともに、力を根こそぎ奪われたと思った事は無い。

もっと酒を飲んでおけば良かったかもしれない。

そうすれば酒の勢いを借りて、強固な魔女の心を倒すまで謝り続けられたものを。

その晩、倒されたのは俺の方だった。

24 地主と魔女と月夜（後書き）

『お月さまが見ていた。』

しょうもない二人を。

謝らないで下さいって、物凄く相手を拒絶していると思うんだ。

許しませんって、言ってるようなものだよ カルヴィナさんよ？

地主、がんばって挽回してくれ。

25 地主と魔女と狼

ここでこうやって問答していても、ただカルヴィナの身体が冷えてしまうだけだ。

そう判断した。解っている。

だからといって引く気にもなれない。

打ち負かされている気がしないでもないが、ここは踏ん張りどころではなからうか。

だからしつこく食い下がる。

「カルヴィナ、おまえが謝る事はない。俺が悪かったのだ」

「地主様に、ご迷惑を、お掛けしているのは私です。ですから、どうか、どうか、そのような事を仰らないで下さいませ」

お互い謝っても相手からは受け入れられないでいる。

謝らないで欲しい。

それはいくら謝っても、許す気は無いのだという拒絶の表れではなからうか。

カルヴィナは身体を小さく丸め縮まって、俺が立ち去るのを待っているように見えた。

月の光を背に浴びて立つせいで、俺の影がカルヴィナを覆い隠す。俺はといえばただぼんやりと立ちすくみ、これは何と小さくか弱い生きものかと思った。

そのくせ大の男を振り回す、とんでもない魔性の女だ。だからこそ魔女なのかもしれない。

今だってそうだ。

「……わかった。カルヴィナ、おまえがそのように思うのなら俺はもう謝らない」

「っ、はい」

自分の意思が伝わったと安心したのか、カルヴィナの声はいくらか弾んだ。

こくこくと首を縦に振る。

その拍子にシヨールが滑り落ちれば良いのにと願ったが、それはならなかった。

忌々しく思う。

何に対してかは、もはや言葉にならない。

そんな感情だけが胸中を渦巻いて、鎌首をもたげ始めている。

「俺に迷惑を掛けるのを心苦しく思うのだな？」

「はい」

「だったら、俺の許可無く出歩くな」

「は……っ、はい」

「戻るぞ」

「はい、戻ります。地主様はどうぞ、先に行かれて下さいませ」

カルヴィナが慎重に身体を屈めて、シヨールから片手だけを足元に伸ばした。

転がり落ちた杖を拾い上げようとしての事だろう。

それよりも素早く杖を拾い上げると、自分の腰帯びに差し込んだ。ただ木を削っただけであろうそれは、手に心地よく馴染むまろやかさがある。

長さは俺の剣よりも少し短いくらいだ。

魔女の娘が体重を掛けているせいかな、先の方は磨り減っていた。

「地主様？ あの、杖をお返し下さい」

杖が自分の手に戻らなかった事を疑問に思ったらしい、不満げな声が上がった。

杖を受け取ろうとし、ショールからさ迷い出した腕を掴む。

予想通りの冷え切った感触に、苛立ちを隠せないまま言葉を口にしました。

「今、何時だと思っている？」

「え」

「皆が寝静まる時刻に、おまえが杖を突いて歩いたら音が響いて迷惑だろう」

「は……い」

カルヴィナが掴まれたのとは反対の手で、胸元を握り締めながら答えた。

身体を後ろに引くようにして、掴まれた腕を引き抜こうと抵抗してくる。

だが俺にとってそれはもちろん、ささやかでしかない。

くすぶり始めた苛立ちは、取り返しが付かないほど燃え上がっている。

謝罪が受け入れられなかった腹いせとばかりに、カルヴィナに辛く当たる自分に愉悦を感じてもいた。

暗い歓びに支配されるままに、なおいつそう腕に力を込めて引いてやった。

力の差を思い知れとばかりに、指を食い込ませる。

自分の中でよせと制止を叫ぶ声と、もっとやってやれと煽る声が同時に上がる。

「痛っ」

「……。」

カルヴィナの痛みを訴える声も無視して、力を緩めてやる事はしなかった。

むしろ身体が浮き上がるほど強く、引き上げる。

それを怒りを買い、なじられていたのだと思ったのだろう。

カルヴィナが声を震わせながら謝った。

「そこまで考えが至りませんでした。申しわけございません」

素直に頭を下げるカルヴィナに、さらに言い表しようの無い怒りが湧く。

「で、では、杖の先に布を巻きつけて戻ると致しましょう。そうすれば、音はいくらか和らぐでしょうから」

「……。」

どうあっても俺に頼るという気が起こらないらしい。

むしろ頑なに、自分で自分の面倒を見ると言って譲らない。

そんなカルヴィナの態度に落胆する自分が居る。

それを認めるまいと思う心から放たれる言葉は、自分でも驚くほど冷たく響く。

「布なんぞ、どこにあると言う？」

「え、えと」

カルヴィナは困ったように黙り、少しのあいだ考え込んだ。

やがて、ためらいがちにおずおずと、自身を守るシヨールをずり下ろして行く。

「うんうん——。」

羽織っていたショールを片手で丸めると、俺の方に差し出した。とたんに露わになる着衣は予想以上に薄着であつた。

首筋と肩を覆うべき布地が無い。

肩紐は細く、首の後ろで結んである。

胸元はそれを絞る格好の造りであり、娘らしい身体の線を強調していた。

無くても無いなりにそれなりに有る様に見えるではないか。

何て事をしでかしてくれるのか、この娘は――

これで誘う気が無いというのなら、俺は間違いないこの少女は魔女だと認めざるを得ない。

カルヴィナの露わになった肩を月が照らしている。

小動物を思わせるような黒目がちの瞳からは、またもや夜露が――

月光がほの淡く影を落とす。

口元のほくろと、首筋を辿った先のほくろへと視線をなぞるように移っていた。

[illegible]

「あの、地主様？
 どうかありませんでしたか？」

魔女の娘が恐るおそる、覗き込むように見上げてくる。
そこで訳のわからない思考から、我に返ることが出来た。
勢い良くそのショールを引っ手繰ると、彼女の身体を包むように
して巻きつけた。

まだ秋の気配が浅いとは言え、夜分は冷え込む季節だ。

そのまま抱き寄せ、勢いのまま膝の裏に手を回し抱え上げる。

「戻るぞ」

「地主様、重いですから！　自分で、自分で戻れます」

「騒ぐな。館の者に迷惑だ」

「静かにします。ですから、下ろして……。」

カルヴィナは俺の胸元に手を押しやる。

当然許さずその肩を引き寄せ、抵抗すらも封じ込めた。

その時だった。

アオオオオオオ————ンン！！

夜の静寂の中、そう遠くはない所で遠吠えが上がった。
狼だ。

ワン！　ワオン！　ワン！　ワン！　ワン！

その遠吠えに刺激を受けたらしい、飼い犬たちがいっせいに吠え
立てる。

カルヴィナはその鳴き声に怯え、身を竦ませた。

「こんなに人里近くに狼が来るのは珍しいな。いい加減さっさと戻るぞ、カルヴィナ。こんな人気の無い所に居てもたもたしていたら、狼に襲われるかもしれない」

「はい」

脅しが効いたのか、カルヴィナは素直に頷いた。

「ちゃんと俺の首に掴まれ」

「はい」

大人しく促がされるままに、おずおずと細い腕が首筋に回された。満足を覚えながら、その背を支えるようにしてやる。

否が応でも密着し、カルヴィナの柔らかな身体が触れる。その身体が小刻みに震えていた。

「狼が怖いのか？」

「犬が、怖いです」

「狼よりもか？」

「……。」

カルヴィナは言葉もないまま頷いた。

よほど犬が怖いらしい。

そういえば連れ帰った時も、猟犬たちに怯えた様子だったと思いつく。

「大丈夫だ。あいつらは人を噛んだりしない」

「でも吠えます」

「犬は吠えるものだろう」

愛犬家としては捨て置けない意見だった。

だからついムキになってしまったようだと言が付く。

館の外にこれ以上長居は無用のはずだった。

ゆっくりとカルヴィナの部屋へと向かう。

館は静まり返っており、深夜独特の気配がした。

慎重に急いだ。

これ以上人気の無い所に居たら、魔女の娘を間違はなく狼の餌食にしてしまうだろうから。

25 地主と魔女と狼（後書き）

『打ち解けない魔女っここに苛立つ地主サマ。』

だったら威張り倒してやる、となった模様。

イジワル。

子供か！

そして一人反省会になだれ込む事でしよう。

魔女と地主と森の彼

だと思う。

私の身体を不必要に揺らす事が無いから、つくづく男の人というものは何て力があるのかと感心してしまう。

緊張はするけれども、ここはとても安定感がある。

長い回廊を、月明かりが煌々と照らしてくれている。

そこを地主様に抱えられて進む。

コツコツと地主様の靴音だけが響く。

何とも言えないような無い不思議な気持ちだった。

不快ではないけれども、愉快でもない。

だからといってその中間でもない。

とても落ち着けるはずが無い状況にも関わらず、私はすっかり地主様に身を預けきっている。

少しだけ、眠気まで感じてきた。

さっきまで神経が研ぎ澄まされて、冴え渡っていたというのに妙な具合だった。

地主様が、先程とは違った雰囲気になられたせいかもしれない。苛立つ彼は苦手だけれども、普段の地主様の本質は驚くほど穏やかな事にも気が付いている。

それが私の敬愛してやまない「森の彼」に似ていると気が付いた時は驚いてしまった。

そう。

彼はあの悠々と出で立つ「彼」に似ている。

おおらかであたたかく、それでいて威厳を持っていて近寄り難い

「彼
と。」

地主様に促がされるままに回した腕が、痺れてきてしまった。そこまでも彼に似ている。

いつも抱きつくと私の腕では回り切らなくて、だんだん疲れてしまふのだ。

私の腕が滑り落ち、代わりに彼の襟元を握り締めたが何も言われなかった。

ただ背に回されていた彼の腕が、よりしつかりと抱え直してくれた気がした。

いづらか地主様に身体が押し付けられる。

彼からは冷たく澄んだ夜風の匂いがした。

○
●
● ○
●
● ●
✱
● ●
●
○
●
● ●
✱
● ●
●
○
○
● ●
✱
● ●
●
○
● ●
✱
● ●
●
○
●
● ●
✱
● ●
●

最近こうやって抱え上げられてしまう事が多い。

今日でもう何度目だろうか？

そんな風に考えて、そつとその横顔を窺った。

引き締まった端正な横顔を、月の光が照らしている。

数日前に殴られた腫れはどこにも見当たらない。

やはり彼は威厳がある。

それはこちらが萎縮してしまうには充分で、いつも恐れ多く感じ
てしまう。

思わず指先に力がこもってしまった。
地主様がちらりとこちらを見る。

——目が合った。

コツ、コツと刻まれていた靴音が、それと同時に止んだ。

不思議と逸らす事が出来なかった。

こんなにも間近で彼の瞳に射すくめられてしまつては、身動きも取れないというのもある。

彼の切れ長の瞳は深い湖の色のはずだ。

でも今は夜の闇にあるから、私の瞳と大差なく見える。
だから安心して不躰に眺めても、許される気がした。

「……カルヴィナ。男をそのそのような表情かおで見るものではない」

長い沈黙の後、先に視線を逸らされたのは地主様の方だった。

重苦しいため息と共に呟かれた言葉に我に返った。

やはり不躰だったのだ。

弾かれたように身体を許される分だけ離して、目蓋をぎゅっと閉じる。

謝らなければ。

そう思うのだが、麻痺してしまつて言葉が出てこなかった。

「いや、違う。そういう意味合いでは無くてだな」

彼らしくない、歯切れの悪い口調だった。

何かを言い掛けて、そのまま沈黙される。

ふっと彼の吐息が、閉じた目蓋を掠めた。

26 魔女と地主と森の彼（後書き）

『このまま——。』

いっその事。

ん？ 何か言ったかな レオナル？

27 地主と姪と魔女

娘はあまり眠れていないようだと言った。

いつも夕食時には船を漕ぎ出す様子から、あまりうまく寝つけてはいないだろうと予測はしていた。

様子を窺いにカルヴィナの部屋を訪れた。

まだ眠そうなら、無理に起き出さずとも良いと伝えるためにだ。

リディアンナは待たせれば良いだけの話だ。

自分自身で驚く。

何をわざわざ俺が訪れる必要がある？

侍女に一言命じれば澄む事だ。

今日もこれから仕事を控えている。

何も余計な仕事を増やす理由はないではないか。

そう自身に問い掛けてみたが、気がつけばすでに魔女の娘の部屋へと足は向っていた。

カルヴィナに用意した部屋を一階から二階へと移動した。

菓子屋の階段を下りる様子を眼にして決めた事だ。

おかみはこちらを物言いたげに見下ろしていた。

お嬢ちゃんにはこれくらいしないと、また逃げられちゃうよ。

そう言っている様に聞こえたから不思議だ。

カルヴィナは俺から逃れる事を諦めていない。

ただひたすらに俺への債務を払いきり、身も心も自由だった森へと帰ることを望んでいる。

恐らく女同士の話で、おかみに導き出された本音がそれなのだろう。

今まで聞いた事のない、明るく澄んだ笑い声だった。

「おいで、おいで」

くすくすと笑いながら、娘はバルコニーで身を乗り出して小鳥たちと戯れていた。

パンくずでも撒いてやったのか。

小鳥はざっと見ただけでも、十羽以上集まっていた。

皆揃って娘に向って赤い舌をのぞかせていた。

カルヴィナの肩に乗り、手に乗り、バルコニーで羽根を休めて見上げている。

皆、同じ種類の小鳥で確か名はシュリトウゼルと呼ばれる。

翠と藍の色彩の小さな宝石のような羽毛に、つぶらな黒曜石のような瞳が可愛らしい。

身体と同じくらいに長い尾羽根は光る濃紺で、貴重な装飾にと使われる。

小型で群れをなして森に住まい、人里には滅多に現れない。

ましてや人に慣れる事は無いとされている、幸運の小鳥とも呼ばれるものだった。

ピィヨ、ピィィヨ、ピヨロロロ——！

「あのね、伝えてくれる？　森の愛しいあの方に。お会いしたいですって」

娘が頬を薄っすらと染めてそう囁き、小鳥に想いを託していた。

それに応えるかのように、小鳥たちはいっせいに囁く。

カルヴィナの笑い声がそれに合わさる。

ボタンつと、大きな音を立てて扉を閉めていた。

ピイイイイイ——！！

一際、甲高い警戒音を発しながら小鳥たちがいっせいに飛び立った。

光に弾かれるようにその身体を羽ばたかせ、飛び去って行った。幾枚かの羽毛も舞い飛ぶ。

ようやく娘の注意がこちらに向いた事に安堵すると同時に湧き上がるのは、何とも苦い思い。

驚きから見開かれた瞳に光るのは涙の雫。

こちらを見てから、飛び立ってしまった小鳥の行方を追っている。

すでに小鳥の影は無い。

カルヴィナの髪が風に吹かれて、ふわりと舞った。

そのか細い後姿をただ見つめる。

「カルヴィナ」

「……。」

名を呼ばれ、諦めたようにこちらを向いた魔女の娘は振り向いた。涙を必死で堪えながら、悔しそうに俺を見た。唇がわなないている。

この娘の心は森にある。

だが、いくら泣かれても帰す気は起きない。

むしろ、この泣き方の方がマシだと思う。

そうだ。はるかにました。

あんなただ涙を零すだけの、何も写しはしない瞳をさせる事などがマンならなかった。

それならば俺を見て、しっかりと睨みすえて泣かれる方がずっといい。

闇など覗かせたまま泣かれたくなかった。

朝からも油断無くシヨールを羽織るようになった娘に舌打ちする。もちろん、内心でだ。

そんなあからさまなまでに苛立ちを表に出したら最後、カルヴィナは……。

考えたくも無い事態になるだろう。

その黒髪を見たいと願っている自分がいる。

少し前までは背を流れるほどの豊かさであった髪も、今は娘の頬を隠すのがやっとという長さだ。

艶やかさを取り戻し始めていた黒髪に、指を絡ませておけば良かった。

もつともそう簡単に触れさせてはくれない所か、目に触れるのすら避けられているが。

カルヴィナは、眠る時もシヨールを手放さないという。

そう責めるように報告された。

そうなる事を予測していた。

カルヴィナに罪はない。

年頃の娘の自尊心を踏みにじった俺にある。

だからこそ「もっと堂々としてくれ」と、頭を下げたが受け入れられなかったのだ。

俺にどうしろというのか。

やりきれない思いに、胸を占拠されている。

そこに追い打ちを掛けてくれるのが、この魔女の娘だった。

「おはようございます、地主様」

羽織っていただけのショールを頭から被り直されてから、深々と頭を下げられた。

「カルヴィナ」

「はい」

「危ないだろう。あまり身を乗り出さないように」

「はい」

「来なさい」

「はい」

促がすと素直に頷かれた。

だが実際はわずかにバルコニーの手すりから離れただけだった。

「こちらに来い」

「う……はい」

そんなに俺の側に来るのが嫌なのか。

そう考えたから、命ずる声に苛立ちが含まれる。

カルヴィナは諦めたようにひとつ小さくため息をついた。

それがまた癪に触った。

そろそろと壁に手を掛けながら、カルヴィナはその場にしゃがみ

込む。

何をする気かとその様子を見下ろしていた。

「お見苦しい失礼をお許してください、地主様」

カルヴィナは膝を付き両手を床についた。

そのまま床をはいずる様に身を進ませた。

右脚だけが遅れて引き摺られる。

「!？」

その様子にやっと気がつく。

カルヴィナの手元に杖はなく、見渡した部屋の寝台に立て掛けてあつた。

慌ててカルヴィナに駆け寄り、その身を抱き上げた。

「悪かった。おまえの手元に杖がない事に気が付かなかった。許せ」

いいえ、とカルヴィナは首を横に振った。

俺の腕の中、居心地悪そうに身じろく。

だが下ろしてやらない。

「ええと、それにまだ、着替えてもいなくて」

「侍女はどうした？ 今日もしディアンナが来るはずだろう？」

「はい。先程いらっしやいました。私に待つように仰って、そのま
まどこかに行かれてしまったのです」

「もう来たのか! ?
いつの間に」

$\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$ $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\bullet$ $\circ$

「お嬢さま、お待たせしました……つと!? 地主様?」
「きゃあ! 叔父様、カルヴィナはまだ着替えてもいないんですよ!」

ぱたぱたと軽快な足音が聞こえたと思ったら、すぐに明るい声が飛び込んできた。

リディと衣服らしき物を抱えた侍女である。

「リディ。俺に挨拶もなくこんなに早くから、どういうつもりだ?」
「カルヴィナに色々着てもらおうと思って、待ちきれなかっただけですわ。叔父様もまだお仕度がお済みで無いでしょうからと考えて、カルヴィナと一緒にご挨拶に窺うつもりでしたのよ。ねえ、カルヴィナ?」

「……はい」

抱えたままのカルヴィナの瞳を覗く。

落ち着かなさと心許無さが表情にも表れていた。

明らかに何か隠していると思われる。

もとより、カルヴィナに腹芸は無理な話だ。

対するリディアンナはといえば、何事も無かったように衣装を並べて見せる。

侍女も従順に頭を下げて見せ、俺の前にある寝台に抱えていた衣装を広げて行く。

「ねえ、カルヴィナ。これだったらきつと動きやすいと思うわ。それでいて、かわいいでしょう?」

「ええ。きつとお似合いになりますわ。着てみられませんか?」

「はい。ありがとうございます」

「ですってよ、叔父様。下ろして差し上げて」

姉にもこの姪にも頭が上がない。

仲良くなったカルヴィナのために、あれこれと世話を焼きたがる所などはやはり「姉」なのだと思う。

諦めた俺に、リディアンナはにっこりと笑いかける。

「ところで！ 叔父様にご提案があります。私、きっと叔父様のためにも良い結果をもたらすと思うの。ですから、うんと仰って叔父様」

それはもう頷けという命令に等しい。

27 地主と姪と魔女（後書き）

『恋の仲持ちリディアンナちゃん。』

叔父様のブキヨウさに見ていただけませんわ！　ってな心境です。

活発な少女らしく、よく動いてくれる子です。

地主と魔女っただけだと　『なんじゃこの空気？』　と進みません
……。

★・。・★・。・★

お気に入り登録や拍手　ありがとうございます。

励みになります。

拍手　小話も　UPしました！

28 大地主と夜露の魔女

怖い！
怖い！

…ウォン！

…ウオン！
ウオン！

……
ウォン！　ウォン！　ウォン！

背後から犬の聲が迫ってくる。

それから逃れようと必死で駆ける。

だんだん犬達の吠える声は大きくなってきている。恐怖に駆られて足がもつれる。

追いつかれたら終わりだ。

そう。

終わりだ――。

•	
○	
•	•
	○
•	•
• •	*
• •	• •
•	○
•	•
• •	*
• •	• •
•	○
•	•
• •	*
• •	• •
•	○
•	•
• •	*
• •	• •

思えば思いっきり自分の足で走ったのは、あれが最後だった。そんな事をぼんやり思いながら、薄れ行く闇の中で身体を起こした。

夢を見て泣いてしまったらしく、少し頭が重たい。

振り切るように瞬くと、出し切れていなかったらしい涙が滴った。

ウォン！　ウォン！　ウォン！　ウォン！　ウォン！

耳に届いた犬の鳴き声に、自分でも驚くほど身体が跳ね上がった。

「あ……っ、ほんもの？」

まだ夢を見ているのか、それとも現実の事なのか。

本気で迷った。

しばらく怯えながら耳を澄ましてみて、今日はあの猟犬たちの出番だという事を昨夜聞いていたことを思い出す。

今日は狩りに森へと入るそうだ。

私には関係ない話だとただ聞き流していた。

なるべく部屋から出るなどときつく言い渡されてから、早いものでもう十日以上経っている。

今日も出てはならないだろう。

だったら誰が森に行こうが私の関与するところではない。

正直、あの森を吹き抜ける心地よい風や木漏れ日が懐かしくて堪らなかった。

それと同時に犬に吠え立てられながら追われるであろう、ウサギや鹿の事を思った。

まだ、自分の半分はあのまま悪夢の中にいるようで、身体も気持ち重い。

掛け布がずり落ちたので、そのまま自分もずるずると寝台から落ちるように降りた。

いったん、寝台のへりに寄りかかるようにしてから、力を入れて

両腕で寝台を押すように突っぱねる。

そうじゃないと起き上がれないのだ。

もたもたと寝間着を脱いでいると、扉を叩く音がした。

「はい」と答える。

着替えている最中だが気にしない。

別に裸なわけじゃないし、下着姿はもう嫌というほど晒している。
今更だ。

きっと侍女のお姉さんだと思って、寝台にもたれて待っていた。
なかなか扉が開け放たれないので、もう一度「はい」と返事をし
てみた。

「仕度は済んだのか？」

扉越しに聞こえてきた声は、地主様のものだった。

「今、着替えているところです」

「早く済ませろ。一人なのか？」

「はい」

「侍女はどうした？」

「わかりません、地主様」

きっと他に忙しいのだと思う。

黙っていると扉越しにお姉さんの声もした。

地主様に挨拶をすると、わかりましたと答える声が聞こえた。

朝から何のご用だろうかと思った。

「主が出かける時は見送りに出るのが常識だろう」

地主様はすでに馬に乗られていた。

エルさんも馬に荷を積んでいるところだ。

他にお付の人が一人と、馬が一頭。

その周りを獐犬たちが五匹も吠え立てていた。

尻尾を干切れそうなほど振っている。

シヨールを被り直して、どうにか視界を遮るようにした。
怖い。

近付きたくないがお姉さんに付き添われて、何とか側まで行つた。もちろん、充分に距離は取つてある。

緊張しつともぼんやりと、忙しそうな地主様を眺めていた。

風に湿り気を感じて、木の葉のざわめきに耳を澄ませる。

風が教えてくれる。

今日はこれからどしやぶりになる。

あえて黙っている。

雨に洗われて犬たちもニオイを失うだろうから、ちようどいい狩り日和だと魔女の娘は思う。

[illegible]

出発の準備が整ったらしい地主様が、馬をこちらに進めてきた。

『今日の森の様子がどうかわかるか、夜露の魔女』

馬上から問い掛けられた言葉は、森に入る前の慣わしによってか

古語だった。

『はい。今日はとてもいい狩り日和です、地主様』

地主様を見上げて、にこにこ笑ってそう断言した。

28 大地主と夜露の魔女（後書き）

『魔女っこの犬が怖い思い出。』

も、明らかにになって行くかと思っています。

魔女っこ、地主の話を昨晚何にも聞いちゃいなかった模様。

聞き流していたか。

地主の言い方がはつきりせず、伝わらなかったか。

多分、両方。

魔女と狩一行

首を捻る。

その違和感の原因を探ろうと、彼を見つめ上げる。
よくよく観察してやろうという、そのつもりで。

「今日はこれから天候が崩れると見ていたが、魔女の娘が言うのなら確かだろう」

馬上であっても彼の動きは素早かった。

そして力強い。

勢い良く馬から飛び降りて、目の前に着地した彼を見上げるよりも早く、つま先が浮いている有様だった。

両脇をすくい上げられ、あっという間に馬に乗せられてしまう。

視線の高さと不安定さに身体が傾く。

それも短い間の事で、素早く跨った地主様に支えられる。

胴回りを地主様の腕に支えられ、何とも言えない居心地の悪さを味わった。

抗議の意味も込めて、回された彼の腕を引き剥がそうと両手を掛けた。

ビクともしない。

どうにか身体を捻って、彼の様子を窺おうと見上げた。

困った。

あんまり身体を捻ると、地主様に思い切り身体を押し付けてしまう。

後ろの方からリディアンナ様の叫びが聞こえてきた。

「叔父様ったらズルイ！ 抜け駆けするなんて!!」

カルヴィナと森に行くのは、わたくしよ——！

何とか振り返る。

駆けて来るリディアンナ様が視界の端に映った。

それもあるという間に遠ざかり、リディアンナ様やお姉さん達の姿も見えなくなった。

お館の門をくぐり抜け、そのまま目の前に広がる草原に行く。

緩やかな丘陵をいくつか超えると、収穫の時期を迎えた麦の穂が揺れる畑が続いていた。

地主様が馬を走り抜けると、麦の穂を刈る人達が折った腰を起こしておじぎをするのが見える。

小さい子もいて、両手を大きく振ってくれていた。

皆、地主様と知って挨拶してくれているのだろうか。

しかし、地主様はいえば私を抱えている。

なので代わりに小さく手を振ってみた。

すると皆、手を振って応えてくれた。

子供たちはよりいっそう手を振って、歓声を上げながら追いかけに来る。

その姿も笑い声もあったという間に遠ざかる。

まばらに木が生えた小道を抜け始めた頃には、エルさんともう一人のお付の人も追いついて来た。

そこに五匹もの猟犬たちも加わり、一気に騒がしくなった。

目指す道の先から流れてくる、森の気配とはまるで違う。

風に乗る森の気配にすぎた。

私の胸も高鳴る。

久しぶりに、深く呼吸が許されるのだ。

求めるもの。

[illegible]

追いついたエルさんが、横に馬をつけて来た。

くれる。

どうせ一緒に乗るのなら、穏やかな気質のエルさんの方が良い。

それから頭を下げて、地主様の後ろに馬をつけてしまった。

いろいろと言われた。

嫌だなと思った。

今すぐに下ろして欲しい。

「掴まれと言っただろう？」

「下りたいです、地主様」

「下ろしてどうする。置いて行かれてもいいのか？」

彼は脅したつもりだったろうが、私は迷わず答える。

「はい、地主様」

「杖が無いだろう」

大きく頷いたが一蹴された。

またそれか、と思いため息が零れる。

最近の彼は私から杖を取り上げる事を覚えてしまった。

何かにつけて文句を付けては、杖を取上げられるのだ。

そうしてさっさと私を抱えてしまうのだ。

「杖を突いて歩くと敷き織物が傷む」だの「夜は音が響くとうるさい」だの「女のくせに手にマメができる」だの。

どれもこれも、もったいもないが納得の行かないものばかりだ。

言われる度に、堪らない気持ちになる。

畑仕事をしていたから、私の手はとっくにマメが出来て固くなっているから手遅れだ。

彼にしてみたら、女性というものはそういうものらしい。

それは許された階層の人だけだ。

間違っても魔女の娘にそんな権利は無いというのに。

どうやら彼が、私を羽根折った鳥のままにしたいらしい、というのは何となく察しが着く。

だが、そうしたがる地主様の意図は解らなかった。

いや。本当は気がついていて。気がつかないフリをしているだけだ。

（カラスをあまり人目に晒したくは無いのだろうな）

泣きたい気持ちを抱えたまま、沈み込む。

「森に着いたらちゃんと下ろしてやるから、そう機嫌を損ねるな」
掛けられた言葉に驚いて、彼を見上げる。

最近の地主様はやたらに、このような言葉を口にするようになった。

何故、地主様ほどの御方が魔女ごときに気を使うような事を言うのか、不思議でたまらない。

「……。」

今日こそ尋ねてみようと思ったのだが、まずは違和感について追及してみる事にした。

そつと指先を慎重に伸ばす。

「地主様、お髭がありません」

そうなのだ。

いつもしかめ面で鷲の様に鋭い眼差しに加えてあるはずの、整えられた口ひげと顎ひげが見当たらないのだ。

そのせいか、いつもの威圧感が少し和らいだ気さえする。

そう私を感じるのも、髭がある男の人はオトナで、とても偉い人だという印象を抱いてしまうからなのか。

そこは解らなかった。

抱きかかえられたこの格好では、地主様の表情はよく見えない。首が痛くなってきた。

ただ言えるのは、彼の肌は日に焼けてはいるが荒れていないという事だ。

今まで髭があったなんて事すら、解らないくらいに滑らかな顎に確認するために手を伸ばす。

「……………剃ったからな」

このまま無視されてしまうのかと思うほどの間を置いてから、ぼそりと呟き返される。

「だからか？」

「え？」

「だから先程、笑ったのか？」

「さっき？」

「笑っただろう」

「いつですか？」

「もういい」

「はい」

「何故、剃ったのか聞かないのか？」

もういいと言われたので黙ったのに。

訳がわからない。

そう言われるという事は訊けと言う事なのだろう。

さして興味も無かったが、一応礼儀だろうと訊いてみる。

「どうして、剃られたのですか？」

「リディアンナの頼みだ」

「リディアンナ様の頼み」

「その方が若く見えるから、そうしてくれと頼まれた」

なるほど。流石はリディアンナ様だ。

賛同して頷いた。

「はい、私もそう思います。お年よりも若く見えます。ええと、3
5歳くらいに」

「……………俺はまだ29だ」

これ以上は黙っていようと思う。

29 魔女と狩一行（後書き）

『お出掛け日和？』

地主サマは色々と、何かが飛び始めているご様子。

理性とかお花とか。うん、色々。

そしてイメチェン★

似合ってるんじゃないでしょうか。

恥ずかしがって見せてくれないから、魔女っこ目線で今回の描写はこんなもんですが、若返ったようですよ。

魔女っこ目線でレオナルは40代だった模様。

30 魔女を歓迎するものと狩一行

『森の精霊よ。あなたの領域に入る事を許可し、恩恵をお授けください』

森に入る一步手前で、地主様が厳かに告げた。

風が心地良く吹き抜けて行く。

木々がざわめく。

彼は許されたのだと知る。

地主なだけあって、土地土地のものに彼はきちんと敬意を払う。

彼という人となりを知り尽くしている訳ではないが、そこは早くから気が付いていた。

そうでなければ、大魔女に会うことすら出来なかったはずなのだ。それはエルさんも同じ事が言える。

彼はおばあちゃんが亡くなってから、ほとんど毎日やって来てくれたのが証拠だ。

エルさんも胸に拳を当てながら、小さく呟いている。

その瞳を伏せた表情は、とても真剣で厳かさが漂っていた。

ただ一番後ろの年若いお付の人は、頭を軽く下げただけだった。見るからに心のこもらない、形だけのものに思わず眉をしかめてしまう。

いなく馬の手綱を引きながら、その顔は飽き飽きしたとでも言いたげに見えた。

彼は早く狩りに繰出したくてならないのだろう。

すでに弓を持ち、背には矢を担いでいる。

気の荒そうな白と黒の斑の猟犬は、その彼の馬の周りを激しく吠

え立てながら、ぐるぐる回っていた。

森の中を行く。

小鳥が少し警戒しながら鳴き交わしている。

警戒している。

しばらくすると鳴き声は遠ざかって行った。

(来てくれている)

（でも、あんまり近付いたら駄目だからね。危ないから）

森の彼は巧みに気配を殺しながら、地主様の馬に合わせて一緒に進んでいる。

時折り彼のいる方向に向って鼻を高く持ち上げている。

彼の實力と氣配に押されてなのか、少し怯えたようにも見えるの

は気のせいじゃないと思う。

（やっと、久々に会えるかもしれない）

あまりの嬉しさに、地主様と一緒にだという事を一瞬忘れていた。

「嬉しそうだな」

「……っ、はい」

驚いた声を上げてしまった。

「何かが歓迎してくれているようだな」

「!？」

「もっとも我々ではなく、カルヴィナ。おまえだけのようだが」

驚いて息を飲んでしまう。

緊張に強張った身体を、地主様に抱えなおされる。

地主様はそれ以上、何にも追及してこなかった。

ただ軽やかに馬を進ませる。

「そういえば朝食がまだだったな。腹が減っただろう？」

「地主様は？」

「俺は軽く済ませた。おまえはどうかと訊いている」
首を横に振る。

「大丈夫です、地主様」

「昨晚もろくに食事に手をつけていなかったと報告があったが、事実か」

「充分取りました、地主様。私にとって必要な分をきちんと」

そう。充分いただいているのに、毎回こうやって責められるのは

キツイ。

最近では地主様とご一緒に食事を免れて、助かっている。

あの立派なお部屋も気後れしてしまうし、給仕をしてもらうというのにもどうしても慣れる事が出来なかった。

私がいつまでもその調子なので、リディアン様が良いようにと計らって下さったのだ。

嫌味も鋭い視線も無い食事は本当にありがたい。

「……それなら良いが。もっと多く取るように。おまえは、もう少し『娘』らしくなるべきだ」

地主様は娘の部分だけを古語で仰った。

恐らく魔女の娘に、そこを強調してやろうと思ったのだろう。そんな含みが感じられた。

『娘らしく？』

『もっと太れ』

『太る』

『そうだ』

『どうやってですか、地主様？』

『だから食事をもっと積極的に取れ』

『魔女の娘にはあれで充分です』

『その体つきで何を言う』

『だって、こうやって森の生氣を感じているだけで身体が満たされます。ですから今も、大丈夫だと申し上げています』

『おまえの体つきからは信用ならんな。おまえが精霊の娘だとも言おうのなら仕方が無いが』

もう黙ろうと思った。

いつもこうだ。

彼と話していると、最終的には言葉を紡ぐ気が削がれて行く。

『別に責めたつもりは無い。だからそう機嫌を損ねるな。オマエは――』

——もつと楽しんでいろ。

黙り込んだ私に、彼は相変らず古語でそう告げた。

『でしたらエルさんの馬に乗りたいです、地主様』

遠慮なく答えたが、返事は無かった。反応も無い。

代わりに、両傍らに付き添っていた獵犬二頭がくーんと鼻を鳴らして、尻尾をお腹の方に丸めてしまった。

どうしたのだろう？

少し離れていたエルさんは、もっと距離を空けて後方に行ってしまった。

エルさんは俯いて肩を震わせていた。

どうしたのだろう、本当に。

誰にも尋ねる事が出来なくて、すつきりしない気持ちを抱えたまま、ため息を付いてしまった。

地主様が目指す先に、懐かしい我が家があるのだと気がつく。

いや、もう彼の持ち物になってしまったのだが、我が家には違いない。

懐かしい小道を行く。

振り向けば付いて来ているのはエルさんと、二頭の猟犬だけだった。

やはりあの年若い人は、魔女の住処には近づけないようだ。これもおばあちゃんの魔法の一つ。

森や魔女に仇を為そうとしたり、敬意を払わないものは森をさ迷うはめになる。

地主様もエルさんも、お付の人が付いて来れていない事を、別段気にしていないようだった。

何も言わずに進んでいる。

『下りたいです、地主様』

『もう少し待て』

待ちきれなくて身を乗り出すと、慌てたように抱えなおされた。胸のすぐ下からわき腹に掛けて、大きな腕が回されて息苦しい。腕に手を掛けて、抗議のために足をぶらぶらさせてみた。

『……すまない。だが暴れるおまえが悪い。手元が狂った』

何故かぼそりと決まり悪そうな声が降ってきた。

そう言う割に地主様の腕は動かないままだ。

私の本気でふり払って落ちるとお考えなのかもしれない。

何て過保護なのだろうか。

あまり心配掛けても良くないだろうからと、暴れるのは止めにして大人しく到着を待った。

乾燥した葉草の芳ばしい匂いが、ここまで漂ってくるようだ。

近づくにつれ、異変に気がつく。

誰もいないはずの魔女の家の煙突から、細く煙が立ち上っているのが見えた。

(お……ばあちゃん?)

———いるの？
温かいスープを作っているの？

『おかえり』

懐かしい声までが蘇ってきて、ありもしないだろう現実を思つて胸が騒いだ。

30 魔女を歓迎するものと狩一行（後書き）

『仮タイトルは次回持越しとなりました。』

おっかしいな。

またですよ。

ネタバレなので仮タイトルも次回に。

地主様、その手はまずかろうという位置です。

健康な成年男子ですからね。 ほどほどにお願いします。
（まだ）

31 魔女の家を訪れた者

『おばあちゃん……？』

今は誰も、住まう者がいないはずの魔女の住処。
訪れてみれば煙突からは煙が上がっていた。
時折り手入れのために館の者を寄こしていたが、今日は誰も手配していない。

ならば誰が？

エルに視線を投げると、彼は承知したと頷く。
馬を繋ぐと、魔女の家の裏手に回った。
警戒を怠らず、手には弓を持っていったのを見送る。
付いて来れた犬のうち、一頭はエルの供を買って出た。
もう一頭は俺の側を離れない。

俺自身も馬上から周囲の様子を窺った。
森に入ってから寄り添うように付いてきていたモノの、気配と視線はまだかろうじて感じられた。
いくらか距離を取ったのだろう。
おそらくここはヤツの領域ではないからか。

大魔女の色濃く残る、圧倒的な存在感は彼女が亡くなってからも健在のようだ。

『ここへたどり着けるのは、この大魔女が認めたものだけさあね』

大魔女のかつて残した言葉が本当ならば、ここへはそうそう悪しきモノは近寄れないようになってゐるはず。

魔女の娘は、ありもしない可能性を思っふてか落ち着きかない。

大魔女の死から既に二月が経過している。

カルヴィナは未だに、大魔女の死を受け入れられずにいるのだと思ひ知らされた。

彼女にとって絶対であつた最愛の保護者の死を、ただの悪い夢だとも思っているのか。

この調子では――。

大魔女の葬儀に、俺も立ち会った事なども目に入らなかったのは明らかだ。

一体いつになったら、この娘の目は覚めるのだろうか。

馬をつなぎ、逸はやるカルヴィナを下ろしてやった。

カルヴィナは素早く、俺へと両手を差し出してきた。

いつもなら俺に頼るのを良しとせず、どうにか自分で下りようと足掻くのだが。

いつにない素直さに苦笑する。

杖も侍女に預けたまま置いてきた。

そのせいか、躊躇いを見せず俺の腕に縋って立つ。

ならばこちらも遠慮なくと、腰を後ろから支えてやった。

カルヴィナが恐るおそる扉を開けると、かすかに軋んだ音を立てた。

いつまでも一步を踏み出す様子のないカルヴィナの代わりに、扉を押し開けた。

どこか懐かしい乾いた草の香りが漂ってくる。

天井のそこかしこに、逆さに干された草花が目に入る。

窓が開放たれ、光が細く差込み細かくホコリが舞うのが見えた。新鮮だが、秋の気配を滲にじませた風が室内に干された草花を揺らしている。

きつと大魔女とその娘ならば、薬草にするべく干している植物を状態良く保つために、多少冷えても換気を欠かさないだろう。

それを知っている者の配慮を、そこはかとなく感じた。

暖炉には消されたばかりであろう薪が、細い煙を上げている。

明らかに人の気配が残っていた。

だがそれは、カルヴィナが期待する人物のものではない。

質素な机と二脚だけの椅子が中央に置かれ、その椅子の背に男物の上着と思しき物が掛けられていた。

$\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$

落胆の隠せない様子のカルヴィナを椅子に座らせる。

「見覚えある物か？」

カルヴィナは無言で首を横に振つて見せる。

上着はそこそこの質の良い物で、仕立てがしつかりしていた。

きちんと裏地まで付いており、ただの農民の物では無さそうだと

判断付ける。

ワン！　ワン！　ワン！

表で番をしていた犬が吠えた。

上着の持ち主が戻ってきたらしい。

犬に驚きながらも怯えた様子は無く、「こら！　吠えるな！」と
明るく諫める声がした。

「誰だ――！？　勝手に……っ、おまえ！　帰ってきてたのか！？
髪は、髪はっ、どうした？」

男は大きな音を立てて扉を蹴り開けると、大声で叫ぶ。

カルヴィナの身体が跳ね上がった。明らかに怯えている。

庇うように男の前に立つと、訝しげな視線で睨まれた。

男は年若く、年の頃は二十歳を超えたばかりのように見える。
溢れる若さ特有の勢いに乗せた眼差しは、不躰で遠慮が無い。

灰色の髪が汗で額に張り付いている。

それを腕で乱暴に拭うと、長い前髪に隠れていた琥珀色の眼光が
明らかになる。

まるで、森に住まう狼そのもののような男だと思った。

俺の全身を眺め回してから睨みつけると「あんた、誰だ？」と低い
声で訊いてきたが無視した。

一步も引かず、チツと舌打ちされる。

薄手のシャツ一枚で袖をまくり上げ、小脇に薪を抱えていた。

それを乱暴に足元に放り置くと、俺を押しつけようとした。

「エイメ、こいつは誰だ？」

「カルヴィナ、この男とは顔見知りか？」

疑問の声は同時に被った。

それから男は息を飲む。

「カルヴィナ、だと！？　それがオマエの本当の名なのか？」

何故か顔を歪めて焦る男に、一步高みから見下ろしてやるような優越感を抱く。

カルヴィナを責めるように問い詰めようとするが、それを許さない。

「大声を出すな。カルヴィナが怯える」

「まったく、何様だ！　あんた！」

男が腹立ち紛れにテーブルを拳で叩いた。

ばん！と音を立ててテーブルが動く。

カルヴィナが驚いて、俺の背に縋った。

すかさずその手を引いて、抱きかかえてやる。

浅い呼吸を繰り返していたカルヴィナが落ち着くまで、背を撫でていた。

「……悪かった。おまえに怒鳴ったんじゃない。何か言ってくれないか、エイメ？」

どこかでよく耳にする台詞も、他者が口^{セリフ}にしているのを聞くと何と滑稽な事かと思った。

真摯な眼差しにほだされたのか、腕の中のカルヴィナが緊張を緩めたのが伝わる。

恐るおそるといった様子で男を見ると、か細い声を出した。

「おばあちゃん……は？」

久しぶりに聞いた娘の言葉に、男の肩が落ちたのが解った。

「もう亡くなっただろう……。ふた月も前に。俺も葬儀に立ち会った」

そうだったね、とカルヴィナは呟く。

ようやく少しだけ、こちらを見た。

「エイメ、その男は何だ？」

「地、」

「カルヴィナ、この男は何者だ？」

男に問われ、答えかけたカルヴィナを遮って同じように問い掛ける。

「ええと、村の男のコ……ではなくて、男の人です」

カルヴィナの中の男の認識はそれまでのようだ。

再び男の肩が盛大に落ちた。

そのまま、うな垂れていればいいものを。

男はこりないタチらしい。

気を取り直したように姿勢を正すと、朗々と声を張り上げた。

「俺はブレンダニィの村長の息子で、こいつとは幼馴染だ。俺はこいつを待っていた。俺の家に引き取るつもりで迎えに来たんだ」

「お引取り願おう。これは既にロウニア家に属する」

「そうはいかない。どう見たって勝手に攫って行っただろう？」

魔女の娘から森を取上げてどうする！おまけに髪まで切られて、まします細っこくなってる奴を置いて行けるか。それに俺はコイツの……許嫁だからな」

「許嫁？」

「いいなずけて、何？」

疑問の声が同時に被った。

31 魔女の家を訪れた者（後書き）

『恋敵登場でツンデレが素直にならざるを得ません、ってなもんだ。』

なんちゅう仮タイトルでしょうか。

題名もちよいと ぼかしたつもりです。

「地主と村長の息子」

にしちゃったら、ばれればな31話になっちゃうもんね。

どうでもいいか。

32話目はそのタイトルになりそうです。

レオナルが物凄く、大人気ない。

いっつか。

32 魔女と地主と村長のせがれ

「いいなずけ？」

魔女の言葉に思い当たる所は無い。

どうやら古語ではないようだ、という察しが付く。

では、何だろう？

考え込んでしまう。

はたと気が付けば地主様の腕の中だった。

何だろう。

最近、当たり前のように抱えられる事が多くなったせいか、こうやって密着されても平気になってきた。

慣れっというのは怖い。

それでもいい加減、離れたい。

まずは意思表示として、両手を突っぱねてもがいてみた。

少しゆるんだが、解放されたとはいい切れない状態に急に恥ずかしくなった。

何より目の前の青年の視線が痛い。

「地主様、あの。離してください」

「……。」

再び背に回された腕に、力がこもって抱き寄せられてしまった。

無言で拒否されたと知る。

彼のまとう香りに包まれて、本気で慌ててしまう。

咽喉の奥で小さく悲鳴を上げてしまったが、聞こえただろうか？

「おい！ 嫌がっているじゃないか。離してやれ！」

青年が地主様の肩に手を掛けたようだ。

今にも飛び掛りそうな勢いに押されながら、何とか場を取り繕おうと声を上げた。

「あの、大丈夫だから乱暴な事、この方にしないで？」

彼の琥珀色の瞳に見えていた怒りが収まった様に見えた。

頷いて見せると、彼も「わかったよ」と呟いて頷いてくれた。

ほっとした。大声を出されるのは苦手だ。争いごとのある場に身を置くのも。

次は警戒心も露わに、私を抱き込もうとする腕の主を見上げる。

「申しわけありません、地主様。足が痛くなってきたので、椅子に」

腰掛けても構いませんかと、伝え切るよりも早く身体が浮いていた。

それも一瞬の出来事で、すぐさま腰掛けさせられたと気が付く。安定感に一息ついた。

この力強い腕から解放されたせいでもあるし、やっと足に掛かっていた負担から解放された事も大きい。

「足が痛むのか？」

頭上から降ってくるように響く声に見上げた。

が、それも短い間だった。

地主様が膝を折ったからだ。

そうして目線を合わされた。

「見せてみる」

そう言いながら、右脚の方の靴紐を弛められた。あっさりと脱がされてしまいそうになる。

だが、それを何とか押し留めた。

今日のこの服はいくらか少し、スカートの裾が短いのだ。

いつものような踝くるぶし近くまであるわけではなく、せいぜい膝頭を覆うのが精一杯だ。

この編み上げの靴を脱いでしたら、醜く引き連れた傷痕を晒してしまう事になる。

そんなのは嫌。

それに痛むのは、どちらかといえば体重を掛けてしまう反対の足の方だった。

「大丈夫です。もう、座れたから楽になってきました。それに痛いのは左の方です」

そう訴える。

だが地主様は引かない。

「左？ 右は痛まないのか」

尋ねながら左の靴紐も弛めてしまう。

「もう、大丈夫です。ずっとこっちに体重を掛けて立っていて、くたびれただけです」

「靴を脱いで楽にしておけ」

「あの、や……。自分でします」

靴をどうあってもゆるめようとする指先を止めようと、そちらにばかり気を取られていた。

青年は腕を組み、顎をしゃくって地主様の方を指した。
その視線に倣うと地主様と目が合った。
深い紺色の瞳を覗く。

「何？ 何って……。お仕えしている、大地主様です」

そうだ。それ以外に何と言いうようも無い。

確信して言い切る。

それで間違いないはずなのだが、当の地主様からはちっと小さく舌打ちされた。

何故だろう。

「納め足りない税金分を働くように言われているので、私の雇い主様であります」と、ちゃんと説明しなければいけないのかもしれない。

そう付け加えようと口を開きかけた時、地主様からも問い掛けられた。

「カルヴィナ。この男はオマエにとって何者なのだ？」

さっきと同じ問い掛けだった。

「村の男の人です。地主様」

「そうか。それだけなのだな」

「はい」

「親しい訳では無いのだな」

「はい」

こつくりと頷いて見せると、何故か頭を撫ぜられた。

「大地主サマとやら。アンタだって、俺と立ち位置はそう変わらな

い」

腕組みしたままの彼が、鼻を鳴らして冷たく言い放つ。

そしてもう一つの椅子に腰を下ろすと、自分の頭をワシワシと掻いた。

そのまま、髪を前から後ろに撫で付けて整えてから、私と視線を合わせる。

「エイメ。おまえは知らないんだな。俺が大魔女に掛け合っていたことを」

「掛け合う？」

「そうだ。おまえを俺の嫁に欲しいと、ずっと掛け合っていた」
「え？」

そんな話は今、初めて聞いた。

それに彼とは、まともに言葉を交わさなくなって随分と立っている。

話したと言っても他愛の無い内容だった筈で、しかもそれはお互いがまだ幼かった頃の事ではないだろうか？

そういえば彼の名前すら知らない。

子供だった頃、名前を尋ねられて答えられないのだと言ったら、ひどく彼の機嫌を損ねた覚えがある。

「だったら俺もオマエになど、名乗らない！」と。

ふいに視線を外されてしまった。

それは今朝方の地主様と同じような反応だった。

「それはまだ許嫁とは言わないな」

「うるせーな！俺が先に名乗りを上げていたんだ。その権利がある」

「どこの決まりだ、それは」

突然の言葉に思考が付いて行かなかった。

それに構わず、青年が続ける。

「エイメ。おまえの名はカルヴィナと言うのが真まことなのか？」

「ううん。地主様が……名付けて下さったの。名乗る事が出来ませんので便宜上、娘とお呼び下さいって言ったらね」

地主様を窺うようにしながら、そつと説明した。

「皆さん、それぞれ素敵な名前を付けて呼んでくれているの」

そう付け足す。

「そうか。なら安心した。まだ、誰にもオマエは真の名を名乗っていないのだろうか？」

「う、ん。まあ」

魔女の名はそのまま力を持つ。

真名を呼ばれるのは、身も心も——魂までをも支配されてしまう事を意味するのだ。

だから、生涯ただ一人と決めた相手以外に、名乗ってはいけないし呼ばせてもいけない。

『おまえが真に、身も心も委ねてもいいと思える相手だけに名乗るんだよ』

そうおばあちゃんから教えられた。

「大魔女が言っていた。オマエ自身が自ら、名乗ってくれたならば許可すると」

そう言って私をじっと見つめながら彼は腰を上げ、そしてその場で跪いた。

胸に手を当てている。

琥珀の瞳がじっとこちらを見つめてくる。

逸らすのを許さないと言うよりも、逸らさないでくれと懇願されているような真摯な眼差しだった。

「だから、エイメ。俺に本当の名を教えてはくれないか。俺に、俺だけに」

「どうして？」

「オマエは人の話を聞いていなかった……訳じゃないよな？ 頼むぜ」

「聞いていたけれど、意味がわかりません」

「オマエの名を俺だけに呼ばせて欲しいからだ」

「村長の後を継ぐものとして、魔女の私を支配してしまいたいからそう言っているの？」

「……………」

地主様は押し黙ったまま傍らに居る。

それだけなのに、ひどく怖かった。

何だかよくわからないが、私の事も含めて怒っているようだ。

何だろう、このいたたまれない空気は……。

エルさんはまだ、戻って来ないのだろうか。

32 魔女と地主と村長のせがれ（後書き）

『何気にお久しぶりです。』

年末年始のわたたくで、少し間があきました。

やるな。村長のせがれ。

ものすごく頑張っていると思います。

それだけ焦っている。

そこを汲み取れない魔女っこ。

33 魔女と地主と求婚者

責めるような口調になってしまったのが、自分でも説明が付かなかった。

名乗れないなら、オレも名乗らないと宣告されていた事をありありと思い出した。

そうやってお互い、そのまま名乗りあう事も無くやってきたではないか。

付かず離れず。

魔女の娘と村長の息子には、その距離が大事なのではないか。

その領域に踏み込まれた事が、こんなにも不快だとは思わなかった。

何故か裏切られたような気さえしてくる。

「私もあなたの名前を知らない。だからお互い様だと思う。これから先もそれでいいでしょう？」

「オレはオマエを責めている訳ではないんだ。それとも、名乗れば許してくれるのか？」

「そんな事を言い出すこと事態、信じられません。どうしてそんなこと、急に言い出すの？」

今迄みたいに関らんフリをしていてくれたら、それで済む話なのに。

「どうしてって……。」

「私、あなたのことも何も知らない。お願いだからもう帰って」

気が付けば一息にそう言い放っていた。
まただ。

語尾が震えて情けない事この上なかった。
人馴れしていないせいかな、いつも感情が高ぶると声が裏返ってしまふ。

「帰ってよ！」

「エイメ……。 」

うろたえ切った声に名前を呼ばれた。
弱り切った様子で何とも憐れだった。
でも同情できない。

『オレの嫁にしたいと――』

おばあちゃんに、掛け合っていた？
いつの間に？ ずっとって言った？
ずっとってどれくらい前からの話？

駄目だ。受け止めきれそうもない。

何の話だろう。

今、初めて耳にした。

私は何も聞かされていない！

信じられない気持ちがあるまま、口調と眼差しに現れてしまう。
自分で言っておきながら、警戒心丸出しの冷たいものだった。

そんな事を言い出すのは、私の魔女としての知恵が必要だから。
きっとそうだ。

彼は村長の跡取りだもの。

村を豊かにするために、森の恩恵が必要だと思ったに違いない。
地主様みたいに。

そうでなければ顔なじみとは言え、ろくに知りもしない娘に求婚するなんて有りえなさ過ぎる。

それでなくとも色々欠陥だらけで、持参金も用意できないというのに。

とんだ辱めだと思った。

地主様だって仰っていたではないか。

持参金がなければ嫁の貰い手だつてなからう。

そうなのだ。

その家につり合う持参金を用意できなければ、正式な婚姻と認められないものなのだ。

ましてや彼は村一番の有力者の家。

そんな事も分からない訳ではあるまいに。

「今までのオレの態度はそこまで酷かったんだな」

「……。」

「悪かった。オマエにしてみたら、急に何を言いだすのかといった所だな？　驚かせたな。すまない」

そんな彼の様子に、真摯な気持ちを踏みにじってしまった罪悪感すら覚える。

でも、どうしても悔しくて涙が滲んでしまった。

そうだ。悔しい。

それでもどうにか涙が零れないようにと、がんばって顔を上げ続けた。

何より自分の知らない所で、おばあちゃんと話をしていた所が気

に入らない。

それにおばあちゃんは、どうして私に何も教えてくれなかったの
だろう？

言うまでも無いと判断したのだろうか。

お互いの仲で秘密なんて無いと思っていたから、少なからず衝撃
だった。

いきなり現れて我が物顔で、訳のわからないことを言い出すのは
地主様だけで間に合っている。

そこで痛いくらい近くにあった、眼差しとぶつかった。

深い濃紺の瞳が、何やら憐れなものを見たとても言いたそうに揺
らいで見える。

そこでやっと自分が、地主様に取り縋っていた事に気が付いた。

感情が高ぶりすぎて、周りを置き去りにしてしまったらしい。

明らかに自分の感情に、地主様を巻き込んでしまった。

私が手を彼の上着に掛けていなければ、彼はどこへなりとも自由
に行けたはずなのだ。

また、見つとも無いところを見せてしまった。

地主様の前で泣いて大騒ぎするのは、これが初めてではない。

今更といえど今更だが、あんまり居心地の良いものではなかった。

『申っ、：しわけっ、ありません。お見苦しい所を、つく』

アレだけ勢いがあったはずなのに我に返った途端、気恥ずかしく
もあつてかしゃくり上げ始めていた。

嫌になる。

『何も謝らなくていい、カルヴィナ。また日を改めよう』

無意識で古語で詫びていたらしい。

地主様は私が古語で話し掛けると、それに合わせてくれるのだと気が付いている。

「戻るか」

地主様が古語をやめて宣言した。

それは私だけにではなく、村の若者に向けられてのようだった。

「……。」

首を縦にも横にも振れず、ただ固まる。

正直、まだ帰りたくない。

だからといって、このままここに居るのもどうかと思う。

「待った！ 地主サマ、魔女の娘は森に帰してくれ」

「それは出来ない」

どうして地主様に言われると、そんなに腹が立たないのだろうか？

不思議に思いながら、地主様の言葉に耳を傾けていた。

感情的ではなく、何か考え合っの事だろうと思わせる落ち着いた声に耳を澄ます。

自分よりも恐ろしく格が上であると、認識しているからだろうか。それもある。

我が物顔であるのは、この彼と大差ないはずだ。

それでも彼が「駄目といったら駄目だ」という時は、絶対だと多々思い知らされてきたせいなのか。わからない。

ただ一つ、これだけは言える。

どうあっても足りない税金分を綺麗に納めてからでないと、答えは出ないという事だ。

・・・・・・
＊・・・・・＊

戻る戻らない、帰せ帰さない。

そんな押し問答が繰り返される。

地主様と村の彼とで、だ。

相変らず二人とも、私の意思を尊重する気は無いらしい。

二人とも一歩も引かない。

「あとう？」

どうにもならないので、声を掛けてみた。

『戻るぞ、カルヴィナ』

「ここに帰りただろう、エイメ」

駄目だ。話が付きそうに無い。

「あんた！ わざとらしく古語を使うのは卑怯だぞ！ オレにも分かるように言えよ」

『そんな必要があるか。俺はカルヴィナに話しかけている』

頭上でわあわあ言い合う二人に、ため息を付くしかなかった。

しばらくすれば、どちらかが折れるだろう。

どちらかに現れるのを待つ事にしてみたのだが。

くたびれてきたのは私だけのようだ。

自分からは――。

「エイメ」

二人とも、私の意志でどちらか選べと言っているのだ。

椅子に腰掛けたままだったが、姿勢を正して二人を見上げた。琥珀色と濃い紺色とを代わる代わる見比べる。

「エイメ！」

ぴしゃりと言いつつ、きっぱりと宣言した。

$\ast$	
$\ddot{}$	$\bullet$
$\bullet$	$\bullet$
$\circ$	$\circ$
$\bullet$	$\bullet$
$\ddot{}$	$\ddot{}$
$\ast$	$\ast$
$\ddot{}$	$\ddot{}$
$\bullet$	$\bullet$
$\circ$	$\circ$
	$\bullet$
	$\ddot{}$
	$\ast$
	$\ddot{}$
	$\bullet$
	$\circ$
	$\bullet$
	$\ddot{}$
	$\ast$
	$\ddot{}$
	$\bullet$
	$\circ$
	$\bullet$
	$\ddot{}$
	$\ast$
	$\ddot{}$
	$\bullet$
	$\circ$
	$\bullet$
	$\ddot{}$

遠くの方、家の外から犬たちの鳴き声が聞こえた。

33 魔女と地主と求婚者（後書き）

『どっちがリードか!？』

まずい。

素直な方が勝つな。

なんだ、地主様、存在感が……薄。

と、思いきや。

意外に魔女っこの中で存在を示し始めていたようなので、一安心。

……するには間違いなく早い。

どう出る、レオナル。

34 魔女と地主と村娘

ウォン！　ウォン！　ウォン！

聞き覚えのあるコの声だ。吠え方だった。

きっとあの薄茶色の毛並のコだと思う。

あの猟犬は構って欲しがってやたらと吠えるから、一番苦手だった。

でもその割に気質は大人しい。注意を向けてやれば、それだけでお利口になる。

それよりも吠えないくせに、いつの間にかスカートの裾を咥えて離さないクロブチのコの方が始末に終えない。

撫でてやるまでけっして、けっして！　離さないのだ。

二頭は地主様に良く懐いていた。

だからといって私には懐かなくていい。

犬は吠えるから怖いとうっかり漏らした翌日、犬小屋へと案内された。

否。強制的に連行されたのだ。

何の責め苦かと本気で泣いて怯えて、地主様に抱きかかえるというより拘束された。

恥も外聞もこの時ばかりは吹き飛んで、必死にしがみ付いた。

恐慌状態に陥って、五匹の犬に負けないくらい大声を出したように思う。

それも大きな胸に受け止められたといえるかもしれないが、自分では制御出来ない震えが来てそれどころじゃなかった。

『怯えるな。慣れろ。この犬たちはオマエの味方になる。主人の一人として毅然として振舞え』

冗談じゃない。絶対に無理だ。
何を言い出すのだこのお方は、と思ったが口に出来なかった。

『おまえたち。この娘に無礼を働かないように。これは大魔女の娘だ。唸ったら拳骨で、吠え立てれば鞭をやろう。噛み付いたら永久追放だ』

等と地主様が余計な事を言うから、いけないのだ。

あのコ達の内、何匹かは私の事も気を使うようになった。
気のせいなんかじゃない。
言葉を持たない動物たちの方がずっと素直に感情をぶつけてくる。
怖いくらい、真っ直ぐに。

だから私の犬がコワイっていう気持ちも見透かされていると思う。

そこがやっぱり、怖いと思ってしまうのだ。

地主様は毎日、私を必ず犬に会わせる様になった。
時には餌を与えるよう指示したり、毛並を撫でてやれと世話をさせる。

何か考えがあつての事なのだろうが、あんまり理解はしたくない。

。。
。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。*。。
。。

犬の鳴き声が聞こえてくるといふ事は、エルさんが戻ってきたといふ事だ。

良かった。これで少しはマシになる事を期待する。

コンコン、と扉が叩かれた。

扉はすでに薄く開いており、そんな風に気を使う所がエルさんだと思ったら、ひよいと覗き込んだのは金の髪の子だった。

「エイメリイ様にお会いしたいと仰るので、お連れしました」

さらりとエルさんは言った。

「私もお邪魔して、大丈夫かな？」

びっくりしながらも、こくこくと頷く。

足取り軽やかに彼女が私たちに近付くと、部屋の雰囲気がガラッと代わった。

「あ！　こらく！　また、このコいじめて泣かせたの……は、誰かしらね？」

「うるせえのが来た」

「よし。オマエだな、ジェス。エイメを泣かせたのは。そこに直りな？」

軽やかな足取りの主は躊躇うことなく、自分よりも随分高くにある胸倉を取った。

いつかどこかで見た光景である。

この自分と年のあまり変わらない少女にも、見覚えがあった。たまに村で絡まれてしまうと、いつでも駆けつけて来てくれた恩人の顔を忘れる訳が無い。

明るい蜂蜜色の髪が眩しくって、それに負けない笑顔を私にも向けてくれた。

彼女はそれのおやかな見た目に関わらず、なかなかの度胸の持ち主だと常々思っていた。

でなければ、魔女の娘にそうそう関わろうとしないはずだ。しかも愛想よく。

それでも勢いに飲まれて、ぽかんとしてしまった。

地主様から知り合いかと、尋ねられてようやく我に返ったくらいだ。

「ミルア。ミルルーア・シュゼット」

彼女の名前を呼んだ。

澄んだ青空色の瞳が真っ直ぐに私を見つめると、困ったように笑いかけた。

真っ白の歯が、ツヤツヤの唇からこぼれるように覗く。

飛び切りに可愛らしい。

これに参ってしまわない人なんていないだろう。

「お久しぶり、エイメ。急にいなくなったから心配したよ。でも、元気そうで良かった」

どうやらその言葉に偽りは無いらしい。

胸倉を掴んでいた手を離して、私に向って両手を広げた。

それくらい熱心に両手を握り締められて、苦しいくらいに抱きつかれたのだ。

「あ、ありがとう」

どうにか、そう答えるのが精一杯だった。

「何を怒っていたのか分からないけれど、随分と良い調子だったわね」

「そ、そう？」

聞いていたの？
とこっそり尋ねる。

「そうそう！」

聞こえちゃったのよと、悪びれる様子も無く囁かれた。

「生きているって感じがした」

そうイタズラっぽく言われて、安心したよ、と笑われた。

いつたい何時いつから聞かれていたのだろう。

ミルアの言葉から察するに、だいぶ前からだろう。

恥ずかしくって顔が火照った。

ミルアは「あはは！」と笑い出す。

段々と忍び笑いが堪え切れなくなつて行くらしいその様子に、首を傾げるより他に無い。

「ううん。いい気味っていうか小気味良いなと思わない？」

男ってしょうがないわね、って思わない？

そう、ごくごく小さく付け足された。

……何の事かわからない。

[illegible]

「私たちブレンダニイの村人は困っているのです、地主様」

ミルアが地主様と聞いていくらか態度を改めた。

まさか大地主様が、こんな所に足を運ぶとは思っていなかったらしい。

ロウニア家にお仕えの人が付き添って来たのだろう、くらいにし

か。

最初は驚きも露わに目をまん丸にして地主様を見て、私を見た。

大地 主様 ご本人！？

眼差しが雄弁にそう語っていた。

それでもしばらくすると落ち着きを取り戻し、やはり彼女らしく物怖じしない。

「聞こう」

ありがとうございます、と頭を下げてからミルアは切り出した。

「村はもうじき収穫を祝い、森への感謝を捧げる祭りを迎えます。それなのに森には魔女が不在なのです」

「ああ」

「祭りに必要とされる香草や薬草や蝋燭に、仕上げの呪文。その他もろもろに必要な森の知恵や、お祭りの時に捧げる祈りの言葉を教えてくれる者が、今は不在です」

「おまえ達だけでは、準備がままならないと言うのか？」

「その通りですわ、地主様。できるのはある程度であって、完璧ではありません。祭りまであと十日を切りました」

真剣な面持ちでミルアは頷いた。

傍らに立っていた村長の息子の彼も、身を正して頷く。

そんな中、自分だけが椅子に腰掛けているのは気が引けた。

「大魔女が立ち去った森に恩恵が望めなくなる事や、祭りに不備があったせいで凶事を予測する者だっているんだ。例えそれがどんなに馬鹿げた、迷信めいたものにしか感じられないとしても。今、村には古語を操れる者がいないんだ。——エイメ以外に」

「祭事に欠かせない祈りの言葉は古語で無ければ、森に住まう神々や精霊には伝わらないとされているのです」

「いつもなら巫女役が早い段階で大魔女に教わるんだが、今回はそ

うも行かなかった。だから、エイメの力を借りたい」

いつしか二人は地主様では無く私の方を見て、熱心に言っていた。正直、向けられた事のない熱意に気圧されてしまう。思わず俯きかけたが、どうにか堪えて二人を見つめた。真剣な眼差しが、本当に困っているのだと訴えてくる。

そうだ。泣いてばかりいても仕方が無い。足がどうであろうと、見てくれがカラスであろうと私が「大魔女の娘」であることに変わりはない。

おばあちゃんは言ってくれた。

『おまえは私の自慢の娘だよ』

ならばそれに恥じない行いをするまでだ。

「地主様」

「……何だ」

一瞬の間を置いてからぼそりと呟くような返答があった。それに怯みそうになったが、拳を作って堪える。

目を逸らさないようにするだけで精一杯だったが、彼を見上げた。

言葉がなかなか出てこない。

それでも彼が辛抱強く待ってくれている事だけはわかる。

この方は人の話を聞かない人ではないのだ。

「あの、村祭りの準備が必要ようです。手伝いに行く事をお許してください。大魔女の娘としてやる事があるのです。準備が済んだら、

地主様のお役に立てるように戻りますから。その、家にある薬草の干したものや、種を持って帰って傷薬やお茶をこしらえますから」

「準備だけなのか？」

地主様がどこか慎重に言った。

それだけで済むのか、と確認されているようだ。

「え？ は、」

「何言ってるんだよ！ 俺と祭りに参加するだろ」

当然の事とはい、と答えようとする前に遮られた。

「え？ え？」

腕を引かれて振り返り見上げれば、ジェス青年がどこか必死の様子で言う事に驚いた。

「なあ！」

よくわからないまま彼を見つめていると、ことさら強く腕を引かれた。

頷けと言う事なのだろう。それくらいならわかる。

だが彼がそんな事を言いだす意味がわからなくて、ますます混乱した。

少しの間、固まってしまう。

「お祭りに、参加？ 魔女の役目はいつも準備をするまでだったと思うんだけど」

そうだ。後は村長さんや、巫女役に選ばれた娘たちの出番のはずだ。

何を隠そう私、魔女の娘はお祭りに参加した事がない。

魔女の祭りはすでに祭りが始まる前から始まっており、準備が済めば魔女の祭りは終わるのだ。

34 魔女と地主と村娘（後書き）

『お祭りがんばるぞ！』

決意する魔女っこ。

魔女の力が必要ならば、やるしかありません。

問題はお許しが出るかどうか。

拍手やコメントありがとうございます！

く拍手お礼小話も新しくしましたく

35 魔女と地主と祭りに張り切る人々

いつもこの時期になると、おばあちゃんとお祭りの準備をした。

森の恵みは年中だけれども、一番多くなるこの季節。

感謝を表し、また来年も変わらず恵みがいただけますようにと、祈りを捧げるためのお祭りだ。

おばあちゃんと村に顔を出す事が多くなるのが、この時期だった。頼まれ物をお届けにあがったり、施す刺繍の図案の相談に乗ったり。

おばあちゃんと一緒に、巫女役に選ばれた娘さんに、お祭りで女神様と森の神様に捧げる祈りの言葉を教えたり。

二十日間はほとんど毎日のように、村と森の家とを行き来する。

準備に訪れるたびに、村に溢れる活気が日に日に増して行くのを感じる。

そわそわと浮き立つような感覚が伝わって来て、私も何だかふわふわした気分になってしまるのが常だ。

広場にやぐらを男の人たちが作り上げて行くのを、遠くから見かける。

その近くの祭壇に捧げ物や、儀式に使う杯を用意する頃にはたいてい完成している。

それを遠巻きに眺めながら、今年も無事に準備が済んだと思いつつ、心の中で一息つく。

出来上がったやぐらには、その日のために準備した祝福の木の実が入ったお菓子と、乾燥させたリイユダの花と葉が積み上げられ

る。

それを巫女役の娘と、森の神様の役の若者が下にいる皆に撒くのだそうだ。

私は実際に、その様子を見た事が無い。人づてに聞いただけだ。

それは森の神様からの祝福とされていて、一年間の幸いを授け、魔を払ってくれるのだそうだ。

『おばあちゃんはお祭りに行かないの？』

『ああ。おまえは行っておいで』

おばあちゃんはいつも、弱々しい笑みを見せた。

疲れたのだろう。

口にはけっして出しはしないが、いつも準備が終わった後は辛そうだった。

『ううん！ おばあちゃんが行かないなら、行かない』

『ワタシに遠慮する事なんてないんだよ？ 行っておいで』

『ううん、行かない。おばあちゃんと一緒がいいの』

おばあちゃんを一人きりにして、自分だけがお祭りに参加するなんて嫌だった。

それに一人きりで行く勇気も無かった。

きつとまた、カラス娘とはやし立てられるに決まっている。

せつかくの楽しい気分を、塗りつぶされてしまうのが怖かった。

おばあちゃんこと大魔女と、一緒に準備が出来ただけで充分満足だ。

そうやって魔女は祭りを迎え、そして終えるのだ。

今までずっとそうやってきたのに、何故そのように言い出すのか分からなかった。

きょんとしてしまふ。

「オマエはいつもさっさと帰っちまうから、知らないだろ？ 祭りの様子をさ。だから、オレと一緒に祭りに行こうぜ。準備だけじゃ、オマエだって面白くないだろう？ なあ！」

「ううん、行かない」

即座に首を横に振る。

ジェス青年が勢い良く屈んで、私と視線を合わせてから、なおも続けた。

「どうして、そんな事言うんだ？」

「どうしてって……。魔女だから？」

「関係ないだろう」

必死に言い募る様子に気圧されて、思わず身を引いてしまふ。

何だろう。あんまりにも真剣で熱っぽい眼差しに、焼かれてしまふそうになる。

どうあっても逃げたくなつて、小さく「離して」と訴えた。

肩に食い込んだ力が増す。

「いい加減にしないか」

「いい加減にしときなよ、ジェス！ ますます嫌われるよ！」

地主様の静かだが苛立ったお声と、ミルアの威勢のいい声が被つた。

「うるせえな」

「オレとじゃない！ 私たちと！ お祭りに参加するのよ、ねっ！？」

「え？ え、と？」

「当たり前じゃない！ そうでなければ誰が古語を操れるって言うの？ お祭りを手伝ってくれるのでしょうか、大魔女の娘よ？」

ミルアが嫌に改まって言うので、思わず頷いてしまった。

「う、うん！」

「はい、決定！ あ！ もちろん、地主様もリヒヤエルさんも一緒にどうぞ」
「……。」

地主様は何も仰らない。

エルさんは、俯いて小刻みに肩を揺らしている。
必死に笑いを堪えているようだ。

今のやり取りのどこに、笑える所があるのだろうか。

エルさんが解らない。

私はハラハラしながら、事の成り行きを見守っている事しか出来ずにいる。

「ミルア、おまえなあ」

「何よ？ 何か文句あるの？ 無いでしょ。あるとしても言わせないけどね」

ミルアは自分よりもずっと、背の高い青年を見上げながら凄んでいる。

図体では負けていないはずの青年は、決まり悪そうに背を丸めて、しきりに後ろ頭を掻き毟っていた。

「あー！もう、わかったよ！」

「よろしい。じゃあ、さっさと村長さん達に報告に行きましょう。今年、森の魔女に加えて、地主様もご参加下さいますから、間違いなく大成功！ にぎやかになりますよって」

ミルアが嬉しそうに笑い声を上げながら、私の両手をすくい上げて、ぶんぶん振り回した。

	○
•	○
• •	•
*	○
• •	• •
•	*
○	• •
•	○
	•
	• •
	*
	• •
	○
	•
	○
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•

それからすぐに村へと案内された。

途中、雨がぱらつき出した。

村に付く頃には、本格的などしやぶりとなっていた。

「ジェス！
じゃあ、頼んだわよ」

と、言い残すとミルアは、土砂降りのなか自分の家に逃げ帰って行った。

村長さんの家に招かれ客室に通され、地主様は丁重にもてなされる。

地主様が魔女の私を、ロウニア家専属の魔女にしたと告げたお蔭

なのか、それは私にまで及んだ。

目の前のテーブルに、お茶とチーズを挟んだパンと、蜂蜜をかけた焼き菓子が並べられる。

久しぶりに会った村長さんは、優しく微笑み掛けてくれた。

こうしてよくよく見ると、ジェス青年と似ているのは髪と瞳の色だけの気がする。

村長さんはどちらかと言うと小柄で、少しふっくらされているせいかもしれない。

口調も気性も穏やかで、いつも会うとほっとする。

「元気にしていたかね？」

「はい」

「たくさん食べて行きなさい。遠慮する事は無いからね。さあ」

何故かしきりに、お菓子を勧められた。

そうは言われても、そんなには食べられない。

ありがたいが申し訳なく思っ、地主様を窺ってみた。

「この娘は小食な性質のようで、こちらも手を焼いている」

「さようでございましたか。エイメ、その……。ちゃんと、食べているのかい？」

「はい。食べています」

「そうか。なら、いいんだが。エイメ、遠慮しないで食べて行きなさい。さあ、これは好きかな？」

私に好みを尋ねながら村長さんは、次々とお菓子をお皿に載せてしまう。

「はい。ありがとうございます」

「村長。あまりこの娘に菓子を与えると、また夕食は要らないなどと言ひ出すので程ほどに頼む」

まさにそう言うつもりでいた。

「そうでしたか。じゃあエイメ、残したら包んであげよう。日持ちするから後でお上がり」

「ありがとうございます」

その間、傍らに同席していたジェス青年は、一言も余計な言葉を発さなかった。

地主様と村長さんは祭事に必要な事柄から、村の様子や治安や今年の収穫の出来具合等について話し始める。

私はどうやら食べる事に専念した方が良さそうだった。

ただその打ち合わせ中、何度も視線を感じた。

ひとつは地主様で、もうひとつはジェス青年だった。

そつと窺うと視線が合う。

合うたびにさり気なく逸らされるので、あまり見ないようにする。

時折り、村長さんとも視線が合った。

村長さんだけはにっこりと笑いかけながら、お茶やお菓子のお代わりを勧めてくれる。

雨音が激しくなつて、窓に打ち付けられていた。

$\circ$	
$\bullet$	$\circ$
$\bullet \bullet$	$\bullet$
$\ast$	$\circ$
$\bullet \bullet$	$\bullet \bullet$
$\bullet$	$\ast$
$\circ$	$\bullet \bullet$
$\bullet$	$\circ$
	$\bullet$
	$\bullet \bullet$
	$\ast$
	$\bullet \bullet$
	$\circ$
	$\bullet$
	$\circ$
	$\bullet \bullet$
	$\ast$
	$\bullet \bullet$
	$\bullet$
	$\circ$
	$\bullet$
	$\bullet \bullet$
	$\ast$
	$\bullet \bullet$
	$\bullet$

打ち合わせを終えて、小降りになった所を見計らって、急いで村を出た。

「今日は狩り日和だと言っていたな、魔女の娘？」

帰りの馬の上で、嫌味っぽいような、呆れたような調子で言われてしまった。

私も濡れないようにと、頭からフードつきの外套に包まれている。それでも叩きつける雨音に負けないようにと、そこは譲らずに言い張った。

「はい。今日は狩りに最適の日でした」

「おまえは」

ふいに頭を、フード越しにごしやごしとかき回されてしまった。

「俺が森の生きものを傷つけるのが嫌だったのか？」

「……。」

「わかった。おまえの前では狩りはしない。しかし、生きるためだけには行かう。それでいいな？」

こくんと頷くと、また同じように頭をごしやごしやにされた。

館に戻った頃にはすっかり日も暮れていた。

「急いで湯につけて、着替えさせてやってくれ」

自身も前髪から雫を滴らせながら、地主様はお姉さんに私を預ける。

その横にはリディアンナ様が、恨みがましそうに地主様を見上げていた。

大きく口角の下がった唇を開くと「ずるいわ！ 叔父様ったら！」と叫ぶ。

「まだ居たのか、リディアンナ。帰らなくていいのか？」

「今日は泊まります！ カルヴィナと夜通しおしゃべりします！」

「カルヴィナは今日は色々あって疲れている。明日にしまさい」

「カルヴィナ、叔父様のおっしゃっている事は本当？」

「ええと。確かに色々ありました、そんなに疲れてはいません」

「じゃあ、今日は一緒に眠っても良いでしょうか？ 夜通しおしゃべりっていうのは、嘘だから。眠るまででいいから、今日の事を話して聞かせてくれる？」

「はい、喜んで。リディアンナ様」

不安そうだったリディアンナ様に、笑顔が戻った。

横で地主様が「まず、着替えと食事が先だ」と、口うるさく繰り返しているのに「わかっておりますわ、もちろんです、叔父様！」と、リディアンナ様がやり返す。

夕食の席でも、そのままの雰囲気が続いた。

リディアンナ様は置いて行かれた事が相当、残念でならず悔しかっただらしい。

しきりに地主様はズルイと繰り返していた。

眠る仕度を整えて、早い内から寝台に二人で寝そべった。

それから、乞われるままに今日あった出来事を話した。

リディアンナ様はさかんに感動して見せ、つくづく一緒に行けなかったのは残念でならないと、零し続けた。

35 魔女と地主と祭りに張り切る人々（後書き）

『本当はもっと色々、言ってやりたかったミルア』

くその辺はおいおいと。

何となく、魔女っこは小動物扱いされているような気がします。

村長さんは小さい子を見ると、食べる食べると菓子だの果物だのを

次々に持って来る人です。

36 地主とその甥っ子

朝一番の来訪者を迎え入れる。

「おはようございます、叔父様！」

「おはようございます、地主様」

にっこりと笑いながらリディアンナが言い、きつちりと頭を下げながらカルヴィナが言った。

先程、扉を勢い良く叩いたのはリディアンナの方だろう。

そんなところは姉に似なくてもよいと思う。

いきなり開け放たれないだけ、まだマシだが。

「……おはよう」

今ちようど着替え終わり、食堂に顔を出そうかと思っていた所だった。

「叔父様、朝食をお持ちしましたの！」

リデイがはきはきと答える。

まあ、見れば分かる。頷いて見せた。

カルヴィナが緊張した面持ちで、慎重にワゴンを押し進めてきた。

二人は既に身なりを整えていた。

リディアンナは髪を二つに分けてみつあみにし、年相応の少女の雰囲気を出しているようだ。

装飾のあまり無い生成りのスカートに前掛け、赤地のベストという服装は、明らかに町娘の軽装である。

カルヴィナはといえば薄灰色の踝まである丈のスカートに、同じく物入れの付いた前掛け姿だった。

自分で縫ったと言っていた出で立ちである。

そこにリディアンナの差し入れた、少し厚手の上着を着込んでいた。

色合いは、濃い緑である。それとお揃いの布地で髪をまとめている。

それが魔女の娘によく似合っていた。

やはり女同士の見立ては違うな、と密かに感じる。

そんな祭りの準備に行くための仕度を整えた二人に、給仕されながら朝食を取っている。

「おまえ達はどうした？」

そう尋ねたら、とっくに済ませたという返事だった。

俺にもさっさと済ませて、森に送り届けろという催促らしい。

木の実を入れて焼きこんだパンに、薄く切り分けたチーズ。

干したイチジクに、茹でた卵。

焼いた肉が少し。

それらが綺麗に盛り付けられた皿を、リディアンナがテーブルへと並べ、カルヴィナが茶を注いで置いた。

「ありがとう」

礼を言うとりディアンナは「どういたしまして！」と、晴れ晴れとした笑顔を見せた。

一方のカルヴィナは薄っすらと微笑んでから、恥ずかしそうに俯いた。

当然だろう。

この娘の小食ぶりには手を焼いていると告げたが、どこかまだ疑わしそうな視線を向けられた。

カルヴィナが反応に困った様子で、こちらを見上げてきたので頷いてやると、やっと食べ始めた。

「おいしいかい？ さあ、これもお上がり」

口の周りに菓子のかけらを付け、唇を蜂蜜で濡らし、カルヴィナはこくこくと頷いていた。

一口を口に含んだら、そのまま菓子を両手で持ったまま、咀嚼そしゃくし続けている。

甘みに心揺り動かされたのか、心なしかその表情は明るかった。館で食事を一緒に取った時には、見たことの無い表情だった。

それをいささか悔しくも感じたが、カルヴィナのいつにない熱心な食欲に安堵する。

もぐもぐと無心に菓子を頬張る姿は、子リスにしか見えない。

正直に言うならば、恐ろしい愛らしさだった。

即行、その場で彼女を抱え上げて、暇いとを言い出さなかった自分を褒めたい。

「エイメ、地主様は、その。良くしてくださるかい？」

「っ、はひっ！」

慌てて答えてカルヴィナは、けほけほとむせていた。

まだいくらかも食べ進んでいない菓子を構えたまま、こちらを見てから、村長の息子の方を見た。

視線を感じて気になったのだろう。

安心させる為に頷いて見せてやると、安心したのか、再び口を動

かし始めた。

「……………！」

言葉も無いまま惚けたアホ面を晒す青年の姿を、視界の端で捉える。

それを横目でいなすと、慌てたように表情を引締めようとしていたが、上手く行っていなかった。

カルヴィナに目を奪われ、どうあっても視線をはがす事が出来ならしい。

赤面したのを誤魔化すように、しきりに口元に手を当てていた。

「それでは村長、明日から早速祭りの準備に取り掛かせるとしよう」

「助かります、地主様。では明日からエイメを迎えに行き……。」

「俺が送り届け、夕刻には迎えに来る。それが条件だ」

「承知いたしました」

青年が何か口を挟みたそうだったが、先にこちらの意向を告げた。

その場はそれで済んだはずだった。

館に帰り着き、カルヴィナに湯と食事を取らせ、リディアンナに任せた。

問題は二人に早く休むようにと告げて、自室に戻ってからである。神経が冴え渡り、いっこうに眠気が訪れなかった。

早朝から出かけ、雨に打たれた身である。

身体は疲れを訴えている。それでも。

何ともいえない不快感に襲われる。

——大地主サマとやら。アンタだって、俺と立ち位置はそう変わらない。

その言葉が、何故かしきりに繰り返し蘇った。

あの時そう言い返しておけば、こんな不可解な思いに囚われずに済んだのだろうか。

勝手に自分は許嫁だなどと言いつ出す男と同じ、だど？

我が物顔で魔女の家を歩き回り、真名を迫り、自分と祭りに参加するのだと言い出す男とか？

カルヴィナにしては珍しく、声を荒げて拒否していた。

いちいち相手にするのも馬鹿らしく、あの場はあえて無視したが、本当は言ってやりたかった。

——オマエと一緒にするな。

それこそ、何の話だ。

気が付けば杯を重ねていた。

そんな有様だつた。

おかげで今日の目覚めは悪かった。

酒が抜け切らないとまでは行かないが、身体が少々重かった。

[illegible]

期待に満ちた二人の眼差しに急かされながら、朝食を終えた。急かされるままに、馬小屋に向う。

そこには、馬の準備をしたりヒヤエルと連れ立って、久しぶりに顔を見る甥っ子の姿があった。

「ギルムード！」

リディアンナがいち早く声を上げた。

「や！ リディ姉^{ねえ}。帰ってこないから、お母様が心配して見に行けっというから来たよ。叔父上に挨拶も兼ねてね」

明るく人懐っこい笑みを浮かべながら、巻きくせのある髪を揺らし、ギルムードが馬から降り立った。

「叔父上、ご無沙汰しておりました」

「久しぶりだな、ギルムード。元気だったか？」

「もちろん。お母様から聞いてるよ。その子が魔女の娘だね？ うっわ！ かわいい！」

ギルムードは控えめに立つカルヴィナに、好奇心いっぱい眼差しを向ける。

甥っ子に年頃らしい恥じらいは無い。

彼は人が好きで、社交的なタチであり、誰とでも警戒心無く打ち解けようとする。

誰に似たのかと感心してしまう。

「そうでしょう！ カルヴィナ、わたくしの弟のギルムードよ」

「はじめまして、ギルムード様」

リディアンナからは誇らしげに紹介され、初対面にも関わらず手放しで歓迎するギルムードに、カルヴィナは恥ずかしそうにしてい

その後、話を聞いたギルムードも、自分も一緒に行くと言い出した。

そしてカルヴィナを、甥っ子が馬に乗せて行くとも言い出す。そこまでは予想通りだった。

何故かそこで、昨晚さんざん苛まれた、不可解な不快感が蘇る。

「カルヴィナ。俺の馬に乗せてあげるから、一緒におしゃべりしながら行こう。いいだろう？」

俺にも視線で問いながら、既にギルムードはカルヴィナに手を差し出していた。

「はい。おねがいします、ギル様」

その申し出に、カルヴィナは二つ返事で頷く。

そんな提案を無視し、さっさとカルヴィナを自分の馬に乗せる俺自身が、一番不可解だった。

36 地主とその甥っ子（後書き）

『不可解な不快感。』

うん。

どなたか、つつこんでやってください。

まだまだ自分を認めようとしないう地主さま。

少し、認め始めている様子ではありません。

37 魔女の娘と石屋の娘

「あの時ね。独り占めしないで下さいって、言っただけでやるつもりだったの」

向かい合って二人きりでの作業中、ミルアが突然そんな事を言い出した。

思わず、手が止まる。

乾燥させた薬草の花と葉を選り分けていた所だ。

何の事やら。

ミルアの話は大抵が突拍子もなく、突然始まる。

「あの時って、いつの事？ 誰に、何を？」

「初めてお会いした時の事。地主様に、エイメを」

「私を、独り占め？」

「でも、できなかった」

「流石のミルアでも、ちょっと……：……どうかと思うな。地主様だし」

「い・や。私はそういう意味でなく、負けたのよ。なんかね、アンタを大事に思っちゃってるからさ」

——当たり前のように寄りそう雰囲気は犯し難かったのよ。

ふうっとため息を付きながら、ミルアがこぼした。

視線は明後日の方向だ。

いったい彼女の目には、何が映っているのかと思わずにはいられない。

思うが問いかけてたりなんてしない。

疑問は胸の奥底にしまうに限る。

問い掛けたら最後、もつと疑問が増えるのは目に見えている。

私自身、これ以上の追及は止めにして、選り分けを開始する。
かさかさという音とともに、香草独特の良い香りが飛んでくる。
この香りは心を穏やかにしてくれる作用を持つ、とおばあちゃんから教わった。

「普段はどんな事を二人で話すの？」

「……特には何もないよ」

「えええ！？ そんなわけ無いでしょう？」

ほらっほらっ、思い出して！

そう言われてみても、ちっとも何も浮かばない。

ミルアの期待の込められた眼差しに、たじたじと後ずさりしたくなる。

何もかも見透かすかのような、澄んだ青空の前で感じるのと、同じ気持ちになる。

それと同時に何もかも、洗いざらい話してしまいたくなるのがズルイなと思う。

苦笑しながら「そうだねえ？」と、考えるふりをした。

本当に話す事なんか、無い。

見当たらなくて途方に暮れている毎日なのだ。

だから私の方から話しかけることはあまりなく、地主様から特には無かった。

二人、無言のままで往復する。

それも、もう三日目になる。

今朝も無言で抱えあげられ馬に乘せられて、送り届けてもらった。

『ありがとうございます』

『ではまた夕刻に迎えに来る』

古語でそう交わした。それきりだ。

「本当に何にもないよ」

「本当にいい？」

何故か疑わしそうな眼差しに晒されたが、隠し立てするような事は何も無い。

「挨拶と必要最低限の事だけだよ。しいて言えば」

「しいて、何？」

「叱られてばかりいるよ」

実は今朝も、少し怒らせてしまった。

思い出して、また気持ちが悪く沈んでしまう。

せっかく作業で気を紛らせていたのに、とミルアを恨みがましく見やった。

「何か、あったの？ 言ってみなよ」

「今朝は、地主様に送っていたただかなくても大丈夫ですって、お伝えしたの。そうしたら、すごく睨まれた」

「何それ、はしより過ぎ！ エイメは最初と最後の結論しか話さないんだもの！ もうくもつと詳しく話してよ」

そこはお互い様だと思うのだが。

今はそんな事はどうでもいいでしょう、とミルアは続きを促がした。

てしまった。

「それはエイメが悪い」

そうきっぱり言い切られ、釈然としなかった。

一方的に責められた気分にもっとしながら、再び作業に没頭する事にする。

それでもミルアは解放してくれる気はないらしく、しつこく話題を振って食い下がってくる。

「ね、ね、ね！ 赤いのは地主様に、差し上げるのでしょうか？」

「何を？」

「もう！ 決まっているじゃない！ ちゃんとワタシの言う事、聞いてくれていた？」

ああ。

あの、お祭りの護符の事か。

明日はそれをこしらえる。

だからこそ、ミルアも含めて村の女の子たちは、この話題で持ち切りだった。

そんな中、ミルアがことに熱心なのは、彼女の家が石屋のせいもあるだろう。

綺麗に磨かれた色石を、編みこんだ紐と布とで通し形にして、腕輪にするのだ。

「ううん。あげないよ」

「どうして！ まさか、ジェスにあげるの？」

「ううん。まさか」

「まさか、なんだね。かわいそうなヤツ。じゃあせめて、青いのは

あの人？ エル、さんだっけ？」

「誰にもあげません」

「何でよ!!」

「そういうミルアは誰にあげるの？」

「それは当日のお楽しみ」

「もう！ちゃんと手も動かしてよ！これ夕刻までに終わらせないと、間に合わないんだから！」

きやあきやあ騒ぎながら、作業を続けた。

何だか気持ちが少しだけ楽になった気がした。

[illegible]

約束の時刻になると、地主様は現れた。

馬のいななきが先触れとなり、しぶしぶ杖を手にして立ち上がり、表に出た。

ミルアも一緒に見送ってくれる。

彼が馬から降り立ち、大股で迷い無く近付いて来た。

襟元がきつちりと詰まつた長い上着に、その上から羽織つた外套マントが翻る。

全身黒づくめの衣装は、よくよく見ると襟元と袖元に、鳶と蛇の絡む刺繍が細やかに施されている。

魔術と英知の均衡を表す紋様は、神殿に属する者の証だそうだ。選ばれた者だけに、許される出で立ちである。

今日はいつもとより、
厳めしく感じてしまう格好だから、
なおのこ
と気後れしてしまう。

「どこかの騎士様みたいね。すてき」

こつそりとミルアが耳打ちしてきた。

すてき？

ミルアは彼が怖くないのか、と感心した。

「そうだよ。騎士様だよ」

「え？地主様は騎士でもあるの？」

「そうみたい。神殿の護衛団の、指導者でもあらわれるらしいの」

「すごいじゃない。剣術を極められているって事なのかしら。どうりで、あのお体な訳だわ」

常々、頑丈そうだと思っていた体つきは、それを物語っている。

地主様は、地主様であるだけではなかった。

だから今日は神殿に赴かねばならない、巫女王様にお会いするのだと仰っておられた。

それならば、彼の手を煩わせてはならない、時間を取らせては申し訳なからうと思ったのだが。

しかも今日からは地主様と二人きりの行き来となり、心の底から
 気まづかった。

[illegible]

「ごめんなさい。用事が出来てものすごく、残念なのだけれど準備には行けないみたいなの。でも、お祭りには行ってもいいかしら？」

準備のためにと通ってから二日目の帰り道、リディアンナ様はそう言い出したのだ。

そう言いながら、何故か地主様の方もちらりちらりと窺っていた。どうしてもお祭りには参加したい。

本当は準備もこのまま続けたいが、リディアンナ様のお立場上、これ以上無理らしかった。

「ねえ、カルヴィナ。お祭りの準備がどんな様子だったかは、話して聞かせてちょうだいね？ 絶対よ！ 約束なんだから」

はい、もちろんです。

そう強く頷いて見せると、リディアンナ様はにっこりと笑った。ぎゅうっと抱きつかれ耳元で「絶対よ！ 絶対なんだから」と、繰り返し言われた。

だから私も同じように「はい、絶対です」と、約束した。でも、いざ話すとなると、何をどう言ったらいいのか。ちよつと、途方に暮れ始めている。

。。
。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。*
。。

そんな事を考えながら、これから迎えるであろう沈黙に耐えようと思った。

37 魔女の娘と石屋の娘（後書き）

『準備しながら恋ばな。』

うむ。

セオリーでしょう。

一人で頷いてみたり。

恋ばな　させようにも　どうにもならない魔女っこです。

38 地主と魔女の言う森の彼

今日は神殿勤めがあつたので、迎えがいつもより遅れたなど感じた。

まだ日は昇っているが、傾き始めている。

森の中とあつてはなお更、陽射しは木立に遮られる。

幸い天気は良い。

少々急げば、日が落ちきるまでには館に戻れるだろう。

そんな事を思いながら、馬を繋ぐ。

こちらが向う前に、魔女の家の扉が開いた。

愛馬のいななきが先触れとなったのだろう。

カルヴィナが村娘に手を引かれながら、こちらに歩いてくる。

娘二人はじゃれあうように笑っていた。

金の髪の娘が、黒髪の娘に何やら耳打ちしている。

実に分かりやすい、内緒話の最中のようだ。

カルヴィナはいつもの困惑顔で、金の髪の娘の話に小さく答えている。

聞き耳を立てる気はないのだが、だいたい聞こえてくる。

たいていが、俺の事をカルヴィナに尋ねている。

カルヴィナは、それに困惑しているのだろう。

それでも、律儀に答えてやっている。

しかし大概、何かを期待している金の髪の娘の思惑からは、外れ

た事を言っているのは予想が付いた。

（本人を目の前にして噂話か。いい度胸だ）

あまり居心地の良いものではないが、さりとて別段、咎めるほどでもない。

よって、そ知らぬ顔でやり過ごす事になっている。

女の話に口を挟まない。

それは俺が姉との日々で学んだ事である。

「お疲れ様でございます、大地主様」

ミルアという威勢のいい娘が、しおらしく頭を下げてきた。

その様子からは、どこにも悪びれたところが見受けられなかった。聞かれていないとでも、思っているのだろうか？

無邪気なものだなと思う。

「ああ、ご苦労。準備は進んでいるか？」

「はい。何とか、間に合いそうです。エイメが来てくれて、とても助かっております。魔女の知恵は森を生きる知恵でございますから」

こちらを見上げて、にっこりと笑って見せた。

心の底から楽しんでいるような、自信に満ち溢れた笑みだった。

それに背を向け、いつものようにカルヴィナを抱えあげて、馬に乗せる。

そうして自分も跨った。

体勢を落ち着けて、馬上から見下ろす。

「今日もありがとう、エイメ。また明日ね！」

「うん、ありがとうね。また明日ね、ミルア」

このミルアという娘も、いかに淑やかに振舞っていても、何故かしらそうは見えない。

黙っていても自身の存在を主張してくるのは、生まれながらのものと、生い立ちからのものだろうと思う。

同じような性質の姉や姪が浮かぶ。

そんな事に思考を飛ばしていると、ミルアが声を掛けてきた。

「ところで地主様」

「何だ？」

「毎日、エイメを送り届けるのはご負担ですか？」

「問題ない。何故、そのような事を訊く？」

「エイメが地主様にご迷惑ではないかと、気に病んでおりますので」

「……ミルア」

カルヴィナは、苦々しく娘の名を呼んだ。

そこには何て事を言いだすのだ、という想いがありありと込められている。

それに堪えた様子も無く、ミルアは続けた。

「お忙しい地主様を煩わせるのは、気が引けます。もし、なんでしたら、こちらから迎えに行きますし、送り届けます」

「……オマエがか？」

「いいえ。村の誰かに頼みます。きっと厭わず、喜んで引き受けてくれる事でしょう」

にんまりと笑う娘に、過剰に反応を示さないように、あくまで落ち着いて答えた。

「必要ないし、問題ない」

「はい。承知いたしました、地主様。だってよ、エイメ？」

カルヴィナは居心地悪そうに、身を竦めた。

「おまえは変に気を回しすぎだ。気に病まずともよい。わかったな？」

そう確認すると、おずおずと首を縦に振った。

今朝方のやり取りを、カルヴィナはずっと気に病んでいたらしいと判断する。

なんて事だ。

。 どうにも説明付かない想いが、胸を責め広げて占拠して行く――

[illegible]

「今日は乾燥させた香草を、枝、葉っぱ、花に選り分けました」

そう報告するカルヴィナの髪から、ほのかに甘い香りが漂う。

この娘自体が甘い芳香を放っているようだ。

この森の木々の合間を吹き抜ける、清涼感のある香りとは異なる。カルヴィナ自体がその香る花だ。

魔女の家を後にして、森の木立の中を進むと、いつもの気配が寄り添ってきた。

姿は見えない。

だが、こちらの様子を窺いながら、付かず離れずで追ってくる。初めて一緒に森に入ってから、それはずっと続いている。

森を抜けると気配は追いかけては来ないが、視線だけは追いつくように感じる。

おそらく森に住まう獣か何かの類なのだろう。

カルヴィナに懐いているが、俺に用心して、けっして姿を現さない。

カルヴィナも答える気はないらしく、いつも困ったように微笑むだけだ。

「もう少し森の中を行ってみるか？」

軽い気持ちでそう提案した。

「はい！」

カルヴィナがいつになく積極的に、力強く頷いた。

とてつもなく嬉しそうに、瞳を輝かせてこちらを見上げてくる。血の気の薄い頬に赤味が差していく。

何だ、この程度の事でこの娘は喜ぶのか、という想いもよぎる。

「どこか行きたい所はあるか？」

「えっと、あちらの方に行きたいです、地主様」

身を乗り出し、あちらですと指差す。

「こら。落ち着け、危ないだろう」

「はい、地主様」

苦笑しつつ、華奢な胴回りを抱え直す。

とたん腕に、娘らしい柔らかさが掠める。

どんなに発育が未熟であろうとも、年頃の娘なのだ。

女という身がまとうやわらかさは、明らかに男ではありえないものだ。

それなのに、この娘ときたら。

こちらがあきれ果てるほど、無防備なままだ。

俺に対して、いつも警戒心露わだが、着目点が違う気がしてならない。

カルヴィナの怯える点。

それは俺の機嫌の良し悪しだ。

それによって、怒鳴られたり、睨みつけられると怯えている。

その点は俺が悪い。

だが、他の視点からの心配はいつさい、していないのが伝わってくる。

男として嬉しいような、哀しいような、複雑な気分に陥る。

年若すぎるカルヴィナに、男の目線がどうあるかなど、思いもよらないのだろう。

そうでなければ、いくらなんでもそろそろ、俺の手元がおかしいと気付き始めるはずだと思う。

あらためて、大魔女の教育の程を問い質したくもなる。

しかしまあ、この娘に警戒心を期待する方が、無駄というものだとも悟っている。

彼女は大魔女の娘。

森に、魔女の知恵に守られて、大切に保護されてきた娘――。

だからこそ、その無防備さに付け込む存在に、過敏に反応してし

38 地主と魔女の言う森の彼（後書き）

『かわいいという言葉を使わずに表現せよ。』

自らに課した指令です。

ふぬぬぬぬう。

伝わっていると、良いのですが。

拍手やコメント、評価、温かな励ましありがとうございます！

39 魔女の紹介する森の彼と地主

地主様が、もう少し森の中を行って下さると仰った。

彼の気が変わる前にと、大急ぎで頷く。

一体どういった風の吹き回しだろう。

正直そう思ったが、この際どうでもいいかとも思った。

久しぶり「森のあの方」にお会いできるのならば。

地主様もきつと彼を一目見たら、驚きに目を瞠ると思うのだ。

そして、その大らかさと威厳に魅せられるに違いない。

「あちらに……。何だと？」

乗り出す私を抱えたまま、地主様の動きが止まった。

「森の彼でございます、地主様。このまま、まっすぐ行かれてみてください」

そう案内する。

なのに、地主様は私の指し示した方向から馬を一回りさせ、背を向けてしまった。

視界が、望む方向から引き剥がされてしまう。

「地主様？　どうかなさいましたか？」

「……。」

恐るおそる問い掛けたが、地主様は押し黙ったままだ。

やはり気が変わったのだろうか。

未練がましく身を振って、振り返って見やる。

駄目なら、最初から期待などさせないで欲しい。

がつかりしてうな垂れていると、また、ゆつくりと馬が一回りした。

ブルルルル——！

いななき鼻を鳴らし、不満そうに齒をむき出しにして、耳を後ろに伏せている。

「どう、どう。馬が怯えている。あちらには何があるという、カルヴィナ？」

いやいやするように首を打ち振る馬を宥めながら、地主様が渋い表情で尋ねてきた。

「怯える。では、行かれませんか」

「まさか、危険なのではあるまいな？」

「いいえ、危険なんてありません。でも、少し近寄り難いかもしれません。私も常々そう感じておりましたから」

「そうか。ならば行ってみるとするか」

「はい！」

嬉しくなつて、元氣良く返事をした。

[illegible]

そのまま進んでゆくと木立が途切れ、急に視界がひらける。

「彼」は他の樹木からひとり離れて、こうしてそびえ立っている。

樹齡は、わからない。

でもきつと、この森が出来た最初から、彼はこの場所に在ったと思う。

少し遠巻きにしながら、地主様と話した。

でもきつと「彼」には届いている事だろう。

風が吹き抜けて、彼の梢を揺らしているのがその証拠だ。

寄りそう地主様はやはり、森の彼の気配にちかいものがあつた。そうじんわりと確信する。

少し、近寄り難く感じてしまう所なんかも、そつくりだ。

いつも抱きつく彼から伝わる、安心感に身を任せているうちに、心も落ち着いて行く。

それと同時に、何故か心はざわめき出す。

風に揺れる木立のように。

そんなところも、そつくりだと思う。

慎重に馬を近づけてから、地主様が口を開いた。

「降りてみるか？」

「よろしいのですか？」

「構わない」

そう答えながら、すぐに地主様は馬から降りていた。

いつもの事ながら、素早い身のこなしだ。

両手を差し出され、その腕に縋る。

この高さから身を投げ出す感じが少し苦手だ。

いつまでたってもなかなか慣れない。

それでも飛び込むようにして、降りるのだ。

大げさかもしれないが、なかなか覚悟がいる。

それが表情に表れているらしく、地主様には少し笑われてしまう。もつとも、そう気が付いたのは最近だ。

それまでは、そんな事を感じる余裕も無かった。

それから二人で黙って「彼」を見上げた。

私が見上げて、彼のてっぺんまでを仰ぎ見る事はかなわない。

恐らく、地主様ほど背のある方であっても無理だろう。

天に一番近い所に樹冠があるなんて、何と彼らしい事か！

幹は両手を回してみても、とうてい回しきれない。

幹は太く力強く天に伸び、
おおらかに全ての生き物たちに腕を差

し伸べているかのようだ。

その立ち姿はいつ見ても堂々としていて、正に王の威厳を備えていると感心してしまう。

こうして目の前に立つなんて、本当は恐れ多い気もする。

だが彼は親しみやすく、誰からも頼られる存在だ。

その懐には小鳥やリスのような、小さな動物たちが集ってくる。

根っこの部分も太く張り出し、大地にしっかりと根ざしているのが分かる。

その姿に、彼は何者にもなげ倒される事が無いと安心させてくれる。

だから、自然と膝を少し折って頭を下げた。

王を敬う礼を表すように。

地主様も黙って同じように胸に手を当てて、頭を下げた。

[illegible]

・。
・

小鳥たちが鳴き交わしながら、枝にやってきて羽根を休めた。

翠と藍色で出来た羽根に、瞳はさながら黒曜石の生きた宝石、シユリトウーゼル達だった。

きっと伝言を頼んだコたちだ。
手をそつと振ってみる。

ありがとうという気持ちを込めて。

ピィィ———ロ・ロウ！

それに答えるかのように、鳴き声が返った。

「シユリトウーゼルか。まさか、あの時の小鳥か？」

「はい。おそらく」

「ならば、俺が側にあっては降りて来ないだろうな」

「そうでしょうか？」

「驚かせたからな。繊細な小鳥だ。用心するだろう」

小鳥たちを見上げながら、地主様が静かに言い切った。

そこに、いくばくかの後悔が滲み出ているように感じた。

「きっと、もう忘れたと思います」

そろそろと「彼」に近付いて身を寄せてから、手を差し伸べてみた。

一瞬の間の後、一羽が舞い降りてくれた。

一羽が降りたのを見て、安心したのだろう。

いつものように、次々と舞い降りて来てくれた。
肩に腕に頭にと、くすぐったい微かな重みが加わる。

「ね、大丈夫でしたでしょう？」

小鳥たち^{たか}に集られながら、地主様に得意げに言ってみた。

地主様は、じっとこちらを見つめていた。

呼びかけても、何の反応も無かった。

急にどうしたのだろう？

ついにはしゃぎすぎて、馴れ馴れしくしすぎたせいだろうかと心配になった。

「地主さ、ま……？」

もう一度、声をかけたその時だった。

何かが視界を掠めた。

それは空から降って来て、地主様の足元に落ちた。

「何だ……？ オークの実か」

そう言って地主様が見上げたのを合図に、また、ひとつ、ふたつと落ちた。

それは止むことなく、勢いを増して行く。

ぱらぱら、ぱらぱらっと、乾いた音が響く。

何と！ 地主様の周りにだけ、オークの木の実が降ってきている。
ぱらぱら、ぱらぱらと彼の上にだけ。

「すごいですね！ 地主様にだけ、降っていますよ」

ぱら、ぱら、ぱらとそれは淀みなく続いた。
こんな事は初めてだ。

「地味に痛いな」

羨ましくなって地主様に近付いた。
とたんにオークの実の雨は止んでしまった。

「どうやら俺は、あまり歓迎されていないようだな」
「え？ その逆ではないのですか？ 地主様にだけ、オークの恵みが落ちてきたのですよ」

どうして地主様は喜ばないのだろうか？
私だったら、すごく嬉しく思うのに。

慎重に腰を落として、落ちてきた実を拾い上げた。
つるつるして、ピカピカしている。

その小さくまろやかな実をつまみ上げ、心持ち目線よりも高く掲げて、木漏れ日にかざす。

うっとりとその美しさに見入っていると、地主様と目が合った。

そこで発見した。

「地主様の御髪おぐしの色とおそろいですね！」

深みのある茶色だが光沢があり、このように日の光によっては、もっと明るくも見えるし、深くも見える。

ジルナ様やリディアンナ様、ギル様ともおそろいだ。

嬉しくなって、つい声を上げてしまった。

「少しお土産に拾って帰りませんか？」

そう誘ってみてから、こんな事は子供っぽいと馬鹿にされるかと思った。

だが意外にも地主様は黙って頷くと、一緒にオークの実を拾ってくれた。

39 魔女の紹介する森の彼と地主（後書き）

『森の彼を紹介します。』

仮タイトルでした。わかりやすい。

★ おまけ ★

地主の愛馬のぼやきです。

ブ・ルルルルルル———！

（※ 行きたくない理由を アッシのせいにしなくておくんなせえ
旦那！）

40 地主と森の加護を受ける魔女

一緒に落ちてきた実を拾う。

小さな手のひらに載せてやったが、たちまちいっぱいになってしまった。

実はかさ付きなのでなおさら。

カルヴィナは、前掛けの物入れに詰め込み始めた。

それもいっぱいになると、俺の手のひらに載せ始めた。

カルヴィナの滑らかな指先が掠めては遠ざかる。

その度に木の実ごと、手のひらに納めてしまおうかと思う。

「!？」

不埒な想いを込めようものなら、たちまち木の実が降ってくる。

ぱら、ぱら、ぱらぱらっと、少し大きめの雨粒が当たるような軽快な音が立つ。

その度に魔女の娘ときたら、瞳を輝かせて大喜びだ。

すごいすごいとはやし立て、いいですねえと本気で羨ましがられた。

（良い訳があるか）

そう思っても口にはしない。

せっかくカルヴィナが珍しく寛いだ様子で、笑顔を見せているのだ。

その無防備さに呆れながらも、つけ込もうとする自分もいる。

すぐ目の前には黒髪をさらさらと肩に流し、頬を上気させた娘があるのだ。

地味に痛いのと、何者かに監視されている薄気味悪さがあった。何者かは、この世ならずのモノに違いあるまい。

これを無視して想いのまま、娘に無体を働いたらどうなるのだろうか？

例えば、そう――引き寄せて抱きしめて、そのまま奪ってしまつたら、どうなる？

どうなると思うのだレオナルド？

恐らくどこか確実に、この程度の怪奇現象では済まないだろう。

カルヴィナのくれて寄こした実の代わりに、気がつくと既に手の中に、細い手首があった。

ザワザワと木立が揺れ始める。

辺りに風が吹きつけてくる様子は無い。

変わらず木の実が落ちてくる。

だが先程より、勢いを増し始めた。

枝がしなって、その分強く叩きつけるかのような勢いがついていく。

まだ軽やかだった音も、どしゃ降りの雨が叩きつけたような音がしだした。

やはり、そういう事らしい。

このカルヴィナの言う森の彼こと、オークの巨木は俺に牽制をしているようだ。

この樹の精霊の加護を、カルヴィナは受けているのだろう。

先程から異様なまでに張り詰めた空気に、カルヴィナは気がつかない様子だった。

無邪気に木の実を集めては、品定めをしている。

俺だけが寒気を感じているようだ。

恐らくオークは、カルヴィナには温かなものだけを送っているのだろう。

『あのこは森の娘だよ』

そんな、かつての大魔女の言葉が蘇る。

「地主様だけに、恵みが許されているのでしょうか？ やっぱり、地主様だから？」

「いや。コレは恵みと言うよりも、戒めと思われるが」

「どうして地主様にだけ、降って来るのかしら。どうして？ ズルイです」

カルヴィナが口を尖らせている。

俺にと言うよりも、このオークの樹に訴えているような調子だっ

た。

「ズルイ？ 本当に羨ましく思うのか」

「はい」

カルヴィナは何のためらいも無く、頷いて見せた。

「なら、オークの恵みに打たれてみるか？」

「はい……!？」

頷いたものの途中、疑問を感じたらしい。

明るかった表情と声に訝しさが含まれて詰まった。

だが答えてやらない。

勢い良くカルヴィナの腕を引いた。

• • • • •

ザザザツと梢が一際しなり、荒げた音を立てた。

ぽらぽらと木の実が俺の頭に、背に、肩に落ちてくる。

それは優しい雨音に似ていた。

引き寄せた身体を、腕の中に閉じ込める。

カルヴィナは一瞬もがいたが、すぐに驚きに目を見開いていた。視界の端に落ちてくるオークの実を捉えたのだらう。

『降ってくる、オークの恵み』

古語でそう呟くと、押し黙ったまま動かない。

何が起こったのか、理解できないでいるらしい。

念願かなって木の実の雨に打たれる事が出来たが、それは男の腕の中でだ。

カルヴィナがおずおずと手を差し出す。

もうすでに木の実は止んでしまった。

それでも手のひらに受け止めようというのか。

しばらく、そうやって手をひらひらと泳がせていたが、急に動きが止まった。

この状況はいかなものかという事に、やっと気がついたという所だろう。

俺を押しやろうとしながら、そつと見上げてきた。

その瞳は不安そうに揺れていた。

誰かこの状況を説明して欲しい。

そんな表情だった。

俺だってそう思う。

「どうだ？　これで気が済んだか？」

腕の中で呆けたカルヴィナが、正気を取り戻す前に声を掛けた。

さも、おまえが望んだからこうしてやったのだという口ぶりだが、
我ながら滑稽こっけいだった。

「あんまり、よく見えませんでした。でも、打たれた音が近かったです。あの、ありがとうございました」

そう小さな声で、躊躇いがちに礼を言われた。

「もう、戻ろう。日も暮れてきた」

「はい」

返事はしたものの、名残惜しそうにオークの樹を見上げたカルヴィナを、そのまま抱えあげて馬へと運んだ。

•	
○	
•	
•	•
•	•
*	
•	○
•	
•	•
*	
•	○
•	
•	•
*	
•	○
•	
•	•
*	
•	○
•	
•	•
*	
•	

来た道を戻ると、思ったよりも日が傾いていた。

辺りには闇が忍び寄り始めている。

あそこの空間は明らかに異質だった。

異界との境目なのかもしれないと推測する。

振り返ってみたが、大木は既に見えなくなっていた。

ここに来るまでに、付いてきていた何者かの気配も遠のいている。

「あのオークの樹の存在を、もしかしたら他の誰も知らないのではないか？」

「そうかもしれないし、そうでも無いかもしれない。私はおばあちゃんに教えてもらいました」

「他には、一緒に行ったことのある者はいないのか？」

「はい。おばあちゃん以外には、地主様が初めてです」

カルヴィナが少し気だるそうに、受け答えをしてくる。ここ最近、帰りはいつもこうだ。

40 地主と森の加護を受ける魔女（後書き）

『一緒に木の実ひろい。』

何というか。

ほのぼの〜していそうで、そうでもない空気が漂い始めております。

拍手やコメントありがとうございます！

拍手小話UPしました。

40話の スピンオフです〜。

41 魔女と村娘たち

「これから差し入れに行くよ！」

「差し入れて、何？ どこに？」

「やぐらを立ててる男衆に」

何故その必要があるのかと問い掛けるよりも早く、ミルアに手を引かれてしまう。

手にしていた編み糸と石が滑り落ち、テーブルの上に転がった。それを慌てて受け止めて、下に落ちないようにする。

「わああああ！」

ミルアも大声を上げながら、同じようにした。

散乱しているリボンをかき集め、裁縫箱や布で取り囲み、ころころ転がる石たちをせき止める。

それから慎重につまんで、色事に分けた箱に戻してから、二人で息をついた。

「ミルアったら、急に何なの？ 護符の石だって驚くでしょう！」

「そこは謝るわ、ごめん。でも、護符を作るのに必要不可欠なものが、エイメ！ アンタには足りていないからよ。石が泣くわ」

「ええ！？ 何、さっきから嫌に突っかかってくるね？」

ミルアは明らかにイライラした様子で、ああ！ だの、もう！ だのとうるさかった。

流石の私も我慢の限界だった。

もうミルアと一緒に準備なんかしない、ケンカになるから別々に

しようと言ったら、差し入れに行くのだと言い出されたのだ。
また、訳のわからない事を。

「エイメがここまでわからずやだとは思わなかった。責めるつもりじゃないけれど、見ているとイライラする」

「それ、地主様にもよく言われるわ。そう思うのなら、放っておいてくれればいいでしょう！」

前に、地主様に言われた事も思い出してしまい、視界が歪んだ。

自分が偉いからって、何なの。

そんなに私の事がイラつくのなら、構わなければ済む話なのに。
地主様もミルアも、どうしていちいち大声を出して突っかかってくるの？

それこそ、私のほうがイライラする！

悔し涙を滲ませながら、ミルアとにらみ合った。

普通ならここで出て行くだろうに、ミルアは違う。

しつこく、急かして来る。

「早く、早く！ 行ってみれば分かる事もあるから」

「やぐらは逃げないでしょ？」

「あんたは人の話を聞いていたの！？ その耳は飾りなのっ！」

「あー、もう。やかましいなあ」

日に日にミルアの勢いと気安さは増して行っている。
気のせいではないと思う。

ミルアがその調子なので、私も遠慮しなくなった。

彼女の持つ気安さが、そうさせてくれるのかもしれない。

少々強引過ぎたりする事や、何だかんだと地主様や他の男の子と

私を結び付けようとするのは勘弁して欲しい所だが、適当に受け流している。

そんな私の様子は、ミルアに言わせて見れば「同じ年頃の娘らしからぬ」という事になるらしい。

じゃあ、どうしろと言うのか。

そう切り出したら、いきなり差し入れに行くなどと言い出した。勢いに飲まれたい訳でもないし、流されたい訳でもないので、一応は抵抗してみる。

「もうすぐ夕刻だから、地主様がお迎えに来てしまうのに行くの？ それなのに、私がいなかったら失礼になるじゃない？ だから、」
「あと一刻くらいは大丈夫でしょう。そんなに心配なら、こうしたらいいわ。そら」

行かないと言う前に遮られた。

言いながらミルアは、さっさと書置きを用意してしまった。

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。

「やぐらの準備の手伝いに行きます。

すぐに戻って参ります。

広場におります。

広場は魔女の家を西に出て、村長の家を左に回り

まっすぐ行くとあります。

魔女の娘と石屋の娘より。」

「どうよ。これで文句は無いでしょう。行くわよ」

「身一つで大丈夫よ。男どもにしてみたら、娘二人の華やかさで充分だ」

「行けばわかるわよ」

気が付けば流されてしまう。

家の脇にある小さな畑の横を通り過ぎた。

ほっとしながら、感謝した。

つかまれた手を、ぎゅっと握り返した。

それなのに、お互い距離を置く事もなく一緒に行動している。
何なんだろう。

同じ年頃の女の子はみんな、こんな調子なのだとしたら、それはそれは未知の生きものだと思う。

「今、何か失礼なコト考えてたでしょ？」

「うん。ミルアってば珍しい子だなくって思ってた」

「何よ。アンタだって珍しい子だよ。魔女の娘だもの」

言うようになったわね、とミルアが笑う。

ミルアほどでは無いよと言いつ返す。

そんな他愛のないおしゃべりを繰り返すうちに、広場に着いた。

広場の中央に、屋根つきのやぐらが出来ていた。

でもまだ完成ではないらしい。

やぐらの下に作られた、簡易の休憩所に皆で座っていた。

ここはそのまま手を加えて、当日には用具置き場になる。

今は吹きさらしだが、もう少ししたら布を張って風除けも作るそう
うだ。

そのために張られたロープと重石に気をつけるようにと、注意されながら手を引かれた。

見知った女の子も何人かいた。

顔だけなら見かけた事のある、青年も何人か。

困ったように視線を逸らす子もいれば、親しげな笑みを浮べてく

れる人も居た。

気後れしてしまう。

やっぱり、来なければ良かったと思っていたら、椅子を勧められた。

すぐに帰るからと言っても、いいから！ と強く勧められた。
お茶も振舞われる。

ミルアは気安く彼らに挨拶し「約束通り魔女の娘を連れてきたわよ」と、改めて紹介してくれた。

「祭りの準備に通ってくれているんだって？ ありがとう、助かっている」

「今年は地主様も一緒にしてくれる、っていう話じゃないか。エイメのおかげだな」

うん、うん、助かる。ありがとうと、口々に言ってもらえて恐縮だった。

それから不意打ちに謝られた。

「昔、からかってごめん。ジェスが悪い」

「何だと！ オレだけのせいにするな！」

「ジェスがなあ」

「ガキでなー？」

「うるせえ！！」

「あゝもう！ 謝るのなら、ちゃんと謝る！」

ミルアが仕切ると、また和やかな雰囲気に戻ってほっとした。

「ごめん」

「悪かった」

「許してくれ」

「ジェスを」

「うるせえ！」

「えっと、もう気にしないで下さい。あつ、えっと、ところで、やぐらはもうすぐ出来そうなの？」

居たたまれなくなって、無理やり話題を変えてみた。

そうでもしなければ、いつまでも謝られてしまいそうだったから。もう、済んだ事なのだ。

「ああ、もうじき完成だ」

「多分、あと四・五日かな」

「ギリギリじゃねえか！」

「だな」

今回は梯子はしこではなく、階段を付けて皆が上に上がりやすくするの
で、時間が掛かっているそうだ。

確かに梯子では荷を上げるのも危ないし、巫女役や神様役の人たち
ちが上がる時も不安定だろう。

去年は怪我人が出たのかもしれない。

「安全に祭りを進めるためには、労力は惜しまない事にしたんだ」

と、ジェス青年に熱っぽく語られた。

「そうなの。うん、でもそうだね。誰か怪我をしたら嫌なものね。
せっかくのお祭りが台無しになってしまうものね？」

感心しながら、やぐらを見上げた。

それからジェス青年を見上げると、誇らしげに笑っていた。

もう風も冷たくなってきたというのに薄着で、しかも袖を捲り上げている。

額には汗が光っていた。

その汗を熱心に見守りながら、手拭を両手で握り締めている子が傍らに居る。

暑い暑いとしきりに口にする赤毛の青年に、水を手渡す子も居る。何て甲斐甲斐しいのだろう。

確かに女の力では手伝えない事も多いが、その分、他に出来る事を教えられた気がした。

青年たちが日が暮れる前にもうひと仕事と、作業に戻って行った。その背を見送ると、女の子たちは簡単に後片付けをしてから、よけていた糸やら針やらを取り出した。

やぐらを飾る旗に刺繍をしたり、当日のための衣装の仕上げに取り掛かる。

「ねえねえ。ここの図案はどうかなあ？」

思い切ったように話しかけられた。

この明るい茶髪の子とは、初めて話したかもしれない。

真剣な瞳は、薄紫だ。

「うん。えっと、この小鳥の意味だとね、わかるよね？ 内緒にした方が想いが込められるから言わないよ。そこに赤い実を足すといいかも」

「うん！ 糸は？」

「これ、これ使っていいよ！ シュリ」

それから次々に相談された。

衣装の事や、仮面の事。

仕上げのおまじないの呪文や、唇を彩る紅の事。

身に付ける石の事は、ミルアが答える。

お祭りの日は、みんないつもとは違う「女性」になる。
なりたい、のだ。

相談されながら、私は誰に腕輪をやるのかと探られた。
誰にもやらないと言うと、すごく驚かれる。
信じられないと、皆が口々に言うのは何故なんだろう。

「じゃあ、作ってもいいの？」

「一応、作ってはいるよ。ミルアに見本を見せるために」

「本当に腹立たしいったら！」

「ミルア、ちょっと、不器用なものね」

悔しがるミルアを宥めるように、からかうように、女の子たちが
笑いさざめく。

腕輪は男の人たちには見せるのは、上げる当日、本人だけにつて
いうのが決まり事だ。

だからこの場では誰もこしらえていない。

おしゃべりしながら、手は一生懸命に針を動かしている。

彼女たちの張り切りぶりはいっそ、見ていて清々しいくらいだ。

そうか。

お祭りにかける熱い気持ち、私には足りないのか。

ミルアはそれを石に託せと言いたいのだろうか。

そうはいつでも、私なりに必死なのは伝わらないのだろうか。

やぐら作業に取り掛かっている男の人たちに熱いまなざしを注いでいる、彼女たちの瞳は潤んで輝きを放っている。

確かに私は人より、熱意に欠けるかもしれないと思う。

たいがい、ぼんやりしているという自覚もある。

今だって、この場にひしめく熱気に当てられながら、ただぼんやりと眺めているようにしか映らないことだろう。

それがイラつかせる原因だろうか等と、つらつらと考えこんでいた。

「――ねえ？」

急に掛けられた声は、真剣だった。

はっと我に返って、声の主を見た。

最初に凶案の事を訊いてきた、シュリと呼ばれた女の子だった。

「わたし、腕輪を渡したい人がいるの。今年こそ、ちゃんと渡したいの」

「うん」

「ずっと前から渡したかったけど、渡せないままお祭りが終わってしまっていたの」

「うん」

「今年こそ、彼を手に入れたいの」

「うん」

「どうしたら彼を手に入れることが出来ますか？ わたしに出来る魔法があるなら、教えてください。大魔女の娘よ」

紫色の瞳を見つめながら、大きく息を吸い込んだ。

「えっと、手に入れたっていうのは……。それは身体的に？ それとも精神的に？」

そこでミルアが、盛大にお茶に咽^{むせ}た。

おばあちゃんには、そこが大事だからよく相談者に確認しなさい、と教わった。

答えによっては対処の仕方も変わってくるのだから、当然の事を訊いたままでのに。

彼女が息を飲むのがわかった。

胸元がゆっくりと上下する。

周りを取り囲む娘たちも、同じ反応だった。

奇妙な静けさがありながら、熱気もある。

魔女の娘は急かしたりせず、静かに答えを待つ事にする。

そして揺れていた眼差しが、しっかりと定まってから、私を見た。

まっすぐに。

「両方」

41 魔女と村娘たち（後書き）

『やぐらが出来てきたよ。』

魔女っことミルアはケンカしても、すぐ仲直り。

いつの間にか。

仲良しですね。

ってか、ミルアがしつこく構うから、魔女っことが『ふしやあ〜！』

と、毛を逆立ててしまうようです。

42 魔女と恋する村娘

両方――。

身も心も。

あの人を手に入れたいの。

お願い、わたしだけを見つめていて。

[illegible]

その気持ちは尊いと思う。

未だ魔女の娘は抱いた事の無い想いだ。

私はゆっくりと頷いてから、答えた。

「それだけ真剣なら大丈夫。きつと伝わると思います」

「伝えたら彼もわたしのこと、そう思ってくれるの？　こんな、何のとりえの無いわたしでも大丈夫って言えるの？」

心配そうな、少し不満の感じられる言葉が返ってきた。

「あのね。魔女の魔法は人の心の自由を奪ったりしません。出来ないもの。例え出来たとしても、とても空しいわ」

魔法で人の心をねじ伏せて、無理やり自分の思うようにする。それは暴力だ。

おばあちゃんは常々そう言っていた。

「魔女が出来るのは想いを伝える勇気を与えるお手伝いをする事。あとは、ちょっぴりだけ、いつもよりも魅力的に見えるように手伝うだけ」

人の心だけは自由にしようとは思ってはいけないよ。

だけれども想いを伝える事は出来るはずだ。

それだけで充分だ。

風が吹きこんで、新しい流れがくる。

『それが大魔女の教えです。シュリ・ダイナーに祝福の風が吹き込みますように。あなたもまた、素晴らしいお花です』

祈りの言葉を古語で捧げる。

「大魔女の、教え……。シュリ・ダイナーに祝福の、風を。あなたも、お花です。素晴らしい」

その祈りの言葉を、ミルアがたどたどしくも訳して呟いてくれていた。

もう一度、今度は皆にも解る言葉で祈る。

「それが大魔女の教えです。シュリ・ダイナーに祝福の風が吹き込みますように。あなたもまた、素晴らしいお花です」

シュリは小さく頷いた。

唇を噛み締めて、頬は真っ赤だった。

「わかったわ。でも、魅力的に見せるってどうやればいいの？」

「あのね、まずは月を写した水で髪を洗ってね、香油があるから、それで髪を艶やかにしたりね、後は」

「香油はどんなもの？」

話の途中で、待ち切れないと言った様子のシュリが身を乗り出した。

「家にあるから分けてあげる。明日でもいいかな？」

「ありがとう！」

ミルアを含めた四人の女の子が、私にも欲しいと騒ぎ出す。勢いに押されながら、慌てて頷いた。

「もちろん、みんなの分だけ用意するから、落ち着いて」

「ね、ね！ 他には何があるの？」

「えっと、お肌が綺麗に滑らかになるように、薬草の雫を使います。仕上げはまた、香油で。髪用とは違うの」

「他には！？」

「シュリばかり、ずるいんだから！ 抜け駆け無しよ！ ワタシにも教えてよ、エイメ」

ミルアが私と皆の間に割って入る。

「あー！ もう、順番に！ エイメが困るでしょう！」

「ミルアこそ、ずるいんだ！」

「どこがよ。言ってみなさいよ」

「エイメに付きっ切りで腕輪の作り方習ってるじゃない。独り占めじゃない」

「なんですっ……！」

「ケンカするなら、もう教えないよ」

ミルアの怒りの言葉を遮るように、きっぱりと宣言した。

女の子たちは、はっと突かれた様な顔をそれぞれ見合せて、大人しくなった。

それを見渡してから、順番におばあちゃん直伝の「魅力的な女性の作り方」を、話して聞かせていった。

今度はみんな口を挟んだりせずに、真剣に聞き入ってくれた。

• • • • •

そうこうするうちに、あつという間に日暮れを迎えていた。

足元に伸びる影が長い。

風が少しだけ冷たさを帯びて、肌寒さを感じる。

それも女の子たちの熱気に押されて、あまり構う所では無かった。ふいに影が深まった気がした。

「お疲れ様でございます、地主様」

違和感に振り返る前に、ミルアが立ちあがって挨拶をしていた。驚いて固まっていた皆もそれに倣う。

皆、恐縮して畏まっていた。

騒ぎはピタリとおさまっている。

皆が地主様に注目している。

今日もお勤めがあると仰っていたから、きっちりとした神殿の騎士様の格好だった。

そんな彼はどこにも浮ついた所が無く、全くもって隙の無い厳しさを漂わせていた。

そういう所がまた、彼はオトナなのだと思う。

深い夜空を思わせる瞳が、まっすぐに私を見つめてくる。

何となく、居たたまれない気持ちに襲われるから、逸らしてしまう。

それでも彼は、私から視線を逸らす事は無かった。

強い眼差しに引っ張られるように、何とかもう一度彼を見上げるのが常だ。

「迎えに来た」

座り込んだままの私に、手が差し伸べられる。

反射的に身を引いてしまった。

地主様の動きが止まる。

「あの、えっと。その、今日も帰らねばなりませんか、地主様？」

思い切って尋ねてみた。

このまま魔女の家に泊まり込んで、色々と用意したいものが出来たから。

でも、彼は無言のまま首を横に振ると、いつものように私の脇をすくい上げる。

抱え上げられて、視界が高くなる。

ミルア以外、瞳をまん丸にして驚いていた。

当然だ。

私だっけいまだに驚く。

「ミルアが杖を地主様へと渡してくれる。
手馴れたものだ。」

少しだけ離れた木に、馬が繋がれているのが見える。

「そちらへと、地主様が歩き出す手前、ミルアが声を張り上げた。
皆もそれに続く。」

「じゃあ、また明日ね！ エイメ」

「今日はありがとう」

「さようなら、またね」

「明日も待っているからね」

「うん、ありがとう。また明日ね。さようなら」

地主様に抱えられながら、皆に手を振った。

視界の端で、やぐらの作業にあたっていた男の人達も、手を振ってくれているのが見えた。

そちらにも手を振った。

（もうちょっと、皆と話していたかったなあ）

「……地主さ、」

「駄目だ」

地主様の返事は、私が帰りたくない、もう一度口にするよりも早かった。

42 魔女と恋する村娘（後書き）

『やぐらの広場に迎えに来た地主。』

すつごく浮いてるよ、レオナル。

そんな一場面が書きたかっただけです。

★ オマケ ★

は、拍手小話にてどうぞ

森の風に吹かれているうちに、頭も少し冷めてきた。

今日も地主様は、お勤めの正装だ。

正直に白状するならば、そのゴワゴワした素材の衣服をまとった地主様からの、包まれ心地はイマひとつだ。

胸元にも飾りの釦や、小さな鎖が掛けてあるせいで、もたれると身体に当たって痛い。

その闇色一色の出で立ちは、凜々しくもあるが物々しくもあるように見える。

地主様が、より一層大きく頑丈に見せるそれは、おいそれと近寄つてはならない雰囲気醸し出している。

神殿の護衛団の筆頭に立つという地主様は、指導者であるそうだから、それは当然かもしれない。

それほどのお立場なのだ。

威厳があつて当たり前なのだ。

それをあえて解りやすく誇示するのが、服装なのだと思う。でも、それは少し堅苦しくって、あんまり好きではない。

地主様自身もその格好はお好きではないと、漏らしていたのを聞いた。

堅苦しくて嫌になるそうだ。

そうほのめかしながら、諦めたようにため息をひとつ付かれた。

首もとを締め付ける高い襟に、指を掛けながら。

ミルアは地主様は素敵だと主張する。

私が大きく賛同しないものだから、余計に強く。

そう言われても、どう反応しているのか解らない。

複雑な想いに絡み取られて、身動きを失ってしまふ。

さっきもまた、その何とも言い表しようの無い気持ちに襲われてしまった。

皆、あれだけ好きなヒトの事で瞳を輝かせていたのに、地主様を見て目の色を変えていた。

ステキねえ――。

ミルアは正直だ。

率直に物を言う。

普通ならば言いにくいことも、さらりと。

皆も同じように感じたのだろうか。

また何の前触れも無く抱え上げられた瞬間、胸がつぶれそうだった。

皆が素敵だと褒め称える人に、抱え上げられるしかないカラス娘。それはさぞや、見つともなく映る事だろう。

そんな惨めな想いを抱く自分が卑しくて、悲しくなった。

でも、何でもないフリをしてやり過ぎすしかない。

いつそ構わないで欲しいと、強く願ってしまう。

地主様とて暇ではない。

むしろ、多忙を極めていらっしゃる。

それでも、毎日の送り迎えをして下さるのは、何故なのだろう？

いつも最後まで言い切る事すら、許されない。

なじる様に鋭く、じろりと睨まれて、無言で抱え上げられるのだ。馬の背に二人で乗った後に必ず「毎日帰ってくると、約束したから許してやったのだ」と言われる。

もちろん、今日も言われた。

暗にオマエがそう言い出すなら森には帰してやらないがどうだ、という事なのだろう。

わかってはいるが言い出さずにはいられない。

この祭りの前の森の気配。

それを感じたい。

それは魔女の力になる。

「あの、お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「何だ」

「どうして森の家に泊まってはいけないのでしょうか？ 何故、地

主様のお屋敷に戻らねばならないのでしょうか？」

「危ないからに決まっているだろう」

「危ない、ですか？」

何の事かと理解できない私に、地主様が唸るように続ける。

「年頃の娘が一人で森にいたら危ないに決まっているだろう」

「今までそうやって暮らしておりましたが、特に危険な事はありませんでしたよ。獣よけのまじないもしてありますから、大丈夫ですよ」

「その獣よけが全ての獣に有効とは思えない。特にあの灰色の毛並の、琥珀の目玉のアレ」

アレ？

狼のことを仰っているのだろうか。

「全ての、獣ですか。ええと、狼や熊や蛇にはちゃんと効いています」

「気がつかないただろうが、狼がおまえを飢えた眼差しで狙っていた」

「えっ!？」

いつのまに？

あんな村中にまで狼が現れる事なんて、よほどの事だ。まるで気が付かなかった。

流石は地主様だ。

騎士様として、鍛えておられるだけはある。きっと、そういった気配に敏いに違いない。

「あの、では地主様も一緒なら許して下さいるのですか？」

彼が強張ったのが伝わり、すかさず頭を下げて詫びた。

「申しわけありません。かえって地主様にはご迷惑をお掛けしますよね」

「オマエは俺に外で寝ろというのか？」

「え？ 外ですか？ 滅相もございません」

確かに彼にしてみたら、あの家の寝台は粗末だろう。

「もし、そうだったならば、私はおばあちゃんの使っていた寢床で

「寝ますよ？」

「……。」

何か、おかしい事を言ってしまったのだろうか？

そうに違いない。

慌てて謝った。

「そういえば、食事もある限り良い物はご用意できませんね。すみません、忘れて下さい」

「俺はそのような事を気にして言っているのではないのだ。分かるか？ ……わからないのだな」

獣でもない。

寝床でもない。

食事でもない。

私がまたおばあちゃんを思い出して、泣き続ける心配をしているのだろうか？

「えっと、もう、おばあちゃんを思い出して泣き暮らしたり、しませんよ？」

そつと地主様の腕に手を掛けながら、振り返るように見上げる。

それでも、密着しすぎているから、視界に入るのは地主様の首元がせいぜいだった。

胸元が上下したと思ったら、深いため息が振ってきた。

「やはりオマエのような危機感の薄い娘はとてもしゃないが一人で置いておけない」

•	•	○
	•	
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○

43 魔女の騎士様（後書き）

『一緒に泊まれば許してくれるの？』

レオナル、超、動揺。

魔女っこは、赤子の手を捻るよりも容易く潰け込めるよ？

誰が狼かってんだって話です。

44 大地主と村の子供たち

「よお」

今日はいつもより、早い時間に迎えに来れた。
まだ日暮れまでには充分時間がある。
うららかな昼下がり。

魔女の家の扉を開けると、そこには村長の息子——名は確か、ジェス青年が居た。

俺を見ると、やる気の無さそうな声が掛かった。
椅子に腰下ろし、身体を前に折りこむ様にして、何やら手作業をしている。

随分と椅子が小さく、窮屈そうに見える。
この青年がいるというだけでかさ張って、魔女の家が手狭に思えた。

扉の取っ手に手を掛けて、押し開けた格好のまま踏み込まず、固まった俺にジェスがため息を付く。

「カ……。」

カルヴィナはどうした、と口を開きかけた途端、青年が人差し指を己の口元に立てて見せた。

そのまま指先で流れるように、部屋の奥の扉を示した。

「……。」

さらに村長のせがれは黙ったまま、顎をしゃくる。

俺の訝しげな視線を一瞬受け止めてから、肩をすくめると、再び手元の作業に戻った。

何なのだ。

何やら癪に障ったが促がされるまま、そっと奥の部屋に近付く。

扉は薄く開かれている。

慎重に覗き込むと、そこには二人の娘が仲良く眠り込んでいた。射しこむ午後の陽射しを受けて、黒い髪と金の髪がつややかに輝いている。

最初に湧き上がったのは怒りだった。

それも無邪気に眠る娘二人を前にしている内、脱力に変わって行った。

闇色を授かった娘は光の祝福を一身に受けて、微笑んでいるようにも見えた。

気持ち良さそうに眠っている二人は、赤ん坊だった頃の姪を思い起こさせる。

陽射しをやわらかく受け止めて、頬や唇のまろやかさが浮かび上がって見える。

そうだ。

あれはまだ幼さの残る少女だったのだと思い出して、視線を外す。

靴も脱がずに、寝床には足先を出して横たわっているのには、思わずため息が漏れた。

そう高さも無い寝床は、老体であった大魔女の寝床だったのか。足の充分上がらない娘のものか。

二人とも、やや突っ伏すように眠り込んでいる。

その手元には作りかけの腕輪やら、色石やらリボンやらが握られたままだ。

大方、この所の作業の疲れが出て、眠ってしまったのだらうと察しは付く。

だが少々違和感を覚えた。

寢床から少し離れた所に、空のカップが二つ盆に置かれていた。

その側には果実らしきものを漬け込んだらしい、瓶が見えた。

『どうぞ、地主様。じき、祭りも近いからね。魔女特製の果実酒を振舞うよ』

見覚えある瓶に、かつての大魔女の言葉が蘇る。

	○	
•		•
••		○
✱		•
••		••
•	✱	•
○	••	•
••		○
•		
	•	
	••	
	✱	
	••	
	•	
	○	
	•	
	••	
	✱	
	••	
	•	
	○	
	••	
	✱	
	••	
	•	
	○	
	•	
	••	
	✱	
	••	
	•	

「くたびれたんだろうな。眠っちゃってさ。もう少し、休ませてやってくれよ」

「眠り込んだのは、くたびれたせいだけか？」

俺の責めるような口調に、諦めたように青年は認めた。

「まあ、酒が効いたんだろうなっていうのもある」

「何故、止めない」

「止めるも何も。来てみたら味見とやらは始まっていたのさ。うん、良い出来だったよ。祭りが楽しみだな」

⋮

「叱るんだったら、言い出してせがんだミルアを叱れ。あいつは全く。エイメが戻ってきてきて嬉しいのは解るが、はしゃいで引っ張りまわし過ぎだ」

そこに責めるような響きは無かった。

ただ、出来るものならな、という含みは感じた。

「いいや。両方を叱る」

「厳しいな、地主サマは」

「女子供が酒に吞まれて、無防備に男の前で眠り込んでいるのだからな。――説教だ」

「そこら辺は同感だな。でも、まあ、程ほどにしてやってくれ。それより、アンタも手伝ってくれ」

「何故だ」

即座に切り捨てるように答えた。

何で俺がというよりも、何故オマエと差し向かいで作業せねばならないのかという不満だ。

「あいつらはもう少し寝かせてやらないとな。酒が抜け切らないうちに説教は無駄骨だぜ。だから放置だ。ま、日が陰って来たら、自然と目を覚ますだろ。それまで暇だろう、地主サマ？」

「暇ではない」

「祭りに参加するんだろう？　だったら準備にも参加してくれないとなー」

それが自然と言わんばかりの滑らかさで、匙を差し出された。

何となく受け取ってしまう。

また顎でしゃくられ、椅子に腰掛けた。

テーブルの籠に山と盛られたクルミがあった。

それらは全部、からが割られてある。
あとはこうやってかき出すだけのようだ。

「ちまちまと地味で単調な作業だよな。でも以外に手間がかかって、人手は一人でも多い方が助かる」

匙はすくい口の方ではなく、鋭くなっている持ち柄の方を使ってかき出す。

「確かに」

「文句を言わずに噂話やら、色恋話やらを口にしながら、こういう作業をする女どもをオレは尊敬する」

「……。」

確かにそうだ。

こうやって男同士が向かい合って作業をしてみても、つらつらと文句を言うか、押し黙るしかなかるう。

黙った後に流れる殺伐とした雰囲気避けたくなり、一方だけがしゃべり続けるか。

「味見は五個分までは許す」

青年の不自然な手元のからの山に視線をやれば、そのような許可が出た。

それが手伝いの報酬のつもりならば、とんでもない賃金の低さだろう。

特には欲しくは無いので、首を横に振って見せる。

クルミの実のあぶらがじわりと指先をぬめらせるものだと、初めて知った。

それだけで充分だと思った。

「……。」

「……。」

カラン、カタン、カラン。

しばらく沈黙の中、からのぶつかかる乾いた音だけが部屋に満ちる。

「なあ、地主サマ」

「何だ」

軽い口調は変わらなかったが、幾ばくかの緊張を含んで聞こえた。

「オレたちは償いたいんだよ。エイメを仲間はずれにして、祭りにこれないようにしちまった。年頃の娘にそりゃあ酷な事をしでかしたんだ。頼むよ」

「何をだ？」

「祭り前の数日間くらい、エイメを森に置いてやってくれ」

「断る」

「あんた将来、頭の固い頑固オヤジになるぜ」

手を止め、俺をじろりと睨む青年を静かに見返す。

「準備も含めて祭りなんだよ。年頃の娘の楽しみを、あんまり邪魔するな。あんた、過保護すぎるぜ」

「何とでも言え」

誰が狼の言葉を真に受けるか。

そんな思いを眼差しに込める。

殺伐とした空気が、一触即発といった空気に変わる。

その時だった。

•	•
••	○
✱	•
••	••
•	✱
○	••
••	•
•	○
	•
	••
	✱
	••
	•
	○
	•
	••
	✱
	••
	•
	○
	••
	✱
	••
	•
	○
	•
	••
	✱
	••
	•

トントン、と軽やかに扉を叩く音があつた。

トン・トン・トン。

トン・トン・トン。

「魔女っーこ！ 居ますかー！」

「えいめ、
いるでしょー」

「あけてくださあい！ 魔女っーこ」

引つ切り無しに扉を叩きながら、幼い声が呼びかけてくる。

「うっわ。うるせえのが来たな」

匙を放り出して、村長のせがれは後ろ頭を掻き爪った。

「しつこいから居留は無駄だと思う。開けるしかないぜ、地主サマ」

「何だ？ 子供か」

「ああ」

心底諦めきった様子で、青年が扉を開けると幼い子供が三人立つ

ていた。

「居たー!」

「ジェスじゃなくて、魔女っこはあ?」

「魔女っこ、おまじない、してー!」

ころろと無邪気になだれ込んできた、好奇心に満ちた瞳が一瞬で固まった。

「「「……!!」」」

見知らぬ俺を見て、恐怖を覚えたのだろう。

騒ぎ立てていた子供たちの動きも口も、ぴたりと止まった。

「おまえたち、大地主サマにちゃんとご挨拶しろよ!」

「えっと、はじめまして。おおじぬさま。魔女っこに用があつてきました」

「きました」

「えいめは?」

その中でも一番年長と思われる、男子が思い切ったように声を上げた。

その背に隠れるようにしていた女子二人も続く。

三人とも明るい茶色の巻き髪が、お揃いに被った頭巾から覗いていた。

深みのある緑の瞳も揃っているから、恐らく兄妹なのだろう。

「ああ。使いに来たのか? 賢いな、おまえたち」

屈んで視線を合わせて褒めてやると、それまで張り詰めていた空気が少し和んだ。

「お母さんが、魔女っここに、これをおすそ分けしてって」

「パンなの。焼きたてよ。おおじぬしさまもどうぞ。でも、ジェスにはあげない！」

誇らしげに籠を差し出してから、一転。

籠を胸に寄せて抱え込むようにして、幼女はジェスに背を向けた。

「ひでーな！」

苦笑しながらジェスが、わざと脅かすように両手を振り上げた。

「きゃー！」

「きゃあ、わるものー！　わるものが来たから追い払って、魔女っここ」

「ジェス、わるもの役やるもんね、ぴったりだよ！　きゃあ、早くー助けてー魔女っここ」

「こら！　誰が悪者だ！　カミサマ役の間違いだろう」

青年は子供たちの、期待どおりの動きをして見せたのだろう。

きゃわきゃわとはしゃぎ声を上げながら、部屋中を駆け回り、奥の部屋へと突進して行った。

躊躇い無く扉を開け放つと、うたた寝している娘二人を見つけて歓声を上げる。

「魔女っこ、いたー！　おひるねー？」

「おきて、おまじない、して」

「ミルアもいるー！ わたしもおひるね、いっしょにする！」

口々に好き勝手な事を言いながら、騒ぎに目を覚ましたカルヴィナにまわり付く。

カルヴィナは眠そうに目をこすりながらも、ころころとじゃれつく子供たちに微笑んだ。

「どうしたの？ わるものが来たって、ほんとう？」

まだ半分以上、夢の中と思わせる眼差しの焦点はまだ曖昧だった。抱きつく子供たちを受け止めながら尋ねる声も、おぼつかず掠れている。

「きたのー！ だから魔法をかけて」

「わるいものにさらわれないように、おまじないしてもらって来なさいって、お母さんから言われてきたの」

カルヴィナの両腕で抱えきれない女子を、金の髪の娘が背後から抱きかかえた。

「うるさいから、攫います」

「きゃー！ ミルア離して！」

「うるさいです。大人しくねんねしなさい」

こちらも寝ぼけているのだろう。

言うなり抱えたまま、勢い良く寝転がった。

「ぐー」

「もー！ ミルアは寝たフリでしょ！」

そう騒ぐ横でカルヴィナは抱えた幼子二人に「早く、早く！ おまじないして！」とせがまれていた。

「はいはい、一人づつだよ——」

そうあやしながら、子供達の額の真ん中に唇を押し当てながら、何やら古語で呟いてやる。

きゃあ！ と嬉しげに声を上げて、お返しにと同じように唇を押し当てては笑う。

最後に、金の髪の娘の腕から抜け出した少女が、カルヴィナに言った。

「魔女っこ、おおじぬさまにも、おまじないしてあげて！」

その無邪気な発言で、初めて俺の存在に気が付いたらしい。

そろそろと視線を上げると俺を見て、カルヴィナの動きが止まった。

44 大地主と村の子供たち（後書き）

『ジェス、頼み込む。』

頑固オヤジ宣告。

うむ、違いない。

ちびっこ達は書いていて楽しかったです。

みんな魔女っこが珍しくてまわり付いて、懐いています。

遊んでくれるジェスやミルアも好き。

子供なりに、地主サマには気を使ってみたようです。

45 魔女と悪者候補たち

「おきて、おきて、魔女っこ！ たいへん、わるものがきたのー！」

きやあーと怖がり半分、興奮半分といった楽しい悲鳴で目が覚めた。

そこで初めて、自分がいつの間にか寝入っていたのだと気がつく。

上体を起こすと、手元には作りかけの腕輪が転がっていた。

$\bullet$

$\circ$

$\bullet$

$\bullet$

$\dots$

$*$

$\dots$

$\bullet$

$\circ$

$\bullet$

$\dots$

$*$

$\dots$

$\bullet$

$\circ$

$\bullet$

$\dots$

$*$

$\dots$

$\bullet$

$\circ$

$\bullet$

$\dots$

$*$

$\dots$

そうだ。

ミルアがお祭りの日のために漬けておいた果実酒の瓶を、目ざとく見つけてしまったのだった。

そして味見をしたい、
と言いつけて出してきたのだ。

ほんの少しくらいなら、と許したら、ゴキゲンになったミルアは私にも飲む様にと絡んできた。

これが酔っ払いか――。

等と妙に感心しながら、首を横に振って辞退したのだが、ミルアは許しちやくれなかった。

いつも以上に感情も表情も豊かになったミルアを眺めた。地主様もお酒を召されるが、こんな風にはなったりしない。

ふにやつとしたいつもより無防備であどけない微笑みは、こちらの警戒心までも蕩かしてしまう。

どうやら付き合うまでしつこく絡んでくるだろうな、と判断したから口を付けた。

慎重にゆっくりと飲んだ。

ミルアは調子に乗って、もう一杯注いでしまった。

それを横目で窺いながら「これは水で薄めて飲むくらいで丁度いいのだったな」と思い出した。

だがもう遅い。

ちびちびと舐めるように飲み下す。

花びらと果実と葉草を調合した液体は、舌に甘く絡んで咽喉を潤して滑り落ちる。

その落ちるのと同じ早さで、胸元がじんわりと熱く火照って行く。

ミルアの頬は真っ赤だった。

瞳はとろんとして、起きたまま夢を見ているようだ。

きっと私も大差ない事になっているだろう。

もっと飲むーとせがむミルアに、もう駄目だと瓶を取上げた。

もう味見どころではない。

しかし、酔っ払いというものはしつこいもので、ミルアはぐずぐずと諦めない。

ミルアにお酒はあまり飲ませない方がいいと気がついてても手遅れだった。

困っているとジェスが現れた。

「おまえら、何やっているんだ？」

「あじみー」

「ミルア、もう駄目だよ」

そこで記憶は途切れている。

ただ陽射しがぼかぼかと暖かく、寝床もちょうど良いくらいにぬくもっていたのは確かだ。

そこにふわふわの温かな塊りとも言っていていい、子供たちが抱きついてきたのだ。

ふふふ、と思わず頬が弛んだ。

この三人兄妹は、一番上のお兄ちゃんが六歳で、二人の妹は五歳の双子だ。

みんな、お揃いのふわふわの巻き毛で、ぱっちりとした瞳は深緑。

その上、お母さんお手製のお揃いの頭巾を被っていた。

「魔女っこ、おまじないして！」

せがむお兄ちゃんのカールの前髪をかき上げて、唇を押し当てながら古語で唱える。

『森の精霊よ。幼子に森の加護をお与えください』

次はリュレイ。

二人からは同じように、お返しを貰った。

最後に、ミルアの腕から抜け出してきたキャレイ。

キャレイは嬉しそうに笑い声を上げると、真っ直ぐに私を覗き込みながら言った。

「魔女っこ、おおじぬしさまにも、おまじないしてあげて！」

お お じ ぬ し さ ま 。

幼い語り口調から、一瞬何の事かと思った。
思い当たって、ドクンと鼓動が跳ね上がる。

「え……っ!？」

そろそろと視線を持ち上げてみれば、そこには地主様の姿があった。

いつもよりも早い時間のお迎えだ。

思いもよらない人影に驚いたのと、キャレイの無邪気な提案に身動きが取れなかった。

「――えっと？」

キャレイの幼い声が響いたきり、妙な沈黙がおりていた。
抱えた女の子は自分の提案に自信たっぷりの様子で、瞳を輝かせている。

ミルアも同じだった。

ジェスからは、突き刺さるような視線を送られていた。
なぜ、皆、黙り込んで様子を窺っているのだろうか？

そろそろと、微動だにしない地主様を見上げる。

彼からも責めるような瞳で、じっと見つめ下ろされていた。

……お、怒られる？

何となく、そう察して身体を強張らせて構えてしまった。

地主様はゆっくりと歩み寄ると、しゃがんで私と目線を合わせるようにされたが、何となく気まずくて目を泳がせるしかない。

[illegible]

「ダメ——ッ！」

突然、大声を出してカールが間に入ってきた。

キャレイごと私に抱きついて、地主様を強く睨みすえている。それには相当驚いた。

カールは地主様が怖くないのだろうか。

流石、小さくても男の子だと妙に感心してしまう。

「ど、どうしたの？」

「ダメったらダメっ。魔女っこのおまじないは、ぼく達だけでいいの！ おおじぬしさまはオトナだから、いらないでしょ！」

そう言って地主様から庇うように、ぎゅうぎゅうと抱きついてくる。

「いいぞ、カール。いっちょまえにヤキモチか。オトコだなあ」

ひゅうと口を鳴らすとジェスがからかった。

そんなジェスにも構わずに、地主様はカールの頭に手を伸ばし、
ごしやごしやと撫で回した。

獵犬たちにするみたいに。

ふいにそんな事をされて、カールは驚いたようだった。

「カールというのか。おまえは勇ましいな。良い子だ」

地主様は心なしか口角を上げ、瞳にはやさしい光が浮かんでいるように見えた。

「……魔女っこは、あげないからね！」

「いいぞ、カール」

「ジェスにもだよ！」

揶揄するように声援を送るジェスにも、カールははっきりと言い放つ。

照れくさそうに地主様の大きな手をふり払って、私にしがみ付く。

「もてるわねー。エイメってっ……！ な・な・な・何でしょうかつ！？」

同じく面白がって笑っているミルアの頭に、地主様の右手が乗せられる。

——と、驚いている間に、私の頭も同じようにされていた。

驚いた何てものではない。

言葉が出てこない。

ただ口をばくばくさせて、忙しく空気を飲み込むばかりだ。

「!？」

地主様はどうされたのだろうか？

視線で問い掛けると、射殺されるかと思うほど睨まれた。

「それに引き換え、おまえたち！ 祭り前で浮かれるのは解らないでもないが、酒に吞まれて男の前で無防備に眠りこけるとは何事だ

！
」

どかーんと雷を落とされた。
わっしと掴まれた頭を揺すぶられる。

「えっと、男って言っても、ジェ、ジェスだし？」

ミルアが何故そこまで怒るのかと言いたげに、口を挟んだ。

ああ、ミルア。無謀な真似を。

心の中でたしなめてみても、もちろん遅かった。
ミルアも頭を掴む手に力を込められたのだろう。

引きつった表情から、自らの発言のうかつさを呪っているようだった。

「おまえは、幼馴染だからといって男を見くびりすぎだ。いつか足元をすくわれるぞ。それからでは遅いんだ。いいか！ おまえたち、これから酒は禁止だ」

「うっわ。何、オレ？ 相当、オレが悪者ですかい、地主様？」

そんなジェスの声を無視して、地主様は「いいか。わかったな？ 返事は？」と促がしてくる。

頷こうにも強く頭をつかまれているので、なかなか上手く頷けない。
い。

ミルアはよせばいいのに、また未練がましく口を挟む。

「お、お祭りの日ですか、地主様」

「当たり前だ！ たかだか果実酒の数杯で、正体をなくしかねない娘が許されると思うな」

そんなあとミルアが情けない声を出しても、駄目なものは駄目だと地主様はまるで取り合おうとはしなかった。

（どうしてお酒に酔って眠ると駄目なのかな？ 浮かれる？ 男の人、足元をすくわれるって何？）

地主様の言った言葉を理解しようと考え込む。

「……わかったな、カルヴィナ？」

「はい。解りました。お酒は禁止ですね。でも、お酒に吞まれて無防備？ 眠るといけないの？」

考え中に話し掛けられたせいで、まとまりのない返事をしてしまった。

途端、頭を掴んでいた地主様の握力が増す。
痛い。

結局その後、お小言は延々と続いた。

45 魔女と悪者候補たち（後書き）

『うたたねから目覚めてみれば。』

うん。

返事だけは良くてもねえ。

解っていないなら意味ないしねえ。

「両方叱る。」の宣告どおり

地主、有言実行の男。

46 魔女と地主とクルミ

結局そのままではらく、おばあちゃんの部屋で作業を続けようかとなった。

「申しわけありませんが、これは女の子たちの秘密の作業なのです。少し、私たちだけにしていただけませんか？　ねっ！　エイメ」
「う、うん」

腕輪を後ろ手で隠すようにしながら、ミルアが言った。
勢いに押されて、あまり何も考えずに頷いてしまう。

おしゃまなリユレイとキャレイも、私たちの味方をする。

「おんなの子だけーねっ」
「だけー」

「「お兄ちゃんも、だめよ！」」

「魔女っこ、それボクにくれるよね？」

「あっ、こら！　抜け駆けなしだぞ！　カール」

「子供相手になんだ」

地主様が呆れたような声を上げる。

「はいはい。行こうぜ、地主様、カール。あの腕輪の行方は祭りの日のお楽しみだ。まだ、クルミは山とあるしな」

「何故、俺が」

「オレはまだやぐら作業があるから、クルミの方は任せた」

そう言いながら、ジェスは大きく手のひらを開いて見せた。

「つまみ食いは五個分まで許す」

「またそれか……。」

地主様になんて事を！

「て、手伝います」

「駄目よ、エイメ。そうしたら間に合わないわ」

「だって……。」

「じゃあ、交代交代でお手伝いしよう。地主様、それでいいでしょう？」

「――ああ」

地主様の返事が一瞬遅れた。

何故か戸口の鍵をいじりながら、気にしておられるようだった。

鍵と言っても錠では無く、取り付けた楔を横に引いて仕掛けるものだ。

壊れてはいないはずだけれど？

「おまえ達、秘密だというのならば、鍵をかけておけば良かっただろう。全く無用心だな」

「え？　だって急にお客さまが来たりしますから」
「ねえ？」

ちびちゃん達を抱き止めながら、ミルアと顔を見合わせる。この時期、引っこり無しに村の人がやって来る。

もしかしたら今日もまた、シュリ達女の子が顔を出すかもしれない。

気付かずに、それを締め出すような事はしなくなかった。

「オレを睨んでもどうにもなりませんぜ、地主様」

ジェスは何故か肩をすくめて見せてから、やぐら作業に戻って行った。

[illegible]

おばあちゃんの部屋で腕輪を作る。

「ミルア、ここまで頑張つて。出来たら呼んで？」

「わかった。こう、同じように繰り返せばいいのね？」

「そうそう」

手元から目を離さないミルアを、ちびちゃん達は瞳を輝かせて見つめている。

こうやって女の子は腕輪の作り方や、思いの込め方を学んで行くのだらうなと思った。

私も小さい頃、おばあちゃんの魔法のような指先を夢中になって見つめた事を思い出す。

杖を引き寄せて立ち上がり、部屋を出た。

地主様に張り合うように、カールは躍起になってクルミをかきだ

している様だった。

「お疲れ様です、地主様。すみません。私もお手伝い致します」
「ああ」

「魔女っこ、ボクのとなりね!」

カールに手を引かれ、すぐ側の椅子に腰を下ろす。

「見て! ボク、こんなに取り出したよ」

「うん、すごいね。いつもおうちでもお手伝いしているから、上手だね」

「うん。はい! これ、あげる」

そう言つて、カールはかき出したクルミをひとつ摘まんで差し出す。

「ジェスが五個分までは良いって行つてたから、ボクの分いっこあげるね。はい、あゝんして!」

「ありがとう」

どうやら食べさせてくれるらしい。

促がされるまま口を開けると、小さな指先が唇に触れた。

「おいしい?」

頷いて見せながら、私もひとつかき出して摘まむ。

「はい、カールにも。あゝん?」

「あゝん!」

にここにこしているカールが可愛くて、私も笑う。

「おいしいね、魔女っこ」

「うん、おいしいね。じゃあ、頑張って終わらせよう」

ふと、地主様の方を見ると既に、かなりの量のカラが積まれているた。

もくもくと作業を続けている。その手つきはとても早い。

その様子にカールは慌てたようで、また必死に作業を開始した。私もそれを見習う。

[illegible]

「エイメ！出来たよっ、ここから先はどうしたらいいの？」

おばあちゃんの部屋から顔を出したミルアに呼ばれる。

私は既に、クルミ五十個分はかき出した所だった。

振り返る。

ミルアは待たずに、こちらにやって来た。

「うう。ちよつと気分転換に手伝います」

言いながらミルアも作業に加わる。

「ミルア、大丈夫？　ちよつと休んだら？」

「ミルアがやるとクルミがぼろぼろになるね」

「うるさいな〜！ お腹に入れば同じでしょうったら」

カールの容赦の無い一言に、ミルアが言い返す。

「いっしょ、いっしょ！」とちびちゃん達は、テーブルの周りをはしゃぎ回った。

ミルアは「クルミが色石に見える」とぼやきながら作業を続けて、結局そうやって日暮れを迎えた。

[illegible]

そろそろ片そうかとなった頃に、ジェスが顔を出した。

「ちび達！ やっぱり、まだ居たのか。おまえ達のかあちやんが心配してたぞ」

「えー！ まだいいでしょ？ まだクルミ、たくさん有るもの」

カールが言い張るけど、もちろんジェスは引かない。

「わ！ おまえ達、頑張ったな！ でも駄目だ。送っていくから、ほら！」

「ええ。まだ、魔女っことおおじめしさまと居たい！」

「居たいの！」

リュレイとキャレイもごねる。

その言葉が意外だったので驚いた。

ちなみに地主様はあまりしゃべらず、適当に相槌を打っていただけだったからだ。

「おまえ達、今日はもう帰るように。家の者に心配をかけるな。わかったな？」

二人の頭に手を置くと、地主様は言い聞かせる。

その口調は優しくしたが、有無を言わせない厳しさも含んでいた。

「う、はい」

「はい」

しぶしぶと言った様子で頷く。

そんな二人の頭を、大きな手のひらがごしやごしやと撫でる。

「わたしも帰るわ。エイメ、また明日よろしくね」

「うん、また明日」

「また明日かあ。魔女っこ、帰らないでここに居ればいいのに！
そうしたら朝一番に来るから、一緒にパンを食べようよ」

「えっと、カール。あのね」

横目で地主様を窺う。

「駄目だ」

やっぱり、おなじみの答えが返って来た。

[illegible]

また明日ね、絶対ねと約束して、見送った。

魔女の家に傾き始めた日が射しこむ。

「……。」
「……。」

地主様と二人で黙ってテーブルの上を片付けた。
細かなカケラやカラをよけてから拭く。
取り出した実には布を掛ける。

今日はいつにも増してにぎやかだった。

その分また余計に帰りたくなくて、切なくなる。
どうしてそう感じるのだろうか？

例え帰らずに済んだとしても、夜はここで一人で過ごすのに。

思わずふうとため息がこぼれていた。

「疲れたか？」

「いえ。あの。今日はありがとうございました。こんな事まで、地主様にまで手伝わせてしまって、申し訳ありませんでした」

「いいや。……いい勉強になった」

そう地主様は静かに仰った。

勉強になった？ 何の事だろう。

そう思いあぐねていると、地主様も隣に腰を下ろした。

そうして布をよけて、クルミをひとつ摘まむと私に差し出した。

「報酬だ」

「え？」

それは地主様が受けるべきものだろうに。

地主様とクルミとを交互に眺めていると、ずいと口元に差し出された。

身を引いて、受け取ろうと手を伸ばすと、嫌そうな顔をされてしまう。

何故？

そう考え込んでいる間に、地主様の指先が唇に押し当てられてしまった。

不意打ちだった。

地主様の指が唇を撫でながら、実を押し込んできた。
自然と実を受け取ってしまう格好となる。

噛み碎くと歯ざわり良く、クルミの実のあぶらがじわっと口に広がる。

おいしい。

「うまいか？」

もぐもぐ、ぐもぐもとしつこく噛んでいると尋ねられた。

こくんと頷く。

またしても頭のとっぺんに大きな重みを感じた。

地主様の手だ。

それは大きくて私の頭を一掴みにしてしまえるほどだ。

ちびちゃん達にしたみたいに、ごしやごしやと頭を撫でられた。

「そうか」

良かったな。

そう呟く地主様の瞳はやわらかな光で満たされていた。

この部屋を満たすのと同じ光だ。

私もクルミをひとつ摘まんだ。

「はい」

同じように地主様の口元へと差し出す。

頭を撫でてくれていた手が止まる。

唇を固く引き結ばれてしまった。

やはり不躰だっただろうかと不安になって、手を引こうとしたら、
手首を掴まれていた。

そのまま引き寄せられ、地主様の唇が指先に当てられる。

そうして指先ごと、口に含まれてしまった。

思いのほか、やわらかな弾力に驚く。

「――うまいな」

何故か震えだす指先に説明がつかなかった。

46 魔女と地主とクルミ（後書き）

『どこがどう勉強になったのか。』

地主、カールに倣って魔女っこをクルミで買収の巻。

そして ちゃっかり。

二人とも関係ないって顔してるけど

説明のつかないもやもやに胸を占拠されつつ。

ふふふ。

お祭りらしくなってます。

地主、魔女っこの好みを見つめようと観察していますな。
健気なこった。

地味に粘りたいと思います。

47 地主と祭り前夜の魔女

気忙しい日々はあっという間に過ぎて、明日はいよいよ村祭りを迎える。

日ごとにカルヴィナの表情が、豊かになって行く様を見守っていた。

朝こちらに向う時は張り切って嬉しげだが、夕方迎えに来るとしよげ返っている。

その繰り返しだった。

いつも帰りたくないといねるのだが、俺が絶対に許しはしないと諦めたのか、ここ四日ほどは言い出さなくなった。

ただその分、落ち込み方がひどくなっている。

準備疲れもあるのだろうが、ほとんど夕食には手を付けない。

仕度を済ませると、さっさと眠りについてしまう。

最初のうちは「きちんと食事を取らないようなら祭りの手伝いには行かせられない」と脅したが、見事に逆効果だった。

夕食ばかりか朝食すら、ろくに手をつけなくなったのだ。

朝はこれから準備に行くので機嫌の良いカルヴィナは、比較的きちんと食事を取れていたと聞く。

「食べられないと手伝いに行かれない」と言葉通りに受け取った娘は、気負いすぎて食事が咽喉を通らなくなったらしい。

リディアンナに責められ、学習しない自分を悔やんでみても始まらない。

カルヴィナは、小鳥か小動物と同じと思うくらいでちょうど良い。脅かすと萎縮して何も手付かずとなる。

俺から何か言われる事は、カルヴィナにしてみたら「絶対命令」らしかった。

少しは歩み寄れたかなどと思ったのは、俺だけの錯覚だったとよく思い知らされた。

最初カルヴィナに、恐怖を刷り込んだのは俺で間違いない。

逆らうと何か罰が待っていると、条件つける物言いは二度とするまいと誓う。

もうしばらくは様子を見て、何も言わない。

あとは軽食を持たせて、石屋の娘に任せることにしている。

[illegible]

どうやら、女だけの秘密の腕輪作りも無事に終わったらしい。

それも含めて、準備はどうか間に合ったと、安堵の表情を浮かべた娘二人から告げられた。

「本当に本当にエイメが来てくれなければ、どうなっていた事か！
ありがとう」

「がんばったねえ、ミルア。みんなも。良かったね」

健闘を称え合う二人を、単純に微笑ましいと思う。

やり遂げたという達成感に、明日への期待が高まってか、瞳が輝

いている。

「じゃあ、エイメ。お祭りの衣装合わせをしましょうか！」
「……衣装合わせ？」

明るい声に対して、カルヴィナの声は低めだった。

明らかに乗り気からは程遠いと窺わせるに充分な口調。

それでも生き生きとした表情で、楽しげにカルヴィナの手を取っている石屋の娘に、気にした様子も無いが。

おそらく姉に付き合わされた事を思い出しての事ではなからうか、
というのはただの俺の推測だ。

カルヴィナに、己を飾り立てようという意識を持て、と要求しても無駄だと知っている。

カルヴィナは極端に目立つ事を厭^{いと}うのだ。

どうやら魔女には魔女の装い方があるという心構えらしい。
森を行き来するために身軽で、華美過ぎず、実用的な物を。
色合いは花のものではなく、森の木立に馴染むものを。

それがカルヴィナの願いだった。

姉がどんなに娘らしい物を勧めても、気持ちは変わらないらしく、
浮かない顔をしていた。

好きにさせてやればいい。

そう思うに至っている。

姉も同じらしく、だがりディアンナを通してそれとなく、似合う
衣服を届けるのは止めていない。

娘二人のやり取りを見守っていると、助けを求めるような視線とぶつかる。

それもすぐ、逸らされてしまった。
それを追う。

どうやらカルヴィナは、祭りの巫女役選ばれたらしい。

「これ！ エイメ着てみてね。多分、大丈夫だと思うんだけど、エイメは華奢だから念のため」

「え？ だから、私が何で巫女役？ ミルアがやるものだど、てつきり」

「わたしを見ていたらわかると思うけど、そんな余裕はありませんでした。古語を完璧に発音するのも、祈りの言葉をそらんじるのも無理です。時間が無さ過ぎたわ」

「だからって大事な役でしょう？」

意気揚々と白地の衣装を持ち出してきた石屋の娘は、さも当然だろうと言わんばかりだった。

「私たちの誰もが準備に追われていたわ。とてもじゃないけれど、森のカミサマが納得するような古語を操れる自信なんてない。もしエイメが来てくれていなかったら、私たちのうちの誰かは腕輪造りを諦めていたわ」

「だからって私でなくてもいいと思う」

選ばれたとういうのもどうかという状況は、はめられたの間違いなのではないか。

そう言いたげな表情だった。

「何を言っているのよ！ わたし、一番最初に言ったわ。そうでな

ければ誰が古語を操れるって言うの？ お祭りを手伝ってくれるのでしょう、大魔女の娘よって」

「……。」

「エイメは納得してくれているのだと思ったわ。協力してくれるって、安心したの」

「じゃあ、何で言ってくれなかったの？」

「忘れていたの。言った気になってて」

さらりと石屋の娘は言っただけだ。

明らかに、計画的な犯行だと思わせるに十分な方便だった。

カルヴィナの視線が泳ぐ。

おぼれる者が、何か助けになるものを求めるかのように。

それでもカルヴィナは、こちらを見ようとしなかった。

一昨日から心なしかカルヴィナから避けられている。

当然か。

人の心に敏い娘だ。

俺の抱いた感情に晒されて、本能から怯えているに違いない。

幼子にしてやるかのような、仕草を務めたつもりだったのだが。

まさかのお返しに、俺の中で何かが弾けた。

籠が外れたと表現するのが相応しいのかもしれないが、そう言っ
てしまうにはあまりにささやかな崩壊だった。

——本当にこの胸の何かが外れたら、あの程度などでは済まない。

本当の手枷足枷が必要になる事だろう。

そもそも最初から、俺に枷となる何かがあるのかと問われたら、何も答えられないが。

「確かにカルヴィナは請け負っていたな。祭りには大魔女の娘の助力が必要だと」

「地主様……。」

「この土地を預かる者として、祭りの成功も仕事の内だからな。カルヴィナ、大魔女の娘としての判断はどうだ？」

頼りなく揺れていた視線が定まった。

はっと、何かにつかれたように目を瞠る。

ためらいながらも、カルヴィナは意を決したように頷いた。

「はい、地主様。精一杯、お勤めさせていただきます」

「ありがとうございます、エイメ！ありがとうございます、地主様！じゃ

あ、エイメも地主様も、今夜はここで過ごしてね」

「何？」

「え？」

「あら。だって祭りの前から森の気に浸らなくっちゃ。それが習わしだもの！ 巫女役はもちろんの事、他ならぬ地主様も！ 祭りに参加するなら、この祭り直前の森の気に触れる事から、ですわ」

自信満々に言い切る、金髪の娘の表情は真剣だった。

先程こつそりと囁かれた報告をにおわせながら、俺を見て言葉を紡いでいる。

。。。。。

地主様。

あなた様の魔女の娘は、何かを思い悩んでいるようですよ。
バスケットの中味は食べきれないからと、ほとんどを人に差し入れてしまいました。

勧めても「朝たくさん食べてきたから」と言うんですよ。

え？　嘘？　それどころか昨日の晩もあまり食べていないのですか？

もう、やっぱり！

あ！　大丈夫です。何やかやと味を見てくれと言って、つまみ食いはさせてますから。

でも、心配ですね。

ちよっと、ぼんやりしているし。

何を気に病んでいるんでしょうね、あのコ。

祭りが終わったら、寂しいからだけでは無い気がします。

・。・十・。・

カルヴィナが、おずおずと伺いを立ててきた。

「地主様、その……。今日は、今日だけはここで一晩明かす事をお許しくいただけますか？」

——エイメを祭りに参加させてやってくれ。

頭の中で手を振って、それを追い払う。

「いいだろう」

「——えっ!？」

「やったあ！ 良かったわね、エイメっ！！」

手を取り合つて喜び合う娘二人に、
ゆつくりと頷いて見せる。

カルヴィナと目が合ったが、逸らされずに済んだ。

[illegible]

ココココン！
と扉が音を立てた。

軽やかだが、性急さも感じられる。

来客を告げるそれに、カルヴィナは躊躇い無く扉を開けた。

⌈ ⌋

村長のせがれが、怪訝そうに眉をひそめて立っていた。

「あの？」

「ああ、何で灯かりがこんな時間まで付いてるのかと思ったから、見に来たんだ。どうしたんだ？　もうとつくに日は暮れちまっただろう？　まさか、ミルアの奴、間に合わないとか泣きついたのか？」

「ううん。違うよ。明日は準備で朝早くから掛かりきりになるでしょう？　だから、泊まっても良いって地主様がお許しくださったの」

「
—
エ
イ
メ
」

困惑顔の青年が首を振り、こちらを責めるような眼差しを向けた。

「少しだけ、いいかい？ 地主様」

顎をしやくつて促がされる。

しぶしぶ立ち上がり、表に出た。

カルヴィナが俺のためにと、やれ茶だ食事だと、忙しく立ち働いてくれていたというに。

少しだけ離れ、小声で話し始める。

[illegible]

——何、さも当たり前の面してんだよ、地主サマ？

当たり前になっているからだろう。

鼻で笑い、顎をそびやかし見下す。

——あんなあ、まさかここで二人つきりでエイメと一晩過ごすか？

そうだが。何か不都合でも？

——大有りだ！！

何。あれとは既に一緒に館に住んでいる。問題なからう。

——広さの規模が違うだろう！

思わずといったように、青年が胸倉に掴みかかってきた。

「どうしたの？ ジェス、地主様に乱暴な事しないで！」

後ろではらはらと、事の成り行きを見守っていたカルヴィナが、不安そうに叫んだ。

ちっと舌打つと、腕を解いてから「悪かった」と素直に詫びられた。

「おまえは何しに来たんだ。村長のせがれ？」

「夕食にご招待いたしますよ、地主様。親父も打ち合わせしたいと待っていますから。もちろん、エイメも一緒に」

やはり大魔女の獣よけは、きちんと働いているとは言い難いと思っただ。

47 地主と祭り前夜の魔女（後書き）

『祭り前夜。』

不思議な高揚感ある 静かな夜。

そんな空気が書きたいです。

色々、迷いましたがUPです。

48 地主と魔女と村長親子

にこやかに迎え入れられて、ほっとした。

村長さんは、やっぱりあれこれと勧めてくる。

「いよいよ明日は村祭りだからね。エイメは巫女役なんだから、しっかりお食べ。ああ、無理ではなく食べられる分だけね。この魚はわたしが釣ってきたんだよ。食事の後には甘いものも用意しているから、その分の余裕を残しておくといい。女の子は甘いものが好きだろう?」

「はい、ありがとうございます」

恐縮してしまう。

村長さんときたら、地主様やジェスのことがまるで目に入っていないかのような様子なのだ。

もちろん、一番最初には地主様を労って、一番大きなお魚を用意していた。

でも私に色々とり分けてくれる。

給仕をしてくれるお手伝いのおかみさんも、やや苦笑気味だ。

それでも「あらまあ、旦那様は世話焼きでらっしゃるから。遠慮はいりませんよ」と、言うだけだった。

「親父、ほどほどにしてやれ。エイメが困っている。そんなに口う

るさくすると、落ち着いて食べられないだろう」

「ああ……。そうか、エイメ。遠慮はいらないからね」

そう言って、すぐ目の前に座る村長さんは目を細めた。

隣には地主様が座っているのに、村長さんは私のお魚だという方の身をほぐし始める始末だった。

まあでも、村長さんに見てみたら、私はうんと子供に見えての事なのだろうが。

地主様とジェスは口数少なく、食べる事だけに集中しているように見えた。

実際、二人の食べ方には驚かされる。

大きなお魚はすでに綺麗に骨だけになっているし、既に最初によそわれたスープは空っぽだった。

もう一杯と、お代わりがよそわれる。

「気持ちの良い食べっぷりですこと！ 作るほうとしては、これほど嬉しい事はありませんよ」

おかみさんが晴れやかに笑いながら、新たに焼きたてのお魚を用意していた。

香草をまぶして焼かれたそれは、香ばしい良いにおいが湯気と共に上がっている。

「ああ、とても美味しい」

「光栄ですわ、地主様にそう仰っていただけて」

私も良かったなと思って、ほっとしていた。

「エイメ？　どうしたんだい？　もう食べられないかな」

村長さんが手の止まった私を氣使って、心配そうに尋ねてくれた。

「いいえ、あの。村長さん達にお夕食に招待してもらって、良かったなあと思ったのです」

「そうかい！」

一瞬驚いた顔をしてから、村長さんは満面の笑みを浮べて見せた。

「はい。だって私あまり準備していなかったから、地主様にご用意できるのは、スープが少しと昨日もらったパンだけだったのですもの。良かったです。ありがとうございます」

きっと、あの量では足りなかったと思っていたし、今の光景を目の当たりにして確信していた。

地主様は「充分だ」と言い張っておられたが、氣を使わせての事に違いない。

やはり、男の人には十分な食事が要る。

テーブルに所狭しと並べられたお皿に盛られた、温かな食事に感謝した。

幸せな気持ちでにこにこしていたのだが、皆が氣まずそうに黙り込んでしまった。

場が奇妙な静けさに包まれる。

何か、変な事を言ってしまったのだろうか。

そう氣をもんでいると、改まって名を呼ばれた。

「カルヴィナ」

「はい」

隣の地主様を見上げる。

「おまえが用意してくれたいた食事は、明日の朝にもらう」

「はい、わかりました。地主様」

声ばかりか、顔つきまでもが改まっておられた。

何だろう、この違和感は？

首を傾げずにはいられないが、その理由がわからなかった。

そのまま食事はすすみ、最後にお茶とお菓子が出される。

「エイメ、蜂蜜もかけておあがり。地主様もよろしかったらどうぞ」
「ありがとうございます。あの、少しだけで大丈夫です。食べきれないといけないので」

「そうか。いいよ、いいよ。好きな分だけで」

その頃にはもう、漂う違和感のその訳に気が付いていた。

村長さんは私にはすごく優しく話しかけるのだが、地主様にはそうでないのだ。

もちろん、あからさまに冷たい感じはしない。

しないのだが、必要最低限の礼儀を表すが、それ以上は無なのだ。

なんだか村長さんは怒っているみたいだった。

それをおくびにも出そうとはしない分、本当に地主様に対して怒っているのが伝わる。

もちろん、決め付ける訳にも、ましてやそう尋ねる訳にもいかないから、黙って知らないフリをするしかない。

——と、思いたい。

「エイメは巫女の役回りを知っているね？」

「そうかい。なら安心して任せる事が出来るよ。そう思いませんか、地主様？」

「エイメ。巫女役の乙女はね……。未婚の女性でなければなら
ないだよ。もちろん、清らかな処女おとめでなければならぬだよ。その
事は知っているかな？」

村長さんは念を押すみたいに尋ねてきた。

「よし。ちゃんと理解しているようで安心したよ。何せ言い伝えの乙女は、森の神様に嫁ぐ約束だからね。その日は一日、巫女役として振舞うのだから、そうでなくてはいけないよ。森の神様だけを想う乙女でなければ」

「おお、そうか。そうか。エイメは立派な森の魔女だな。明日のお勤めも期待しているよ。――ねえ、そう思いませんか？ 地主様」

そう嚴重に締めくくると、地主様に笑顔を向けた。

だが、どこか怖い笑みだった。

目が……。目が、笑っていない。

「村長。解らないでもないが、それは要らぬ心配だ。カルヴィナには大魔女の加護がついている。不埒な想いを抱く者は、あの家にすら近づけやしない」

「さようで。ならば安心いたしましたよ。年を取ると、どうも心配性になってしまっていけない」

「俺から言わせてみれば、祭りにかこつけて群がる狼の方が巫女に噛み付きはしないかと心配だ」

「ああ。それはもちろん。祭りを前に浮かれるケダモノどもは、よく馴けてありますから。それこそ、ご心配には及びませんよ。なあ、ジェス？」

「親父、地主様。二人とも、言いたい事はよく解るが、いい加減にしろ」

最後の方には、ジェスまでもが不機嫌な声を出していた。

「地主様。お聞きになった通り。巫女は清らかな乙女でなければ資格が無い。そして、明日の巫女役はエイメだって事をお忘れなきよう」

「ああ。もちろんだ。決まっている」

「だったらエイメは今夜うちでお預かりしましょう」

「断る。それこそ不安材料だろう」

まただ。

終わりの見えないやり取りが繰り返される。

最終的には私にどうしたいかと尋ねられたので、迷い無く「森の家に地主様と帰る」と告げた事で、一応やり取りは終わった。

$\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\ast$
 $\bullet$ $\bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$

ぽつんと一人、置いてきぼりにされたような気分だった。

「そういえば、お祭りの打ち合わせはどうなったのだろうか？」

結局は私が巫女としての心構えがあるのかどうかを、はっきりさせなかっただけのような気がする。

確かにろくに練習もしていないから、心もとなく見えるのかもしれない。

きっと成功させると約束をした。

それでも村長さんもジェスも、心配そうな顔を互に見合わせていた。

夜も深くなってきた。

明日は早い。

ここに泊まるようにとしきりに勧めてくれる村長さんとジェスとに、暇を告げる。

せめて送ると言い張るジェスに丁寧にお礼を言ってから、それも

丁重にお断りした。

地主様と二人、ゆっくりと歩いて戻る。

地主様に左手を引かれながら、ゆっくりと。

月明かりもあって、さすが祭り前の夜だと思った。
何もかもが力強く、特別な気配に支配されている。

地主様は灯かりで足元を照らしてくれながら、慎重に足を運べるようにしてくれる。

いつもみたいに、抱き上げたりせずに、私に森の中を歩かせてくれた。

道すがら、ぽつりぽつりと話しながら歩く。

「月が綺麗ですね」

「そうだな」

「森の気配も高まっていて、魔女の力になります」

「良かったな」

「はい。泊まることをお許しくださって、ありがとうございます」

「……ああ」

お礼を伝えると、ためらいがちな返事が返った。

それと一緒に、繋いだ手にぎゅっと力が込められた。

転ばないように？

私も、なるべくしっかり掴み返した。

48 地主と魔女と村長親子（後書き）

『村長親子に心配される魔女っこ。』

うん。

村長さんは魔女っこの、父親気取りですからね。

色んな想いが渦巻いている訳です。

どんなにすましたつらをしていようともやろうはやろうなんだよエ
イメー！

みたく。

手を出したらただじゃすみませんよ、と牽制親子。

地主と魔女と幻の存在

[illegible]

眠りにつく前に、カルヴィナには内側からきちんと鍵を掛けて休めと言ひ渡してあつた。

大魔女の部屋の方には、鍵が付いていたのを確認済みだった。だからこそ、石屋の娘の提案を呑んだところもある。

いたいけな少女に無体を働く趣味は無い。

それほど女に飢えている覚えも無い。

だが、男という身と性さがを信用しきっている訳でも無い。

用心はするに越した事は無いのだ。

「獣はこの家に侵入したりしませんよ？　それほど心配なようでしたら、地主様こそ、こちらの鍵付きの部屋でお休み下さい」

等との外れな事を言い出すカルヴィナを、半ば強引に押し込めて鍵を掛けさせてから横になった。

カルヴィナが使っていたであろう寢床だ。

娘のまとう香草と花の香りに包まれている気がする。

それはそれで、どうかという状況だろう。

「きちんと日に当てて手入れをして置きましたから、どうぞご容赦下さい」

知らず渋面になっていたであろう俺に、そう申しわけ無さそうに詫びるカルヴィナに、何と言葉を掛ければ良かったのか。

「氣に病む必要は無い」としか言えないまま、俺の世話を焼こうとするカルヴィナに鍵を掛けさせたのだ。

それが最適の方法だったろう。

いつまでも寢床の周りをうろちよろされるよりは、ずっと。

どうでもいいが、寝付ける気がしないのは何故だ。

腹立たしいまでに無防備な、魔女の娘のせいに違いあるまい――。

[illegible]

寝付けぬまま、どれほどの時が過ぎたのか。

微かに、だが聞きなれた乾いた音がした。

コツ……コツ……。

カルヴィナの突く杖の音だ。

細心の注意を払っているのだろう。

音は微かで、寝入っていたならば気にならないだろう。

気配を殺しながら、慎重に扉を開けた気配がした。

月明かりに誘われるように、カルヴィナは森に向つて歩き出して、

祭り前の森の気配を感じたい。
月の光は魔女の力になります。

そんなカルヴィナの言葉が蘇る。

ふらふらとした足取りはおぼつかないながらも、楽しそうに見えた。

だからと言って明かりも持たず、単身森の中をふら付くのは感心しない。

気配を殺すのならば、こちらの方が格上だ。

小剣を胸元に忍ばせてから、カルヴィナの後を追った。

すぐさま、いつも寄り添ってくるものの気配と足並みが揃う。

明かりが無いにも関わらず、足元が明るい。

いつもは控えめなはずの月明かりが、ここまで強いのを初めて感じた。

森の木々も力強くざわめきながら、魔女の娘を歓迎しているかのようだ。

[illegible]

やがて木立が開けた先に、湖があつた。

カルヴィナは静かに佇んでいる。

月の光を静かに受け止めている湖面は、魔女の娘の言う力とやらを蓄えているのだろう。

静かでありながら、力強く訴えてくるものがあつた。

カルヴィナが何やら古語で呟いている。

よくよく耳を澄ましてみれば、歌を口ずさんでいるようだった。

口ずさみながら、羽織ったショールを置き、衣服を脱ぎ始めていた――。

[illegible]

カルヴィナが躊躇い無く、生まれたままの姿でつま先を湖に浸した。

そのか細い後姿をただ、呆然と眺めていた。

止めようと思ったのだが、状況に抗えず、何故か身動きが出来なかった。

湖面がざわめき出す。

ただならぬ気配を感じたと同時だった。

大きく月明かりを写した鏡のような湖面がさざなみ、何者かが姿を現した。

「……？！」

思わず、声を上げそうになったが堪え飲み込む。

湖面に出で立つという怪異を容易くこなす。

それは「獣」と呼ばれる存在だった。

それが目の前にいるのだ。

神殿に属する獣の存在は知ってはいたが、お目にかかった事は無い。

彼らは気難しく、人よりも遥かに優れた知能を持っている。

それゆえ、縛りつけようとする人という存在を許してはいない。

獣の存在は神秘だ。

いわば幻の存在。

神に近いとまでされるほど。

実際、この獣は神々しいまでの美しさだった。

月光をまとった毛並は白銀に輝きを放っている。

湖底から現れたとしか思えないのに、その毛並は水気をまるで含んでいないようだ。

蹄を持ちながらも、その足元の方は鱗に覆われている。

見かけはやや小ぶりな馬ほどだ。

姿形はしなやかな鹿の足腰に、馬のような頭が乗っている。

その頭のとっぺんには一角を戴いており、それを突き出すかのよう

にカルヴィナに頭を垂れた。
カルヴィナは慣れた様にその角にそっと、両手を這わせると、そ

のまま獣の首筋に抱きつき身を寄せる。

獣の方も慣れたもので、そんなカルヴィナに首筋を擦り付けるようにすると、首を振り少女の身を湖へと導いた。

獣も一緒に半身を水に浸す。

物怖じしないカルヴィナに、呆氣に取られるしかない光景だった。

小さいと――。

ずいぶんと発育がままならないと嘲っていたはずの、胸の頂から目が離せずに見ていた。

「あんな少女を相手にするなんて犯罪だろう」

「ああ、そうだともレオナル」

「俺にだって好みはある。それ以前にあれば子供だ」

「そうだとも。君の言うとおりだ」

今となっては、相槌^{あいづち}をしきりに打っていた相手の顔が思い出せない。

声すらも。

そこは残念ながら、寄りそう獣の毛並に被さってしまう。

しかしながら、それが緩やかに持ち上げる頂とその境目が月影に妖しく浮かぶのは、何とも扇情的な眺めだった。

息を飲む。

生唾を飲み込むとはこういうことを言うのだろうか、と頭の隅でぼんやりと思った。

くすくすと笑う声さえ扇情的で己の耳を疑った程だ。

カルヴィナが、まるで違う女に見えた。

いつものようにびくびくと怯えた所も無く、心から寛いでいる。

俺ですら、畏怖を抱かずにはいられない存在を前にしているにも関わらず、だ。

そんな彼女に獣も身を委ね、一緒に水浴びを楽しんでいる。

手ですくった水を掛けてやったり、獣の首筋に抱きついて泳いだりと、実に楽しそうだ。

遠目からでも、あんなに楽しそうに笑うカルヴィナは初めて見たと思った。

胸に何かが圧おしかかる。

「……。」

パキッと、空気が鋭く爆はぜたような音を立てた。

小枝を踏みこんだらしい。

小さいが確実に音を立ててしまった。

その場から動く気など無かったのだ、全然。

誓って言う。

その場で様子を窺おうと思っていた。

そう。思っていたのだ。

だが気が付けば一歩踏み出していた。

あまりの美しさに一歩を踏み込んだなどは、認めたくはないが事実だろう。

そのささやかな音に気が付いたのは獣の耳だけで、カルヴィナはその獣の様子に初めて緊迫したようだった。

そつとその裸体を獣に寄せる。

獣は慈しむように、鼻先でカルヴィナの唇に程近い頬を突いた。

少女は安心しきったように、獣に腕を回して身をすり寄せていた。

それを見た瞬間、どうしようもないくらい熱い気持ちちが身体を駆け抜けていた。

月が雲に隠れたのだろう。

辺りは再び闇一色と成った。

そんな中でも獣の瞳だけが爛々と輝きを放ちながら、こちらを見据えていた。

まるで満月のような煌々とした光に射抜かれる。

もちろん逸らさず挑んだが、その側で淡く光を放つ白さ際立つ肌に、目が行ってしまうのは男の性^{さが}だろうか。

そちらに目を奪われている合間に、月が再び姿を現した。

湖に映りこむ月光を浴びながらの水浴びをする少女と獣――。

どこからどう見ても、この世のものとは思われぬ程の美しさだった。

やがて獣は一鳴きすると、少女の頬をぺろりと舐めた。

その肉厚の舌に頬を舐められて少女の首が大きく傾ぐ。

そのまま襲われてしまいそうな風景に、堪らず身を乗り出していたのも事実だ。

そんな俺に一瞥^{いちべつ}くれると、水しぶきと共に獣は姿を消した。

強く吹いた風も凪ぎ、圧倒的な存在感が消え、静寂が舞い戻る。

そんな中、置いていかれたかのように、カルヴィナは湖面を見つめて佇んでいた。

瞳はあの強烈な存在を追いつめて、他の何も求めていないのは明らかだ。

その事でより一層、胸に何かが加わる。

それに煽られるまま、命ずるような言葉を発していた。

「カルヴィナ！」

大声で名を呼ぶ。

カルヴィナの肩が跳ね上がり、我に返ったような目つきで、やっそこちらを見た。

「おまえはそんな格好で……冷えるだろう。こちらに来い」

カルヴィナは今やっと、自分があられない格好なのだと思い出したらしく、弱々しく首を横に振りながら身を沈める。

「来い！ 早く！」

「あ、の。すぐ、上がりますから、向こうへ行って」

下さい、と言いながら水の中に身体を沈ませてしまう。

「カルヴィナ」

気が付けば自分も湖に入っていた。

49 地主と魔女と幻の存在（後書き）

『魔女っこ、お祭りの前の晩に水浴び〜R15!』

だから何この仮タイトル。

R15! にはしては全然ぬるくてすみません。

さあ、レオナルはこのまま理性は保てるでしょうか。

やっところさ獣が出せて満足です。

50 魔女と一角の彼

私はとても浮かれていた。

駄目だと諦めていた、祭り前の森に居られるのだ。

心の底から安心した。

これで約束を違えずに済む。

そうも思った。

「彼」のことだ。

私が姿を現さなければ、何をしでかしてくれるか分からない。

誰にも相談できずに、時間だけが差し迫ってきている。

その事に気を取られてしまい、ろくに食事も取れなくなってしまった。

だからまた、地主様に叱られた。

ますます、何かを口にする気も失せて、面倒だった。

ミルアが落ち込む私に気が付かないはずも無く、それとなくどうしたのかと訊いて来た。

だから答えた。

ただ、祭り前の森の気配を感じただけだ。

それなのに、地主様はお許し下さらない。

魔女の娘にとって、どれほどそれが辛いかな。

それを訴えた所でまた一蹴いしやくされるのは目に見えるから、諦めただけだ。

この時ばかりは、ミルアの強引さには感謝している。

——いつの間にか私の事を、巫女役に祀り上げていたことを許せるくらいに。

それはそれで頭が痛い……。

ともかく私は浮かれていた。

これほど浮き足立ったのは、あの抜け出して港町で船を見かけた
時以来だ。

夜の深い闇も私を温かく包んでくれるから、怖くは無かった。

むしろ、とても心地が良い。

私の髪も瞳も闇と同じだ。

このまま溶けて、一緒になってしまえたらどんなにいいだろう。

.		.
	o	
.		.
.		.
*		.
.		*
.		.
.	o	.
.		o
		.
		.
		*
		.
		.
		o
		.
		.
		*
		.
		.
		o
		.
		.
		*
		.
		.
		o
		.
		.
		*
		.

目的の湖に着いた。

湖面は静かに月光を受け止め、巨大な鏡のようだった。

月も喜ばしげに鏡を覗き込んでいる。

もうそれはそれは息を飲む美しさだった。

『森の深くの　そのまた深く　森に住まう獣がおりました』

小さく言い伝えの歌を口ずさむ。

古語で。

そういえば久しぶりに歌った気がする。

森に居る時はこうしてよく歌ったのに。

地主様に仕えるようになってから、それも忘れていた。

歌いながらゆっくりと地面に腰下ろし、衣服を脱ぐ。

肌を掠める風すらも、夜の濃密な気配がする。

深い闇色を引き連れて、私を包んでくれる。

裸になる事に躊躇いはない。

だって、ここに近づける人は居ないもの。

私だけ。

衣服を脱ぎ去り、つま先を浸す。

小波が伝わって行く。

それを合図に「彼」が現れた。

頭に一角を戴き、蹄を持つ彼。

相変らず、気高く凜としている。

『久しいな。大魔女の娘』

『お久しぶりですね。――――さま』

彼の名の部分だけは声には出さず、唇で形作るに留めた。

『おまえはまだ、我に真名を教える気にはならんだか？』

そう尋ねる彼に曖昧に微笑みながら、手を差し出す。

彼もそれ以上は追及してはこず、私を湖へと導いてくれた。

[illegible]

水の中は好きだ。

だって、足の不自由さをあまり感じずに済むから。

一緒に水の中の浮き加減を楽しむ。

時折りじゃれつくようにしながら、耳元で『おまえの真名を当てたら我のものだぞ?』と次々に名前を挙げられる。

『春の花』レイザン
『月の娘』シャルメイ

彼の挙げてくれる名はいつだって美しい。

そう。

私はうっかりと彼の名を当ててしまったのだ。

ならば、おまえも名乗れと言われたのだが断った。

彼は憤り、そのまま森の中を追い掛け回された。

彼にしてみたらふざけたらしかったのだが、それ以上に死に掛けた私に驚いたらしい。

それなりに反省した彼は、それ以来無茶に追い掛け回すような真似はしなくなった。

ただし条件をつけられている。

『名を当てた者の罰として、月の一番力の強い晩は我に付き合え』

それから、と一角の彼は付け足した。

『私の花嫁となるならば足を治してやってもよい』

それも断ったら、唸るように吐き捨てられた。

『ならば不具の身体に留まれ、森の娘』

・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。
・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。
・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。
・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。

彼の呟く古語に酔いしれながら、昔の事を思い出しているとふいに名を呼ばれた。

カルヴィナ
『夜露』

体が跳ねた。

『当たり前か!?!』

嬉しそうに目を細め、鼻先で頬に擦り寄る彼に、首を横に振った。

それは地主様が付けた名だ。

そう呼ばれるうちに、私は縛られるようになったらしい。

カルヴィナ――。

夜露、と。

そう私を呼ぶ声を思い起こす。

その時だった。

側の彼の体が強張った。

一瞬、満月に雲が掛かったのだろう。
辺りが暗くなった。

獣の彼は森の中、闇の中を鋭く見つめている。

何が見えているのだろう。

恐ろしくなって、その背に身を寄せた。

それから彼は鋭くい嘶くと、身を沈めてしまった。

『おのれ。裏切ったのか、森の娘！』

何の事かと尋ねる暇も、違ふと弁解する余地も無かつた。

.		.
o		.
.		o
.	.	.
*		.
.	.	.
.		*
.	o	.
.		o
	.	
	.	.
	*	.
	.	.
	.	o
	.	
	.	.
	*	.
	.	o
	.	
	.	.
	*	.
	.	o
	.	
	.	.
	*	.
	.	.

行ってしまった。

もう少し一緒に遊びたかったのに。

そんな哀しみがじわじわと胸を占拠し始める。

彼の消えた湖面を眺めていると、大声で名を呼ばれて我に返った。

「カルヴィナ！」

夢かと思った。

何故、彼がここに？

驚いて固まっていると、地主様は水の中に入ってきてしまった。

それにも驚き、慌てた。

「あの冷たいですから、早く上がって下さい」

「嫌だ」

「え？」

「オマエも早く上がれ。冷やして身体を壊したらどうする！」

あ、そうか。

この方は本気で心配してくださっているんだな。

子供のような私に、同情を寄せてもそれ以外の事は起こらないだろう。

そこでやっと、自分が何も身に着けていない事を思い出しておおいに慌てた。

「上がります、上がりますから。向こうへ行って……！」

それでも地主様は許しちゃくれなかった。

どんどん近付いて来て、がっちり腕を捕らえられてしまう。

こんなにも熱く何かを訴えるかのような、眼差しに晒された事なんてなかった。

どうにか片腕だけで、身体を隠そうと身を振る。

それも掴まれた右腕を引かれるようにされるから、上手く行かない。

嫌だ。

恥ずかしい。

見ないで欲しい。

かつてこの人に言われた言葉が脳裏を掠める。

みっともない――。

みつとも……。

見たくも無いはずでは？

常々、娘らしくなれとため息を誘うこの体の貧弱さを、この人に見られたくない！

「いや、いや！ 放して！ 嫌あ！」

「カルヴィナ。冷えるから、早く」

どこか泣き出しそうな声に驚いて、思わず顔を上げてしまった。

満月を背に受け、淡い陰りがより一層、彼の表情を頼りなくしていた。

それでいて熱帯びた視線は、まっすぐに私を貫いている。

満月――。

そこでやっと自分の思いがけない失態に気が付く。

おばあちゃんが笑いながら教えてくれた魔法。

眠る女性せいを最大限に引き出して、男性の目を眩ませてしまうというお呪い。まじな

呪いというには、あまりにも踏み込んだ方法だと思ったものだった。

生まれたままの姿で、満月の光を一身に浴びるというそれ。

教わった時は「私には関係ないな」と、ぼんやり思ったのを覚えて
いる。

大体、どうやって男性を誘い出し、目の前で裸になれというのだ。
しかも誘い出すにしても「さも気が付いていない風を装って」と
来た。

女の性というのはつくづく推し量れないなど、感心したのは確か
だけれど。

何がどう働いてこうなったのか――。

静かに力を放つ満月に尋ねたい気がした。

50 魔女と一角の彼（後書き）

『おいおい、ここにも。』

えらっそうなお方の登場です。

なまえは――――。

『人の子ごときが我の名を呼べると思うな。

ましてや我に触れようと思うなど！

それなりの覚悟はあるのだろうか？』

だ、そうです。

魔女っこ……。

マズイのに目を付けられています。

51 生まれたままの姿の魔女と地主

気が付けば、地主様の腕の中だった。

慣れたはずの状況。

心が騒ぐ。

ちっとも慣れたり何て出来やしない。

「おまえが……悪い。あれほど鍵を閉めて休めと忠告したのに」
「し、閉めました」

そう。

確かに閉めて横になった。
いったんは。

深いため息と共に、小さく舌打ちされて、身体も心も震えた。

「掛けていないも同然だ。こうやって抜け出すのならば」

「もう、申しわけありません、でした」

一方的に責められながらも、どうにかこうにか謝った。

怖い。

布一枚の隔たりがどんなに大事か。
今、思い知った。

地主様はいつも服の上から、私を抱きかかえた。
当たり前だ。

同じように抱きかかえられるにしても、生まれたままの姿の今は、
恐ろしく何かが違うと思った。

同じように背中、わき腹に通される腕の力強さは恐怖でしかない。
肌に触れる手のひらから伝わる熱に、地主様の手はこんなに熱か
ったのかと思った。

ただ、大きく力強いだけではなく。

居心地悪く身体を捻りながら、どうにか腕で彼との距離を取ろう
とした。

例えそれが僅かであろうとも、重要だ。

何せ隙間無く抱きしめられているせいで、私の貧弱さを彼に押し
当ててしまっている。

片方で地主様の胸元を押し返し、もう片方で胸元を隠す。

地主様はびくともしない。

それ所かより一層、抱き込まれてしまった。

「地主さま？」

声が震えた。

恐るおそる見上げたが、地主様の表情を伺う事は出来ない。
地主様のお顔が、ぴったりと私の頭に張り付いているからだ。

確かにこうしているお陰で、私の貧弱さを地主様の目に晒す事は無い。

無いのだが、もっと悪い気がした。

弾力に乏しい私の身体の線が、丸分りではないか！

地主様のお考えがわからない。

私の抵抗など、始めから存在しないかのようだ。

わずかに取れた距離もまた、背に押し当てられた手のひらに引き戻されてしまう。

「……。」

「地主様。あの、上がりましょう？　地主様が冷えてしまいます」

「……。」

「じぬしさま？」

「……だ」

「え？」

「嫌だ」

「っ!？」

予想もしない答えに、言葉に詰まるしかなかった。

苦しい――。

胸が痛む。

張り裂けそうだ。

どくどくと脈打つ胸の鼓動が自分のものなのか、地主様のものなのか。

判別つけ難い。

涙を覚^{さと}られたのだろうか。

また強く抱き寄せられてしまった。

痛みが重なる。

と、いう事は痛みを訴える場所は、同じだという事だ。

ああ、また、だ。

ぼんやりとそう思う。

地主様も痛みを覚えているのは、どうした事なのだろうか？

『どこか、い……痛むのですか？』

たまらなくなつて尋ねる。

口から滑り出た言葉は、古の響きを放っていた事にも気付かないでいた。

『いいや。何故そう問うのだ？ カルヴィナ』

対する地主様も古語で返して来た。

そこでやっと、自分が古語で問い掛けていたと気付かされた。

『地主様が痛みを訴えていらっしゃるからです』

『痛みなど、感じていない』

嘘だ。

これほど密着していれば、流れてくる感情をせき止めるのは難しい。

痛い。

呼吸をするのだって苦しいくらいに、胸が狭まる気がしてならない。

『あれは何だったのだ、カルヴィナ？』

『……』

『おまえに真名を迫っていたな？』

『……』

『カルヴィナ。答えろ』

首を横に振る。

「地主様。一角の君は人という存在を嫌っております。容易く口にしてもいけません。彼の耳に届いたら何をされるか。ですから、早く、上がりましょう？」

思わず、古語に切り替えてしまっていたのも直す。

「あれは何だ？」

「昔、私の過^{あやま}ちで、彼の一角の君を怒^からせてしまったのです。それ

「約束とは何だ？」

「地主様にお伝えする訳にはまいりません。彼の君との契約ですから。どうぞ、お許し下さい。彼を怒らせてはなりません」

静寂に波うつ水音に、心許してはならないのだ。

[illegible]

満月を背に受けた地主様の表情は、今までに見たことも無いものだった。

思わず息を詰めて見上げる。

無表情でありながら、こんなにも訴え掛けてこられるような眼差しは、何を言わんとしているのだろうか？

わからない。

わかるわけが無い。

私はただただ、たじろぐしかない。

痛い。

苦しい。

この胸に湧き上がる、疼きに説明なんてつかない。

満月の力を借りて、力を引き出すのは男性も一緒だったろうか？

元より自信と能力に溢れたお方だ。

何もかもを味方につけて、いつ何時でも光を放つに違いない。

鋭い中にも、柔らかさを見出せるようになったと思っていた。

そんなのはただの自惚れでしかない、言い聞かせるに限る。

地主様は、誰に対しても平等にお優しい。

時に厳しく感じられる事があっても、それは等しく同じように厳しいのだ。

だからだろう。

いくらか知り合った足の不自由な娘にも、同じように氣を used したのだ。

地主様の気の良い所だと思つと同時に、容易く他人を信用するなんて、育ちが良い証拠だとも思う。

しっかりと真正面から見詰められて、そうやって思考を飛ばした。

それなのに、導き出された答えがそれかと泣きたくなった。

[illegible]

ひとつ、ゆつくりと瞬く。

一体どれほどそうやって、見詰め合っていたのだろうか。
ほんの短い間だった気もするし、果てしなく長い間だった気もす

る。

もう、ひとつ瞬くと、まなじり眦をあたたかな雫が伝い落ちた。

それを払うように、地主さまの親指が頬を滑る。

『カル・ヴィナ』

夜の雫と彼が眩きをもらしたかと思えば、耳元にやわらかさを与えられていた。

発音が違えば意味も異なる。

『カルヴィナ。俺の名づけた名を、真の名に』

言われた言葉の意味がわからない。

ただ何かしらの衝撃をこの胸に与えた。

その意味を問い掛けるように見上げれば、地主様の唇が近付いて見えた――。

51 生まれたままの姿の魔女と地主（後書き）

『どうしようもないタイトルですな、オイ。』

魔女っこ目線だと、混乱の極みでプチ・フリーズのため

色気も恋心らしきトキメキも薄いですねえ。

現状説明がせいぜいとキたもんだ。

地主目線だと どこを見ていやがるんでしょうか。

と、問い掛けたい出来栄えに 作者 ぐったり★

です。

52 地主と魔女と一角持ち

引こうとする身を許さずに、腕の中に捕らえたままにする。

それでいて、捕らえられているのはこちらの方だと言ってやりたかった。

カルヴィナの痛々しいまでに途惑う様子が、腹立たしい。

あの、危険極まりないと誉れの高い獣には身を寄せておきながら、俺には何一つ許そうとしない。

それどころかまるで、俺が無理を働いているとでも責められている気がしてならない。

捕らえて離そうとしないのは、この娘の方だ！

先程からカルヴィナだけを責め続ける己がいる。

腕の中に居るのは、忌々しくも夜露で俺を惑わす魔女の娘。

手に伝わるのは、どこまでも滑らかな手触りだ。

水に冷えた手のひらに、熱が伝わってくる。

そのまま、細腰まで滑らせて引き寄せ、密着させる。

水気を含んだ毛先を頬で払うようにし、首筋に顔を埋めた。

「おまえが悪い……。」

吐息と共にささやけば、その身を震わせながら、頭を下げて素直に詫びてくる。

「も、もうしわけ、ありません」

その声までが震えていた。

ならば。

その抗い難く魅せつけるのを止めてくれと、声には出さずに唸る。

俯き、俺の肩に預けていた顔を上げさせた。

恐れをありありと浮かべた瞳が気に入らなくて、その上目蓋に唇を押し当てる。

そのまま頬に滑らせ、カルヴィナの上唇に触れる。

被害者ぶって涙ぐむ、そんな泣き声でまで糾弾されたくない。

やわらかさに心が震えた。

まろやかな弾力が心地良く、ただその感触に恐れに似た想いも湧き上がる。

歓びからだと思ひ当たったら、何かが落ち着いた。

腑に落ちたとはこの事だろうか。

甘さを伴なって走る疼き。

そのまま食^はんでから、重ねようと首を傾けた。

『や……っ』

小さく上がった悲鳴なぞも全て、封じ込めるに限る。

明確な意思を持って、カルヴィナの細顎を掴みあげて押さえつけた。

もう逃げられないと悟ったのだろう。

カルヴィナは固く目を閉じて、されるがままに耐えている。

『っ、え、っく』

いよいよ本格的にしゃくり上げ始めた上に、顎を掴まれているせいだろう。

居場所に困ったらしい、小さな舌がうごめく。

ひどく胸が痛むのと同時に、満足してあざ笑う獣の存在を、自身の中に感じる。

——その時、足元が大きくぶれた。

「!？」

身構える暇も無かった。

そのまま、湖底から足を引き摺られてしまう。

すぐさまカルヴィナから手を離れた。

巻き込まないために。

夜闇をそのまま溶かしこんだかのような水中で、先程の満月にも似た輝きがこちらを見据えている。

獣だ。

もがきながらも、胸に忍ばせた剣を採る。

——それも、己の吐く息が泡となつてかき消した。

.		.
.	○	.
.		○
..		.
*		..
..	*	.
.		..
.	○	.
.		○
		.
	..	*
	..	.
		○
	.	
	..	*
	..	.
		○
	.	
	..	*
	..	.
		○
	.	
	..	*
	..	.
		○
	.	
	..	*
	..	.
		○

何やら女のすすり泣きに混じって、怒りの声が聞こえる。

——カルヴィナ？

『もう！ 知りません。これからは貴方様と会ったりなんてしません！ 絶交です』

それに対する声は、
おいおいに焦っていた。

『ど、どうかそのような事を言わないでくれ。そなたには、我が花嫁になつてもらおうと思つてゐるのだから』

『お断りいたします。これから先、二度とお会い致しません』

『そやつが悪いのではないか。そやつが。だから、懲らしめてやつたまで』

『だからといって、水中に引きずり込むなんて！地主様が死……』

やり過ぎです！

と、泣きながら糾弾しているのは、カルヴィナで間違いないようだ。

ぼんやりとした意識が浮上しだす。

『だから、こうしてちゃんと陸に上げてやったろう？ 我のちからで、そなたら二人の身を乾かしてやったではないか』

確かに、衣服に何の湿り気を感じなかった。

そっと薄目を明けてみやれば、先程の一角持ちの獣がいた。落ち着き無く、蹄の前脚を交互に踏み鳴らしている。

カルヴィナは泣き止まない。

獣の足踏みも止まらない。

どうやら、俺を湖底に引きずり込んだ事で、カルヴィナの怒りを買ったらしい。

『どうか怒りを鎮めておくれ。我が花嫁』
シャル・メイユ

『その名前で呼ばないで。貴方の真名をまた呼びますよ？』

『うぬ……。』

カルヴィナは追い詰められると、普段の大人しさはどこへやら。

こちらが思いがけない勢いで抗ってくる。

獣は俺よりも長い付き合いの割りに、知らなかったようだ。

完全にのまれて、狼狽している。

いい気味だと思う。

・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。
・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。
・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。
・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。　・。

心地良い柔らかさに包まれているのは、カルヴィナの胸元に抱きかかえられているから。

ただし俺が気を失っている間に、しっかりと衣服を着込んだらしい。

それを残念に思っている自分がいる。

『ところで。その寝たふりをしている地主とやら。いい加減にせぬか!!』

カルヴィナは驚いて手を離し、立ち上がろうとしたらしい。

狸寝入りは認めよう。

だが、そう簡単に体を動かせるほど回復してはいない。

我ながら重そうな音がした。

カルヴィナの膝から落とされたのだ。

しかも結構な勢いをつけて。

『ふん。頑丈な奴め。どうだ、頭は冷えただろう！
我が花嫁に無
体を働くと、それに相応しい罰が待つと心得よ』

カルヴィナからは、無言で拳をお見舞いされた。

52 地主と魔女と一角持ち（後書き）

『湖底引きずり回しの刑。』

はい。

そこまで。

『ほんの一回りさせてやったくらいだ！』

いぼる一角の君に、魔女っこキれました。

あゝあ。

残念だったね、レオナル。

だから早く上がれば良かったのに。

53 祭り当日の魔女の娘と地主

少し、体が重く感じるのは寝不足のせいだと思う。

それ以外に原因なんて思いつかない。

……眠れないからと、無理やり呟った果実酒くらいしか。

[illegible]

村長さんの家の一室を、控え室にするようにと言われてあった。

約束通りに朝早く、ミルアが迎えに来てくれた。

地主様も一緒に付いて来た。

何ともいえない重苦しい雰囲気を引き摺ったまま、サワヤカな朝の陽射しを浴びながら、移動した。

地主様は客間へと案内され、私は別部屋へと案内される。

二人きりになると、ミルアが恐るおそる尋ねてきた。

「ど、どうかしたの昨夜？」

どうもこうも。

そう思い当たったら、また無性に怒りがこみ上げてきた。

「どうもしないわ」

ミルアは期待一杯の瞳を潤ませながら、流し目を寄こす。とてもじゃないが信じられないと、その目は言っていた。

我ながらそう思う。

鏡の中の自分の姿を見れば、嫌でもそう思う。

目蓋がはれぼったくむくんでいる。
最低。

泣いたのが一目で丸解りだ。

それだけではない。

唇までもが異常に赤く、腫れていた。

何て事か、と思う。

「嘘よ」

「そうね。嘘だわ」

「えっ!？ 何、教えてよ。地主様と何があったの」

「教えられないわ」

わざとらしく顎をそびやかして、そっぽを向いてみた。

そう。

私は今、とてもとても機嫌が悪い。

[illegible]

流石の地主様も湖底に引きずり込まれれば、危ういに決まってい

氣を失つたずぶ濡れの地主様を抱きかかえて、一角の君を責めた。

『そんなに怒らなくても良いではないか』

と、何やらもごもごといい募る一角の君は、慌てたように角を二振りした。

その途端、暖かな風が吹き、包まれたように感じた。

『その者もじきに目を覚ます。服も髪も乾かしてやった』

だから何だというのだろう？

どうあつても詫びようとしない一角の君を睨み、未だ目を覚まさないう地主様を庇うように抱えていた。

『だから、なんだと言うのです？』

『うぬ……。そう、へそを曲げてくれるな』

『貴方様が格上でいらっしゃいます。ですから、私の機嫌を窺う必要などございませんでしょう？』

常々、上から目線である彼にありのままを告げる。

一角の君は立ち去る事も無く、ただ、その場で足踏みを繰り返していた。

『そのような事を言わないでくれ』

『もう知りません。今後一切、貴方様とはお付き合い致しません』

そして私との、不毛なやり取りを繰り返した。

だから、さっさと立ち去ってくれば良かったのに！

『そのような事を言わないでくれ。そなたには、我が花嫁になつてもらおうと思っているのだから』

『お断りします。もう二度と会いません。絶交です』

そんなやり取りに疲れた頃に、一角の君が角を振り上げて、後ろ足だけで立ち上がった。

『ところで。その寝たふりをしている地主とやら。いい加減にせぬか！』

一瞬、何の事か判断付かなかった。

寝たふりをしていた？

いつから？

かっとなど頭に血が上った。

思わず、強く抱え込んでいた地主様の頭を、勢い良く振り落とす
ていた。

地主様はゆっくりと、身を起こした。

その様子を見て安心したのと同時に、気がつけば拳を振り上げて
いた。

もう、知りません！

ぽかぽかと地主さまをぶってしまった。

それくらいではびくともしない地主様が恨めしかった。
結局それごと広い胸に受け止められてしまった。

なお悔しいったらない。

わたしばかりを責めて。

初めての――。

おまえが悪いと地主様は、そう言って私を責めた。
そう責めながら口付けてきた。

身動きできないように押さえつけて、吐息ごと私の自由を奪った。

奪われたのは身の自由だけではない気がしたが、他に何なのかは解らなかった。

だからと言って、一角の君に感謝する事など出来なかった。

訳がわからなくなって、悔しくて泣けた。

「すまなかった、カルヴィナ」

申しわけ無さそうに呟かれた言葉に、大きく頭^{かぶり}を振り続けた。

私が泣くくらいで困るのならば、おおいに困らせてやれと思ったくらいだ。

のろのろと立ち上がろうとした時に、手を伸ばされた。

どういう訳かひどく驚いてしまった私は、その手を叩きつけてしまった。

『嫌っ!』

思い切り拒絶の声を上げて、身を引いた。

その拍子に後ろによろめいたが、構うものかと思った。

むしろ、今後一切構わないで欲しいとも思った。

いつの間にか後ろに回りこんでいた、一角の君に身体を支えられた。

『我につかまれ。森の娘』

⌈
⋮
い
⌋

嫌という言葉は飲み込んだ。

素直に従う。

その白い首筋に腕を回して縋りつく。

地主様に背を向けて。

自分の足で魔女の家に戻るには、それしか方法が無かったからだ。そうしなければ地主様にまた、抱え上げられてしまうに違いなかったから。

『私の背に跨っても良いのだぞ？』

どこか安堵を含ませた物言い、一角の君はそう勧めてくれたが、首を横に振った。

振り続けた。

	•
○	
	•
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •

それから無言で戻った。

一角の君の蹄の音だけが、闇の中に響いていた。

せつかく蓄えた森の力も、楽しい気分も台無しにされてしまった気がした。

地主様に対して失礼だと思ったが、苛立ちは収まらなかった。

『ありがとうございます。――さま』

一角の君の耳元にお礼を囁いてから、別れた。

わざとらしく真名も呼んでしまった。

気高い一角の君は、真名を呼ばれることを良しとしない。

縛られるからだ。

その名を口にする者の意思に、場合によっては良いようにされてしまう事もあるのだ。

私自身それは何と傲慢な行いかと、普段は諫めていた行動だった。

だが、その時は違った。

とても凶暴な想いに駆られていた。

そうして主導権を主張してやらねば、好き勝手されと思ったのだ。

今まで大人しくしていたから、付け上がらせたのだ、きっと。

そのように導き出された答えに、自分自身が一番驚いていた。

おろおろする一角の君と地主様に、何だか余計に腹が立って仕方が無かった。

いつも、大いに威張っているのに、おかしい。

私の顔色を窺うなんて、本当におかしい。

そればかりに気を取られてしまう私が、一番おかしい。

二人に背を向けて、さっさと部屋に籠った。

速やかに部屋の鍵を閉めて横になってはみたものの、興奮して
て寝付ける自信など無かった。

明日は大事なお勤めもある事だし、ここはもう無理やりにでも眠
ってしまおうと考えて、果実酒に手を伸ばしたのだ。

地主様には禁じられていたが、構うもんか。

寝しなになってようやく、この訳のわからない気持ちに説明がつ
き始めていた。

何となく、裏切られた気分。

地主様は、「私に、こんな事を絶対にしない。」そう、固く信じ
ていたのだ。

信じる。

信頼するというよりも、疑いもしないでいたというのが正しいの
かもしれない。

だって、そうでしょう？

私のような者が側に居るだけで、勘違いされて迷惑だと仰ってい
たではないか。

きっぱりと、誰がなびくかとお怒りだった。

私のどこが気に入らないかを、スレン様に力強く説いておられた。
この耳でしかと聞いたから、間違いない。

地主様は先々、お嫁さまをお迎えになられるだろうに。

その時まで、私の借金がなくなっているとは到底思えない。

と、言う事は、だ。

私は変わらず、地主様にお仕えしなければならないという事だ。

そうなるのならば。

それは、とても気持ちの悪い事だと思った。

[illegible]

怖かつた。

地主様が。

地主様が、死んでしまわれたかと思つた。心配した。

それから、腹が立った。

寝たふりをしていたと知ったから。

それから。

それから。

後から後から一気に、湧き上がって来る感情に押されるように、涙が零れた。

泣きながら目覚めて、鎮まらない怒りの正体に、また泣けてくる。それでも必死にこらえて、ここまで来たのだ。

今日はお祭りで、私は巫女の役なのだから、頭を切り替えなければならぬ。

そう言い聞かせながら。

「エイメ。あのさ、とにかく、その。着替えようか？」

ミルアが気を使いながら、慎重に私の髪に触れた。

53 祭り当日の魔女の娘と地主（後書き）

『魔女っこ 混乱。』

こんなに怒った事ないので、魔女っこ消耗しています。

妙に興奮したまま、お祭り当日。

大丈夫でしょうか。

54 魔女と赤いお祭り衣装の女の子

仕度を終えて、一人控えていた。

部屋にはたくさんの暖かな陽が、差し込んでいる。椅子に腰掛けながら、ぼんやりと日の光を眺めていた。

あたたかさに、ささくれ立った心も落ち着きをいくらか取り戻している。

光に遊ぶこまかな塵を、ただ目で追っていた。

窓の外に広がる木々の葉が、赤く黄色く色づいている様も眺めた。陽射しを浴びて、艶やかに輝く赤茶色。

その色合いに何故だか、もう二度と構わないで欲しいと願う人の面影が浮かんで、苦しくなった。

窓の向こうから視線を引き剥がし、頭を振った。

しつかりしなくてはいけない。

これから、私は、大事な役目を果たさねばならないのだから。

今日は森の神様のことを考えて、感謝を捧げる日。

そつと両手を組んで祈りの形にし、唱えるべき感謝の言葉をそらんじてみる。

[illegible]

大丈夫だ。

少し前まで、むつかしいと感じていた部分も、忘れていない。

ふと目の前の鏡の中の自分と目が合った。

真っ白の衣装に、お揃いのベール。

ふちは金と銀とで飾られた、上品でありながらも、きらびやかな衣装だった。

私の色とはあまりにも対極にある色彩をまとして、嫌でも黒い髪と瞳が目立つ。

カラス、娘――。

急に何もかもがやるせなくなつて、俯く。

ふいに冷たい風が頬を撫でた。

振り返ると、小さく扉が開いていた。

隙間から、好奇心で溢れた瞳が覗いていた。

にこにこしながら、小さな手を差し込む。
そのまま、私を見詰めたまま、幼い女の子は身を滑り込ませてきた。

金の髪にも光が降り注いでいる。
眩しいほどだった。

お祭りの装束なのだろう。

深くも鮮やかな赤いスカートに、木の実が刺繍された上着にお揃いの額当てをしている。

大変に可愛い。

「どうしたの？ ええと、どこの家の子だったかな？」

記憶をさらって見たが、やはり思い出せなかった。

女の子はにこにこしている。

深い緑の眼差しは、雨に濡れた森の木々のようだ。

どこか懐かしさを湛えた色に、つられて微笑み返す。

女の子も、より一層笑みを深めた。

ふっくらとした頬に浮かぶくぼが可愛い。

何の警戒心も持っていないのは明らかで、やはり、村の手伝いの時に一緒だったのかもしれないと思い直した。

「なあに？　どうかした？」

女の子は私の両手をすくい上げて、ぎゅっと握った。

「え？」

屈むようにと手招きで促がされ、少し背を丸める。

『今日は祝福があるからね。何にも心配いらないよ、――――』

「!？」

耳元で囁きこまれた言葉は、古語だった。

しかも完璧な発音。

それより何より驚いたのは、この子が私の真名を呼んだからだ。

言葉が出てこなかった。

ただ、涙が溢れた。

懐かしくて温かい、安堵のために零れ落ちた証の涙。

それを見届けると、女の子は手を放し、すり抜けるように戸口へと向った。

『待つて！　どうして』

くすくす笑いながら、その子は扉の向こうに駆けて行ってしまふ。

捕まえなくちゃ！

待って、行かないで！

あなたは……？

あなたは誰？

目線だけで縋りつくように、追いかけると、女の子は唇に人差し指を当てて見せた。

大慌てで杖を引き寄せ、扉を開け放つ。

確かにぱたぱたという軽やかな足音がしたはずなのだが、見渡す限り女の子の姿はどこにも見えなかった。

ただ陽射しだけが、暖かく溢れていた。

54 魔女と赤いお祭り衣装の女の子（後書き）

『日の射しこむ部屋で。』

何となく、陽射しやら木漏れ日やらのシーンをよく書いてしまう気がします。

（作者比。）

だから、何だっていうのか。

さて。

この子は……。

盆踊りとかって、亡くなったご先祖様も混じっているっていうよね！

ぶるぶる。何の話だ。

お祭りも、人外の者が混じって参加してますよー魔女っこ。

55 地主とカミサマの面

準備をするというカルヴィナを見送った後、客間へと案内された。

扉を開けたとたん、目に入った奴の存在に迷わず眉根を寄せる。

「何で、おまえがいるんだ。スレン？」

「つれないなー、レオナル」

「申しわけありません」

「リヒヤエル」

リヒヤエルがすかさず詫びてきた。

だが、言葉ほど悪びれた様子は感じられない。
しかし、そこはかたなく諦めは感じられた。

「叔父様、お祭りですもの」

祭りにと用意してもらったのだろう。

赤い衣装に揃いの額あてをし、同じくらい頬を赤く染めた姪が取り成す。

「リディアンナ」

「叔父様もお祭りに参加されるのでしょうか？ 皆も今年は地主様がいらっしゃるからって、うんと張り切ってるって。さっき、ミルル

「アから聞いたわ!」

楽しみね、とはしゃぐ姪に手を取られ、振り回された。

いつも大人びた落ち着きを持った姪の、年相応の反応は微笑ましい。

「そうそう。この高貴な身分のボクだって、下々の者の事に興味が無い訳ではない。それに、いい機会じゃないか? ボクのような存在に心乱されるコが出てくるのも」

「おまえはもう帰れ。いますぐ!」

「嫌だなあ、レオナル。だってさ、フルルが巫女役なんでしょ?」

「……。」

「だったら、その晴れ姿を見ないで帰るなんて、男が廃^{すた}るからゴメンだね」

こちらの様子を窺うように言う、奴の道理に拳を握り締めた。気取った物言いと、斜め上から見下すかのような態度に、いつも以上に腹が立つ。

それは奴も同じなのだろう。

いつにも増してスレンの態度は挑発的だった。

「スレン。騒ぎは起こすなよ」

「騒ぎ? 騒ぎって何さ」

「カルヴィナに構うな。それにその呼び方もやめろ」

「嫌だね」

「表に出るか？」

「何なわけ？ さっきから。ボクにとってあのコは、フルル。それにフルルは、レオナルの物じゃないでしょ。指図されるいわれは無いね」

「その呼び方はやめろと言っている！」

震えながら歩くから。

何故そう呼ぶのか尋ねた時の、奴の答え。

かっど頭に血が上る。

その勢いのまま、スレンの胸倉に掴みかかった。
締め上げる。

「叔父様。スレン様。いい加減になさって！ 今日はお祭りなのよ？」

「……。」

「だよ、レオナル？」

リデイの制止の声に我に返る事が出来た。

それはスレンも同じだったらしく、争う気は無いのだと両手を上げた。

睨みつけると、顎をしゃくられた。

突放すように、奴を解放する。

「まったく。短気な叔父様で困るよね、リディ？」

「スレン様も一緒ですわ」

リディアンナが、呆れたようにスレンに返した。

• ○
• •
• •
✱
• •
• ○
• •
• •
✱
• •
• ○
• •
• •
✱
• •
• ○
• •
• •
✱
• •
• ○
• •
• •

「あの面を被るんだってさ」

そう言いながら、壁を指差す。

そこには獣を模した仮面があつた。

「やぐらに上がっているのは、カミサマと巫女役だけって決まりな
んでしょ。いいのお、レオナル？」

今日の巫女役はカルヴィナだ。

そしてカミサマとやらの役、は？

スレンが、唇の両端を吊り上げながら、揶揄するのを聞き流すよう務めた。

あくまで挑発的な物言いをする奴に苛立つ。

それは、あまり寝ていないせいもあるだろう。

そう已で結論付ける。

「詳しいな」

「誰かさんと違って、早起きしたからね。ねえ、リディ？ 村長さんのお話はためになったよねえ」

我々よりも少し高みから、見下ろしているようにも見えるそれ。

深い闇色でありながら、静かに光沢を放っている。

瞳の部分はくり貫かれ空洞になっているが、それがまた妙な存在感を与えている。

面は狼の様にも見えなくもない。

やや長めの鼻ヅラに三角に尖った耳。

額から頬にかけて、毛並を紋様化したのであろう渦巻が彫られてある。

仮面は口元までは覆わずに、上あごまでの造りだった。

牙を模した細工が大小、付けられている。

「レオナルに似合いそうな禍禍しさだね」

等と、忌々しい事をほざきながら、スレンは仮面に手を伸ばした。

「この輝かしいボクには、到底似合いそうも無い」

スレンが呟くのと同時だった。

視界が闇色で占められた――。

。。*。。*。。*。。*。。*。。*。。

エイメなら、カルヴィナなら、この事態に説明が付くかもしれない。

そう結論付けて、大魔女の娘に一縷^{いちる}の望みに賭ける。

そうして、巫女役の控えの間に押しかけたのだ。

「エイメ、いいかな？」

石屋の娘が扉を叩くと、中からすぐに返事があった。

（何だ？）

カルヴィナの声に反応して、何とも言いがたい感覚に襲われる。

仮面が熱を帯びたような、ざわついたような。

仮面は意思を持っており、明らかにカルヴィナの姿に反応している。

そこには、美しく着飾った乙女がいた。

白い衣装に金の刺繍が、娘の髪色に映える。

細かく編み上げられた細工物のような衣から、負けなくらいに白い手足が覗いている。

白と言っても、あたたかみの感じられる風合いのように見えるのは、陽光のせいかな。

うっすらと化粧をしているのであろう頬は、いつも以上に滑らかに、やわらかそうに見えた。

そこに一点、鮮やかな紅を刷いた唇が、物言いたげに薄く開かれていた。

瞳は驚きのためなのか、大きく見開かれ潤んでいた。

今にも夜露が零れ落ちそうなの――。

急激な渴きを覚える。

思わず仮面に手を寄せた。

そのまま、皆と同じようにカルヴィナへと歩み寄る。

「魔女っこ、きれい！！ お嫁さんみたいだっ！！」

「きれい――！ 魔女っこ、お嫁さん！？」

「魔女っこ、お姫さまみたい！！」

カールが一番に駆け寄った。

続いたのは双子たちだ。

口々に感嘆の声を素直に上げながら、突進して行く。

「おや。化けたねえ」

「もう！ スレン様ったら素直でないのね。カルヴィナ、本当に素敵」

スレンがからかうと、リディがたしなめる。

そんな二人も巫女装束をまとったカルヴィナに、賞賛の眼差しを送っていた。

村長とそのせがれが、遠慮がちに進む。

息を飲み、一瞬カルヴィナに見惚れたせいだ。

そんな気配にも敏く^{さと}気取る。

仮面がそれを認識した途端に、冷たく感じられた。

それはとても不快だった。

その冷たさがではなくて、カルヴィナに向けられた熱帯びた視線が。

口元を歪めてしまっていたのだろう。

俺の感情の動きに敏いカルヴィナが、怯えた眼差しを寄こした。子供たちに抱き縋ったまま、言葉無くこちらを見上げている。

その事にひどく満足を覚える。

そうだ。

『我だけを見ていればいい』

一瞬……。

自分が、自分ではない感覚に吞まれたような気がした。

『我だけを』

だが、その感覚におおいに同意してしまった。

カルヴィナに歩み寄る。

• ○
• •
✱
• •
• ○
• •
✱
• •
• ○
• •
✱
• •
• ○
• •
✱
• •
• ○
•

「と、言う訳だよ。フルル？」

スレンが全く反省のみられない口調で説明する。

「何がと、言う訳だ！」

これに怒鳴り返したのは、村長のせがれだ。

「ジェス！ その面が地主様をお選びになったのだ」

村長は慌てたように、息子をたしなめた。スレンの不興を買いたくは無いのだろう。

「親父……。くそっ！」

「今までこんな事は無かった。仮面が外れなくなる事など」
「一体、どうなっている？」

本日のカミサマ役とやらはこいつ、村長のせがれだったようだ。

物々しい黒い羽飾りの付いたマントを羽織って、仮面を取りに来たら、この騒ぎだったという訳だ。

一緒になだれ込んできた、ちび兄妹たちも心配そうに事の成り行きを見守っている。

一同が見守る中、頭をふつてもみたが仮面は張り付いたように、びくともしなかった。

傾けた拍子に、仮面の耳元に付けられた紐も一緒に揺れた。

本来ならば、これを頭の後ろで結びつけて固定するのだろうに。

あらためて、事の異常さにゾッとするしかない。

「俺が訊きたい」

55 地主とカミサマの面（後書き）

『いたずらに仮面を被せられた地主』

やっど！　ここまで来ましたっ、てな気分です。

ここまで出来ていたのに、なかなか辿りつけない日々よ……！

さあ、役者はそろったぞ。

56 巫女役の魔女と神様役の地主

大変だ。

仮面が外れない？

そんなバカな……。

先程の不思議な女の子の来訪は、黙っておこうと決めた。
それどころではない。

ぎゅっと、胸元の衣を握り締める。

皆が皆、黙りこくって、地主様が頭を傾ける様子を見守っていた。

確かにおかしい。

仮面は頭の後ろで紐を縛って、固定する造りだ。

地主様の耳もとで、落ちた紐も揺れていた。

房飾りの付いたそれは、地主様の肩に付いている。

地主様は両手で、仮面を引き剥がそうともされた。

皆が息を詰めて見守る。

ビクともしない。

地主様のため息を合図に、皆も詰めていた息を吐いた。

「どうなっているんだ？」

ジェスが、地主様を責めるように問い掛けながら、仮面に手を伸ばした。

両手で引き剥がそうとしているが、やはり仮面は外れなかった。

まるで、ぴったりと張り付いてしまったかのようだ。

地主様は傍目から見ても嫌そうに、ジェスの好きにさせている。だが、いい加減無駄だと判断されたのだろう。

彼の手を払いのけるように遮ると、唸るように言い捨てた。

「俺が訊きたい」

確かにそうだ。

•	
•	○
•	
•	○
•	
• •	*
• •	
•	○
•	
• •	*
• •	
•	○
•	
• •	*
• •	
•	○
•	
• •	*
• •	

「魔女っこ。この間、地主さまにおまじない、してあげなかったから……かもよ？」

リュレイが遠慮がちに、上ずった声で切り出した。

「おまじない？」

「そうよ。ジェスもいたじゃない、あの時。皆でクルミをかき出した時よ。お兄ちゃんも私たちも、魔女っここから、魔よけのおまじな

いしてもらっていたでしょ！」

「それが何だって言うんだ？」

「もう！ 森の神様のイタズラかもしれないでしょ！ だから、魔女っこ、おまじないしてあげたら、地主さまのお面はずれるかもよ？」

だん！ と足を踏み鳴らして、リュレイがジェスに噛み付いた。

「それを言うなら、俺だとしてもらってないぞ」

「「ジェスは悪ものだもの」」

幼い声が仲良く被った。

どうやら二人とも、地主様の味方らしい。

「おまえ達。気を使わせたな」

言いながら、地主様はリュレイとキャレイを抱き上げた。

片腕ずつに軽々と。

二人はきゃあきゃあど喜んでいる。

「魔女の娘のまじないならば、ちゃんと昨夜もらっているから、安心しろ」

さらりと言ったのけた地主様に、頬が火照った。

ミルアがぱっと勢い良く私を見た。

無言だったが何か言いたそうに、こちらを見ている。

村長さんもジェスも、眼差しだけで問い詰めてくるのは止めて欲しい。

余計に恥ずかしく、居たたまれなくなってしまう。

そうなの――？

じゃあ、何でかな――？

「村長の言う通り、森の神の意思とやらかもしれんな」

「うん！ いいんじゃないのーレオナル？」

「何がだ、スレン」

「地主業は廃業しちゃってさ、今日からは森のカミサマとして君臨するがいいさ。君、ちよつと働きすぎだしね」

スレン様はしきりに頷きながら、そのような事を言い出した。

冗談とも取れる内容だが、スレン様はあながちそうでもなさそうだった。

地主様は呆れたような声を出した。

「馬鹿を言うな。今日だけだ。そのカミサマ業とやらは」

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

・。
・

大変な状況だというのに、そこはやはり地主様だと思われる一言だった。

落ち着いておられて、取り乱した所は一切見られない。

「やるしかないのだろうか。村長？」

「ええ。その面は、森の神の意思が宿ると言い伝えられております。ならばその意向に添いましょう」

村長さんはうやうやしく胸に手を当てて、地主様に頭を下げた。

それを見て、怒り出したのはジェスだ。

「親父！ くそっ！」

マントの首元を弛めると、それを床に叩き付けた。

肩の部分の羽飾りが床にぶつかって、大きな音を立てる。

ちびちゃん達が怯える。

地主様はリュレイとキャレイを抱きかかえ、私はカールを抱きしめた。

「ジェス！」

乱暴にマントを脱ぎ捨てたジェスを、村長さんが叱った。

ジェスは落ち着こうと必死なのだろう。

大きく息を吐き出す。

「まずは、ボクからの」

「え！？」

ん、と唇を寄せてこられた。

と、思ったら物凄い勢いで遠ざかっていた。

地主様とジェスがほぼ同時に、スレン様の肩に手を掛け、大きく引っ張ったからだ。

両の肩をぐいと引かれたスレン様の足元は、当然の事ながらふらついた。

「魔女っこは、ぼくのなの！！ 勝手に触らないで」

私に抱きつきながら、スレン様を見上げる。

カールが頬っぺたを真っ赤にしながら、しがみついて庇ってくれた。

「えー？ そうなの、フルル？」

「ええっと」

「スレン！ 子供相手に何だ」

収まらない騒ぎの中、パン！ パン！ と小気味良い音が響いた。村長さんだった。

両手を打って注目を集めたのだ。

「ジェスはお客人に村をご案内してくれ。ミルルーアは子供たちと

一緒に戻るように。それから、まかないの方がどうなっているか、おかみ達に聞いておくれ」

ミルアはすぐさま、ジェスはしぶしぶ頷いた。

「エイメ。私たちは仕度に戻るよ。何、すぐに戻るよ。だが待っている間、地主様にお役目の説明をしておくれ」

「はい」

村長さんからはそう頼まれた。

頷いたが、どう説明すればいいのかと少し困った。

皆、口々に頑張ってねと言い残して、部屋から出て行く。

だが向けられる眼差しに含まれるものは、そればかりでは無い気がした。

居たたまれない。

何だろう。

たまらなく、恥ずかしい。

「カルヴィナ、叔父様をよろしくね。さ、スレン様。リヒヤエル。お祭りの様子を見学させてもらいましょう」

「そうだね。下々の祭りに参加するなんて滅多に無い機会だしね？」

「レオナル様、エイメリイ様、それではまた後ほど」

「エイメ。その、また後でね？ さ、ちびちゃん達！ 行くよ」

「「またね、魔女っこ」」

「魔女っこ、また後でね」

そんな中、一番最後で立ち止まったのはジェスだった。

「エイメ」

「今年はやぐらに掛ける梯子は、階段にしたんだ」

「うん」

「それは俺が、俺たちが作った。エイメがやぐらに上がり易いようにと」

「……ありがとう。大変だったでしょう？」

「いや。どうって事は無い。ただ――」。

ジェスも皆も私が巫女役をやると知らされていたのだ、と今更なから思う。

梯子であって、恐らくどこか確実に落下する自信がある。

「ただ？」

「ただ……。俺がカミサマ役だったんだがな。残念だ」

「……」。

どう答えたら、言葉をかけたらいいか解らない。

困って見上げると、真剣な眼差しが覗き込んでくる。

「せめて、祭りでは一緒に踊ってはくれないか？」

「えっと」

「嫌か？」

「あのね。嫌って言うより、その」

「嫌じゃない？」

「踊れないから。その、私の足だと」

ジェスが首を左右に振る。

「そんな事は無い。いや、構わない」

「踊れないよ？」

なおも念を押すように言ったのだが、ジェスは譲らなかつた。

「エイメ。待っている。待っているから。巫女役が終わったら、やぐらから降りてきてくれ」

「うん？」

「待っているから」

そう幾度も言い残してから、皆の後に続いて行った。

[illegible]

とうとう、地主様と二人きりになってしまった。

「カルヴィナ」

ジェスが扉を閉めたのと同時に、名を呼ばれる。

地主様は椅子を引いて、私の真横に腰を下ろした。

あまりに自然に寄り添うようにされるから、警戒する間も無かつた。

「どうした訳だろうな。外れなくなった。大魔女の娘の意見はあるか？」

「お困りでしょうか？」

「少しな」

いくらか躊躇った後、地主様はぼつりと呟いた。
先程と同じ、落ち着き払ったものだ。
だが心なしか、しおれて聞こえもする。

「失礼します」

そつと仮面の下から両手を差し込んでみる。

地主様の頬に触れる。

そつと。

少しざらついている。

今日はまだ髭を剃られていなかったのだ、と思う。

やはり仮面はビクともしない。

仮面越しの眼差しは、遠いようでいて間近に思えた。

彼の視線が痛いつたらない。

そつと仮面の頭の部分に触れてみる。

あたたかい。

あたたかい？

この陽射しのせいなのか。

それとも地主様の体温がうつったせいなのか。

獣の毛並を紋様化して彫られた部分は、風をまとう様を表している。

そう。

彼の……森のカミサマと崇められる彼の名は『疾風まとう暗闇』という。

そっと、その名を呼んでみる。

『シュディマライ・ヤ・エルマ』

巫女役だけが許される、その呼び名を。

56 巫女役の魔女と神様役の地主（後書き）

『おかしいな。また、長くなった』

だいたい毎回1000文字くらい書いてから

「うん。これ以上無理。（ギブ）UPしようかな」

等と思うわけですよ。

それなのに。

気が付くとハナシが膨らんでおります。

ああ。

57 地主と言ひ伝えの獣

この深い森の、そのまた奥深く。

人の子では到底、踏み入る事が許されぬ森の奥地に住まう獣がおりました。

いつしか、そこは聖域と呼ばれ、獣は森の主と呼ばれるようになりました。

とうの獣は、そう自分を崇め始めた生き物を不思議な気持ちで眺めておりました。

その中でごく稀に、自分の声を聞く事が出来る者に出会いました。年若い娘です。

娘は自分は巫女なのだ、こうやって貴方様のお言葉を聞いて、皆に伝える役目なのだと申してきました。

『何かご所望のものはございませんか？』

——何でもよいのか？

『はい』

——ならば。おまえが我の側に居る事を望む。

そうして獣は娘を森の奥深くへと、さらってしまいました。

今までさらっていた家畜や子供の代わりに。

すると、どうでしょう。

獣は子供や家畜をさらう事を忘れました。

代わりに、花や果物や木の実をとる事を覚えました。

そうすれば娘はとびっきりの笑顔を見せてくれます。

それでも時折り、娘は残してきた家族や仲間を思っ泣く事もありました。

娘が自分以外を想って泣く事に、獣は胸を痛めました。ですが、娘を帰してやる気がどうしても起きません。

やがて……。

やがて。

獣は初めて知りました。

娘と自分とでは、流れる時間の長さが大きく違うという事に。

それでも――。

ただ娘の側に居られれば、獣は満足でした。

優しい眼差しと、毛並を梳いてくれる指先は、ずうつとずうつと変わりませんでしたから。

それでも訪れた日。

娘ともう過ごせなくなるという、最期の日。

さようなら、ありがとうと告げる娘の御魂に、獣は縋りつきま
した。

『どうか、どうか。行かないでくれ。ずっと側に居てくれ』

『あなたがそれほど望んで下さるのなら、また生まれ変わったら、必ずあなた様のお側に参りましょう』

そう約束してくれた娘は、森の白き女神の樹に宿りました。

幾度でも生まれ変わり、獣の前に現れる事を誓った魂を、獣は今も森の奥深くで待ち侘びているそうです。

永遠を誓い合つた絆にあやかりたいと、うつしよ現世に身を現す男女の願
いも込めて。

深い森の、遠い昔の、あったかもしれない物語。

.		.
o		.
.		o
.	.	.
*		.
.	.	.
.	*	.
.	.	.
o		.
.		o
	.	.
	.	.
	*	.
	.	.
	.	o
	.	.
	.	.
	*	.
	.	.
	.	o
	.	.
	.	.
	*	.
	.	.
	.	o
	.	.
	.	.
	*	.
	.	.

この土地に生まれた者ならば、誰でも知っている昔語りだ。

カルヴィナは言い伝えを語りながら、俺の役の台詞や立ち回りを説明してくれた。

物語は生きる世界が違う者同士の哀しい、それでいて美しい結末を伝えている。

暗闇で微かな光にすがるかのような……。とうの昔に置き去りにした、泣きたい出したい気持ち。心細さ。

そんな想いが去来する。

獣の目を通してみているのだと気が付く。

そうでなければ――。

こんなにも世界が娘中心で見えるわけが無い。

普段の自分ことザカリア・レオナル・ロウニアであれば、まず意識に上るのはもっとほかの事だったはずだ。

見て回らねばならない貸し地や、その荘園の具合、援助を求める有力者とのやり取り。

神殿の護衛団の訓練。

そういった仕事の事が大半を占めていた。だが仮面をつけた今やどうだ？

この世界の美しさにのみ集中している。心を傾けるべきものは、本来はそれだけなのかもしれないとすら思えてくる。

そんな自分を否定したい。いつもの、忙しく立ち働く地主ぜんとしりと理性は命じてくる。

それは何と、ちっぽけな自己かとすら想い始めていた。
意識の変化に戸惑いながらも、素直に身を委ねてしまう。
それが正しいと思う。

どこかしら、たゆたうような眼差しが目の前にある。

カルヴィナに、こんな顔をさせたのは誰かと怒りが湧く。

――何故、我を見て微笑まない？

（この娘の心が俺には向いていないからだ）

頭の中で、あがった疑問に答えてやる。

この娘の自由を奪い、己のものにするための画策を練り始める。

――この娘が欲しい。

身も心も魂までを縛り付けたい。

どうやって誘い込み、組み敷き、思うままに貪るか。

そんな想いに囚われ始めている。

「地主様？　今の私の説明で大丈夫でしたでしょうか？」

にこりと笑う娘に頭を振った。

「ああ。問題ない」

この娘の微笑を守らなければならない。
貪り、食い尽くしたところで獣の飢えは治まらない。

それどころか。

真の獣へと身を落とす事だろう。

胸の奥、己の内部の奥深く――。

（シュディマライ・ヤ・エルマ。大人しくしろ。貴様に、カルヴィ
ナに触れる資格は無い）

唸り声を上げる獣に、言い聞かせた。

57 地主と言ひ伝えの獣（後書き）

『昔語り。』

なんと。これも半年前にすでに出来ていたらしい。

日付を見て、自分で驚きました。

やっぱりUPすると少し変化します。

いや。おおいにか……。

58 巫女役の娘と疾風まとう獣

広場の一角に、席を用意してもらった。

心地良く風が吹き抜ける。

楽しげな笑い声と太鼓の音が交差する、にぎやかな空気に自然と浮き足立つ。

出番までもう少し。

[illegible]

「ええと。お酒は……。」

言いよどむ。

「こうやって神様や巫女様に祝いの酒を振舞って、おいしく飲んでもらうのが縁起がいいとされているんだ」

「そう、なの？」

今までお祭りに参加した事が無かったから、知らなかった。

「そうそう。今年も無事に収穫を終えることが出来ました。これは感謝の気持ちです。どうぞお受け下さい」

少し向こうでは神様役の地主様も席を設けられ、皆に囲まれている。

着飾ったお祭り衣装の女の子たちが、順番に注いでいるのはこち

らと同じものなのだろう。

そう納得してから、視線を戻すと人懐っこい笑みがあつた。

杯を受け取りながら、彼の名前を思い出す。

確か名前はロウド。

ジェス達と一緒にいた若者。

彼の陽気な人柄を表すような赤い髪に、真っ青な瞳の青年。

ろくに口も聞いたことの無い彼への認識はそこまでだ。

他にも三人の若者たち。

地主様ほど大きな背丈ではないが、こうやって四人もの男の人に四方を囲まれては、縮こまるしかなかった。

皆、私の手元を見守っている。

皆から労われている証の果実酒。

それなら、受けない訳にはいかないだろう。

そもそも、こんな席で断るという事が自分には許されるのだろうか？

答えは否、だ。

だったら飲み干すしか他に道は無い。

そろそろと口を付けた。

お酒の味は濃かった。

これは水で薄めるくらいで丁度良いのではなからうか。

しつこい甘さが咽喉に絡みつく。
思わず咽る。

何故かそこで笑いの波が広がった。

「さあさあ。どんどん飲んでおくれ。祝いの酒だからな。巫女様に
 ぴったりだ」

なおもと促がす口調から、とてもじゃないが残せる雰囲気ではないと思った。哀しくなった。

やぐらを作っていてくれた若者たちに囲まれ、その期待に満ちた眼差しに晒されて追いつめらる。

ほんの少しだ。

杯に一杯。

これくらい、受けるのが礼儀だろう。

○

● ○

●

● ●

✱

● ●

● ○

●

● ●

✱

● ●

● ○

●

✱

● ●

● ○

●

● ●

✱

● ●

●

● ●

✱

● ●

●

急に強風に煽られて、ボールが大きく後ろに攫われた。

髪飾りという重みで固定されていても、少しずれるほどだったから、とても強い風が吹いた。

何事だろうか、吹き付けてくる風のほうへと視線を上げた。

視界が陰りを捉える。

陽射しが雲に遮られた時みたいに。

真つ黒い衣装に身を包んだ、仮面の姿をとらえる。

すっかり上がった太陽を、その背で封じ込めたかのようにだ。

いつかも似たような事があった気がする。

「地主さま」

というよりも、風をまとい従えたかのような風格に、森の主さまの名前が相応しい気がした。

『シュディマライ・ヤ・エルマ』

皆、その異様なまでの威圧感に圧されている様だった。
存在自体もさながら、意思持って動く闇のよう。

私の知っている闇は夜のあの静かで、包み込むような闇だ。

それとはまた違う、静かな……。

夜の深い湖よりも深く、うかがい知れない存在のような気がした。

これに近い気配は森の彼こと、オークの巨樹しか思い当たらない。

（どうしよう。近寄り難い。こういうのを何というのだったかしら？）

——神々しい。

そう思い当たったら、寒気がした。

彼自体が風の影響を受けていないのは何事か。

地主様のまとうマントはそよともしていない。

ただ、彼が歩を進めるたびに私のベールが風にさらわれる。

確かに今、地主様は疾風まとう暗闇と表現するに相応しい。

気圧される。

その圧倒的な存在感に、ただ、ただ、目が離せない。

彼がこちらに近付いてくると、周りを囲んでいた若者たちが一人、また一人と横に身をずらした。

私だって出来るのなら、そうしたい。

だが、無理だ。

大人しく椅子に腰掛けて様子を窺う。

両手に持った杯の中身がさざなみ立つ。

やがて彼は歩みを止めた。

優雅に。

それすらも森の獣が、駆け抜ける足を止めた時みたいに。

すいとしなやかな動きで、手を差し伸べられた。

思わず身を竦めた。

それに躊躇ったかのように、彼の手が止まる。

彼の手のひらは、私の頬を掠めるようになぞった。

その流れのまま、さも当たり前のように私から杯を取り上げた。

驚いて目を瞪るよりも早く、地主様は杯に口を付けていた。

仮面が少し邪魔なのだろう。

杯に口を付けてから、しばらく傾ける事もなく、逡巡されたように見えた。

やがてゆっくりと杯を傾け、飲み干される液体が咽喉を滑り落ちてゆく様を見守る。

それは――。

オオカミが、水飲み場にうやうやしく口付けた様子に似ていた。

『カルヴィナ。酒は禁止だと言っただろう？』

怒られた。

「この娘の体は酒を受け付けない。過ぎれば意識を失うほどにな。そうなたらおまえ達、巫女役の不在で祭りに穴を空ける気か？
もつとも」

地主様が彼らに一步踏み込む。

そうして見渡すようにしながら付け足した。

「森の神がそれを許しはしないだろうが」

自然と人の輪が遠ざかった。ほんの一步分。それにも満たないほど。

そこに安堵を覚える。

大きな闇色の背を見つめながら、肩の力が抜ける自分がいた。

若者たちは顔を見合わせると、散り散りに去って行った。

その背を見送ってから、地主様は振り返る。

そしてため息をついてから、厳かに繰り返した。

『カルヴィナ。酒は禁止だ』

『勧められてもですか？』

『なおの事、駄目だ。特にあいつらのような男共からは』

『……。』

何となく悔しくて、素直に頷く事ができなかった。

『おまえは酒が飲みたいのか？』

『受けるのが礼儀だと思っています』

『無理に受ける必要は無い。わかったな？』

せっかくお祭りに参加させてもらっているのに。

少しでも何でも皆の期待に応えたいだけなのに。

地主様は横暴だ！

そんな風に思ったら悔しくて、気が付いたら反抗していた。

『イヤ』

『何？』

『じ、地主様の言う事なんか、ききません』

『そうか。なら、俺の前でなら酒を飲んでもいいぞ』
『……。』

あつさりと地主様はそう答えながら、私に杯を戻した。ほんの少しだけお酒が残っている。

強がって見たものの、杯を受け取った時に震えてしまった。

お酒を飲むと少し眠くなる。

地主様の前で、私は何度か眠りについた事がある。

それなのに。

それは何だか、とてつもなく怖い気がした。

『男の前で酒に飲まれると、どれほど意に沿わない事になるか。何となくだが予想は付くな？』

黙り込み、杯を見詰める。

そんな私と目線を合わせると、地主様は諭すように言った。何となくは解るけれど、はっきりとは解らない。

『はい。でも、地主様の前ならいいのですね?』

仮面越しだが、地主様が目を瞞ったのがわかる。

覗き込むようにして、**答えを待つ。**

正直、自分で言っておいて何を言っているのか、よく解らなくなつた。

『カルヴィナ。頼むからそう煽ってくれるな。俺とて……保障はできない』

『保障？』

何の事かと彼を見やると、地主様の手の甲が頬を撫でた。

そのまま、ぺちぺちと軽く叩かれる。

『余計な事を言った。忘れてくれ』

○

● ○

●

● ●

✱

● ●

● ○

●

● ●

✱

● ●

● ○

●

✱

● ●

● ○

●

● ●

✱

● ●

●

彼の吐息が触れるほど近くで呟かれる。

そこでやっと、昨晚の出来事をありありと思い出した。

我ながらどうかしている。

一氣に頬が熱くなった。

『もうじき出番だな。それまでにもう一度、打ち合わせておこう』

気を取り直したように、地主様が仰った。

いつも通りにされる地主様が、何だか恨めしい。

（地主様は、慣れておられるのだ、きっと。色々と……。）

だから。

私だけが意識したりしたら、馬鹿みたいだ。

そう思ったら、あいまいに頷くのが精一杯だった。

58 巫女役の娘と疾風まとう獣（後書き）

『さあ！ お祭りだよ。』

何だこの、甘酸っぱさは……！

こっぱずかしいなと思いつつ、UPしました。

題名を巫女役の魔女くとせず、娘にしました。

ただの一人の女の子だなあ、今日の魔女っこ。

そう思ったので。

59 森の神様と巫女の娘（前書き）

お祭りは 地主&魔女っこ目線でお送りいたします。

59 森の神様と巫女の娘

大魔女の娘は人よりも少し離れた所で、静かに佇む娘である。

無関心なのではない。

誰かや何かに助けを求められた時には、そつとその知識と知恵を差し出す。

その様子はまるで、憩う小鳥のためにそつと枝葉を伸ばす若い樹のようだ。

ただ静かに風にそよぎながら、遠慮がちに周りのもの全てを見守っている。

寄り添うものを拒まない、その大らかさはあたたかい。

言葉で表現する者は戸惑いを覚え、苛立つ。

それは言葉では説明が付かないがため。

良くも悪くも浮世離れた了霧圀気を醸し出し、おいそれと近付く事すら憚られる。

当の本人はそれを、自身の生まれ持った色のせいだと思い込んでいる。

それが魔女の娘に憂いを持たせる。

その憂いが余計に、娘の持つ了霧圀気を妖艶に魅せるのだ。

けして自分からは主張しない。

見過ごす者は見過ごせばよい。

それに気が付く者など少数でいい。

いつもと違う雰囲氣に苛立つ。

カルヴィナがあまりにも可憐だからだ。

巫女役の純白の衣装を身に着けた娘に、穢れなど見当たらない。

大魔女が森の奥深くで愛いづくしんできた訳がわかる。

ひとたび人の輪に引っ張り出されたら最後、人の目を集めてしま
う。

好奇、賞賛、羨望、嫉妬といったものから、男の要らぬ感心までと幅広く。

無意識に存在を主張して止まない娘は、様々な思惑を人々に抱かせてしまう。

無自覚なのだから余計に夕チが悪い。

早速まわり付いていた男達。

カルヴィナにしきりに酒を勧めていた。

無理に飲み干そうとして、咳き込むカルヴィナから取上げれば、それは恐ろしく濃い酒だった。

怒りが頂点に達する。

追い払い、荒々しい心のままカルヴィナに向き合う。

自分でも宥めようの無い怒りを抱えたまま。

ところがカルヴィナときたら、俺を横暴だとなじってきた。

その割に語尾は震え、視線は惑っていた。

それは、強がりなだけだというのは言われずとも解る。

照れているだけだとも。

言葉を交わし、その頬に触れる。

気がつけば、怒りはすっかり収まっていた。

獣の欲求を満たすのならば、そんな指先程度の触れ合いで鎮まるはずも無いと思われた。

必死で指先まで留めた想い。

滑らかな感触が、昨晚抱き寄せた曲線をありありと蘇らせる。

だからこそ、慌てて触れるのを止めたのだ。

それでも、心を荒ませていた嵐はあっさりと風いでいた。

たちまち鎮まってしまった獣は、娘の清純さに平伏したに他ならない。

『お慕いしております』

という台詞を聞きたくて幾度も言わせた。

耳にも心にも心地良い。

祭りの間、巫女役の娘の心は森の神にのみ捧げられるのだ。

その間は永遠のひと時。

ああ。

まただ、
と思う。

これは俺の感情だけではない。

この仮面の意思が持つ、記憶もあるのだ。

この仮面を代々付けてきた者達の記憶も含めて。

•	
• •	•
* •	○
• •	•
•	• •
○	*
•	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	• •
	*
	• •
	•
	○

おばあちゃん。

おばあちゃんも巫女役をやった事があるんだって教えてくれた。
こっそりと。

おばあちゃんが、娘だった時。

誰が神様役だったの？

そう尋ねたら、森の彼だと教えてくれた。
こっそりと耳打ちして。

どんなヒトだったのか尋ねたら、黒い髪に黒い瞳の背の高いヒトだったと教えてくれた。

私と一緒にだ！

そんな風に言われたら、期待だって一気に高まる。

早く続きをとねだる私に、しいつと言いながら声を落とすように言われる。

どんな小さな声だって、風にさらわれてしまうものだ。

だから、森の人たちに聞こえてしまう事が無いように用心しなければならぬ。

そう言っておばあちゃんは、香草を燃やしながら煙を焚いて呪文を唱えた。

『この場に吹く風はこの場に留まる風』

そう唱え終わったら、おばあちゃんのお話の始まりだ。

儀式がまた特別な感じがして、否が応でも期待感が高まる。わくわくした。

いつもおばあちゃんにねだって聞いた。

お祭りの晩に。

蝋燭の明かりに灯されながら、お酒を少しだけ許される。そうやって、ちみちみ飲みながら聞く物語は特別だった。

おばあちゃんが巫女の役をやり、私が神様の役をやった。そんな時のおばあちゃんは、とても楽しそうで可愛らしく見えた。

何べんも繰り返した物語。

これからも繰り返される物語。

それを地主様とやる事になるなんて、人生何が起こるかわからないものだ。

おばあちゃんはよくそう言っていた。本当にその通りだ。

地主様が神様役をやり、大魔女の娘が巫女役だなんて。誰が想像しただろう。

私と目線を合わせてしゃがんだままの地主様は、よく打ち合わせしておこうと仰った。

そこは素直に頷く。

何としても成功させなければならない。

意地なんか張っている場合ではないのだ。

地主様はよく聞き取れない、発音の僅かな差にまで耳を澄ましていて、何べんも言うよう促がされる。

だから何回も繰り返した。

不備があってはいけない。

急な割にはどうにかお互いサマになっていると思えた。だが地主様は慎重だ。

本番直前まで、出来る限り練習する気のようにだ。

何回か繰り返した後「気持ちが悪くもっている様に聞こえない」

と文句をつけ出した。

どうしろと言うのだろう。

気持ち――。

言葉に託す想い。

演技力を私に求められても、と思う。

その旨を伝えると、地主様はむっすりとしてしまった。

気難しい。

それに地主様こそ棒読みだ。

そうやってやったら、ますます機嫌を損ねたみたいだった。

『おまえが気持ちを込めて言わないから、こちらだってやりにくい』

あくまで私のせいだと主張される。

そんな事を言われたってどうにもならない。

$\bullet$	
$\bullet \bullet$	$\bullet$
$\ast$	$\circ$
$\bullet \bullet$	$\bullet$
$\bullet$	$\bullet \bullet$
$\circ$	$\ast$
$\bullet$	$\bullet \bullet$
	$\bullet$
	$\circ$
$\bullet$	
$\bullet \bullet$	$\ast$
$\ast$	$\bullet \bullet$
$\bullet \bullet$	$\bullet$
$\bullet$	$\circ$
$\bullet \bullet$	$\ast$
$\ast$	$\bullet \bullet$
$\bullet$	$\bullet$
	$\circ$
$\bullet \bullet$	$\ast$
$\bullet \bullet$	$\bullet \bullet$
$\bullet$	$\bullet$
	$\circ$
$\bullet \bullet$	$\ast$
$\bullet \bullet$	$\bullet \bullet$
$\bullet$	$\circ$

それでもお互いに譲歩しあって、お役目をまっとうしようと誓い合った。

楽しみにしてくれている村の人のためにも、心を込めて行う。

何より村の代表として、森に感謝を捧げる役には違いないのだから。

気が付けば大きな手と手を取り合って、二人で祈りを捧げていた。
『この森の恵みに感謝いたします。どうか女神よ、お力をお貸し下さい』

敬虔な気持ちで臨まなければ、感謝の気持ちもきつと伝わらない。
言い争いはお祭りが終わってからでいい。

太鼓の音が一際おおきく高く、ふたつ、鳴り響いた。

全ての準備が滞りなく済んだのだと、それは告げているかのように聞こえる。

お祭りが始まる。

さあ、位置につこう。

59 森の神様と巫女の娘（後書き）

『こりゃ同時進行しないとこんがらがるし、くどいわ。』

そんな理由で二人の目線交互でお送り致します〜。

解りにくくなりませんように。

（→ 努力します……。）

さあ、お祭りの始まりです。

60 暗闇の獣と生け贄の子供

始まりの大太鼓が鳴り響くと、それまでさざめいていた人々の話し声が止んだ。

森への感謝を捧げる、お祭りが始まる。

息を詰めてその瞬間を皆で迎える。

そんな気持ちが一つになって、広場は静寂に包まれながらも、熱気に満ちていた。

涼やかな風が吹き抜けて、その火照りをいくらか冷ましてくれる。

[illegible]

やぐらの前に、村のみんなで輪を作って見守る。

半分は男の人たち。

太陽の昇る方角に集まって固まる。

地主様はその真ん中辺り、一歩だけ前に出て立っている。

そのまた半分は女の人たち。

太陽の沈む方角に集まっている。

私もその真ん中辺りに、地主様と同じように一歩だけ前に立っている。

広場を挟んで、地主様とは真向かう格好だ。

その男の人と女の人の中に挟まれているのは、子供たちだ。子供たちも同じように、男の子と女の子に別れて固まっている。

影はほとんど足元に落ちている。

それは太陽が昇りきった事を意味する。

広場の中央に歩み出た村長さんが、大きく声を張り上げた。

『これより、大いなる森の定めに感謝を捧げるための祭りを始める！』

いつもの、ほんわかした雰囲気村長さんではないみたいだった。威厳に満ちて響いた宣誓の言葉も古語だ。

でも、言い終わってからにつこり子供たちに笑いかける頃には、いつもの村長さんに戻っていた。

子供たちがいっせいに、広場の真ん中を目指して駆け出す。

男の子も、女の子も。

すごく小さな子も、手を引かれながら。

子供たちは全員で二十名くらいだ。

その中に、先程の女の子の姿が見えないか探す。だが見当たらなかった。

もしかしたら、恥ずかしがって木陰にいるのかもしれない。あまり深く追及するのは止めにして、目の前の事に集中する。

「せえの！」

一番年長と思われる男の子の掛け声を合図に、子供たちが歌いだす。

『森のおくの』

『そのまた奥の』

『奥深く』

『そこには森の』

『森の』

『神様と呼ばれる』

『気高い』

『獣がおりました』

古語のせいもあり、意味を理解できないまま歌っている子もいるのだろう。

幼さゆえの舌足らずも相まって、やや、調子が外れてしまう。

それでも幼い歌声はのびやかに響いてゆく。

素直な歌声は微笑ましい。

思わず涙ぐんでしまうほどの、清らさがある。

背後から微かに鼻をすする音が聞こえてくる。

そっと振り返ると、ミルアが堂々と涙を流していた。

彼女のこういう所は素直に見習いたいと思う。本人には告げないけど。

『その姿はまるで』

『まるで』

『疾風まとして動く暗闇』

『皆がそう呼ぶその頃は』

『獣はまだ獣でありました』

『その魂を鎮めるただ一人の娘と出会うまでは!』

『疾風まとう暗闇は獣でありました』

シ
ユ
デ
イ
マ
ラ
イ
・
ヤ
・
エ
ル
マ
！

最後に大人達も加わって全員で、森の主の名を呼ぶ。

さあ、地主様の出番だ。

[illegible]

シ
ユ
デ
イ
マ
ラ
イ
・
ヤ
・
エ
ル
マ
！

その掛け声を合図に、子供たちの群れの中へと突き進んだ。呼ばれた名前に相応しい動きを意識して。

「きやああ」

「わるもの来たー！」

「こわい！」

歓声を上げながら、子供たちが散り散りに逃げて行く。

中には本気で泣き叫んでいる幼児もいた。後々、心の傷にならなければ良いが。

そのような心配もちらと掠めたが、役目は役目だ。
ひとしきり、追い回すように子供たちの輪の中でマントを翻す。

逃げ惑う子供たちの中で、こちらを見据えて微動だにしない子供が居た。

カールだ。

双子たちの兄だけあって、随分としっかりしている。
幼いながらも、カルヴィナを真摯に思いやっている男だ。
だから俺や村長のせがれには素っ気無い。

挑むような眼差しで、俺を睨みつけてくる。

例え強がりが含まれていようとも、やはりこの子供は勇ましい。
カールの前に歩み寄り、立つ。

『我は森に住まう獣。それを――疾風まとう暗闇などと呼ぶのはオマエか?』

「獣め！ 真っ黒だから暗闇と呼ばれるんだ！」

古語の台詞はカールには難しい。

恐らく上手く理解できていなかっただろう。

それでも受け答えは、そうそう的外れでも無かった。

『それでは今日の生け贄はオマエにしてくれよう』

カールを抱き上げようと引き寄せる。

「放せ――！！ おまえの好きになんか、させるもんか――！」

カールが足をバタつかせて暴れる。
それを抱き込み、抱え上げてしまうといくらか大人しくなった。
そのままマントの中に隠す。
闇に包みこんでしまうかのように。

女たちには背を向ける格好で三歩踏み出せば、カルヴィナの出番だ。

[illegible]

『どうかお待ち下さい、森のあるじ様』

細いが良く通る声が、シュディマライ・ヤ・エルマを呼び止めた。

振り返る。

真剣な眼差しが縋っていた。

思わず、そらしてしまいそうになったが堪えた。

獣は自身の暗闇を恥じたのかもしれない。

娘の存在があまりにも眩く、光をまとって見えるから。

『我をそう呼ぶ、おまえは何者だ』

『ただの人の娘でございます』

『人の子が我に何の用だ』

『どうかお鎮まり下さいませ。子供はお返し下さい』

『ふん。ならばオマエが代わりに生け贄となれ』

そう告げてから、カールを下ろす。

迷わずカルヴィナに駆け寄り、抱きついたカールを側に控えていた女性が引き取った。

名残惜しそうに振り返るカールの手を引いて、輪の中に戻って行く。

それから、カルヴィナの手を取り進む。

村人が見守るように囲む輪の中を、ゆっくりと回りながら台詞を口にする。

なるべく、もったいぶってゆっくりと。

そこが大事だとカルヴィナが言っていた。

おそらく大魔女の教えがそうであったのだろう。

『あなた様は森のあるじ様でございます。子供らではなく、森の恵みがあなた様を満たしましょう』

巫女役の言葉が終わったのを見計らって、付き従っていた村娘が赤い実の付いた枝を差し出した。

カルヴィナが受け取ったそれは、俺へと手渡される。

そこで枝に付いた実を口に含む。

『このようなものでは我は満たされぬ』

『ではこれもどうぞ』

同じ要領で今度はクルミを渡される。同じく口にする。

『これくらいでは我は満たされぬ』

『ではこれもどうぞ』

それを繰り返す。

『あなた様はもうただの獣ではありませんぬ』

獣は、その瞬間から真の森の神となった。

60 暗闇の獣と生け贄の子供（後書き）

『お祭りです。』

何か物騒なサブ・タイトルになってますが。

儀式にのっとりまして、進行中。

地主は何気にノってますね。

61 真の森の神と真白き光

地主様、いや……。

森の神様となったシュディマライ・ヤ・エルマに、立ち上がるように手を貸す。

奪うことのみにか心の向かなかった獣は心を得た。

一人の娘を思いやる心を知って。

森の恩恵に預かる自身を知って。

ただ風のように森の中を、駆け抜けていただけの獣はもう何処にもいない。

『あなたは真の森の神様です』

娘の言葉に、獣は自分の力のあり方を知るのだ。

疾風まとう暗闇は、森の神様。

万物のありかを知らしめて、導く風となる。

『おまえがそう言うのならば、それに恥じない行いをすると言おう。我が名はシュディマライ・ヤ・エルマ。娘よ、おまえの名は何という？』

『お好きなようにお呼びください、シュディマライ・ヤ・エルマ。あなた様のお付けくださった名を、我が真名といたしましょう』

『それは真か？』

「はい」

『それが意味すること、おまえは承知しているのか？』

『はい。わたくしはあなた様をお慕いしております』

『ならば共に森に生きよ』

『はい』

『では、おまえをこれからは、森の真白き光、と呼ぼう』

『恐れ多いことでございます』

『我を眞の森の神としてくれる、そなたこそ眞の光だ。恥じること
は何もない』

『ありがとうございます。喜んでお受けいたします』

『では、共にこの森の行く末を見守るとしよう』

そうして娘は、差し出された手を取る。

迷いなく。

[illegible]

そこで拍手が沸き起こった。

今まで息を詰めて見守っていてくれた、皆の歓声も一緒に上がる。

やりとげたのだと知る。

まだ実感がわかない。

ただ、ゆるゆるとこの胸が温まって行く気がした。

惜しみなく拍手をくれる輪の中で、地主様と顔を見合わせる。

自然と頬が緩んだ。

地主様も仮面越しだが微笑んでおられるようだ。

唇の端が持ち上げられている。

強く風が吹いた。

訪れる冬を感じさせる冷たさも含んだ風。

だが、それだけではなく、人々の熱気をも含んで感じられた。

ボールが風にはためく。

地主様の大きな手がボールと、耳にさしてくれた花を押さえてくれた。
れた。

—— ほら。風が吹いた。

いつだって二人の間を、風が吹き抜けて行ったものだった。

おばあちゃんと過ごし続けた日々を思い出す。

あの時と同じ風が吹いたから。

—— ああ。どうしても、さらわれて行ってしまうか。

おばあちゃんは目を細めながら、風の行方を追っていた。

仕方が無いねえと言いながらも、その声は嬉しそうだった。

風が吹き抜けて行くのは決まって森の奥深く。

二人の間のないしよ話も、その間にあった温かな空気も一緒に送り届けられているのだ。

そうして力を取り戻す。

今、この時も。

森の奥で見守っている存在を感じる。

感じる。

その眼差しは好奇に満ちている。

生きている私達の一瞬のきらめきを見逃すまいとして。

—— 何もかもがまばたきの間でしかないよ。

おばあちゃんはよくそう言っていた。

亡くなる、その直前まで。

だから瞬く。

その瞬間を焼き付けるために、私たちは瞬くかもしれないとすら思う。

瞬く度に心の奥底に刻み込み、瞬き重なる度に深く深く刻まれてゆく。

この身が減んでも残するという、魂に届くまで。

惜しむように目蓋を閉じ、待ち侘びるように目蓋を開ける。

その繰り返しだ。

もちろん同じ風景を見ても、その目に映る色彩は人それぞれだろう。

目の前に立つ、地主様を見上げる。

そんな自分に気が付く。

地主様は逸らさずに見つめて下さった。

そう思ったからそつと目蓋を伏せた。

また、風が吹いた。

森のたいなる意味たちから、それで良いのだと言ってもらえて
る気がした。

61 真の森の神と真白き光（後書き）

『同じものを見たならば』

魔女っこ、ちょっと自覚してきたかもです。

熱気に当てられて、少々ほうけておりますが。

自分の感情を拾い上げたようです。

少しだけ。

62 祝福さずける森の神と女神

皆の歓声がひとしきりおさまる頃、頭を下げる。

村長さんが進行を促すように、声を張り上げた。

『さあ、今年も無事に森の神と女神を迎えることが出来た！ お二人ともから祝福をさずけていただくとしよう！』

それから地主様に付き添われるようにして、慎重にやぐらに登った。

確かに階段になっていて助かった。

これがはしごだったら、目も当てられない。

慎重に慎重に。

杖は階段の登り口に立てかけて、手すりに掴まりながら足を運んだ。

地主様が横に立ち、腕を回して肩を支えてくれている。

一人で登れると言い張ったが、相手にされなかった。

確かに強がりであったことを認めるしかない。

階段は全部で十段以上あった。

思っていたよりもずい分高い。

それからは怖くなって数えるのを止めてしまった。

足を運ぶ方だけに集中するに限る。

[illegible]

『ありがとうございます』

どうにか登りきり、地主様を見上げたが頷いただけで、体が離れる気配はなかった。

そのまま、やぐらの真ん中まで付き添われて行つた。結構、広い。

私の部屋より、少し狭いくらいだ。

そこには、大きな籠がふたつ用意されていた。

ひとつは乾燥させたリユウダの花。

五つの花弁が可愛らしく、花ごと散るので形が壊れにくいし、何よりその効能が素晴らしい。

この香りをたとえば安眠をもたらし、病も遠ざけると言われている。

それともうひとつは、クルミを焼き込んだお菓子。

きれいにひとつひとつ、布でくるのである。

布はみんなで持ち寄ったもので、色とりどりそれぞれ味のある出来栄えだ。

壊れてしまってもいいように、お菓子は大きめの塊りで焼かれてあるのだそうだ。

おかみさん達がそう、教えてくれた。

崩れてもちょうど一口分になるように、だそうだ。抜かりがない。

本当はクルミだけをまいていたそうだが、いつのまにかお菓子に

変化したらしい。

おばあちゃんの頃はすでにお菓子だったそうだから、ずいぶん前にそうなったのだと思う。

私はお菓子の方が嬉しい。クルミだって嬉しかろう。

側には手籠が用意されていた。

そこに私はお菓子を、地主様はお花をつめる。

籠は結構大きくて、樽一つ分くらいはある。

これは頑張らないといけない。

地主様と顔を見合わせ、無言のまま頷きあった。せつせと詰める。

やぐらから顔を出すと、既にみんな待っていた。

まずは小さい子達から、やぐらのすぐ近くで待っている。

「魔女っこ、魔女っこ、お菓子を早く、ちょうだいな！」

リュレイとキャレイが大きな声で、歌うように催促している。

それにつられて、他の子達も同じように言い出した。

小さな体からあんなにも大きな声が出るなんて、すごい。

感心してしまう。

「違うだろう、森の神様と女神様だろう！」

そう言い直しているのは、少しお兄さんの子だ。

「そうだったね」

「今日、魔女っ子は森の女神様。地主様は、森の神様なのだったね」

「だったら」

「せえの！」

『森の神様、女神様。お菓子とお花をください、ください、くださいな!!!』

その子供たちの掛け声を合図に、思い切ってお菓子を降らせた。

[illegible]

雲の上から雨を降らせるのって、きっとこんな気持ちなのかもしれない。

木々や草花たちが喜んで恵みの雨を受ける。
その様子に微笑み、満足を覚えながら雨を。

それはとても素敵だ。

小さい子たちから順番に前に並び、行き渡ったら、大人たちが前に出る。

スレン様とリディアンナ様にも、えいっとお菓子を降らせた。お二人共も、良い笑顔を見せてくれた。

それから。

何故か隣同士で恵みを受けるミルアとエルさんにも、お菓子とお花を降らせた。

そういえばミルアが誰に腕輪をあげるのか、聞いていなかった。

そういうことなのかもしれない、と思った。

後でミルアに聞くことにする。

[illegible]

何故だか呼ばれたような気がして、そちらに視線を落とすとジェスと目があつた。

ジェスは両手をこちらに伸ばし、大きく広げている。何だか泣き出しそうな笑顔に見える。

そちらにもお菓子を、と思つたら籠を取り上げられた。代わりに花が入つた籠を押し付けられていた。

——地主様に。

なんだろうと思って訝しんで見上げた。

仮面の横顔は何を考えているのか、いつも以上に解らなかった。

ともかく、ジェスにはお花を振らせてみた。

くるくると風に吹かれて、お花は頭上をかすめて行ってしまうよう
うだ。

うふふ、と思う。

何度見てもいい。

お花が風に舞う様を見守る。

地主様は無言でただ、立っている。

どうしたのだろうかと見上げた。

それからおもむろに、籠の中のお菓子をわっしと一掴みした。

何と！

地主様ときたらそれを、ものすごい勢いで振りかぶって、ジェスにお菓子を投げつけたのだ！

ええ！？

驚く。

だがジェスもジェスだった。

しっかりと受け止めて、地主様を睨んでいる。

周りの人たちも遠巻きにして、何やらニヤニヤしているように見える。

何だろう、二人とも。

男の人同士、なにやら仲がいいような気がした。

62 祝福さずける森の神と女神（後書き）

『やぐらの上で。』

魔女っこ目線だと、なかなか話が……。

変な方向に進む気がします。お祭りは滞りなく進んでおります。

地主、心が狭い。

63 嘘つきな神と純粹な女神

カルヴィナは、実に楽しそうだった。

朝方の不機嫌さはすっかり収まったようだ。

今は目の前の物珍しさに夢中で、昨日のことは一旦忘れていられるらしい。

そのままこの楽しい記憶に上乗せされて、不愉快な記憶は封じてくれとも祈ってみる。

正直、ぐずられるのは苦手だ。

……無理やり言うことを聞かせたくなる。

そうなたらまた、ややこしい事になる。間違いない。それは避けたい。

なんにせよ、生き生きしているカルヴィナはいい。

その横顔を盗み見ながら、花を舞い降らせていた。

ふと、視界の端に不愉快な人影が掠めた。

それは下からカルヴィナを見つめている。

カルヴィナは気がつかない。

奴の視線から遮るべく、カルヴィナに寄り添うようにしていた。

やがて奴は両手をこちらに向けた。

こちらにも菓子をと催促するかのよう。

カルヴィナも気がついて、奴こと村長のせがれの方を向いた。

それとほぼ同時に、カルヴィナから籠を取り上げていた。

その代わりに、すかさず花籠を押しつけてしまう。

菓子包みをひとつ掴むと、勢い付けて奴へと振りかぶった。

その額の当たりを目掛けたのだが、狙ったように衝突はしなかった。

奴が受け止めたからだ。

ちっと心の中で舌打ちする。

奴はこちらを恨めしそうに見上げて来た。

村長のせがれには、森の神から直々に祝福をさずけてやったのだ。ありがたいと思え。

菓子を手にした者は、後ろの者に場所を譲り渡してやるのが礼儀だ。

さっさと場所を空けてやるがいい。

やぐらの高みから見下ろす。

村長のせがれは祝福を望む人の波に押しやられ、やぐらからは遠ざかって行った。

だが、その視線は俺ではなくカルヴィナへと向けられていた。すぎるように。

あいつは諦めていない。

そう思わせるに充分な執着を感じ取る。油断ならない。

当のカルヴィナは気がついてはいないようだが。

カルヴィナはその様子を不思議そうに見守っていたが、何も尋ねてはこなかった。

俺と村長のせがれを交互に眺めただけだ。

それよりも手箆の中の花に集中しだした。

……それはそれでどうかと思った。

[illegible]

カルヴィナは菓子だけをまくより、花もまいてみるのも楽しいと判断したらしい。

たちまち、花を降らせる事に夢中になったようだ。

手のひらに慎重に花をすくうと、弧を描くように腕を空に滑らせる。

うっとりとその風に舞う様を眺めながら、花籠から降らせ続ける。

手籠の花が無くなると、せつせと大籠からかき入れる。

籠にたつぷりと用意された花に、両手を突っ込むカルヴィナの表情は恍惚としていた。

そのまま大きな籠へと、腕が埋まってしまいう程に身を乗り出して
いる。

先程の村長のせがれの熱の込められた視線も、花の感触の前には忘れ去られたようだった。

杖がないので、ふらつきながら立ち位置に戻ろうとする。

俺もそれに合わせて、さりげなく菓子を補充し、戻るときはカルヴィナの背を支えた。

先ほどニヤついていたスレンに、ほんの少しだけなら感謝してやってもいいと思えた。

いよいよ手籠の中で最後、となった。

惜しむようにゆっくりと、ていねいに菓子をまく。

カルヴィナも同じようだ。

最初の頃は景気良く舞い降らせていたのだから、おかしなものだ。

大籠いっぱいを用意された菓子も花も、意地でもまいてやらねばと思わせるに充分な量だったからだ。

それも終わる。

二人、言葉にして打ち合わせずとも、最後のひとまきは頷きあつてから降らせた。

それから空になった籠を持ち上げて、底が見えるように広場を見渡した。

拍手がわき起こる。

労いの意を込められた、拍手だと思った。

それに手を振って応え、手すりから離れた。

『少し、休んでから降りるか』

くたびれたのだろう。当然だ。

やぐらは快適に設えられていた。

森の神を労うために、酒も用意してある。

危なかつた。

村長のせがれは自分が森の神の役をやるからこそ、余裕ぶりだったのだと気がつく。

カルヴィナが注いでくれた杯を受け取った。

舌に残る。

俺にしてみれば甘すぎる酒だが、娘には口当たりがよからう。それは氣遣いと見せかけて、男のよからぬ策にしか俺には思えない。

忌々しく思い、ため息と共に吐き出した。

『俺はあのオークの木の氣分を味わった。俺に実を降らせたあの氣持ちがよく解った』

許し難い気持ちで、カルヴィナに近づく男を攻撃する。
撃退するべく、実を振らせるしかなかった。
思わずもらした感想に、カルヴィナの表情が明るくなった。

なんだ？

何がお氣に召したのか。

『私も、木の気持ち少し味わえた氣がします！ クリとかクルミとか。食べられる実がなる木の気持ち』

うつとりとそう呟くカルヴィナに尋ねる。

『食べられる実がなるのがいい、のか？』

『はい。私自身、いつも助けてもらいましたから。そうなりたいと思います』

カルヴィナは力一杯頷いて答える。
森での生活は厳しいものだ。

ましてや男手もない、非力なカルヴィナと大魔女との生活だ。
二人は知恵を出し合いながら、その日その日を暮らしていたに違いない。

食うに事欠く事もあったのだろう。

まだまだ、丸みからは遠い華奢な肢体。
その薄い身体を見ているうち、何故だか心が軋みを上げる。

（ばあさんが生きているうちに、気が付いてやれば良かった）

そんな後悔にも似た、自責の念にかられる。
不意に囚われた悲しみを沈めようと、杯を呷った。

『女性はどうだろう』

花を咲かせ、実をつける。

命を生み出すその様は、まさにカルヴィナの望む姿そのものだと
言えるだろう。

『そうでしょうか？　でしたら、嬉しいです』

微笑みながら、自分の好きな木について話すカルヴィナは饒舌だった。

俺なら考えもつかない事を言う。

物の見方がまるきり違うようだと思わせた。
だが不快ではなかった。

むしろ心地よい。

小鳥が陽ざしの中でさえずるかのようだ。

足を投げ出してくつろぎ、にこにこしながら俺に語りかけてくる。
美しく可憐な小鳥。

小鳥はたいそう可愛らしく、魅惑的な手触りをしている。

『あちこちに花が付いている』

そう言うのと、カルヴィナは自身を手で払うようにした。

『ありがとうございます。取れました？』

『取れていないな』

嘘だった。

すかさず手を伸ばし、頭や背を撫で払うようにしながら引き寄せ
る。

カルヴィナは大人しくされるがままだ。
無防備な。

あちらこちらに、花が付いているから。

俺の意図など深く勘ぐりもせず、素直に受け取っているのだろう。
隙あらば触れようとする手に、何故なんの警戒も抱かないのか謎
だった。

この娘はよくも悪くも、言葉通りに物事を受け取る。
言いくるめやすい。
そこに付け込む自分が卑しい。

それとも昨晚ほどの触れ合いくらいでは、この娘に男を意識させるに到らないのか。

杯に酒を注ぎ、差し出す。

『おまえも飲むといい』

『でも、それはお酒なのではありませんか？』

『これならおまえが飲んでも問題なさそうだ。充分に薄めてある。それに、これを飲み干すまで、やぐらを降りてはならないそうだ』

『え！　そうなのですか。初めてやぐらに上がったので知りませんでした』

カルヴィナは驚きながらも、俄然はりきり出した。

[illegible]

瞳が挑戦的に杯を見つめている。

籠の中身が空になるまで。

瓶の中身が空になるまで。

やぐらから降りてならない。

それが森の神役と乙女の役割だと、使命感を覚えたらしい。

——大魔女の娘は、なぜこうも簡単に騙されるのか。

63 嘘つきな神と純粋な女神（後書き）

『俺以外に……。』

仮たいとるの続きは次回です。

なんだ、それ。

いや、ねたばれゝなので。

わっるいオトコがいますね。

全然、大丈夫じゃない状況なんだよ、魔女っこ。

誰も教えてやれない。

64 やぐらの二人(前書き)

ええと〜。

軽目に R15 です。

64 やぐらの二人

やぐらの中は静かだった。

下の方からは楽しそうな笑い声が上がってくる。

それでもここは独特の静けさが支配していた。

皆がここを、神聖な場所として設えてくれたからだとも思う。

天井からは代々受け継いできた織り布が張り巡らされ、神秘的で綺麗だった。

今年また新たに加えられた物もある。

それは女達が想いを込めて刺繍した物だ。

その紋様は主に森の恵みを図案化してある。

木や、花実や、小鳥や、鹿や獣。

皆の想いで出来上がった、森の奥深くの神様のすみか。

それが、このやぐらだ。

• •		
*	•	○
• •		
•	•	• •
○		
•	*	
• •	• •	
*	•	○
• •		
•	•	
○	• •	
• •	*	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	*	
	• •	
	•	○
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	*	
	• •	
	•	○
	•	

『地主様。でしたら森に住めばいいと思います』

大まじめにそう提案する。

それでも、どうにかお酒を飲み干すことが出来た。

良かった。

お役目をやり遂げたに違いない。

もう、やぐらからは、降りたい。

もう地主様との会話も尽きた。

それなのに仮面越しの地主様の視線は、怖いくらい鋭い。

何か言いたいことがあるに違いない。緊張する。

身構えて待つが、地主様は何も仰らないままだった。

ついに沈黙に耐え切れなくなって、言葉を発した。

『えっと、その。お酒、飲み切れましたね?』

『そのようだな』

『地主様のおかげです。ありがとうございます』

『……いや』

駄目だ。

何を言って会話は続かない。

と言うよりもむしろ、地主様にはその意思がないようだ、というのが正しい気がした。

そつとため息をもらしてから、立ち上がるべく手すりにすがる。

『では、地主様。やぐらから降りるとしませんか?』

『……。』

『えっと。シュ、シュディマライ・ヤ・エルマは、まだこちらに？』
『……。』

なんの返答も無い。悲しい。

虚しくなったが、その感情に浸っていても仕方があるまい。
後ろに這いずってから、ゆっくりと立ち上がった。

『それではお先に失礼致します。なんでしたら、お酒のお代わりをお持ちいたしましょうか？』

『いや。充分だ。おまえは降りるのか？』

『はい。ジェスも待っていると言っていましたから……。』

何の気も無しに、理由をあげた。

それと同時に。

地主様が急に立ち上がった。

怖くなり慌てて、やぐらから降りるべく、背を向けた。

『失礼いたします』

『行くな』

『え、でも。ジェス、待っているから』

『行くな』

『……。』

今度は私が押し黙る番だった。

いつのまにか腕に手が食い込み、痛みを訴える。

上腕をひねるようにされ、無理やり引き戻された。

『あの男はおまえを嫁にと望んでいる。それに応えてやる気なのか？』

静かに見据えられているはずなのに、こんなにも熱いと感じたことは
ない。

これは恐怖だった。

そうとしか表現できない。

気が付けば、体は逃げを打つべく行動を起こしていた。

『あ……っ！』

ちいさく悲鳴を上げながら、やぐらの階段を目指し駆け出す――。

それも気持ちの上、
だけでしかなかった。

[illegible]

背に温かな体温を感じた。

衣服一枚を隔てていてさえも、伝わってくる温かさに身が竦む。

何故かしら、カラダが跳ね上がるくらいに熱く感じた。

背後から回された両腕が、カラダに巻きついてくる。

拘束されてしまった。

「嫌、嫌、嫌……。」

そこから抜け出さねばと、必死でもがく。

すると、舌打ちされた。
それに打ちのめされる。

地主様に、解放する気がないのだと言われたも同じだった。

『付け上がらせたものだな』

その一言が更に私に追い打ちをかけた。

ぞつとするような響きだった。

耳元に溜め息と共に掠める眩き。

それは低く、何の感情も含んでいないかのような声音だった。
震えがくる。

言葉の意味を図りかねて、恐るおそる身体を振って、地主様を見上げた。

『おまえの主は誰か。――解っているのか？』

そうだった。

逆らう事は許されないだろう。

思い起こせば無礼な行いをしたものだ。

そう自分を省みる。

それと同時に哀しくなった。

どんな事をされても、逆らう権利は私には無いのだと言われたも
同然だからだ。

鋭く息を飲む。

自分でもおかしく感じるくらい、息継ぎがうまく出来なくなった。

胸を踏みつけにされたら、きつとこうなる。

あんまり馴れ馴れしくしているから、不快に思われたのだ。
自分の浅ましさに泣けてくる。

私は楽しかった。

でも、地主様は違ったのだ。

そう思ったら涙が止まらなくなった。

足を温かさと冷たさが、同時にかすめ上げたものだから、身をすくませた。

衣装の裾がまくれ上がったのだ。

足の膝から太腿にかけてを、下から一気に撫で上げられた。

そこには一直線に走る傷痕があつて、大きく皮膚が引きつれてしまっている。

『この足で踊ろうというのか？』

首を横に振った。

私は右脚を引き摺らねば歩けない。

忘れた事なんかない。

踊れる訳がない。

言われなくても知っている。

でも、地主様はわざわざ言う。

身の程を知れというみたいに。

おまえみたいな者が泣くと腹が立つ。

足を引きずって歩く障害者の。

みっともない、みすばらしい娘。

最初に宣告されていたではないか。

忘れたわけではないが、失念していた。

あんまりお祭りが楽しくて……。

本当は忘れていてはならなかったのだ。

身の程をわきまえないでいるから、こうやって地主様の不興を買う羽目になるのだ。

私は本当に学習しないと反省しても、遅かったようだ。

ただ体を丸めるようにして、胸を押さえた。

ぎゅうぎゅうに締め付けられて苦しかったから。

痛い。

どうしよう。

息を吸い込むだけでも、痛い。

涙があふれる。

『あの男に応えてやるというのは……いう事だ。解っているのか？』

『答える？』

『応える』

地主様の手が傷跡をなぞり上げて行く。

64 やぐらの二人（後書き）

『俺以外に嫁に』

イケナイように。

しちゃうの？

レオナル！

そんな仮タイトルの続きでした。

65 狂暴な獣と魔女の娘（前書き）

少々 乱暴なシーンがございます。

不快な方は ご遠慮ください。

65 狂暴な獣と魔女の娘

ジェスが待っているから。

カルヴィナが他の男の名を呼んだ途端、俺の中で何かがブチ切れた。

やぐらを降りる理由がそれなのか？

あの男が一方的に取り付けた約束を守るために？

強烈なまでの怒りが沸き上がり、押え付ける事など不可能だった。

逃げを打つカルヴィナを捕らえると、後ろから羽交い締めにする。

[illegible]

『おばあちゃん、怖いよ、助けて』

人は窮地に陥ると、自然、一番頼りにしている者に縋るものだ。

予測は付いていた。

それなのに、カルヴィナが助けを求める相手にすら嫉妬した。

これが予想外の相手だったら、自分はこの娘をどうしてしまふか
予想もつかなかった。

おそらくどこか確実に、この程度では済みはしない。

力の差にモノを言わせて身も心もズタズタに引き裂いてしまったかもしれない。

後先も考えず、己の嵐をその小さな体に知らしめてやればいい。

そんな狂暴な想いに支配される。

振り払えなかった。

傷痕をたどりながら右足を撫で上げる。

『この足で踊ろうというのか？』

カルヴィナは首を振っている。

か弱く、ふるふると震え、泣きじゃくりながら。

『恨むのなら大魔女を恨むのだな。こんな男に借りを残したまま亡くなったのだから』

嫉妬でどうにかなりそうだった。

怒りのあまり、破滅的な行いをしている自覚はあった。

だが、止まらない。

『仕える主の異常時だというのに、おまえは何をしてくれた？ 大魔女の娘』

今更、そんな事を持ち出すなんてどうかしている。

それでしか縛る方法の無い自分にも笑える。

ここ最近まで、主従の関係など無いのだと思わせるようなそぶりを務めておいて、いざとなったならそれを持ち出す。

思えば希薄な間柄だ。

そもそも始まりからして、それだった。

だったら。

いまさら。

何を取り繕う必要があるのか。

『ジェスは私に対して罪悪感を持っているだけです。ただ、それだけです。だから、もういいよって伝えたくて。他にジェスの事、待っている子がいるのに……。だから！　お願いです、地主様。だから、降りなきゃ』

もがいて腕から逃れようとする身体を、思い切り抱き込んだ。
恐怖からか身動きが弱くなった。

そんなカルヴィナの身体を抱え上げ、敷き織り物へと連れ戻した。
そうやって腰下ろせば、やぐらの囲いに阻まれて、外からは見えなくなるだろう。

『あ、あの、地主様を待っている子も、いると思います。一緒に踊って欲しくて。だから降りましょう？』

見当違いの事ばかりを紡ぎ出す、その口を黙らせるにはどうしたらいい？

組み敷いて、その白い喉がのけ反る様を見定めていた。
差し出されるがごとく誘う、そのどこに食らいついてやろうかと。

口元を寄せるも、仮面が邪魔だった。
仮面の下で唸る。

文字通り、ただの獣でしかない。

甘く香る肌を前に、飢えはつのるばかりだ。

『地主様？ どうされたの？ お祭り、本当は嫌だったからお怒りなのですか？ 無理やり付き合わせてごめんなさい』

ただ、ひたすらに詫びて詫びて許しを請う。

それすらも腹立たしく、獣の本性をむき出しにさせるだけだった。

泣き出したカルヴィナの泣き声も涙も、奪い尽くしてやりたいと思った。

だから宣言する。

『おまえはもう俺以外に嫁に行けないようにする』

顎をつかみ、そらせないようにして見下ろす娘は、忙しくまばたきを繰り返している。

『お嫁に、行けない？』

見開かれた瞳が瞬くと、涙がひとしずく零れ落ちた。

『もともと……どこの誰にも、行けませんよ？』

魔女ですからと不思議そうに告げられた。

何故、俺がそのような事を言い出すのか、知りもしない無垢な娘。

まるで理解できないといった表情は、最初に連れてきた時から全く変わりが無いものだった。

65 狂暴な獣と魔女の娘（後書き）

『あああああ。レオナル、取り返しつかなくなるよ』

もう少し地主には冷静になってもらいたかったのですが。

無理でした。

あああああ。

下書き無視ですよ、また。

終わりから遠ざかる。

66 シュディマライ・ヤ・エルマと真白き光

沈黙が怖い。

地主様は何も仰ってはくだらない。

仮面の奥の眼差しは何をうつしているのかも計れない。

先ほど、地主様に言われた言葉を繰り返す。

地主様以外に、お嫁に行けないようにするって仰った。
もしかしたら聞き間違いかもしれない。

だとしたら、きっと、見当違いの答え方をした。

やぐらの天井に飾られた色とりどりの刺繍飾りが、よく見えた。
それらからも見下ろされ、身動きが取れない。
その事をぼんやりと思う。

私は、今、身動きが取れない――。

その事に衝撃を覚えるよりも、どうしてだろうかなどと疑問に思う。

地主様に押さえ付けられているからこそその、この有り様なのだが。

地主様はどうして怒り出してしまったのだろうか？

ああ、そうか。

私がお祭りに無理やり付き合わせて、貴重な時間を奪うようなマネをしたせいだ。

息が詰まる。

ふえっと、抑えきれない嗚咽が漏れた。

慌てて唇を噛み締めて、堪えようとしても遅かった。

ぎゅっと目蓋を閉じると、眦から涙も押し出されてしまった。

頬をゆっくりと伝い落ちるのを感じながら、何故じぶんが泣いているのかと問いかけた。

地主様が怖いせいもある。

だがそれ以上に悲しいのは、他にあった。

地主様が怒り出したのは、お祭りが楽しくなかったからかもしれない。

そう思い当たったからだ。

私は楽しかった。

準備も含めて、いろいろあったけれども、すごく楽しかった。

でも地主様はそうでなかったのかもしれない。

仮面が外れなくなるという、説明のつかない事態になったのも、元を正せば私にあるのかもしれない。

それなのに、魔女の娘は何の役にも立てないでいる。

いろいろな可能性を思っただけ。

地主様からは何の言葉も返らない。

それが答えだと言うことだろうか。

もう口をきくのも嫌なくらいなのかもしれない。

『もう……も、しわけ』

申し訳ありませんと言いかけて、唇を噛んだ。

『泣かないでくれ』

懇願の響き。

そろそろと瞳をあければ、飛び込んできたのは黒い仮面だった。その獣の毛並みを象った、彫りの向こうにある眼差しとぶつかる。しばし見つめ合う。

先に視線を外したのは、地主様の方だった。

瞬きで涙を払うと、眼差しで追いかける。

『地主様？』

『……』

やはり返事はない。
では、地主様ではない？
何故かそう思った。

『シュディマライ・ヤ・エルマ？』

びくりと地主様の肩が揺れた。

『シュディマライ・ヤ・エルマ』

もう一度呼んだ。

今度は確信を込めて。

そうだ。

これは地主様であって、地主様では無い。
そんな気がした。

仮面に込められた何かに、地主様は突き動かされているのかもしれない。

『……真白き光』

そう呼ばれた。

胸のどこかが軽くなった気がした。

そうだ。やっぱりそうだ。

シュディマライ・ヤ・エルマだった。

彼は飢えた獣なのだった。

乙女がその傍らに在らなければ。

片方の手首が自由になっていた。

地主様の右手に頬を包むようにされる。

かと思えば指先が、唇をなぞる。

くすぐったくて、思わず自由になった手で止めようとした。

地主様の手に手を重ねる。

そうやって触れたけれども、押さえることは出来なかった。

『シュディマライ・ヤ・エルマ。私を……食べるの？ 食べたら、
飢えは収まるの？』

これはお祭りの続きだと思ったから、そう口にした。
食べるという表現が果たして相応しいのかどうかは、解らない。

『……言っている意味が解っているのか？』

地主様——シュディマライ・ヤ・エルマが唸るように言った。

仮面が近づく。

仮面の紐が落ちて、首元をくすぐる。

やはり、紐が緩んでも仮面は外れないらしい。

房飾りに手を伸ばす。

弄ぶように引くと、仮面がもっと近づいた。

肌をかすめるほどに。

房飾りを辿り仮面に手を伸ばすと、地主様の髪にたどり着く。

地主様の髪の毛は思った以上に柔らかかった。

艶やかに光を反射する、あのオークの実と同じ色から、もっと硬さを想像していたのに違っていった。

思わずもっと絡めようと、指先を伸ばしてしまう。

さ迷わせた指先を捕われた。

動きを止められたのだ。

引こうとしても遅かった。

またしても目を閉じてしまった。

だが、次の瞬間にはすぐさま見開く。

覚えのあるあたたかな弾力に、指先が包まれていた驚きから。

まずは人さし指の先を、次いでは中指の腹を伝い、薬指の根元から、手のひらへと温かさが移動していく。

手のひらに頬をすり寄せられるようにされてから、その中心に唇を押し当てられていた。

熱が手のひらから、体の奥深くまでにじんわりと伝わって行くの

を感じる。

その熱をやり過ぎせなくなって、それを伝えようとどうにか抗う。親指で彼の唇を押しとどめたつもりだったが、ただその輪郭を確かめただけに過ぎなかった。

そつと這わせただけの指先にまた、唇が押し当てられる。

おとこのひとに、初めて触れたと思える瞬間だった。

『あ……っ、や』

もはや言葉に何てならない。

仮面がぐつと近づく。

だが獣を模した作りが、一定以上の距離を保たせる。

地主様にはこれ以上触れる事はない。

そつと仮面にも指先を這わせる。

伝わるのは乾いた木の感触のみ。

その時——初めて仮面が邪魔だと思った。

66 シュディマライ・ヤ・エルマと真白き光（後書き）

『気力も体力も根こそぎ使い果たしました』

幼いながらに使う色気とやらを表現せよ。

などという指令を自分に出してみたがため。

れ、れおなる……。

次、パスするんで頼んだ。

67 疾風まとう獣とレオナル

カルヴィナの指先が頬を伝う。

まるで俺という形を確かめてるかのような、幼い好奇心に突き動かされたかのような。

そう思うのが自然だろう。

だがそう思いたくとも、そう思えなかった。

どうしてか、その指先に拙いながらも色気を感じてしまうのは、俺の欲望のなせる技なのかもしれない。

この娘は本当に理解していないのか？

その眼差しと指先が、どれほど目の前の獣を刺激するのか、毛の先ほども考えが及ばないのか？

潤んだ眼差しに加えて、薄く開かれた唇が強く何かを訴えてくる。大きくはだけた胸元もさることながら、もがいたせいで足も見えている。

先程、俺が撫で上げた傷跡が日にさらされているのだ。

今一度、その手触りを確かめたい――。

温かく滑らかな、娘の手触りがすぐそこにある。

それよりも、目の前に差し出された首筋に牙を立て、味わうべきか。

獣は獲物のどこに食らいつくか、頭がいつぱいだ。それを見透かしたように、名を呼ばれた。

『シュディマライ・ヤ・エルマ？』

なるほど。

俺は獣だと。

その通りだった。見抜かれたのだ。

そう心で肯定する。

『シュディマライ・ヤ・エルマ』

今度は確信を込めて呼ばれた気がする。

間違いないと。

だから答えた。

『……真白き光』

そうだ。俺はシュディマライ・ヤ・エルマの仮面に支配されている。
疾風まとう暗闇という名の、ただの森の獣であつた彼に。

その状態で自らを差し出すような、恐ろしい事を訊く。

『シュディマライ・ヤ・エルマ。私を……食べるの？ 食べたらず
えは収まるの？』

俺の言葉を真に受け、その事に傷つく少女が横たわっている。

男の力に抗えず、無力さをあらわに涙する姿を存分に眺る。

闇を映した瞳を占拠しているのは、紛れも無く俺という存在だと
確信する。

また泣かせてしまったという罪悪感と共に、胸に居座るのは何と

も身勝手な想い。

『シュディマライ・ヤ・エルマ。満たされないのならば、その、私を食べ、食べ、ればお怒りは収まりますか……？』

たどたどしくも、懸命に尋ねてくる。

カルヴィナは俺をシュディマライ・ヤ・エルマと捉えているようだ。

俺の言動が、仮面に魅入られた者の所業と信じているのだろう。いや。

むしろそうであってくれという、懇願にも似た響きに愛しさと欲望が同時に募る。

『いいや。おまえの命を奪うことなど考えられない。真白き光』

祭りの儀式の続きさながらに、繰り出された言葉に乗って返事をした。

カルヴィナは小さく安堵して、俺に微笑みかけてくれた。

俺であって、俺でない存在の仕業。

その事にいくらか安心したようだった。

獣そのものの存在の眼前に晒され、カルヴィナは生きた心地がしなかったのだろう。

俺自身も抑えきれない自分に焦りを覚えていた。

だが、とてもじゃないが制御できそうもなかった。

その事に焦りを覚えつつも、野に放たれた獣を応援してやりたい気持ちも同時にあった。

獣の思うように貪らせてやりたい。

手綱など最初から無かったものとし、獣の本能の赴くまま突き進

ませてしまいたいと願う。

その唇を瑞々しい肌を全て、魂ごと奪い尽くしたい、というのが本音だ。

それはシュディマライ・ヤ・エルマの望みなのか？

そうかもしれない。

だが、それだけではない。
済まされない。

それは俺の願望にほかならない。
俺の。

ザカリア・レオナル・ロウニアの、偽らざる本音だ。

『どうかしたの？ シュディマライ・ヤ・エ……。』

ゆつくりと、しかし大きく首を横に降ってみせる。

俺を疾風まとう獣と呼ぼうとした唇を封じるために、親指を当てて制した。

『レオナルだ、カルヴィナ』

『地主様？』

『レオナル。呼んで、呼び戻してくれ。俺を、ザカリア・レオナル・ロウニアを』

見下ろしたまま告げると、カルヴィナはおずおずと頷いてくれた。
押し倒した身体を抱き起こし、膝に乗せる。

とたんに伝わってくる柔らかさに、再び押し戻してしまいそうになるのを堪えた。

恥ずかしいのだろう。

居心地悪そうに、俯き加減で身をよじるカルヴィナの背に手を当てる。

支えるようにし、向き合わせるために項も支えた。

『カルヴィナ。俺を呼び戻してくれ』

赤く染まった耳元に、懇願を囁き込む。

同時に柔らかく抱き込み、僅かに震える身体をさすった。

小さく頷いたのが伝わってくる。

いくらか力をほどき、カルヴィナを見逃すまいとのぞき込んだ。

『レ、レオナル様』

かすれる声がそっと名を呼んでくれた。

だが、まだ足りない。

まだ、獣から戻れない。

促すように首を横に振って見せた。

『まだ、だ。まだ戻れない。カルヴィナ』

『レオナル様』

『様はいらない。カルヴィナ、俺に与えられた名をすべて呼んでくれるか？』

こくんと小さく頷くカルヴィナを抱き寄せ、額同士を合わせる。

仮面越しにもカルヴィナの熱が伝わってくるようだった。

その時を聞き逃すまいと瞳を閉じる。

祈りの言葉を待つのは仮面に支配された男か、獣か。

——自分の中では答えが出ている。

『ザカリヤ・レオナル・ロウニア』

『ああ、そうだ。カルヴィナ』

呼び声に答える。

それが答えだ。

[illegible]

目蓋をあけ、光を受け入れる。

とたんに闇は去つたように思った。

肌に違和感を覚える。

それは違和感というよりも、解放感だった。

カルヴィナも密着していた分、気づいたのだろう。

とうに緩んだ仮面の紐が引かれるのを感じた。

カルヴィナだった。

二人の胸元に挟まれるようにして、仮面が滑り落ちていた。

⌋
⋮
⌋

⋮

互いに無言で、しかし笑顔で見つめ合う。

仮面を見て、また顔を見合わせる。

『カルヴィナ。俺は戻れたようだ』

『はい。地主様』

『違う』

俺を地主と呼んだ唇を、口で封じた。

「……うん、や……じぬ……。」

『違う』

俺をちゃんと名で呼ばないのなら、また獣に戻ってやる。

それを思い知らせるために、甘い仕置きを続けた。

頑ななカルヴィナの抵抗が止むまで、ずっとそうしていた。

••	••
✱	•
••	○
•	•
○	••
•	✱
••	••
✱	•
••	○
•	•
○	••
••	✱
	••
	•
	○
	•
	••
	✱
	••
	•
	○
	••
	•
	○
	•
	••
	✱
	••
	•
	○
	•

『そういう俺は何ひとつ、おまえに申し込んでいなかったな』

『え？ 申し込む、ですか？』

すっかり呼吸を乱してしまったカルヴィナが、たどたどしく尋ね返してきた。

これ以上ここに居ては、取り返しのつかない事をしでかしそうになる己を諫めた。

今はまだここまでと言ひ聞かせる。

『そうだ。俺と一緒に祭りに参加して欲しいとも、踊って欲しいとも言っていないかった。カルヴィナ、俺と踊ってくれるか?』

『踊れません、地……レオナルド様。誰とも……。この足では』

『大丈夫だ。嫌ではないのだな？』

おそろおそろといった様子で、カルヴィナは頷く。

『だったら何の問題もない』

カルヴィナがまたあれこれ考え始める前に早くと、その身体を抱き上げた。

67 疾風まとう獣とレオナル（後書き）

『もはや使い果たしたなんてもんじゃない』

レオナル、頑張りました。

いろいろ問題点はありますが。

68 乙女を求める獣たち

地主様に抱きかかえられて、やぐらを降りる。

私はといえば揺れに身体を任せながら、手のかけどころに困っていた。

やたらと仮面を握り締めてみても、あまり何の助けにもならないのは分かっている。

それでも。

トン、トン、と地主様がひと足ごとに下りる度に、振動が伝わってくる。

最初はそれが心地よかった。

私の胸の鼓動と同じリズムだったから。

でも、だんだんと早まる鼓動とは合わなくなってしまう。

色々と意識が戻ってきているせいだと思う。

さつき、地主様に、たくさん……。

熱を与えられ、そして奪われた。

それだけじゃない。熱を呼び覚まされてしまったのだと思う。

そうして私の中でこもった熱は、地主様に吸い上げられるみたいだった。

地主様も同じに思ったかもしれない。

熱に浮かされながら、そんな事を思ったら自分が溶けてしまう気がした。

そんなお互いの熱を感じながら、ただ嵐が過ぎ去ってくれるのを待った。

もう、恥ずかしくて耐えられない。
俯くしかない。

そうなる、もっと彼に頬をすり寄せてしまうような格好になる
しで、いたたまれない。

『どうしたんだ、カルヴィナ？ 何だ。照れているのか？』

そんな事をさらりと言われて、額にまたあたたかなものが押し付けられた。

!!

私の頬は熱いなんてものじゃない。

動じてもない地主様に悔しさを覚えるのと同時に、こみ上げてくるのは説明のつかないもどかしさだった。

さすがは地主様だ。こんなこと、当たり前前にこなす。

大人の男の人らしい余裕っていうものに、私はすっかり怖気ついていた。

仮面を被ってしまう事にする。

今度は私が外れなくなる番だったら、いい気がする。

.	.
*	.
.	○
.	.
○	..
.	*
..	. .
*	.
..	○
.	.
○	..
. .	*
	. .
	.
	○
	.
	..
	*
	. .
	.
	○
	. .
	.
	○
	.
	..
	*
	. .
	.
	○
	.

乙女を求める獣の視線と交わった――。

地主様に言われた、謎かけみたいな言葉を反芻する。

..*..。..*..。..

身体に力が入らないまま地主様をぼんやりと見上げると、一瞬だけ視線をそらされた。

それもただ眺めた。

そこに置いてきぼりにされたかのような寂しさを覚えた。

だから無意識のうちに、眼差しですがっていたのだと思う。

それに気がついたように、地主様は視線を戻してくれた。

『そんな顔をするな』

どんな顔の事だろう？

顔を真っ赤にするなって言うことかと思い、頬に手を当てた。

ほてりを冷まそうとしてだったけれど、逆効果だとすぐに気がついた。

手のひらも、負けないくらい熱かったから。

『いや、違う、カルヴィナ……。』

抱え直され、ゆっくりと頬に当てた手を外された。

まだあのどこか熱の名残のある眼差しに、射すくめられる。

『どうしてこんな事をするのだと言いたそうだな』

それもある。

だから、ひとつ瞬いて答えた。

『俺も乙女を求める獣の視線と交わったのだ』

地主様は、ぽつりとそう漏らされた。

そのまま抱き上げられ『もう降りるぞ』と宣告されたのだ。

どうか熱よ冷めて。

そう願ってみても、余りにも時間が短すぎた。

だんだんと近づく、人々の楽しそうな笑い声が音楽に乗って、大きくなってくる。

皆に変に思われたらどうしよう。

生まれて初めて、自分の色以外の理由で人前に出たくないと思った。

『カルヴィナ』

揺れはもう収まっている。

私には大きいのだ。

落とさないように手で支える。

地主様はそんな私を見下ろしながら、もう一度名を呼んだ。

『カルヴィナ』

『……はい』

何かを伝えたそうな呼び声に、心動かされる。

地主様が何かを気にしておられる。

わずかながらも伝わる動揺が何なのか。

彼の視線にならってそちらを見た。

「――ジェス」

彼が立っていた。

いや。

ただ立っていたのではない。

待っていたのだ。

私を。

その姿は遠く過ぎ去ったあの日の、まだ幼かった彼にかぶった。

いつも何か言いたそうに、でもそれを飲み込むように唇を引き結んだ少年。

それが怒っているように見えるから、私はいつも怯えていた。

私を見ると不機嫌になるんだって、カラス娘は不吉だからって、

ずっと無言でそう言われている気がしたものだった。

でも違ったのだ。

今ならわかる。

彼はずっと私に何かを伝えたかったのだ。

それが上手く言葉に出来なくて、乱暴な仕草や物言いに繋がっていたのだ。

「ジェス」

彼の名を呼ぶと、たちまち地主様から不機嫌な気持ち伝わってきた。

驚いて地主様を見上げると、決まり悪そうに見下ろされたが、そらされることはなかった。

「エイメ。待っていた。ずっと」

ジェスが思い切るためにと、大きく息を飲み込んでから言ったのがわかった。

「俺と踊ってくれるよな？」

68 乙女を求める獣たち（後書き）

『獣の憩う場所』

獣が乙女を求めるように、乙女もまた。

そんなシーンが書きたいな、と早何年目でしようか。

お楽しみいただけますように！

69 勇気を出した乙女たち

そこにあるのは立派な青年の姿のはずなのに、私の脳裏に浮かぶのはまだ幼さの残る少年の残像だった。

引き結ばれた唇を眺めていたら、私も同じように引き結んでいた。それは決意の表れだと思うけれども、一体何を決めたらいいのか教えて欲しい。

誰に教えを乞おうというのか。

そこで浮かぶのはやっぱり、おばあちゃんだった。

おばあちゃん。

いつだってこの胸にある人を思い浮かべる。

おばあちゃんは確かに年齢から言えば、お年寄りかもしれないなかった。

けれど、私よりもうんと昔のことも、新しいことも知っている人だから。

この胸に渦巻く想いを表す言葉を、きっと知っているのもおばあちゃんだ。

でも私も知っていることがある。

おばあちゃんはこんな時、どう言うかということだ。

いつも不安で答えに惑うたび、おばあちゃんにすがった。すると必ず頭を優しく撫でながら、こう促される――。

『自分で自分に聞いてごらん？』

おばあちゃんはいつだって、答えを自分で出すようにと促してくれた。

それが正しかろうと間違つていようと、それが一番の答え。
 選択を人に任せてはならない。

一番正しいと思っ
てゐるおばあ
ちゃん、の答
えこそ最善に違
いない。そう信
じて疑わない私
の甘えは、やん
わりと、そして
きっぱりと突っ
ぱねられた。

だから私は自分に尋ねるしかない。

• •	
*	•
• •	○
•	•
○	• •
•	*
• •	• •
*	•
• •	○
•	•
○	• •
• •	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•

私も呼吸を整えるべく、意識して大きく息を吸い込んだ。

辺りは日が落ちかけている。

一昨日よりも、昨日よりも、日暮れが早いように感じる。

足はやに駆けてゆく実りの季節を惜しむ間にも、確実に遠ざかる何かを迎え入れられたら――。

まっさらな自分になれるだろうか。

ふとそんな祈りにも似た、儚い想いが浮かんで消えた。

入れ替わるように、ゆっくりと忍び寄る冬の気配が胸に沁みて、背筋が伸びる気がした。

「ジェス」

「言っただろう？ 待っていると」

「……うん」

「エイメ、待っていた。ずっと」

「ずっと？」

「ずっとだ」

ジェスは胸に手を当てると、ゆっくりとその場に跪く。

今この目の前にいる青年は、遠いあの日の少年であって、そうではないのだ。

どんなに瞬いたとしても戻ってこない日々。

いつかは彼とも一緒に風景を見たはずなのに。

冷たい風が頬を撫でながら吹く。

私はただ怯えていた。

ジェスは違うものを望んでいた。

そこに気が付けていたのなら。

ほんの少しだけで良かった。

俯いてしまわずに、勇気を出して眼差しを上げていたのなら。

——見えてきたものがあつたろうに。

それでも、重なったかもしれない想いを呼び起こしたいとは思わない。

真剣な眼差しに、どうしても応えられない等と言いついにくくなる。

罪悪感からだけではない。

我が身の可愛さからもだ。

自分で自分が嫌になる。

「……。」

胸が詰まり、言葉にも詰まった。
自分の状況も忘れて、真剣な眼差しから逃げないようにするだけで、精一杯だった。

背中がとても温かな事も馴染んで忘れていた。
声を掛けられるまで。

「カルヴィナ」

ものすごく改まった口調で名前を呼ばれた。
低く落ち着いた声の威力は半端ではない。
すぐさま答えねばという気持ちになってしまう。

「じぬ……っ、レ、レオナル様」

危ない。

慌てて口を噤んで、言い直した。

そうでなければ人前であろうとも、どんな目に合わされるか。
これは地主様の仕掛けてきた罠だ。

もうその手には乗らない。

先程さんざん思い知らされた。

用心深くなった私に、微かだが舌打ちが上から振ってくる。

危なかった。

こんなにも密着しているのに、それを本気で忘れていた。
自分の神経を疑う。

頭を振って、しっかりしろと自身を叱咤した。

仮面を構えて、いざという時に備える。

『ちゃんと名を呼ばなければ、俺はまた再び獣に戻ってしまう』

そこに至った理由を尋ねる暇も与えてもらえないまま、そんな風に押し付けられた理由を飲み込むしかなかった。

確かに名前は大事だ。

魔女の娘だもの。

よく心得ている。

仮面に宿る意思に支配されていたらしい、地主様の言い分はもつともだ。

だが、もう仮面は外れたのではなからうか？

それともシュディマライ・ヤ・エルマの御霊は、まだ地主様の奥深くにしがみついていると離れないのだろうか。

何といっても今日はお祭りだ。

そうやって今日は過ごそうと森の神様も考えたのだとしても、文句は言えない。

「カルヴィナ」

「じ、レ、レオナル様」

「カルヴィナ」

「レオナル様？」

試され……脅されている！

間違いなく、私は今、脅されているに違いない。

何が無だかよくわからないが、地主様の放つ氣迫にただならぬものを感じる。

頭の中がぐるぐるしてきた。

忙しなく呼吸を繰り返していると、視界の端を何かが掠めた。

そつと伺うと、いつの間にか出来た人垣の中、手を振るミルアの姿があった。

ひらひら視界を掠めるのは、ミルアの白い手だった。

ジェスの後ろで人影に紛れてこっそり立つ、ミルアが何やら口をばくばくさせている。

何か言いたいようだ。

唇をミルアにならって動かしてみた。

ガンバレ。

――何をどう？

尋ねようにもこの距離と雰囲気だ。

困りきって視線を投げかけると、ミルアも何やら決心したように頷く。

心なしか表情が固い。唇を引き結ぶと、隣に立つ人の腕を引いた。その腕を高々と持ち上げて見せてくれた。

その男の人――エルさんの腕には、一生懸命にこさえた腕輪がはまっている。

「……。」

何だかもう後には引けない所に追いやられている気がしないでもないが、覚悟を決めるしかないようだ。

「じぬ……。レオナルさま、少し下ろしてください」

即座に断られた。

すぐさま下ろされた。

その間も私が転ばないようにと、もたせ掛けるようにして支えてくれた。

石は赤だ。

今までの感触の記憶を頼りに作ったら、私の腕にははかなり大きな寸法になった。

「じ、レオナルド様。どうかこれを、よろしかったら受け取って下さい」

勢い付けて差し出したら、地主様にまるで押し付けるようになってしまった。

彼の手のひらに収まる赤い石の輝きが、ひどく眩しい。

地主様は私と腕輪とを交互に見比べて、それから微笑んでくれた。

「ありがとう、カルヴィナ。いいのか？」

「はい」

こくりと頷く。

すごく恥ずかしいけれど、先程のやぐらでの出来事に比べたらなんてことはない。

そう自分に必死で言い聞かせた。

それはそれで頬が火照る。

そっと見上げると、地主様は早速はめてくれていた。

私に見せるようにしてくれる。

「ちようど良い大きさだ」

地主様のもの言いたげな眼差しと見つめ合ってから、ジェスへと向き合った。

「ごめんなさい、ジェス。あなたとは踊れません。これから、ずっと。だからもう、待たないで。待たないで——本当にごめんなさい」

「そうか。わかった。……もういくら待っても、どうにもならないのだな」

「ごめんなさい」

「謝らないでくれ、エイメ」

ジェスが悲しそうに、でも無理やり微笑んで見せながら、立ち上がる。

「いいんだ。エイメが祭りに参加してくれて良かった。本当に。巫女姿、綺麗だ。すごく」

「ジェス……。」

「お疲れさん！！ ジェス——！！」

突然の大声に驚く。

ジェスの背を突進するように叩き、後ろから首を羽交い締めにする人影があった。

お祭りの直前に、お酒を勧めてきた若者たちだった。

「そうだ！ そうだ！ 謝らなくなっただけいい！ ジェスは俺らフラレ組みに任せろ——！！」

「祝いの酒でやけ酒すつから気にすんな！ 毎年恒例」

「嫌な恒例行事だねえ」

いつの間にか歩み寄ってきていた、スレン様がのんびりと言った。

「色男様には解るもんか！」

「確かにそうだねえ」

そう言いながら前髪をかき上げる腕には、腕輪が二つもはまっているのが見えた。

「うっわ。むかつく気もおきねえ」

• •		
*	•	○
• •		
•	•	• •
○		
•	*	
• •	• •	
*	•	○
• •		
•	•	
○	• •	
• •	*	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	*	
	• •	
	•	○
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	*	
	• •	
	•	○
	•	

ちよつとした騒ぎの中、地主様だけが落ち着きを払っていた。

ものすごく大きな、広い意味での好意のつもりで差し出した腕輪だった。

今までもお世話になりっぱなしで、迷惑のかけ通しだった。

私の持っているもので、差し出せるものなどほんの僅かしかない。

せめてもの、お礼を伝えたい。

そんな気持ちを込めた品を渡したいと思って、差し出したのだ。

こんなもの、きっと地主様に見てみたら、何の意味も成さないはずだろうけれど。

そんな卑屈な気持ちに負けてなるものか、と気持ちを奮い立たせていたのに。

いざ渡す段階になると、やっぱり気持ちは怯んでしまった。

それなのに地主様は腕輪をはめてくれて、大事そうに石の部分を撫でてくれている。

目が合うと石に唇を押し当てながら、頭を下げられてしまった。

そのまま優雅に膝をたたむように折り、胸に手を当てて申し込ま

れた。

「あなたの好意を確かに受け取った。どうか私と踊って欲しい」

地主様——と心の中で呼ぶと、見透かされたように訂正された。

「レオナルだ、カルヴィナ」

大慌てで頷く。

そのまま再び、勢い良く横抱きにされた。

「スレン。片付けておけ」

「何だあ。もう外れちゃったんだね」

ニヤニヤと意味ありげに笑うスレン様に、地主様は仮面を押し付けた。

スレン様はおどけて、半分だけ仮面を被るようにしながら、流し目をくれる。

「当たり前だ。いつまでもシュディマライ・ヤ・エルマでいられるか」

「ふうん？」

そんなスレン様に背を向けると、地主様はぐんぐん踊りの輪の中に進んでいく。

大きく組まれた木の枠組みの中、炎が勢い良く燃え盛っている。

何組みかの男女が、既に向かい合ってステップを踏んでいる。それにぶつからないように、上手に避けながら地主様は回った。

炎の周りを、くるくる回りながら、一緒に笑った。

さっき一緒に撒いた花びらも一緒に舞う。

私を落とさないようにしっかりと抱きかかえてくれる腕の中、安心していた。

ただそうやって、くるくるされているだけなのに息が上がってきた。

「レオナル様、ちょっと、回りすぎやしませんか」
「確かに」

声を上げて笑う地主様なんて初めてだった。

目が回ったのだろう。

クラクラしてきた。

「もう！ ふざけすぎです」

「舌を噛むぞ」

「きゃあ！」

抗議してみたが、笑い飛ばされてしまった。

つられて一緒に笑ってしまった。

笑い過ぎたのか、だんだん苦しくなってきた。

楽しいけど、苦しい。

今の私の気持ちは、体の声と一緒にと思った。

「……。」

何だ。

私は地主様が好きなのだと気がついた。

好き。

その瞬間——ぽたりと落ちた雫は、夜露なんかじゃない。

地主様が好きだと認めるしかない。

けして相手にされるわけないからと、見ないふりをしてきた気持ちを、潔く見据えることなんて出来やしなかった。

でも。

それでも。

——好き。

そうしたら、楽しいけど苦しいと思った。

息ができないと。胸が詰まるのだと。

軽快な音楽が少し緩やかになった。

それに合わせるように、レオナルド様もまた優雅に歩調を落とす。

私を抱きかかえて、あやすように身体をゆすり続けてくれる。

どうされたって、胸は苦しいばかりだ。

「よく、がんばったな」

そう言って大きな手が、後ろ頭を撫でつけてくれた。
何を労ってくれているのだろう。

それでも一気に肩の力が抜ける。

レオナル様の首筋にすがって、肩に額を押し付ける。

そのまま、何故だか溢れ出した涙を止めることが出来なかった。

69 勇気を出した乙女たち（後書き）

『腕輪はある意味 獣にはめる首輪みたいな』

結局は皆が見守る中の告白大会になりました。

カルヴィナ、注目されるの苦手なのに頑張りました。

おいちゃん・おばちゃんたちはもちろんの事、

おじいちゃん・おばあちゃんたちも

「若いっていいねえ」 と うっとりしながら見守っているぞ！

70 地主と魔女と色男

レオナル様にあやすように揺すられながら、少しだけ人の輪から離れる。

炎の明かりから遠ざかったおかげで、あまり顔を見られないといい。

そう願った。

泣いたから、きつと目蓋も腫れてしまったに違いない。

だからといってこうやって、いつまでも抱きかかえられているのもどうかと思う。

「レオナル様。もう大丈夫ですから、下ろして下さい」

一瞬の沈黙の後、解ったと伝えるように頭を抱きかかえるようにされた。

彼のまとう香りに包まれて、胸が苦しくなる。

自分のうるさいくらいに跳ねる胸を、手で押え付けた。

「とても大丈夫そうには見えないが」

レオナル様は慎重に下ろしてくれた。

それでも支えるようにしてくれる。

だから足が地についているか、いないかの差で、あまり状況は変わっていない気がする。

「カルヴィナ？」

今更だけどこんなにも密着していることが、恥ずかしくてたまら

なかった。

俯きがちで胸元を押さえているものだから、不審に思われたのだろう。

名を呼ばれながら、そつと顎を持ち上げられた。

私たちの左手には森の夜闇。

それをお祭りの炎の明かりが、闇を押しやってくれている。思わず息をのんだ。

あまりにも真剣な眼差しで見られていたからだ。

それもあるが、炎の明かりを頼りに見上げた彼の顔は、ひどく精悍に見えた。

そんな事はとくに知っていたと思っていたのに、改めて思い知らされた気分だった。

時折揺らめく炎の明かりが作る、陰影のせいだろうか。

それだけでレオナル様が、まるで初めて見た人のように見えるのはどうした事だろう。

そらそうとさ迷わせた視線は、絡め取られてしまったかのように動かせなかった。

大きな手のひらに頬を包まれてしまっていたから。

気が付けば、その手に手を重ねていた。

少し滑らせ落ちた指先に触れたのは、手に馴染みのあるつるりとした感触。

見なくとも、それが赤い石の腕輪と解る。

それが今、レオナル様の左の腕に収まっているのだ。

言葉もなく、ただ見つめ合った。

本当はすぐ、その指を振り払ってしまいたかったのだけれど。

何故か出来やしなかった。

[illegible]

「叔父様！ カルヴィナ！ 素敵だったわ。お母様も来たがって
いたのよ！ すごく残念がってたんだから。だからわたくし、今日の
ことたくさん話すわ」

興奮した様子で跳ねながら、リディアンナ様が駆け寄って来た。その後ろをスレン様もゆったりと続く。

「リディ」

「ありが、とう、ございます」

自分でも驚くほど、声に張りがなかった。それこそ、取り繕いようがないほどに。

「どうかした？ カルヴィナ、疲れちゃったの？」

「少し、
だけ」

正直に認めた。

くるくる回ってたくさん笑って、たくさん涙を零したら体がぐったりしていた。

何だか思うように身体に力が入らない。

「カルヴィナ。無理せず休ませてもらおう」

言うが早いかレオナル様に支えられて、いくつか椅子の並べられた場所を目指した。

ここは昼間おじいちゃんやおばあちゃん方が優先的に座るよう、用意された控え場だった。

今、ここに休む人はいない。

ガラんと空いている。

その真ん中に腰下ろすと、レオナル様の大きな手が額に当てられた。

「少し熱いな。大丈夫か？」

「はい。平気です」

「水を。何か飲み物をとってこよう」

「あ……。自分で」

「カルヴィナ。いいからここで待っている」

「あ。レオナル、僕の分もお願い」

スレン様はすかさず、片手を上げた。

「知るか」

「じゃあ、そこいらのお嬢さんに頼んでくるとしよう」

「自分で取りに行くという選択肢はないのか」

「レオナルは解っていないな。そんなものは口実だよ。女の子に話

しかける」

言いながらスレン様は手を振った。
するとこちらを遠巻きに眺めていた女の子たちが、きゃあと嬉しそうに応える。

「話にならんな」

「スレン様の分はわたくしがお持ちしますわ」

「ん。ありがとう、リディ。頼むよ」

「あ、あの、私も行きます」

立ち上がろうとしたが、大きな手に両肩を押さえつけるようにされた。

その重みはびっくりするほど大きくて、熱かった。

じんわりと肩から伝わって行くぬくもりは、再び鼓動をも早めて行く。

どうしようも無くなって、意味も無く思わず首を横に振っていた。

「いい。遠慮はいらないから、ここで少し休んでいてくれ。俺のため」

レオナル様のため？

何故だろうと思って首を捻ったが、そう言われては素直に頷くより他にない。

「日が落ちたから冷えてきた。カルヴィナの衣装では薄すぎるな。気が回らなかった、すまない」

何故、レオナル様が謝るのだろう。

ますますもって理解できない。

困惑していると、ふわりと大きな温かさに包まれていた。

「それを羽織っている」

レオナル様はシュディマライ・ヤ・エルマの外套を、私にかけてくれたのだ。

言葉が出てこなかった。

そんな私の表情はきつと惚けていたに違いない。

いつのまにか添えられていた手に、頬を撫でられて我に返った。レオナルド様には小さく笑われた。

「カルヴィナ。すぐ戻る」

そう言い残すとリディアン様の手を引いて、やぐらの方へと向かわれた。

[illegible]

その二人の背中を見送りながら、ふうと一息つく。

スレン様はふふと軽く、笑い声を漏らす。

「お疲れさまだったね、フルル」

「……いえ」

「あーあ。どうして仮面外れちゃったんだろうな。もう少しあのま

までも面白かったのに」

シュディマライ・ヤ・エルマの仮面を弄び、被るようにのぞき込みながら言う。

仮面越しに私を見ている。

その口角は高く持ち上げられていた。

「ふふふ。見ているこっちがくすぐったいよ。大事にされているんだね。ねえフルル。レオナルは君の事うんと甘やかすでしょ。あいつはいつもそうだから」

いつも？

そんな所に引っかかりを覚えてしまう。

「聞きたい？ だったら一緒に踊ろうか」

「私の足では踊れません」

「ん。知ってる」

仮面をずらして、スレン様はにっこりと笑う。

「でも平気」

レオナル様は誰にだって親切で優しい方だって、もう知っている。

「いつも」という言葉に引っかかりを覚えるなんて、どうかしている。

聞きたくなんてない。

そう思い首を横に振ろうとした。

そのはずだったのに。

スレン様は椅子から立ち上がると、私の前に跪いていた。

『どうかひとときこの手を取っておくれ、大魔女の娘よ』

気が付けば頷いて、目の前に差し出された手を取っていた。

『腕輪を差し出すっていうのは』

『自分を差し出してもいいってことでしょ』

『何？ もう食べられちゃった？』

そんなにも深い意味合いが腕輪にはあったのか。

何やら、お祭りの喧騒が遠ざかった気がした。

怖い。

得たいの知れない恐怖に恐れても、スレン様の手は緩んではくれない。

無意識で追いかけたレオナル様の気配も遠い隔たりを感じた。

『何だ。もう気づかれたか。だったら話しは早いよ。二人きりでゆっくり話そうね』

——この人は何か能力ちからのある人だ。

気がついた時にはすでに捕われた後だった。

70 地主と魔女と色男（後書き）

『スレンと踊る』

仮タイトルでしたが、次回に持ち越しのようです。

地主、あつまあま。

魔女っこ、その感情はね、恋のうちよ。

スレン、ノリノリです。

何気にお気に入りのキャラです。

71 魔女の娘と色男

空間がこの場だけ、異常なまでに静まり返った。

先程まで絶えず聞こえてきた音楽も雑踏も遠いのではない。
ここまで届かなくなった。

一体この人は何をしたのだろうかと、問いただすように見上げた。

『あれあれ。惚けるのはまだ早いよ。フルル』

ぐいと引き寄せられた手のこうに口づけを落される。

思わず引いた。

でも無駄だった。

あたたかく柔らかな感触が押し当てられる。

怖い。

椅子に腰掛けたまま、身体ごと引いて丸めるようにした。

『もう。ちよつと結界をはったただだよ。誰にも邪魔されたくないからね。だから、そんなに怯えなくなつて大丈夫だよ。何も取って食ったりしないから。……レオナルと違って』

努めてなのか、軽い口調で言われた。

それでも最後の方に付け足された言葉は、何やら重みがあったのは確かだ。

ますます怯む。

情けない表情で見上げていたのだろう。
スレン様は吹き出した。

『本当にそんな顔しないでよ。やっぱり、どうにかしてやろうかって思わせるよ?』

前に似たような事を、レオナル様にも言われてしまったことがある。

きっとあんまりビクついていると、相手に対して失礼になるに違いないのは解る。

でも、そんな顔というのが、どういうものを指して言っているのかは解らなかった。

強ばった身体のまま、スレン様を見つめた。

ふ、とスレン様がゆったりと笑った。

闇の中、微かに届く炎の明かりを頼りに見ても、この方の髪も瞳も輝いている。

どこか懐かしいという感情さえ湧いてきて、不思議と少しだけ緊張を緩める事が出来た。

それは森の深い色合いを思わせる、眼差しのなせる技だろうか？

『そうそう、フルル。わかってくれたみたいだね。お利口サン?』

からかうように。それでいて嬉しそうに。

そんな歌うような調子で言いながら、また私の頭をごしやごしやにする。

『せっかくだから、フルルとも踊ってあげようね』

そう言い出した。

『私は踊れません』

慌てて抗議する。

レオナル様がしてくれたみたいなり方で、スレン様と踊るのは嫌だったから。

『ん。だから知ってるってば』

動じないスレン様は、ただ私の両手を取った。

跪いて私と目線を合わせたまま、優雅に一礼すると自分だけ立ち上がる。

そうして私と手をつないだまま、ご自身だけ椅子の周りを回った。

時折方向を変えたり、私の手を高く持ち上げて回ったりとされるうち、思わず笑い声を漏らしてしまった。

『おや。やっと笑ったね』

不覚にも楽しくなってしまった。

なるべく表情を引き締めようとしてみたけれど、うまくはいかなかった。

スレン様も気がついたのだろう。

『全く。フルルは素直でないったら』

そうぼやかれた。

そういえば、と気がつく。

今にして想えばそれは不自然なほど。

こうして盛大に触れられていてさえも、その感情は穏やかなものしか伝わってこない。

ゆつくりと私を四方から眺め回しながら、一周すると再び真正面に立った。

緑の瞳が私の瞳と合わさる頃には、頭を撫で付けられていた。

『ふふふ。かわいいね。本当にフルルは見事なカラス娘だねえ。闇に溶けてしまいうだよ。ああ、それとも闇から生まれた？ 魔女の娘』

この責め苦はいつまで続くのだろう。
スレン様が飽きるまでだろうか。

この方の感情の波が穏やかな分、良くも悪くも予想がつかない。

仕方なく身を任せる他になさそうだ。

そう諦めかけたその時だった。

『そうそう。レオナルの事、教えてあげようと思ったんだっ！』

そう。

この方の抱く感情から私に対する悪いものは感じ取れない。
だから警戒しきれない。

いつだって私を、感情の荒波に放り込むような真似をするという
のに。

そこは何故なんだろう？

気に入らないから？

『知りたいでしょ？

知りたいよねえ？

いつも優しいレオナルの

こと』

頷くものか。

せめてそれくらいの抵抗くらい出来なくてどうする。

そう自分を叱咤して唇を引き結んだ。

『……。』

『無言は了承と受け取るよ』

『知りたくありません』

『どうして？』

『スレン様の口から聞いて知ろうとは思いません』

『あれあれ？ さっき僕の手を取ったじゃないか』

『それは、あの』

『まあいいじゃない。聞いておきなよ』

結局はスレン様が喋りたいだけなのではないか。

[illegible]

『レオナルドは、ねえ——。これが唯一の女性だと決めたら、一生を掛けてその胸の愛を捧げるぐらいの気負いがあるんだよ。その関係が成熟しようがしまいがお構いなしでそう決めちゃうんだよな。僕には理解できない思考だ。色んな女性がこれだけ居るんだからさ』

⋮

私にどう答えると言うのだろうか。

腕を大げさに広げて熱弁する彼を、恨みがましく見やった。

スレン様は観客の関心を得たとばかりに続ける。

『だからあの年になっても独り身なんだよ。いつまで手の届かない女性ヒトを想って、努力し続ける気なんだろうかと気をもむでしょ。友人としてはさ。そこにフルルと住み始めたって言うから驚いた。いいよあのヒトの事は諦めたんだなって』

『いつまでも手の届かない人……？』

『そ。身分違い。貴族のお姫様だ。ロウニア家は資産家だけど爵位も何もない。地方の一有力者に過ぎないからね。アイツはそれくらいの事で諦めたりしない。実力ならあるんだから。後はどうやってのし上がるかって話だった。多分、僕と初めて会ったのはその頃。』

なあんか身分は無いけど、あってもおかしくなさそうな奴が入ってきたって神殿は噂してた』

遠くを見るみたいに目を細めて、スレン様は笑った。

『アイツは強いよ。強くなった。並み居るライバルに強敵たちをも蹴散らして。うるさ方の古参のじさまや巫女頭達だってものともしなかった。面白かったな。じさまやばさまの慌てふためくさまは。そうこうするうちに巫女王様直々に目を掛けてもらってさ、信頼されて騎士団の指導にまで上り詰めたんだから参っちゃうよ』

『巫女王様に、ですか』

『そうだよ。僕も忠誠を誓ってお仕えしているお方だ。話くらい聞いたことあるでしょ、フルルも？』

『話だけなら』

『そ。そんな風に出世街道を華々しく突き進む、真面目男がレオナルって訳だ。どうするのフルル。そんな彼が今や君に夢中だよ？お嫁さんになってあげるの？』

どうしよう。

何を言っているのか解らない。

と、言うよりも何故そうはつきりと断言されるのが、解らない。

『む、むちゅう？』

『そうだよ。何をしたの。魔女の惚れ薬でも一服もった！？』

『何故そこまで話しが飛躍するのかわかりません。それに、私は魔女ですからどこにもお嫁に行けません』

『うん。そんな言葉では引き返せない所まで来ているんだよ。解らない？』

『……。』

『解らない何て言うのなら君は傲慢だよ。だったらレオナルにどうして腕輪をあげたりなんかしたの？ アイツはもう有頂天だろうさ。きつと近々、君を妻に迎えたいと言い出すよ。どう責任とるつもり、フルル？』

『え？ え、だって！ 今、レオナルド様には、身分違いの想い人がいるのだって言いましたよね？』

『言った』

『どうしてそんな話を私にするのですか？』

『それくらい自分で考えてみなよ』

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

お互い静かに見つめ合った。

互いの腹づもりをさぐり合う。

きつとスレン様は彼なりに、レオナル様の事を大事に思っている。それだけは確かだ。

だとしたら私のことは目障りなのだろう。だからか。

そう考えた時だった。

『君にレオナルは相応しくないよ』

スレン様は迷いなく言い放った。
言われなくても知っている。

悔しかったから、言い返してやろうと思ったが言葉がなかなか出てこない。

『私は、私ごときがレオナル様には、ふさわしいわけが無いことくらい知って……。』

『違うよ、フルル。レオナルは君には相応しくないと知っているんだ。君がレオナルに釣り合わないとか、そういう意味じゃない。君にとっては、と僕は言っている。良くて、ほんの、ひとときだ。君だって本当は知っているんだろう？』

『何故、それを、あなたが知って……。？』

『なにも君を大魔女に託されたのは、レオナルだけじゃないよ。僕もだ』

肩にかけられたマントの両端を、ぎゅっと強く握り締めていた。

『大魔女に会いたい？』

優しく問いかけられた。

スレン様にはおおよそ似つかわしくない、真面目な顔でのぞき込まれる。

もちろんだ。

思わず頷いていた。

『だったら。僕たちとおいでよ。大魔女だって、それを望んでいたと僕は思っている』

。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*。。。。*

..*..。..*..。.

——答えは今すぐとは言わない。 時間に余裕はそんなにないけれど。

そんな言葉で締めくくられた。
曖昧に頷くのがせいぜいだった。

耳に届く楽の音に、どうにか意識を現実に戻す。
近づいてくる大きな温かさに、涙がこぼれ落ちそうになった。
どうにかごまかそうと、強く瞬きしながら見上げた。

「遅いよ、レオナル。待ちくたびれたじゃないか。ところでリディは？」

「何を言う。ほんの少しの間だったぞ。——リディなら子供たちと一緒にだ」

呆れたようにレオナル様は仰った。

そう。

本当にひと時の間だったはずだ。
でもずい分と長い時間だった。

「待たせたな、カルヴィナ。くたびれたんだろう。これを飲んだら横になれるよう、戻るか？」

そう言いながら私に杯を渡してくれる。

「あり、がとう、ございます」

できるだけ大事に受け取るようにはしたけれど、手の震えが止まらなかった。

71 魔女の娘と色男（後書き）

『スレン、何を言い出すんだ。』

好きな人の好きだった人の話なんか、聞きたくないよね？

でも聞かずにはおられない。

ひどいや、スレン。

※ 拍手小話放置中★ ですが そろそろ何か新しくする予定です。

お遊び小話ですみませんなネタしかないですが。

72 レオナルと魔女の娘

あまりに震えているので、支えるつもりで手を差し伸べた。

その途端にカルヴィナの肩が、大きく跳ね上がった。

小さな手から杯が転がり落ち、衣服を濡らす。

カルヴィナの膝下と、ほんの少し俺の袖口ぐらいたったが、カルヴィナの動揺は思った以上だった。

「申し訳ありません。せっかく地主様が持ってきて下さったのに。申し訳……。」

「謝らなくていい。気にするな。それよりもスレン。何を言った？」

スレンに対する苛立ちを、努めて出さないように尋ねた。

今、カルヴィナは俺に怯えていると感じたからだ。

少しでも俺の感情が荒ぶると、この娘は萎縮してしまう。

先程、嫌というほどそうさせた事を後悔している。

いくらか頭の冷えた今なら、己の行動を諫める事ができる……はずだ。

「ん？ レオナルの武勇伝。怖がらせちゃったみたいだね？」

スレンは面白そうに目を細めて、のらりくらりと答える。

こいつにこれ以上構っても、怒りが爆発するだけだと解っている。だから無視するに限る。さっさと背を向け、カルヴィナに向き合った。

「何を聞いたのだ、カルヴィナ？ おまえを怯えさせるような事だったか？」

「……。」

のぞき込み、その瞳を伺う。

カルヴィナは涙を溜めたまま、微かに頭を振って見せてくれた。安心させるために、頭に手を置いて撫でようと手をかざすと、それだけで怯えられてしまった。

とたんに胸に苦い想いが広がる。

それすらも押しやるようにして、優しい口調を心がけた。

「疲れたな。村長の家に戻って着替えて、休ませてもらおう。それでいいな？」

今度は強く頷いてもらえた。

そこに安堵する自分に苦笑する。

「カルヴィナ。大人しく抱えられてくれるか？」

一瞬、怯えたように首をすくめられてしまったが、打ち消すように頷いてくれた。

そっとマントを跳ねよけて、華奢な身体に腕を差し入れた。

「あれあれ。乙女がシュディマライ・ヤ・エルマにさらわれて行くようだよ」

スレンが笑いながら仮面を差し出す。

カルヴィナを抱えているせいで両手はふさがっていた。

「ねえ、フルル。これは君が受け取って」

マントの下で、小さく反応があった。
そっと顔をのぞかせたカルヴィナへと、スレンは仮面を差し出し
続けていた。

「これは君が村長の家まで持っていてあげて。なんなら、レオナルにはもう一度仮面を付けてもらいなよ。もう一度でも何度でも、二人でお役目ごっこをするといいよ。誰にも邪魔されずにね」

おずおずと受け取ろうと、指先を伸ばしたカルヴィナを、からかうようにスレンは言う。

「え？」

おそらく意味は理解できていないだろう。

だが、意味深なことを言われたと、それだけは察したらしい。カルヴィナは腕を引きかけた。

だが、スレンは半ば押し付けるように仮面を持たせてしまう。

「カルヴィナ、奴の言うことは気にしないでいい。――スレン！リディアンナを頼むぞ」

「当然」

「もう一刻以内には館に送り届けろよ」

「えー？ 今日はこちらで一晩明かそうよ」

「駄目だ」

「出たな、横暴。嫌だよ。夜の森は危ないから、村長が泊まれって部屋まで用意してもらってあるし」

「ならいいが。リディアンナにほどほどにするよう、寝かせてやってくれ」

「了解」

ひらひらと手を振りながら、スレンが見送る。

「ごゆつくり。まあ、レオナルドも、ほどほどにね」

.	.
*	.
.	o
.	.
o	.
.	*
.	.
*	.
.	o
.	.
o	.
.	*
.	.
.	.
.	o
.	.
.	.
.	o
.	.
.	*
.	.
.	.
.	o
.	.
.	.
.	*
.	.
.	.
.	o
.	.
.	.

村長の家に戻ってみたが、誰も居なかった。

当然と言えば当然だ。

まだ、祭りの最中なのだ。

暗い家に背を向けて、さっさと魔女の家を目指した。

• •	
*	•
• •	○
•	•
○	• •
•	*
• •	• •
*	•
• •	○
•	•
○	• •
•	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•

手にした明かりを頼りに暖炉に火をおこす。

夜の気配に、秋を通り越した季節の気配が混じっているように感じる。

火の側に椅子を引き、そこにカルヴィナを座らせた。

靴を脱がせて、汲み上げたばかりの井戸水で、カルヴィナの足を拭いてやる。

「冷たうはないか？」

「地主様、あの、自分でしますから」

「レオナルダ、カルヴィナ」

「レ、レオナルド様。自分でやります」

「もう終わる」

取り合わず、小さな足先を布で包んで水気を切った。

カルヴィナの足では、左の足先に負担を掛けているようだ。

靴の中で押し付けられて、窮屈そうに丸まっていた指先をほぐすと、血も滲んでいた。

不自由な右足とは反対の方に重心を傾けているのだから、当然か。清潔な布を選んで引き裂いて巻きつけてやる。

慌てふためくカルヴィナをよそに、一連の作業を滞りなく済ませた。

「今日は朝から、なんだかんだと座れなかったものな。痛むか？」

「いいえ。ちっとも」

「無理をするな。気がついてやれず、すまなかった」

即座に否定するカルヴィナを、再び抱え上げた。

鍵付きの方の寝室を指す。

歩き出すとすぐるように、身体を預けてくれた。

その事に何よりも安堵する。

静まり返った室内に俺の足音だけが響いた。

暖炉の炎に照らされた影が揺らめく。

魔女の部屋の奥までは照らしきれない。

開かれた扉の隙間から見える明るさでは頼りない。

互いの輪郭をたどるのが精一杯だ。

そんな中、低めの寢床にカルヴィナを下ろす。

俺にそうされる事にいくらか慣れてくれたらしく、促さずとも下ろされる間際には、首元に腕を回してくれるようになった。

その下ろした瞬間に、腕に力を込められるのが好きだ。

カルヴィナにしてみれば単に、不安定さにしがみついただけかも

しれないが。

彼女自身から望んで、抱擁されたとも受け取れる。

それに応えるように、細い身体を抱き込むようにする。

「――もう疲れたな？　横になって休め」

耳元に囁き込むと、頷いたのが伝わる。

背の中ほどをなで上げると、華奢な体がしなった。

そのままゆつくりと身体を横たえてやる。

• •		
✱	•	○
• •		
•	•	
○	• •	
•	✱	
• •	• •	
✱	•	
• •	○	
•	•	
○	• •	
•	✱	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○
	•	

どうして俺はこんなにもか弱い娘に、あれほどの暴言を吐けたの
だろう？

弱り切った娘がろくに食事も取らずに泣き暮らしている。

そう聞いてしぶしぶ訪れた。

その時の俺は仕方なく出向いたのだ。

これ以上、他人になぞ構っている暇はない。

いくらばあさん縁の者であろうとも、俺は関わる気は無かった。

あ
の
日。

このまま放置すれば娘が、あつさりばあさんの後を追うのが目に見えてしまった。

そこに苛立ちを感じながら、娘をかつぎ上げたのだ。
本当に何という面倒な――。

そうとしか感じられなかった。

帰るのだと言い張る娘に、何と状況の読めない馬鹿な娘かと呆れた。

泣くと腹が立つ。

そう言っただけだった。

放っておけばただ、ただ、弱ってゆくだけのくせに。

食事も取らず、うつむいたまま涙をこぼす娘を、散々なじった。

取らないのではない。

取れなかったのに。

過度の緊張に追いやられて。

そうしたのは俺だ。

あの時――。

萎縮しきって怯え、出ていったカルヴィナを大声で怒鳴りつけた
事は記憶に新しい。

ほんのつい先程も同じ過ちを繰り返した上、怒りに任せて押し倒した。

泣きじゃくりながら謝り、震え続ける娘に何と言った？

思い出したくもないとは、我ながら身勝手なものだと呆れるしかない。

• •		
✱	•	○
• •		
•	•	
○	• •	
•	✱	
• •	• •	
✱	•	○
• •		
•	•	
○	• •	
•	✱	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○
	•	

「レオナルダ、カルヴィナ」

「そうか。それもそうだな」

起き上がろうとするカルヴィナの肩を押さえつけたまま、衣装の肩紐を引いた。

それを眺めながら、もう片方も指に絡めて引く。

「じ、じぬさま……？　なに、を？」

訂正は自らの唇に乗せたまま、カルヴィナの唇に押し当てた。

72 レオナルと魔女の娘（後書き）

『地主よ。その手つきは何だ。』

嫌に手際よい。

あまりのナチュラルさに、警戒心も発動しない……？

どうなります事やら。

73 魔女の娘とレオナル

地主様に抱えられて、そっと下ろしてもらえる瞬間が好き。

——好き。

あふれる気持ちのままに、少しでも勇気を出してみる。

ありがとうございます、という気持ちも。

それらを地主様に抱きつく腕に託す。

ぎゅっと力を込めると、大きな手が背中を撫でてくれる。

まるで壊れやすいものに触れるみたいに感じるから。

大切にしてもらったという錯覚に浸る事も出来る。

最初の内は恥ずかしいという気持ちが強くて、素直に地主様を頼る事が出来なかった。

「疲れたな？ もう横になって休め」

何度かあやすように頭から背を撫でられてから、身体を横たえてくれる。

大きな手。

私の頭だって一掴みに出来てしまうほどに。

ミルアと一緒に怒られた時を思い起こして、少し笑ってしまった。

地主様はなんだかんだといって、私を子供扱いするのだと思う。

何だか暖かなものにくるまれているような、そんなふわふわした気持ちになってしまう。

こんな気持ちのまま、眠りに落ちていけたらさぞや良い夢が見ら

れるだろう――。

そう思いながらも、まどろみに身を任せる訳には行かない事に気がつく。

「地主様？」

「レオナルダ、カルヴィナ」

「あの、巫女の衣装がシワになってしまいますから、横になる前に着替えます」

「そうか。それもそうだな」

「はい」

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
• •	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

シユス、とわずかに空気を切る音が、耳元を掠める。

肩紐が解かれたのだと知る。

もう片方も。

腰に巻き付けられた飾り布も緩んで、楽になった。

背中に回された指先が、身体を締める衣装の紐を難なく探り当ててしまった。

僅かに持ち上げられて体が浮く。

あまりに流れ良く進む手際の良さに、しばらく惚けていた。

「じ、じめしさま……？なに、を？」

そこまで子供だと思われているのだろうか？

「地主様？」

柔らかく押し止められながら、疑問を口にした。

「レオナルだ」

そう間近で囁かれると、反論ごと塞がれた。

地主様の、唇で。

そう呼ぶ心の中でさえ見透かされたように、強く押し当てられてはひとたまりもなかった。

「や……！」

思わず漏らした悲鳴すら、飲み込まれてしまう。
熱くて柔らかい感触に侵食されて行くかのよう。
さつきもやぐらでされたのと、同じようにされる。
絡め取られて、執拗に嬲られる。

こわい。

どうして名前で呼ばないと怒られるのだろうか？

聞きたいことがたくさんある。

自分自身にも。

す……き？

ほんとうに？

自分に問いかけてみる。

涙がこぼれ落ちた。

——苦しい。

逃れようとしても、許されなかった。

余計に深くを許してしまう結果になるだけだった。

「ん、んっ……あん」

切れ切れに漏らしてしまう声が自分のものだなんて信じられない。

しびれ始めたのは体だけじゃない。

思考もだ。

暖かいだけじゃない。

同時に熱さも感じる。

息が乱れていたのは私だけじゃなかった。

暗闇の中、肩で息をしながらどうにか訴える。

「じ……レオナル様。服くらい自分で脱げます。私、そこまで子供じゃありません」

痺れを起こした舌では、うまくろれつが回らない。
それでもなるべく、毅然と言い放ったつもりだ。

紐という紐は解かれ、胸元まで引き落された衣装をどうにか引張る。

これ以上引かれたら、ただでさえ凹凸に乏しい私の体が曝されてしまう。

例え暗闇にあっても、恥ずかしいものは恥ずかしい。

「カルヴィナ。お前は俺を殺す気か？」

「そんな事、あるわけありません。地主……レオナル様」

どうして地主様と呼ぶと怒るのだろう。

どうしても今までの癖で、地主様と呼んでしまう。

そもそもレオナル様と呼ぶなんて、恐れ多い。

何もかもひっくりくるめて意思表示するつもりで首を横に振った。暗闇であっても間近できつく、見下ろされているのを感じる。

胸が痛いくらい忙しい。

やがて重々しいため息がひとつ降ってきて、首元を掠めた。

身体にかかる圧迫感が増す。

「やあ、じ、ぬし様！」

首筋をかすめ続けていた柔らかな弾力が、押し当てられながらゆっくりと移動してゆく。

首筋から鎖骨、胸元まで通って、また首筋へと戻ってゆく。

「くす、ぐったいです。っ、あ、痛」

くすぐつたいと抗議した途端、耳たぶを噛まれた。
わずかであっても、それはチリチリとした熱さを私に残した。

「やあ、レオナル様、レオナル様って、ちゃんとお呼びしますから。
怒らないで」

どうしても逃れなくて、必死で彼の名を呼んだ。

「レオナル様、レオナル様、いやなの、レオナル様……！」

幾度も泣いて訴える。

地主様は答えてくれない。

ただ、同じように唇が胸元と首筋を行き来するばかりだ。

そして時折、耳たぶを噛まれる。

だがそれも、最初の時ほど強くはなかった。

甘噛み。

きつとそれだと思い当たった。

そうこうするうち、つつまれている心地よさに眠気に襲われ始める。

身体に力を入れてもらえない。

目蓋にさえも。

絶え間なく与えられる刺激すらも、私を眠りに誘ってゆく。

そうして全身の身体から力が抜けていった。

「カルヴィナ。おまえはやはり俺を」

――殺す気か。

うとうととまどろみ始める中、苦しそうな呟きを聞いた気がする。

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

差し込む日の眩しさに、目が覚めた。

そつと身を起こしてみると、下着一枚でいた。

その事に違和感を覚える。

寝るときにはこれが普通だ。

何も特別な事はないはず。

そう無理やり自分を納得させてみても、違和感はぬぐい去れなかった。

$$\begin{array}{c} \lceil \\ h \\ \vdots \\ \circ \end{array}$$

まだ少し寝たりない気がする。

体がだるい。

それでも起き上がった。

椅子に丁寧にたたまえていたのは、巫女役の衣装だった。

そこで全ての記憶がつながる。

確か昨晚は、地主様にここに運んでもらった。

それで……それから……？

73 魔女の娘とレオナル（後書き）

『セーフでしょうか。』

アウトでは無いと思います。色々と。

なんのはなしでしょうか。

カルヴィナ、今ひとつズレている。

レオナルは色々と堪えたハズです。多分。

74 レオナルとかつての神様役（前書き）

時間はちよつと戻ります。

レオナル目線。

74 レオナルとかつての神様役

「さあ、命の水だ」

アラクエア・ヴィータエ。

古語と今の言葉が入り交じった不思議な調べを持つ言葉の意味するところは。

酒である。

確かに水分には違いない。

「いや、あの娘には純水が必要なのだが」

「だからこそ相応しかろうよ。この命の水が」

「いや……。あれはあまり酒に強くない」

「旦那。」

ぽん、と軽々しくありながらも、嫌に重々しく肩に手を置かれる。

「こいつこそが、旦那と娘っ子に必要な水に違いかんべー!!」

——こいつは酔っぱらいだ。

そう素早く判断して、くるりと背を向けた。
リディアンナも同じく倣う。

「ま・ま・ま・まあ！ 待っておくれよ、旦那！」

とりなすように独特の軽い口調で呼び止めてくる。

男はしつこかった。

何だろう。初対面のはずだが。

いつぞやの酒場でのオヤジ共が浮かぶのは何故だろうか。

夜空の下にあってさえ、主張してくる赤毛な所がまた……。

「リディ。先に戻っていてくれ」

「はい、叔父様。私も少し、お祭りの輪に加わってもいいかしら？」

「ああ。ここで見ている」

姪っ子を遠ざける。

リディアンナは素早く俺の意図を汲み取って、身を翻していた。

「賢いお嬢ちゃんだなあ。アッしらに気を使ってくれたんだな」

そうしみじみ呟きながら、背を見送っていた。

「俺は長い事、祭り行事に参加しているが今日もまた感動した。ああ、いいなあ、若いつていうのは！」

「そうか。それは何よりだ。連れを待たせているのでこれで失礼する」

「だから待ってくれ、旦那。前振りが長くて悪かったよ。巫女役の魔女っこはもちろんの事、神様役の旦那の姿に俺は……！ きゅうんとこう、胸の当たりがだな！」

いい加減、解放してはもらえないだろうか。

前振りとやらはどこまで続くんか。

「持病でもあるのか、亭主」

「ひでえや、旦那。つれないにも程があらあな」

「前振りはここまでだ。さあ、これを旦那の嬢ちゃんに飲ませてやつておくんな！」

「断る。あれは酒に弱い」

「違うって旦那！　これはアラクエア・ヴィータエ。すなわち命の水だ！」

「……。」

ずいと差し出された杯から立ち上る芳醇さは、間違いない。
アルコールと称されるものだ。

「強すぎる。とてもじゃないが娘の口には合うまい」
「なあに。心配はいらない。こいつにはコレで薄めるんだ！　さあ、大魔女直伝の薬を漬け込んだ砂糖水だ！　今夜を迎える無垢な娘っこ達とその相手のための、薬効たっぷりだぜ」

手際よく杯に砂糖水を注ぎ足すと、男は杯をずいと差し出してきた。
た。

まじまじと男を見下ろす。

太い眉は下がり気味で、いかにも人の良さそうなオヤジだ。

その顔は酒のせいかな赤らみ、まるで締まりというものがない。

「おおっと。旦那みたいな伊達男にそんな風に熱心に見られちゃ、たまらんね！」

（ばあさん。何を伝授してやっていたんだ）

心の中で問いかける。

「旦那。お嬢ちゃんから腕輪を貰ったんだろう」

「ああ」

「しかも！ そいつは野郎共が恋焦がれる赤い石飾りだ。ってえ事はだ」

俺の腕を引き、腕輪に触れようとしたので振りほどいた。

これは誰にも触らせたくない。

カルヴィナ以外には。

そんな俺の様子に気を悪くした様子もなく、亭主は気安く腕を肩に回してくる。

酒臭い息から逃れようと顔を背けたが、思いのほか強い力に引き戻される。

――今夜は決めるしかないぜ。

ざわりと血が波打って、体中を逆流したように感じた。

一点を見つめる俺に、亭主はここぞとばかりに畳み掛けてくる。

「石を贈り、それを受け取った者は森の神の名のもとにおいて、結ばれる運命にある二人だ。しかもだな、旦那は神様役をお務めくださった。お嬢ちゃんは巫女役ときている。このお役目をまっとうした二人が夫婦の契を交わすのが、ほとんどだ。何を隠そうこの俺と、母ちゃんもそのうちのひと組みだ」

俺の中で何かが弾けて、結びついた。

何だ。

そうか。

食っているのか。

むしろあれは今にも食されるのを待っている、熟れかけた果実そのものではなからうか。

まだ花開いたばかりのような瑞々しさでもってして、虫や鳥を誘うような。

その薄く開かれた花卉を味わうべく舌を差し入れてみれば、甘く酔わせる。

だが花は、そのままでは花のままだ。

誘われた虫や鳥の力を借りて、身を結ぶものだ。

まだ幼さを残した心と体では、確かに何かの手助けが必要だろう。どこのオヤジとも分からぬ、ましてや初対面の男の押し付けるままに、杯を受け取っていた。

1150

右手に受けた杯はその場で呷った。

カルヴィナから贈られた赤い石が光る。

「おお！ 旦那、応援しているぜ」

何だ。

そうか。

食
っ
て
い
い
の
か
—
—
。

妙にそう確信していた。

$\bullet$ $\circ$
 $\bullet$
 $\bullet \bullet$
 $\ast$
 $\bullet \bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$
 $\bullet \bullet$
 $\ast$
 $\bullet \bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$
 $\bullet \bullet$
 $\ast$
 $\bullet \bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet \bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$
 $\bullet \bullet$
 $\ast$
 $\bullet \bullet$
 $\bullet$ $\circ$
 $\bullet$

..*..*..*..*..*

俺の不埒な想いに勘づいたのか、カルヴィナは震えていた。それとも。

これから迎えるであろう、二人きりの夜を思って身を震わせているのか。

スレンを睨めば、知らばつくれるかのように視線を逸らされた。

「遅いよ、レオナル。待ちくたびれたじゃないか。ところでリディは？」

「何を言う。ほんの少しの間だったぞ。——リディなら子供たちと一緒にだ」

更に視線で問い詰めたが、スレンはおどけたように肩をすくめて見せるだけだった。

「待たせたな、カルヴィナ。くたびれたんだろう。これを飲んだら横になれるよう、戻るか？」

跪いて覗き込めば、不安そうな瞳がおずおずと見つめてくる。

間違いない。

スレンが余計な事を吹き込んで、カルヴィナを怯えさせたに違いないと確信した。

だがそれも、このアラクエア・ヴィータエにかかれば身の内に沈み、新たな熱源と成り代わってくれるだろう。

心の中で亭主に素直に感謝した。大魔女にも。

全部を飲みきる前に、カルヴィナは杯を落としてしまった。

だが僅かだが口にし、それはカルヴィナの喉を潤しながら、体の奥深くへと染み渡っていったはずだ。

その証拠に、先程よりも口調が格段に甘くなった。

「いや、レオナルド様。服くらい自分で脱げます」

あまりにも可憐な様子と、およそいつものカルヴィナらしからぬ大胆とも取れる言動に、心が乱される。

子供じゃない。

俺はすっかり気を良くして、柔らかな肢体を支配する事だけを考えた。

体中に貯まる熱を持て余しながら、甘く香る肌に夢中になって印を付けた。

やがて甘く痺れさせるような悲鳴が、穏やかな寢息に変わって行く事に耳を疑った。

「おい？」

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ 0 \end{array} \right]$$

返事はない。

「俺を殺す気か」

揺さぶってみたが、やはり反応は無くなっていた。

煽るだけ煽られて勢いを増した炎は、燃やし尽くすべく次々と求められているのに――。

[illegible]

寝込みを襲っても面白くない。

第一、カルヴィナを悲しませるだろう。

とんでもない忍耐を強いられながら、迎えた朝日は無情に思えた。無慈悲までとさえ。

大魔女の乾いた高笑い、風によって聞こえてきそうだ。

「カルヴィナ。昨晚は無茶をしたものな。よく眠っていた」

意地悪く、含みを持たせて言い放つ。

所有の証を強調するためにも、カルヴィナの意識が覚醒した今がその時だ。

慌てて掛け布で身体を隠そうとするカルヴィナを、腕の中に捕らえた。

74 レオナルとかつての神様役（後書き）

『なんだ。食っていいのか』

じゃ、ありませんよ、レオナル。

カルヴィナ、好き勝手に言葉の意味が変換されていたよ！ また。

あんまり書くと生々しさが増しそうなので、この辺で切り上げ。

※ アルファポリス様のファンタジー大賞に、エントリーしてみました！

ひひひひひひひひひひ！！

作者にしては思い切りました。

頑張るために。

応援よろしくお願い致します！

選挙運動に参加する政治家みたく、声を張り上げてみることにすら、

ドッキドキです！！ ひひひひひひひひひひ！！

75 カルヴィナとレオナル

「おは、おはよう、ございます。じ、ぬしさま？」

「レオナル」

ただ一言をきっぱりと。

何だろう。

昨日の事は幻か何かでは無かったのだろうか？
そう。

お祭りの独特の空気に浮かされた熱が見せる幻。
そんな期待も一気に消し飛ぶ一言だった。

ギロリと表現するに相応しく見下ろされ、全ての感覚も思考も麻痺してしまう。

身体を支配しだすのは恐怖だ。

彼から放たれるのは、不機嫌さの混じった威圧感としか表現できない。

「……っう、ふえっく」

思わず情けない声が漏れた。

どうして私は頼りない下着姿一枚で、地主様は上半身裸なのだろう？

それだけでも異常事態だと認識するのに充分だった。

恥ずかしいのと怖いので、思わず身を隠したくなって掛け布を引っ張り上げる。

「だがそれよりも地主様の動きの方が早かった。後ろから羽交い締めにされてしまう。」

「っあ！」

最初は悲鳴が押し出されるほどに強く、たくましい腕が私の身体に巻き付く。

やがてゆっくりと加減され、息苦しさは薄れた。それなのに。

苦しさからは解放されたはずなのに、私の胸は軋みを上げている。

何も身に付けていない部分の素肌が触れ合っている。そこから伝わってくる熱は、地主様の持つもの。

「地主様」

「レオナル」

首の後ろに押し当てられる柔らかさに、不自然なほど体が跳ねた。

胸が痛いくらいに早打つ。

ちりっとした痛みに、何かと身体を振って地主様を見ようとした。

でも密着しすぎているせいで、それはかなわない。やがてその小さく焼け付くような痛みは引いた。でも、微かに痛みを覚える。

それはまるで指先に火傷を負った時に似ている。

火から手を引っ込めて水で冷やしても、どうしたって肌に痛みは残る。

それに似ていた。

同じ痛みが胸元に居座っているのに、今更ながら気が付く。

この感覚が小さいながらも無数に、散らばっている事に私は怯えるしかなかった。

「地主様、あの」

「……。」

「ん、やっ！」

今度は何も言われなかったが、また同じように首筋に痛みを与えられた。

レオナル。

そう名を呼べと無言で責められているに違いない。

「放して下さい、地主様」

「……。」

答えは返らない。

地主様の唇が項から肩へと滑る。

少し、ちくちくするのはきつとお髭だと思う。

また、伸ばされるのだろうか。

「じ、」

ふいに体が浮いて、向き合わされる。

苦しそうな光をたたえた瞳とかち合う。

何事かと驚いていると、そのままゆっくりと横たえられてしまった。

陽の光で温められた寝床から、細かなチリが舞うのが見えた。心地よさを感じて、眠気に引き戻されそうになる。

右の肩を大きな手で押さえ付けられて、顎を捉えられた。強引ではあるものの、乱暴にはない。

「カルヴィナ。どうして名前では呼んでくれないのだ？」

「どうしてって……。恐れ多いからです」

「恐れ多いとは何だ？」

「地主様が地主様だからです」

「それがどうした？ 昨晚はあんなに呼んでくれたではないか」

「わ、忘れて下さいっ！」

そういえば、と一気に夜更けの事が思い出される。

ただならぬ雰囲気流されて、怖さのあまり根を上げたのだった。きっとお酒も少し入っていたからだと思う。

でも、今は違う。

ちゃんと身をわきまえねばならない事くらい、心得ている。

お祭りはもう、終わったのだ。

乙女に焦がれる森の神様も、彼を想う巫女の魂も、森の奥深くへと帰っていったはずだ。

だから、この胸に居座り続ける想いはきっと、彼らの名残に違いない。

「カルヴィナ。おまえは俺に腕輪を贈ってくれた。赤い石の。そう

だろう？」

地主様に腕をかざして見せられる。

これがその証拠だ、と言わんばかりの勢いだ。

「はい」

「だったら、何故そう頑なに俺を拒むのだ？」

「拒む？」

「そうだろう。俺にはそうとしか思えない。おまえは身も心もこの腕輪に託して、俺に差し出してくれたのでは無かったのか？」

「……？」

どうしよう。

また、地主様の言っていることが解らない。

でも理解しようと頭をひねった。

昨日スレン様から言われた言葉も参考にするならば、私は地主様に自分自身を丸ごと差し出したということになるのだろう。

それがどういう事なのか、はつきりとは知らない。

でも臆気でも自分がどういう状況に直面しているのかくらい、知っている。

もしかしたら、とも思い当たる。

「えっと？ どうぞ地主様の、気の済むようになさって下さい」

覚悟を決めて目をつぶった。

赤い石の意味するところは、乙女の純潔——純血。

血肉を捧げようとした乙女を見習ってのものが、赤い石で表すようになったのだそうだ。

・。・。・。・。・。・。・。・。・。
・。・。・。・。・。・。・。・。・。
・。・。・。・。・。・。・。・。・。
・。・。・。・。・。・。・。・。・。

「今晚は地主様は遅くなるから、夕食はいらないそうだよ」

「そうかい。伝えておくよ。何だい、地主様は夜のお仕事のために、町にでも繰り出すのかい？」

「およしよ！ 全く！ 地主様の事をそんな風に言うもんじゃないよ」

「なんでえ。地主様だって立派な男だ。いくら澄ましていようと、時には必要ははずだぜ。オンナがさ。せっかく手に入れた大魔女の娘っ子じゃあ、まだまだ相手は務まらないだろうしなあ……つて！ 痛え！ ぶつなよ！」

「お黙り！！」

地主様のお屋敷で、そんな話を聞いてしまった事がある。

でも今にして思えばそれは、少しだけわざと大きな声で言われていたのかもしれない。

私の耳にも届くように。

地主様も男の人。

だから女の人が必要な事がある、という事だろう。

きっと、私はそういうものの対象としてはあまりにも子供すぎて、不向きなのだという事を言われていたのだと察した。

当然だと思う。

たいして魔女の力も発揮できず、だからといって地主様を慰める事も出来ない。

75 カルヴィナとレオナル（後書き）

『足りない知識でもって明後日方向の答えを導き出すよ、魔女っこ』
もうこの子は恋愛初心者ですから。

その所、頼みますよ、レオナル。

※ アルファポリス様のファンタジー大賞にエントリーしています。

どなたか存じませんが、応援ありがとうございます！

ありがたやゝありがたやゝ！

頑張ります！

76 カルヴィナとレオナルと仲介役（前書き）

少々、乱暴なシーンがございます。

76 カルヴィナとレオナルと仲介役

肩を揺すぶられる。

ますます身を小さくして、固く目蓋を閉じた。

「カルヴィナ。カルヴィナ。悪かった。言い過ぎた」
「？」

「おまえをいじめすぎた。悪かった。責めたのでも怒った訳でもない。だからそんなに怯えないで欲しい。許してくれ」

勢い良く抱き起こされる。

慌てたように幾度も背中を撫でられた。

そろりと目蓋を持ち上げる。

そこでやっと自分がガクガクとおかしいくらい震えながら、涙を流している事に気が付いた。

色々と驚きすぎて、訳が分からなくなってしまっていたようだ。

「悪かった。おまえの気持ちのこもった腕輪はありがたく受け取った。大事にする。だからおまえに無茶させたい訳ではない。俺が急ぎすぎたのだ。悪かった。許してくれるか？」

そう優しく何回も謝りながら、頭を撫でてくれた。

私が落ち着くまで、ずっと。

「地主様、あの、もう大丈夫ですから謝らないで下さい」

「カルヴィナ」

「服を着たいです、地主様」

そう訴えると、地主様は椅子の背に掛けてあった私の服を取ってくれた。

それだけではない。

さも当たり前のように、私の腰に手を回して持ち上げようとした。その意図に焦った。

「地主様。あの、自分で自分の事くらい出来ます」

「巫女の衣装も自分で脱げなかったくせに？」

唇の端を持ち上げて、地主様は笑みを浮かべながら言う。

どうやら本気で責められた訳ではなさそうだ。

からかわれたのだろうか。

「ええと。それは申し訳ありませんでした。地主様がたたんで下さったのですよ、ね？」

「そうだ」

「う……。」

よく見れば、巫女の衣装の上に置かれているのは、神様の面だ。

白い布地の上には、闇色が鎮座しているように思えてしまう。

何だろう。

どうしてこんなにも居た堪れなさが増すのだろう。

腕や胸元の筋肉の盛り上がり方に、なるほど私など簡単に持ち上げられる訳だと納得する。

厚みのある体はそれだけで威圧的に感じるほどだ。

腕だって私の脚以上に太い。

どうりで逃げられないはずだ。

男のヒトのカラダ、だなんて思った。

改めて落ち着いてみたら、急に恥ずかしくて仕方がない。

頬が火照ってしまふ。

きつと耳までも真つ赤だろう。

側に落ちていた服を引き寄せて、体を隠すようにしながら、地主様をうかがった。

「着替えますね、地主様」

「ああ」

なかなか出て行ってくれないので、まだ何か言いたいのだろうか
と首を傾げた。

「あの、着替えくらい一人で出来ますよ？」

「……ああ。悪かった」

地主様が扉を閉めてくれるまで、動かずに見守っていた。

• •	
*	•
• •	○
•	•
○	• •
•	*
• •	• •
*	•
• •	○
•	•
○	• •
•	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•

それから二人ともちゃんと服を着て、静かに食事をとった。

焼いたお魚と、残っていたパンとで。

魚は地主様が私が寝ている間に、仕掛けた罠を引き上げたそうだ。いつのまにかそんな事までこなしてしまう地主様は、やっぱりすごいと感心してしまう。

せめてと食後のお茶をいれようと立ち上がると、やんわりと制された。

「杖が無いだろう？ 大人しくしていろ」

確かにいつも使っている物は見当たらなかった。

広場に忘れて来てしまったのだ。

後で取りにいかなければ。

そう考えながら「いいえ」と、首を振って見せた。

少しだけ歩いて、暖炉の脇に立てかけて置いた予備の杖があるのだと見せた。

私の手に刺が刺さってしまわないようにと、丁寧に持ち手の部分が削ってある。

それでもいくらか手応えが有りすぎて、掴みにくいのだが、うんと頑丈な太さの杖ではある。

私はこれで一人で動けるのだと主張する。

「予備を作って貰ったのです」

「作って貰った？」

「はい。ジェスに」

頷いて答える。

その間に、体が浮いて椅子に腰掛けさせられていた。

「え？ え！？」

何事かと目を見開く。

気が付けば手にした杖は地主様の手にあった。
返して欲しいと、手を伸ばしたが無視された。
一体どうしたというのだろうか？

そんな風に怯えていたら、耳慣れない音が響いた。

――ベキィ！

地主様は私に構うことなく、自身の腿を使って杖を真つ二つに折ってしまったのだ！

そこにためらいは微塵も感じられなかった。

しかもその二つを勢い付けて、放り投げられてしまった。
暖炉の側に置いてある、薪の上にと。

カラン……カラン……。

無残な形となった杖が、積み上げた薪から滑り落ちて行くのを見ていた。

何が起こったのだろう。

一連の動きを目で追っているうちに、視界がみるみるぼやけてきた。
た。

地主様と目が合う。

「カルヴィナ。あの男、」

「っ、う、わああああん！」

私はかつてないほど大声上げて、泣き出してしまった。

・。・。・。・。・。・。・。・。・。
・。・。・。・。・。・。・。・。・。
・。・。・。・。・。・。・。・。・。
・。・。・。・。・。・。・。・。・。

扉を閉める音が聞こえた。
やたらに響く靴音も伴う。

——あれ？　せつかく無事にお祭りが終わったっていうのに、何
だって深まってるわけ？　絆じゃなくて溝が。

——うるさいぞ、スレン。

——あー。レオナルが悪いんだろ。また突っ走っちゃったから、
フルルがついて行けなかったんだ。あーあ。

そんなやり取りが扉の向こうから聞こえてきた。

「フルール！　聞こえてるんでしょ？」

「……。」

ドンドン・ドンドンと、扉が絶え間なく叩かれ始めた。

「フルールー！　いい加減、機嫌を直して出てきてあーげーてー
！」

ドンドンと強く叩かれるから、振動が伝わって私を落ち着かなく
させる。

扉に寄りかかるのを止めて、距離をとった。
そのまま、じりじりとお尻を引きずるようにして、部屋の隅に逃

げる。

地主様は口ではああ言っていたが、本当はとても怒っていたのだ。だからああやって、杖に怒りをぶつけたに違いない。

本当は、杖じゃなくて、私のことをああしてやりたかったに違いない。

怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

それしか感じられなくなった。

「フールールー！ レオナルはとつくに降参しているから！ 頼むから、出てきてあげてよ」

「……。」

返事も出来ないまま一人、首を横に振り続ける。

扉を叩く音は止まなかった。

スレン様の割には、意外としつこい。

76 カルヴィナとレオナルと仲介役（後書き）

『レオナルの株が、また下降の兆し。』

本当に何してくれるんだ、この男。

怒りに囚われて何もかも台無しにするタイプ。

仕事じゃ抑えがきくのかなあ。

魔女っちは大きな音や、乱暴な動きが怖くて仕方がない。

——猫だ！

スレンとフルル

私はおばあちゃんの部屋に閉じこもって、泣いた。

地主様が私の事を置いて帰ってくれる事を期待して。

じつとして息をひそめる。

• •		
✱	•	○
• •		
•	•	
○	• •	
•	✱	
• •	• •	
✱	•	○
• •		
•	•	
○	• •	
• •	✱	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○
	•	

すまなかった、許してほしい、出てきてくれないか、喉は乾いていないか、腹は減っていないか、何か言ってくれないか、という事を繰り返し繰り返し、順繰りに言われた。

それでも黙つたまんまでいた。

どうしようもなく泣きすぎて、声を出す気にもなれなかった。すごく、疲れる。

地主様と一緒にいると、予測のつかない感情の嵐に放り込まれるから、すごく疲れる。

それだけじゃない。

すごく、胸が痛くなる。切ないなんてものではない。見えない剣でめった切りにされたも同然に感じる。だから。

もう、嫌だ。

地主様もそのうち嫌気がさして、置いていってくれるに違いない。そう、踏んでいたのだが、思ったよりも地主様は辛抱強かった。言葉を発さなくなったが、一向に立ち去る気配がないのだ。

ずい分時間が経ったはずだ。

さて、どうしたものかと考え始めた頃に、スレン様まで加わったのだ。

「フルールー！ レオナルは死ぬほど反省しているみたいだから、許してあげてー！」

ドンドン・ドンドンと扉を叩く音で調子を取りながら、スレン様は繰り返す。

すごく辛抱強く何度も何度も。

いつもの軽い調子でありながらも、そこにはどこことなく真剣さも感じられた。

何にせよ、この方から感情らしきものが伝わってくるのは珍しい。

意外にも心配してくれているようだ。

「……。」

そろそろと扉に近づく。

この扉の向こうから、心配そうな気配が二つ私をうかがっている。

「もう！ レオナル、何やったんだよ？ たそがれ黄昏ている場合じゃないだろ」

「俺が大きな声を掛ければカルヴィナを怯えさせてしまう」

「ああ、そう！ そうやって学べたのはレオナルにしちゃ、殊勝な事だ。そうやってカルヴィナ自ら出てきてくれるまで待つつもりな

んだな」

「そうだ」

「どれくらい経つのさ？」

「朝方からだな」

「今はもう夕刻だ！ 充分待っただろう！ そうやって気配を殺して、息を潜めて根競べかい？」

「まあ持久戦だな」

「いい加減にしてくれ！ お前、勤めを放棄する気か！ 俺の立場が無くなるじゃないか」

そちらの心配か。

いくらか肩が落ちる気もしたが、スレン様らしくてほっとする。

より一層、焦りを込めて扉を叩かれた。

ドンドン・ドンドン・ドンドン！

「フルールー！ 勘弁してくれ。レオナルは大事な勤めがあるのに、俺に押し付ける気満々だよ！」

それはいくらなんでも、いけない気がする。

地主様の足を引っ張る何て、さすがに申し訳ない。

「フルル！ 出てきてくれないとレオナルの奴は、絶対、動かないよ。それで後からリディアンナとジルナ様から死ぬほど責められるよ！ だから、許してやって——！！」

「レオナル！ お前もどうにかしろ。焦れ！ 焦りを見せろ！ せっかく築き上げてきた信頼を失う気か？」

「カルヴィナの信頼なら、もう失っている」

「そっちもそうだけど！　そうじゃないー！！　神殿の護衛騎士団長が不在で済むか」

「オマエがいるだろう」

「……っ！　助けてフルル！　頼むから、出てきて一緒に帰ってやってくれ。今、神殿の方も大事な時なんだよ。それなのに、レオナルの奴、お飾りの立場の僕に重労働を押し付けるんだよ」

「オマエにも自覚はあるんだな。だったら飾りの立場らしく、たまには必死で取り繕って場を持たせてみる」

「八つ当たり反対！」

扉の向こうでは、スレン様と地主様の言い争いに移行していった。

今聞いたスレン様の話しは切羽詰っていた。

とてもじゃないが嘘だとは思えない。

「……。」

せっかく築き上げてきた信頼を失う？

地主様が私に構っていたせいで？

そんなことは、あってはならない。

地主様ご自身が何よりもご存知だろうに。

いけない！　これ以上、意地を張っている場合ではなさそうだ。

震える指先で錠を外す。

カチャリと控えめな音が響いた。

恐る恐る扉を押し開ける。

「フルル！」

「カルヴィナ」

何て素早い動きの出来る人たちなのだろう。

思わずまた扉を閉めかけたのだが、許されなかった。

スレン様は手どころか足まで隙間に挟み込んでいたからだ。

そこに地主様も加わっては、もう何の抵抗も出来なかった。

地主様が大きく扉を開け放つと、支えを失ってよろめいてしまった。

すかさず、スレン様に腕を掴まれ引き寄せられる。

「フルルー！ 捕まえたっ。捕獲っ！ ……睨んでも代わってやらないよ」

一瞬もがいて助けを求めそうになったが、それもどうかと堪えた。

空をさ迷わせた腕は、スレン様に縋らせる。

ぎゅ、と強くスレン様の袖口を引っ張った。

あんまり密着しないで欲しいという抗議を込めて。

スレン様の影から地主様と目があった途端、一瞬で体が強ばった。

怖くなって、すぐ視線をそらしてしまった。

また胸が痛くなる。

スレン様はそんな私を庇うように抱き込んで、地主様の視線を遮ってくれる。

「フルル？ 一体、何があったんだい。レオナルに虐められたのは間違いなさそうだけど」

こっそり尋ねられた。
声をひそめて答える。

「杖……折られて、投げつけられたの」

何とか声を絞りだして、そう短く訴えた。

ただ、それだけだ。

再び涙がこみ上げてしまう。

「そうか。それはレオナルが全面的に悪いね。よしよし、怖かったろう」

大きな手が頭を撫でてくれる。

初めてあった日にされた、飼い犬のケインとやらにするのとは、ちよつと違う手つきだった。

どうしたのだろう。

スレン様が優しくて気味が悪い。

それでも今はこの優しさにすがってしまった。

胡散臭く感じながらも。

私を見せないようにしながら、スレン様は怒鳴った。

「レオナル——！！ フルルにとったら杖は自分の足なの！ それをそんな風にされたら、自分を痛めつけられたと思うにきまっているだろう！ 謝れ」

「ああ。カルヴィナ、すまなかった。おまえの口からあの男の名を聞いて、つい……。カッとなってしまった。許してくれるか？」

その声はすごく静かだった。

静かすぎて深く沈み込んでいくかのよう。

地主様は深刻なまでに悪いことをしたと、思ってくれているのが

伝わってくる。

そっと窺うと、目があった。

その様子がまるで、叱られている時の彼の猟犬に見えてしまった。それも盛大に雨に打たれた上に、なおかつ怒鳴られた後みたいなのなだれ具合だ。

いつもの堂々とした地主様のお姿に変わりはない。でも醸し出される雰囲気は淀んで暗い。

急に罪悪感を覚える。

「カルヴィナ？」

「……はい」

ただ、頷いて何とか声を絞り出す。

とたんに立ち込めていた暗雲が晴れたかのように、地主様の表情が明るくなった。

その事に安堵する自分もいる。
何だか肩の力が抜けた。

「よしよし。仲直りだね」

「スレン。もう離してやれ」

「まだ、ダメ」

「離せ」

「ダメ」

「返せ」

「ダメッたらダメ」

スレン様は断固として譲らなかった。

• •		
✱	•	○
• •		
•	•	
○	• •	
•	✱	
• •	• •	
✱	•	○
• •		
•	•	
○	• •	
•	✱	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	✱	
	• •	
	•	○
	•	

「しかしフルルはやるねえ。あのレオナルが形無しだよ」

間延びした声に感心が含まれている。

それに合わせるかのように、軽快に進む馬の足音が、また妙な調子をつけた。

「君の出した条件を呑んで大人しくしているものね。あの、独占欲の塊がさあ」

あの、でスレン様は顎をしゃくって、後ろを示した。

少し離れて地主様も馬に乗り、私たちの後が続いている。

私は身を乗り出す訳にもいかず、ただ追いかけてくる蹄の音でそれを確認するだけだ。

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \circ \end{array} \right]$$

条件なんて出した覚えがない。

ただ、地主様と一緒に戻るのは嫌だと言っただけだ。

どう答えようもなく、微かに首を横に振ってみたり曖昧に頷いてみたりした。

そのまま首を傾げてみただけ。

どうして私はスレン様と一緒に馬に乗っているのだろうか？

ほんの数刻前までは思いもしなかった状況だ。

頭を動かし過ぎた。

ずれ落ちたショールをかぶり直す。

地主様とはまた違った大きな手が、私を抱え直す。

その手の持ち主をそっとうかがった。

線の細そうなスレン様だけど、やっぱり男の人だなんて思った。

「ん？ 何なに？ フルル。僕に見とれちゃった？」

「いいえ」

「何だよお」

即座に答えると、ふてくされたような返事をされた。

スレン様の馬は白馬だ。

何でも「僕の持つ印象にピッタリだから」だそうだ。

よく理解できないが、確かにそうだなとも思える部分はあった。

ただし、黙って真面目なお顔をされていれば、という条件付きでだ。

つくづく残念な気がする。

そう思ったがわざわざ伝える訳もない。

黙って終わらせようとしたら、スレン様はにっこり笑った。

「フルルの目は口ほどにモノを言ってくれるね」

L

○

わ

5

L

 $\sim$

2

•

?

が

!

1

77 スレンとフルル（後書き）

『スレンと逃避行。』

そんな始まりです。

スレン、どこまでも自分勝手。

地主よ、頑張って挽回してください。

このセリフも何回目でしょうか。

78 カルヴィナとスレン

景色がどんどん後ろに流れていく――。

駆け抜ける疾走感に翻弄されてしまう。

どうしたって、スレン様にしがみつくより他はなかった。

その手触りには覚えがあった。

お祭りの準備中の地主様もこの手触りだった。

厚みがあつて、ゴワゴワとしていて、何となく取っ付きにくい。

これこそが、彼の言う大事なお勤め服とやらの違いあるまい。

色合いや意匠こそ異なるが、地主様が神殿に行かれる時の服装に似ていた。

それに身を包んだ人を引き締めて見せる上等の衣服は、けして派手ではないが地味でもない。

表情も、雰囲気までも、何もかもが少し違って見せるのだ。

それこそがこの衣装の目的なのだろう。

重役の任務に当たるといふのがどういふことなのか。

それを垣間見せてくるようで、私は苦手に思っている。

その襟首に刺繍された蛇と絡む鳶の紋様が、神殿の象徴だと言うことくらい私だって知っているからだろうか。

[illegible]

神殿。

そこに集うは能力者として名乗りを上げた人たち。

あるいは見出された人たちだという。

おぼあちゃんからは、そう聞いている。

いにしえ

古から語り継がれた叡智と自然からの恩恵の、集約の場。

様々な人々の想いが編み出した魔術というものが加わって、独自に発展しているそうだ。

政^{まつりごと}は中央政權、すなわち王族が主だって行う。

それとは別に祭事は神殿が行うのだ。

神殿が祀るのは女神デルメティア。

彼女が司るのは豊穡だ。

乙女に身をやつした女神が、この地に降り立ったという言い伝えは子供だって知っている。

その乙女がこの国の王族の祖先と恋に落ち、その身に命を宿したという事も。

女神は母となり、やがて豊穡の大地となった。

その夫に選ばれた者は、その実りを国中に分け隔てなくもたらす事を誓い、王として認められた。

そんな二人の間に生まれた子もまた、この国を導いたという。

それがこの国の王族の始まりとされている。

だが豊穡の女神の方は血の流れに則って現れる訳ではなく、常に生まれ変わり続けているらしい。

この国の乙女として生まれたものは皆、女神様の血を受け継いでいるとされているのだ。

だから神殿を統治する王は世襲制ではなく、時が来たら自然と選ばれるもの。

一度もお目にかかった事はないが、今の巫女王様はご高齢であるらしい。

既に70歳近いというのを、おばあちゃんから聞いた事がある。おばあちゃんと同じくらいの歳だ。

その御方こそが、地主様がお仕えしている尊い御方なのだ――。

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

スレン様の正装姿に、そんな事をつらつらと考えていた。

この国を代表する御方に仕えておきながら、地主様は何を考えているのだろうか？

今まであんまりにも遠い話すぎて、いまいち掴みきれないでいたが、そうも言っていない。

私に構っていたせいで、何か大切なお役目を放棄する気だとしてら……。

地主様はどうかしている。

「レオナルときたらさあ。フルルを見たたん、さらって行っちゃったでしょ。森の娘を自分の元へとさ。だから僕は追いかけて、様子を見たんだ。わざと意地の悪い言葉をぶつけてね」

何故、そんな必要があるのか。

もちろん私には解らなかった。

スレン様はお構いなしで続ける。

「そうしたら案の定。つまらないプライドからフルルをこき下ろした。聞いていたよね？」

はい、と。

どうにか答えた。

そんな答えも風にさらわれて、遙か後方だ。

思わず地主様に届いてくれるなど、祈らずにはいられない。

もちろん耳に届くようなものではないと知ってはいるが、このわだかまった想いが礫^{つぶて}になってぶつかってしまふ事を恐れた。

風というものは何もかも、さらって届けるものだから。

目に映らないものなら、なおさらだ。

ぎゅっと目をつぶった。

みっともないカラス娘。

貧相な娘。

しかも足を引きずって歩く。

いくらか時間が経ってくれたおかげで、はっきりとその言葉は思
い出せない。

だがその分、言われた言葉の指す意味合いだけが凝縮されて蘇る

のだ。

要点だけを突き詰めて、私のことを何という風に捉えているのか。それだけは忘れられない。

何より、忘れてはならないと自分自身を諫めてもいる。

そういえば――地主様は追いかけて来てくれているのだろうか？

ふとよぎった考えに、自分自身の浅ましさに嫌気がさした。

あれだけ地主様を拒んでおきながら、いざという時は彼の姿を求めてしまう何て。

あれほど置いて立ち去って欲しいと願っていたくせに。

いつ、地主様から愛想をつかされてもおかしくないのだ。

怖くて後ろを振り返ることも、スレン様にも尋ねることも出来ない。

私は、自分勝手な娘に違いない。

あんなに真剣な眼差しの地主様を、突き放すようなマネをした。そうしてスレン様の手を取ったのだ。

あの時、彼はどんな目で私を見ていたのだろうか。

胸が痛んだ。

「自分のプライドの方を優先するヤツに、フルルを任せて何ておけないよ。だから、フルルが出て行くように仕向けたよ。何でわかるのかって？　だって君。そんなに大人しくないもの。弱っていたけど、何かしら対処しようとするでしょ。大魔女の娘だものね」

私というお荷物を乗せてなおかつ、こんなにもしゃべり続けているながら、スレン様の呼吸はまったくもって乱れていなかった。

「レオナルは迎えに行った。あのまま無視するかな、って本当は思ったんだ。面倒ごとが無くなった。そういう答えを出すかな、と思ったんだけど。意外にも自分で追いかけた。人も使って、あちこちに配置して。それこそ、囚われているって公言しているようなものでしょ？」

「囚われている？」

地主様ほどの方が、何に囚われていると言うのだろう。

あの方は自由だ。

何においても彼自身に選ぶ権利があると、私は思っている。

それは私には無いものだとも。

悲しくなって瞳を伏せる。

そんな風に思っ て面をあげられなくなる自分がますます、その輝かしい何かから遠ざかる気がした。

少しでもいいから彼の側にいるのに相応しい、人となりを望んでいるのだと気が付く。

それが具体的にはどういったものなのかを考えるのが怖くて、事実を突き付けられる前から、私は逃げている。

今だってそうだ。

「もう、馬を止めて。下ろしてください」

意を決するよりも早く、言葉が口を付いて出た。

体をこわばらせて、その場に留まるようにしてみたが、何の効果もなかった。

「嫌だよ」

「お願いします」

「……ダメ。もうちょつと、付き合って」

スレン様は少しだけためらってから、続けた。

「レオナルは繰り返し返すよね。君の魅力にひれ伏しては、それに抗うていうの？　優しくしては突き放す。矛盾しているんだよ。君を大事に想う心と己の自尊心を量りにかけては、その重みの傾くほうがわずかばかり自分なんだ。レオナルが一番フルルを侮辱しているに、他ならないと思わないかい？　そのくせフルルって呼ぶ僕を怒るんだ。要は自分以外の誰かが、フルルを侮辱すると怒り狂う。フルル自身がフルルを卑下してもだよ？　何様のつもりなんだろう。そう思わないか」

「それは、私が税を納めてこなかったし、色々と問題のある娘だから……。」

「まだそんな事を言うの？」

うまく答えられないまま、スレン様の走らせる馬に揺られ続けた。

[illegible]

いづらか風が柔ら became った。

馬の足音にもゆとりが表れる。

それでも私の動悸は収まらない。

吹き付けてくる風は心地よく、厳かなながらも暖かな空気に出迎え

られる。

開けた原っぱの先に待つもの。

それは、森の彼ことオークの巨木だったからだ。

「さて、振り切ったね。どうしたのさフルル？ 君、ここが好きだろう」

スレン様がこともなげに言うのを、ただぼんやりと聞いていた。

78 カルヴィナとスレン（後書き）

『何のつもりでしょうか、スレン？』

何か考えあつてのことなのは、間違いありませんが。

もう少し彼の目的にお付き合いください。

79 スレンとフ・ルールウ

心地の良い風が迎えてくれる。

すべての風が行き着く場所だと思う。

いつもなら心踊る場所のはずだった。

でも今は勝手が違う。

いつのまに？

しかも案内が無いというのに、どうやって？

何故、スレン様がこの場所を知っているのだろうか？

次から次へと疑問が沸き上がる。

それが、この一見優男にしか見えない彼を、得体のしれない存在だと突きつけてくる。

あなたは、だれ？

そう尋ねたくとも、恐ろしさからか声が出てこない。

「さあ、降りようか」

スレン様は軽く一礼して見せてから、馬から飛び降りた。

意外にも思える行為に、スレン様にも一応の礼儀が備わっているようだった。

さすがは森の彼だとも感心する。

曖昧に頷いているのだから、頭を下げようとしているのだから解らない私を、スレン様が降ろしてしまう。

そのまま、さも当たり前のように、後ろから腰を抱えられた。居心地悪く感じたが、あまりに自然なので構うのも馬鹿らしく、身を任せた。

ゆつくりと進む。

ぎこちない足取りは、途中で何度ももつれた。

ともすればそのまま、うずくまってしまいたいとすら思った。だがそれは許されなかった。

その度にスレン様に抱え直され、向き合われる。

スレン様は何も言わなかった。

ただ、私の足で一歩づつ彼へと向かわせた。

近づく度に大きな気配が濃厚になって行く――。

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

「森の彼」は変わらず威厳に満ちて、凜と立っている。

ところが私ときたら、どうだ？

泣きすぎて思考はうまく働かない。

きつと目も腫れていることだろう。

姿勢を正したい所だったが、そうするにはあまりに酷い有様のよ

うに思えた。

思わずショールを深くかぶり直してしまう。

まるで寝起きなのに地主様に出くわしてしまったかのような、そんな気持ち。

つくづく私は決まらない、と情けなさまでこみ上げてくる。

だが歩みを止まらせる事は出来なかった。

スレン様は私がためらう度、やんわりとだが強く促すように一歩を踏み込んで、ここまで連れてきた。

「さて。この樹の下でかつての乙女と若者も見上げたんだ。二人揃って」

いよいよ森の彼の枝の下に入ると、スレン様は切り出した。

何の抑揚もない呟きだったが、何故か私の心をざわめかせるのに充分だった。

それに呼応するかのように、風が吹いて大きく枝がしなる。

ぱらぱらと視界を掠める何かが落ちてきて、足元を見ればそれはオークの実だった。

「いてて」

ふと見上げれば、スレン様は片手で頭を庇うようにしている。

きっとオークの恵みに打たれたのだろう。

いつかもこんな事があった。

一緒にオークの恵みに打たせてもらった。

楽しかった思い出に、僅かに頬が緩む。
でも何故か、心が重い。
やり切れなさが広がった。

今、一緒に恵みに打たれているのが、スレン様だからだと思う。
それを見透かしたように、スレン様が言った。

「フルル。やっぱりレオナルの方がいいんだね」

「……。」

からかいは一切、感じられなかった。
だからこそ余計に、私は何も答えられなかった。
ただ、黙り込む私にスレン様は続ける。

「ねえ、やめておきなよ。言ったよね。レオナルは、君には不釣合
いだって。レオナルは……だし。君は大魔女の、森の娘だもの。こ
れから先が予想できるでしょ」

「……あなたは、一体、」

それだけ言うのが精一杯の私を遮って、スレン様は言葉を止めよ
うとはしなかった。

「レオナルはこれから先々、また君にとんでもないことをしでかす
よ。別に君が悪いとかそういう事じゃない。それはレオナルがレオ
ナルであるからこそ、起こりうる事なんだ。その前に僕たちとおい
でよ」

——ねえ、そうしなよ。

動けなかった。

否やと答えたいはずなのに、どうしてか首を縦に振ることすら叶わない。

ここに踏み止まりたい。

ただそれだけを願う。

ここという場所がどこなのか。

それは。

まぶたを伏せ、それは何処かと自分の胸に尋ねる。

間違いなくまっ先に浮かぶと思われた、森の姿は無かった。

その事に驚いて、目の前のスレン様を見上げる。

スレン様は困ったような顔をして、それから笑った。

「ね？ フルル、そうしなよ。君の事を大好きな者たちも、それを望んでいる」

手を差し伸べられる。

それはそれは優雅に。

一緒に踊ろうと誘うかのような気楽ささえも、憎らしかった。

その手を拒むにはどうしたらいい？

でもどうしてその手を拒む必要があるの？

簡単だ。

ただその手に、手を重ねればいいのだから。

全てはそれで済む事を、私はどこかで承知していた。

今ならまだ間に合う。

取り返しのつかなくなるその前に。

この手を取りさえすれば、おそらく私は笑って過ごせるだろう。

これ以上、泣くこともなくなる。

これ以上、胸を痛ませることもなくなる。

これ以上、戻れない想いが降り積もることもだ。

あの方も私を置いて行ってしまう人。

それを忘れてはならない。

それでも。

それでも？

「フルル」

優しく促すように名を呼ばれた。

それから言い直された。

『僕らの、フ・ルールウ』

発音が違えば意味合いも異なる。

それはいきなり優しい響きを持って、私を呼んだ。

フ・ルールウ。

それは古語で愛し子を表す言葉。

一気に涙が溢れた。

説明のつかない、あたたかなもので満たされて溢れ出したかのような涙だった。

懐かしい。懐かしい。懐かしい、私の還りつく場所。

私はゆっくりと、手を差し伸べていた。

79 スレンとフ・ルールウ（後書き）

『何もかも遠ざかって行く感覚。』

また訳の分からないものを表現せよ、と自らに課してみた様子。

それは寂しくもあり、懐かしくもあり。

頑張ります〜！

おかしいな、9月中旬に完結しない。

80 愛し子と夜露

カルヴィナ！！

「あ、れ……？　今、誰かが、私を？」

呼んだ？

呼ばれたと思う。

辺りを見渡す。

スレン様の手に、手を重ね置く寸前に強く呼ばれた。

強く、強く。

それが現実なのか、夢の続きなのか区別がつきにくい。

ぼんやりとした頭は働かず、答えを導き出すこともない。

ただ、今まさに重ね合わされようとしていた手のひらはそのままだ。

スレン様が、小さく舌打つのが聞こえた。

『時間を与えるっていうの？　これ以上の猶予に、一体何の意味があるっていうんだろう』

勢い良く吐き捨てられた言葉は、私にではなく誰かに向かってのようだった。

誰に？

面を上げたがスレン様しか見当たらない。

急に何もかもが恐ろしくなって、一步後ろに逃げた。

背に当たるのは、尊敬する森の彼だった。

ゴツゴツとしていて無骨な彼だが、しっかりと私の体を受け止め

てくれている。

それに心強さを感じたら、何だか視界が晴れ渡った気がした。

視線を定めてスレン様を見上げると、変わらずこちらに手をさし伸ばしたままだった。

まるで追い詰めるかのように。

私はその手のひらと、スレン様との瞳とを代わる代わるに見た。

深い森そのままの瞳に宿る光は鋭かった。

たちまち、射すくめられてしまいそうになる。

それでもどうにか首を横に振る。

『どうして？ フ・ルールウ？』

これ以上は後ろに下がることが出来ない。

声音はこの上なく優しかった。

でも、潜んだ苛立ちは隠しようもない。

スレン様の指先ひとつ取ってみても、それが滲み出ていた。

この方は感情の波が無いのではない。

深くにひそめる事が出来るだけなのだ。

目的のためならば、そうする。

私が人の持つ感情に過剰に反応してしまうと、知っていたからこそその振る舞いだったのだ。

恐怖にすくみそうになりながらも、必死で抗うために両手を後ろに回す。

『ねえ、僕らの愛し子。君だって本当は知っているはずだ。何をどうするべきか、何て』

それでも首を横に振り続けた。

弱々しくても、頭を振るのをやめなかった。

スレン様の瞳がすがめられる。

差し伸べられた手は、そのまま伸びて私の顎を捕えた。

緑の眼にしっかりとどき込まれる。

もがいたが、そらすことは許されなかった。

どうしたわけか目蓋を閉じることさえも。

『ねえ、うんと言ってよ。この手を取っておくれ。――――』

風が強く吹き抜けて行った。

オークの木立が大きくしなり、ざわめいた。

それと同じように私の血もざわめく。

それが本格的な恐怖へと入れ替わるのに、そんなに時間は必要無かった。

なぜ？

なぜ、私の真名をこの人が呼ぶのだろう？

『なぜ、あなたが私の……。』

それ以上言葉が出てこなかった。

知らばつくれようにも、真名を呼ばれた強制力のせいなのか、それは出来なかった。

喉が乾き切っていた。

それ以上の言葉は紡げない程に、カラカラに乾いている。

きつと馬鹿みたいに泣きすぎたからかもしれない。

だからこうして大事な時に、声が出ないなんて羽目になるのだ。

スレン様がまるで見せつけるかのように、自身の唇を舐めて湿らせるのを、目の前で見ていた。

『ん？ ふふ。ダメだなあ。ちゃんと用心しなきゃ。森の中で放たれた言葉は全て風にさらわれてしまうって、大魔女から教わったはずでしょ』

確かにそうだ。

でも、私が自分の真名を教えたのはこの後ろの、森の彼だけ。

遠い昔に囁いた事があつただけだ。

ただ、その、一度だけだ――。

「ね？ 僕たちと来るでしょ？」

心は嫌だと叫び声を上げている。

でも声にならない叫びだった。

• •	
*	•
• •	○
•	•
○	• •
•	*
• •	• •
*	•
• •	○
•	•
○	• •
•	*
	• •
	•
	○
	• •
	*
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•

スレン様の両手がオークの木に当てられて、私は閉じ込められていた。

『―――』

耳元に唇が押し当てられてから、真の名を囁かれた。首を振って逃れようとしたが、今度は抱きすくめられてしまった。やんわりと慎重でありながらも、容赦の無い戒めだった。そうして逃げられないようにされてから、再び呼ばれてしまう。

『―――』

どうかその名で呼ばないで欲しい。その名で呼ぶのは、そう。

あの方だけであって欲しい。

レオナル様、レオナル様、レオナル様、レオナル様。

ただそれだけを叫び続けた。

私を夜露と名付けてくれたあの人の名を呼ぶ。

人は追い詰められると、本当に頼りにしている人の名を呼ぶ。

それがおばあちゃんでは無くなっていた事に驚きと、戸惑いが隠せなかった。

先程、私があるべき場所と浮かべたのは森ではなかった。

そんなはずはないと打ち消そうとしても、それはならなかった。

それは。

それは。

「カルヴィナ！」

それは私を夜露と呼ぶあの方の隣だ――。

[illegible]

「カルヴィナ！」

風のざわめきに乘せて、確かにそう呼ばれた。

強く確かな響きが私を呼んだ。

「レ……オナル、さま？」

「あゝあ。残念。良いところだったのに、追いつかれちゃったよ」

スレン様は、おどけたように言う。私から少し離れた。その背に隠れて見えなかった人影がさした。

「カルヴィナ！ 大丈夫か？ スレン、どけ！」

乱暴にスレン様の肩を押しやると、レオナル様は私を抱きしめた。足が浮き上がる。

私もためらいなく抱きついていった。

まるで私という存在を確かめるみたいに、背を撫でられる。

「カルヴィナ、すまなかつた。カルヴィナ、カルヴィナ、無事か？」

「つく、レオナ、レオナルさま。ごめんなさい、ごめ、ごめんなさい」

温かさに包まれて安心する。

だから素直に謝る事が出来た。

背をあずけていたオークの木と同じくらい暖かで、頼りになる気配に涙が溢れる。

素直に怒りも苛立ちも、喜びもあたたかい想いも溢れるままに、表してくれる人。

「カルヴィナ、カルヴィナ、カルヴィナ」

幾度も名を呼んでもらえて、私はやっと落ち着くことが出来た。

「すまなかった。来るのが遅れた。怖い思いをさせてしまったな？

——スレン！　　どういふつもりだ！」

私を大事に隠すようにしながら、スレン様に詰め寄る。

「ん？　二人とも意地っ張りだから悪いんだろ。良かったじゃない。仲直りできて」

そこにはいつもの、本当に今までと変わらないスレン様しか居なかった。

80 愛し子と夜露（後書き）

『フ・ルールウとカルヴィナ』

スレンの正体たるや、何だ。

敵なのか味方なのかすら、はっきりしません。

レオナル、ぎりぎりセーフ！

どうやってここまで来れたのかは、また次回です。

81 レオナルとシュディマライ・ヤ・エルマ

結局はカルヴィナが思うようにならないから、怒りを爆発させてしまっただけだ。

結果がこれである。

心底怯えさせ、何もかも拒まれた。

ここから帰らない、と強く宣言された。

当然の流れだろう。

確か菓子屋の所でも似たような事があつた。

ならば、俺もここに居座るまでだ。

あの時のように、地主という地位を見せつける真似はするまいと思った。

結局カルヴィナには自分が借金を返さぬまま逃げようとしたから、連れ戻されるのだと認識させてしまったからだ。

閉じられた扉の前で、ただひたすら待つ――。

.	.		.	.
*		.	.	
.	.			o
.		.	.	
o		.	.	
.	*	*		
.	.	.	.	
*		.	.	
.	.			o
.		.	.	
o		.	.	
.	*	.	.	
.		.	.	
		.		o
		.	.	
	*	*		
	.	.	.	
		.		o
	.	.	.	
		.		o
	.	.	.	
	*	*		
	.	.	.	
		.		o
	.			

日も傾いてきた頃に意外な来訪があつた。

スレンだ。

奴にしては珍しく血相を変えていた。

「もうレオナルになんて、任せておけない」

そう、ごくごく小さく囁くと、扉に向かって叫び出した。

あれこれ訴える内容はまるつきり作り話でもなかったが、だいぶ大げさだった。

「フールー！ レオナルは大事なお役目を放棄しようとしているよー！」

それがさもカルヴィナのせいで、という風に思わせるのに充分な小芝居だった。

なるほど。

こうやって人の心理を巧みについて、こいつは世の中を渡ってきたのか。

俺には出来ない芸当だ。

妙に感心してしまったが、同じようになろうとは思えなかった。

罪悪感を嫌と言うほど感じたらしいカルヴィナが、扉を開けてくれた。

俺に勤めを放棄させては自分のせいだ、と思つての事らしかった。真面目なカルヴィナらしいと思つたし、まだ本格的に見限られた訳ではなさそうだとも思えた。

おずおずと顔をのぞかせたカルヴィナは、ひどく憔悴していた。

その事に胸が締め付けられた。

同時にえも言われぬ色気を感じて、動けなかった。

「カルヴィナ！」

「フルルウ！！ 捕まえたっ」

そんな俺とは裏腹に、スレンの動きは素早かった。あつという間にカルヴィナを捕まえてしまった。

それが面白くなく、取り戻そうとしたが拒否された。スレンからもカルヴィナからも。

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

やはり、帰らない、帰りたくないと訴えられた。

そこはスレンが話術で巧みに言いくるめてくれたおかげで、どうにかこうして帰路についている。

先ゆく白馬を見つめた。

カルヴィナは俺と一緒にならば嫌だと泣いて、スレンにすがったのだ。

「よしよし。じゃあ、優しい僕と一緒にだったらいいよね？」

　　またもスレンは言葉をいように捉えて、何となくカルヴィナの意思を尊重したように納得させた。

「じゃあ、行こうか」

スレンに抱えられてカルヴィナは馬に寄せられた。
いくらか居心地悪そうにして見えるのは、俺の希望だろうか。

やはりこちらがいいと、腕を伸ばしてくれないだろうか。

そんな気持ちも込めて見守る。

目があつたが、ショールを深く被り、顔を隠されてしまった。それでも見詰め続ける。

「ハイハイ行くよ。レオナルはもうちよつと、離れて離れて」

どちらにしろ、狭い森の小道を並んで馬を進める事は出来ない。

仕方なく、その後ろに続いた。

• •		
*	•	○
• •		
•	•	
○	• •	
•	*	
• •	• •	
*	•	○
• •		
•	•	
○	• •	
•	*	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	*	
	• •	
	•	○
	• •	
	•	○
	•	
	• •	
	*	
	• •	
	•	○
	•	

何事か。

いきなりスレンが馬の腹を蹴った。

「はっ！」

やると思った。

奴の事だから、俺を引き離すくらいのいたずらは仕掛けてくるだろうと、最初から踏んでいた。

だが向こうは人ふたり分の重みがある。

馬にとってそれは不利だ。

そうした油断が俺を不利な状況へと追い込んだ。

引き離された？

そんな馬鹿な。

スレンはああ見えても能力者としての腕はある方だ。

人に気付かせず、術を発動させたりも出来るのか。

俺にすら、いや俺だからこそ、手の内は見せないでおいただろう。

スレン、本当に食えない奴……！

歯ぎしりしても距離は広まるばかりか、その馬の背を見失った。

.	.
*	.
.	o
.	.
o	.
.	*
.	.
*	.
.	o
.	.
o	.
.	*
.	.
.	.
.	o
.	.
.	.
.	o
.	.
.	*
.	.
.	.
.	o
.	.
.	.
.	*
.	.
.	.
.	o
.	.
.	.

確かに目では捉えていた。

馬の速さも申し分なく、過不足なかったはずだ。

それでも追いつけないどころか、完全に引き剥がされてしまった。

気が気では無くなる。

カルヴィナと他の男が二人きり、しかも人気のない森の中ときて
いる。

始末に負えないイタズラをしでかすのが、スレンという男だった。恐らく何もしていないでいる、とは思えなかった。

イタズラ。

嫌がらせなどという程度で、収めるか、そうではないとしたら？

「可愛かったから。」などと、さらりとほざいて、実行していそう

だ。

心配の余り、妄想だけが先走る。

「スレン！！ いい加減にしろ！！」

全力で叫んだ言葉も、森は静かに受け止める。

いったん、馬の足を緩めて辺りを伺った。

木立を吹き抜ける風も木漏れ日も、皆、魔女の娘の味方のようにだ。

耳を澄ませても、己の胸の高鳴りだけが響いて聞こえる始末だった。

——落ち着かねば。

まずは、そう自分自身に言い聞かせて、瞳を閉じた。
耳を澄ませる。

どこへ行ったのだろうか？

その痕跡を辿ろうと試みる。

カルヴィナ、カルヴィナ、どこだ！？

そこでふと、浮かんだのは仮面だった。

昨日今日の騒ぎで返しそびれていたものだ。

巫女の衣装と共に、持ち帰っていた。

もちろん、後で改めて村長の家に返しに行くつもりだった。

「カルヴィナ！！」

馬から飛び降り、全力で駆けつける。

仮面は途中で放る。

視界を遮って邪魔だったからだ。

スレンは必要以上に近く、カルヴィナの側にいた。

宥めようのない怒りに、今度こそ身を任せ、勢い任せにスレンの肩を引いた。

「あゝあ。残念。良いところだったのに、追いつかれちゃったよ」

ふざけた口調であったが、スレンの目は挑戦的に、睨んできた。

こいつは時折、俺に敵意をあらわにする。

いつもは、表に出さないようにしているのだろうと思う。

だが、今は構うところではなかった。

「カルヴィナ！ 大丈夫か？ スレン、どけ！！」

木とスレンとに挟まれて、身を小さくしていたカルヴィナがこちらを見ていた。

瞳には涙が溢れている。

だが、そらされる事は無かった。

「カルヴィナ、すまなかった。カルヴィナ、カルヴィナ、無事か？」

「つく、レオナ、レオナルさま。ごめんなさい、ごめ、ごめんなさい」

泣きじゃくりながら、俺へと腕を伸ばしてくれた事に安堵する。

オークの実だ。

それが俺の頭と肩に当たっている。
当たり続ける。

——相変わらず、オークの木からも歓迎されていないようだ。

81 レオナルとシュディマライ・ヤ・エルマ（後書き）

『レオナル、ぐだうだ』

してる場合じゃないよ！

そんなまま次回です。

82 大地主の夜露

カルヴィナ。

俺の夜の雫。

そう。俺のもの。

ただ涙を流し続けていた娘だった。

それを保護し、衣食住を与えているのは俺だ。

それなのにいつまでもこちらに馴染もうとしない。

森こそが自分のある場所だと言い張ってきかない娘に、苛立ちは募るばかりだった。

森がなければ魔女として成り立たないなどと言う、その唇を封じてやりたくて仕方がなかった。

非力な、しかも足の不自由な、貧相な娘のくせに。

財産らしいものは何も持たず、一体どうやって生きて行こうと言うのだ？

言葉にせずとも、そう詰問し続けていた。

思えばあれほど腹が立った事など、そう無かった。

どうしてあれほど、腹立たしくてたまらなかったのだろう。

おまえの頼りにする森が、一体何をしてくれると言うのだ？

この俺こそがお前に与えているというのに。

何故、そんな顔で見られなければならないのだ？

娘は怯えきっていた。

俺を見るたび、顔色を失う。

深く頭を下げて、恐れ多いという言葉でまとめあげて、俺という存在一切を否定してしまう。

いつも浮かない顔をして、食事もろくに取ろうとしないのは、俺に対する挑戦か？

全く、大魔女の娘だか何だか知らんが、つまらない自尊心だけは高いと見える。

散々、なじった。

食事をろくに取らないと聞くたびに。

夜更けに一人で抜け出されるたびに。

「申し訳あり、ません」

娘が涙ながらに謝っても、俺は容赦せず追い詰めて行った――。

俺はどういった訳か、容赦という言葉を持ち合わせていなかったらしい。

あの時の感情は、改めて思い直してみても説明がつかない。

その言葉では言い表せないもどかしさに突き動かされながら、ただ娘の涙を苦々しく感じていた。

大魔女の娘に森が与える恵みとやらと、ロウニア家の材が与える恵みを計りに掛けてみよと、暗に命じていたに等しい。

娘の答えは決まっていた。

仕立てた上等の服も、品数豊富な食事も、働かずとも良い環境も、何もかも負担らしい。

それはこの俺が負担でならない、と言われているも同然だった。

[illegible]

だが、カルヴィナは俺に腕輪を贈ってくれた。

この胸に広がる歡喜のまま、愛しい娘を抱きしめる事も許された。

やっと、大魔女の娘が俺を受け入れようとしてくれたのだ！

二度と踏みつけたりするまい。

そう誓うのも何度目になるのだろうか。

祭りを終えて、カルヴィナは少しづつ、ロウニア家に馴染んでく
れた。

彼女なりに譲歩に譲歩を重ねてだろう。

こちらの用意した服も着てくれるし、たまになら一緒に食事もとってくれる。

そこはよく話し合うようにと心がけた。
ともすれば最初から諦めて、俺の言うことに従おうとするからだ。
俺も、俺の価値観だけで押し付けることのないように、と気を配
ったつもりだ。

祭りが済んだ後も、カルヴィナは森に帰りたいと言ってきた。

その時の落胆ときたら、自分でも驚くほどだった。

帰りたい、だと？

おまえの帰る場所はここだと言い聞かせたいのを、かなり堪えた。
だが遠回しにでも、そのように伝える。

「カルヴィナ。おまえ一人を森におく訳にはいかない」

「……どうしてでしょうか？」

「おまえが心配だからだ。これから冬を迎えると言うのに、一人で
は何かと不便だろう？ それに何より俺の気が休まらない。分かっ
てくれるな？」

「はい」

「だが、たまになら帰ってもいい」

「ありがとうございます！」

「ただし、俺も一緒に行ける時だけだ。いいな？」

「で、でも。それでは地主様にお手間を取らせてしまいます」

「カルヴィナ、そんな事はない。おまえはもうロウニア家に属して
いるのだ。それがどういうことか考えてみてくれた事があるか？」

「いいえ」

「おまえを良からぬ事に巻き込みたくないのだ。ロウニアの財に目を付けた人間だって、いないとも限らない。俺自身、敵も居ないわけではないのだ。そういう輩は大魔女の獣よけ位では防げるものではない。そうだろう？」

「はい」

淡雪のように儂い笑みを向けられたように感じる事に、俺は安心してきっていた。

どうもこの館にいと、カルヴィナが俺に対して一線を引くように思えた。

大地主と大魔女の娘という距離感を守る。

そうさせているのは、このロウニア家特有の空気だろうか。それとも俺自身か。

「カルヴィナ。これから森に出かけるか？」

「はいっ！」

俺がそう切り出すと、カルヴィナの表情が輝いた。

あれほど縮まったと思った距離も、この館にいてはまるで無かったもののようにされてしまう。

だから俺はカルヴィナを森に誘う。

82 大地主の夜露（後書き）

『レオナルの独りよがり変わらず。』

そしてほぼ、独り占め。

さあ、レオナルのこの部分がある限り、今一歩近づけないと思うんですよ。

お祭り終えて一段落。

近づけたようで、日常に戻った二人のこれからが始まります。

83 魔女の娘と大地主

最近、地主様のお許しをいただいて、お庭の隅っこに場所をもらった。

そこはそこそこの日当たりが良くて、水はけも良い。かと言って日が強く当たりすぎる事もないのは、近くに大きな木があるからだ。

だから本当に加減の良い日当たりで、心地が良い。

私が心地よく感じると言うことは、植物たちにもそうであるとも言える。

きつとこの大地の生命力を感じて健やかに伸びるだろう。

そんな薬草達は素晴らしい薬効が期待できる。最高だ。

しかも井戸が近くにあり、作業がしやすい。

まさに魔女の畑にうってつけの場所をいただけた。

ここの所、日の出と共に起き出しては、一番に畑に向かってしまう。

そこで摘んだ新鮮な薬草を厨房に届けて、お茶や料理に使っても

それを地主様への朝食としてお出しするのが、ほぼ日課になりつつある。

どうか地主様の活力になりますように。

植物たちよ、力を貸して。

そう願いながら畑を見渡して、一番光って見える葉っぱを摘む。

少し前までは、おばあちゃんが元気でいられますようにと唱えていたのだから、不思議なものだとも思う。

ささやかだが、魔女の力を発揮できて満足だった。

お祭りから何度か森の家に帰らせてもらって、苗や種を取ってきたかいがあった――。

戻りたいのだと訴えたところ、ものすごく何とも言えないお顔をされてしまった。

眉根が寄り、不機嫌ともまた違う不穏さが漂い、非常に恐ろしかった。

長い沈黙の後、地主様はゆっくりとこちらを見てくれた。

そうして森の家には地主様が一緒になければ、戻ってはならないと条件出されたのだ。

そうでないといと色々と大変らしい。

そういえば菓子屋のおかみさんも、似たような事を言っていた。

地主様の御そばにいますと言うことで、私に目を付ける人も出てくるかもしれないのだ。

地主様はお金持ちだ。

もしも誘拐されたら、身代金を要求されたりする可能性も出てくる。

そうだったら、地主様に迷惑をかけてしまうだろう。そんなのは嫌だ。

だから、一緒に。

⋮

一人、畑仕事をしながら、ほてった頬を撫でてゆく風が嫌に心地よく感じてならない。

[illegible]

森に歸ると必ず……。○

地主様の腕の中に閉じ込められてしまう。

そのまま、ぎゅうつとされて苦しくなつて、助けを求めて顔を上げる。

そうだったら、罍にはめられたも同然だ。

優しく、なだめられるようにこめかみや頬に、唇が押し当てられるのだ――。

「ん、あの、やあ」

「可愛い」

抵抗虚しく。

もとより私の抵抗なんて、あつても無いようなものだろう。それに地主様にしてみたら、森に連れて来てやったのだからこれ

くらい寄せと言っているような。

私は地主様の所有物くらいに思われているような。
何となく伝わってくるものに、恐れおののくしかない。

そのことが私を悲しくさせる。

どうやら男の人という生き物は、女の肌のぬくもりを求めるものらしい。

うつすら聞き及んだ事が導き出した答えがそれだ。
胸が痛くなる。

そつと深くを探り当てようとする動きから逃れたくて、頭を振れば執拗に追い詰められてしまう。

「ん……やあ」

触れ合うだけでは物足りない。
もつともつともつと――。

そんな想いが伝わってくる。

もつと？

これ以上、どうしたらいいのだろう。

苦しくて息が上がる。

無意識の内に涙が溢れる。

しゃくりあげると、優しいけれども怖い指にあやされる。
どう怖いのかという……。

上手くは言い表せない。

ただ確かなのは、私から一切の抵抗を封じてしまうという事だ。

抗おうという気さえも。

そうして耳元に囁き込まれるのだ。

「カルヴィナ。おまえは俺に赤い石の腕輪をくれたのではなかったのか？」

覚えなどないと言い張れたら、どんなにいいか。

何も言えなくなってしまう。

ただ、胸だけが張り裂けそうになる。

ぎゅうぎゅうに何か詰め込まれて、それが勢い良く内側から膨れ上がるかのような。

圧迫感がたまらなく苦しい。

「森に行く」という言葉に頷けば、それはこういった事を許したと言っているも同然になるらしい。

それに気がついてからは、怖くなって頷けなくなってしまった。

そうなると地主様との接点はあんまり無い。

せいぜい朝食の時とお見送り、たまの夕食の時くらいだ。

そこで、ようやく思い知ったのだが、地主様と私とはまったく話が合わない。

今までだっただけでずっとそうだと、当たり前のことだと認識していたはずなのに。

最近はずっと勝手が違っていた。

私は必死で彼の話に興味を持つとうと耳を傾けてみるのだが、まったくもってそんな兆しが見えてこないのだ。

ただ、やっぱり地主様はお忙しいのだなあ、とか。お金持ちなのだなあといった自分との差だけを突きつけられる気がする。

話せば話すほど離されて行く感じだった。

どうしようもない。

エルさんと地主様が打ち合わせているとき等、何を話されているのかまるで解らない。

無知な小娘が無礼にも、馴れ馴れしくすぎていたのだと改めて
思い知る。

急に胸にあつた圧迫感がしぼんでゆく。

おかしい。

やっと深く呼吸が出来るようになったというのに、私がそれを寂しく感じているとは何事か。

あたたかな土に触れながら、そのままぼんやりしてしまった。

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

「あら。可愛らしい子猫ちゃんがいるわ」

人影がさしたと思ったら、綺麗な声も降ってきた。

子猫？

どこにいますと言うのだろう。
私も見たい。

辺りを見渡してみたが、残念ながら小さな尻尾の先すら見当たらなかった。

せいぜい木漏れ日が揺れているだけだ。

「あらあら！ 本当に可愛らしいこと！ 子猫を探しているの？
子猫ちゃん」

すぐくはつきりとした、凜とした声が響く。

83 魔女の娘と大地主（後書き）

『地主はね、君とね？』

魔女っこ、理解していない。

ここで書くとネタバレなので、また先々に。

ではっ！

84 子猫と貴婦人

すぐくはつきりとした声が、この庭園を支配してしまったかのようを感じる。

何だろう、何事だろうか。

ただならぬ気配に訝しみながら、声の持ち主を振り返って見上げる。

私はぽかんとしてしまった。

見上げたその人が、あまりにも美しい女性だったからだ。

てつきり、お屋敷のお姉さん達の誰かかと思ったけれど、違っていた。

まず視界を占めたのは、美しく流れるドレスの裾だった。

ドレープをたつぷりときかせた豊富な生地が、女性の歩みと共に一緒に流れる。

まるで小さな滝だ。

滝の流れが近づいてくる。

一目で質の良いと思わせるそれは、華美ではないのだがとても豪華に見えた。

陽の光を浴びてより一層、きらびやかに光を放っているかのようだった。

衣装もそうだが、それよりもこの方自身が光を放っているかのような容姿だ。

小首を傾げるように覗かれ、胸の辺りが跳ね上がる。

サラサラと溢れる髪は、透き通ったかのような金色だ。

まるで光の束そのものみたいに、私には映る。

大きな瞳は、これまた透明感のある翡翠色だった。

実際には見たことは無いが、きっと宝石と同じ輝きを放っているに違いない。

光の加減によって澄んだようにも、深みがあるようにも見える。

きっと、ご自身に自信があるのだろう。

迷いなく見据えられて戸惑うしかない。

私はといえば、いたたまれなくなって、視線があちこちに泳いでしまう。

どうしよう。どうかした方がいい気がするのは、この方が高貴な方だと解るからだ。

それを知らしめるのは、この方が生まれながらに纏うもの。

それは品位という言葉で表現するのが相応しいのだと思う。

この方との決定的な違いは、生まれと育ちだと私にだってわかる。

あまりにもこの場に相応しくない雰囲気、嫌でも気圧される。

あまりに綺麗だから触れてみたく感じるけれども、同時に手を伸ばすのはためらわれるもの。

恐れ多い気がして、私は身を引く方を選ぶ。

「あの、子猫をお探しなのですか？」

いつまでも黙ったまんまにいるのも悪い気がして、恐る恐る尋ね

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

「いいのよ。もう、見つけたから」

「見つけた、ですか？」

「どこに？」

「ここよ！ 子猫ちゃん」

「え？
え？」

「可愛い！
なんて素敵な手触りなんでしょう！」

そう言いながら、私の頭を撫で回す。頬や、喉元までも。あんまり撫でられるから、シヨールが脱げてしまった。それでも手は緩まなかった。

「ふふ本当に、初めて見る」

この人の言う「初めて」は私の色をさしているのだと思った。
黒い髪。黒い瞳。まとめてカラスとされる色。

私も、こんなに綺麗な女性を見るのは、ジルナ様に続いてお二人目だ。

この方の雰囲気、私を恐ろしく緊張させた。

こんな時に限って、作業用にと自分でこしらえた服を着ている自分が恨めしい。

ここ最近はいいい付けを守って、きちんと与えられた服を着ていたというのに。

いや、畑仕事をするのに、あの格好では思うように動けないから当たり前なのだが。

そもそも、着ている物が違ったくらいで、私の見てくれは変わりようがない。

それに私は魔女の、自分で作った服を誇りに思っていたのでは無かったのか。

自分が情けなく、浅ましく思えた。

俯く視線と共に、心もどんどん地べたにのめり込むかのようだった。

「どうしたの？ 子猫ちゃん」

「……。」

いつのまにか目線が一緒だった。
いいのだろうか。

この方は、お召し物が汚れても気にしないのだろうか。

そこは気にして欲しい気がする。

優しく声が潜められる。

私は本当に猫の子になってしまったかのように、答える事が出来なかった。

ただその翡翠の瞳をそっと見返すことしか出来ないでいる。

どうして、私に構うの？

あなたは、誰ですか？

そんな簡単な言葉ですら、この方に掛けるのははばかれた。

それでもこの方は解ってくれたようだ。

「何だかとても寂しそうだったから、つい、ね」

つい？　なんだというのだろう。

「構い倒したくなるというものでしょうよ。そんなに、お耳としっぱがしょんぼりしているように見えたら」

私には耳はともかく、しっぱなんてあった試しなんてない。それを見透かしたかのように、女性はいたずらっぽく笑った。その笑顔があんまりにも綺麗だったから、見とれてしまう。

「ほら、しっぱ」

そう言う私に見せたのは、解けた前掛けの紐だった。

なんだか泣き出してしまいそうになった。
それは、この女性が押し殺しているであろうものが、静かに伝わってくるから。

解放されたくて、慌ててもがく。

でも振りほどいたり、突き放したりなんかはしない。
しちやいけない。きっと傷つけてしまうから。

そんなのは嫌だった。

だから、この方が自分から手を放してくれるのを待つ。

風が吹き抜けてゆく。

どれくらい、そうしていたのだろうか。

そんなに長い時間では無かったはずだ。

でも時間が留まったかのように、ゆっくりと流れたように感じた。

「あの？」

「ああ、癒されるわ」

そう言うとき女性は私の後ろ頭を撫でた。

それから、ゆっくりと腕を解いてくれた。

「疲れたときは、可愛い子猫ちゃんを愛でるに限るわ」

さらりとかつ、しみじみ言われた言葉に、この方は間違いなくスレン様と同族だと思った。

さり気なく人の事を見下す辺りが。

84 子猫と貴婦人（後書き）

『この人は誰？』

それはまた次回に。

スレン属性なのは間違いなく……。

85 子猫と貴婦人と地主

この方は、可愛いそうだな人なのかもしれない、だなんて。そう思った私が馬鹿だったに違いない。

確かに寂しい気持ちは本物かもしれないが、だからといって黙ってからかわれているなんて、嫌だ。

「私、子猫なんかじゃありません」

「じゃあ、何だっというの？ 子猫ちゃん」

「大魔女の娘です」

「ええ。知っているわ？ 何でも真の名は名乗れないのだ、という話でしょう。だったら好きに呼ぶしかないじゃないの」

それがどうかして？ とでも続けられてしまいそうで、私は言葉を失う。

でもそのまま、見失っては駄目だと自分を叱咤した。

それに、どうして私の事を知っているのだろう？

その事にとてつもない違和感を覚えるのは、何故なのだろうか、気持ちが悪かった。

もやもやとした重い^{おり}澱のようなものが、胸に積もってゆくかのようだった。

振り払い様もなくただ、ただ幾重にも重なって行く。

「さ、さようでしたか。私は地主様にお仕えしております。失礼ですが、お客様はどなた様で……。」

「カルヴィナ！
ルゼ！！」

「ルゼ、様を付け忘れちゃダメでしょ、レオナル」

——いらっしやいますか？

思い切って尋ねた言葉は、続ける前に遮られていた。

••		
*	•	○
••		
•	•	••
○		
•	*	
••	••	
*	•	○
••		
•	•	
○	••	
•	*	
	••	
	•	○
	•	
	••	
	*	
	••	
	•	○
	••	
	•	○
	•	
	••	
	*	
	••	
	•	○
	•	

聞きなれた大きな声が二つ、聞こえたと思ったら、あつという間だった。

地主様とスレン様が駆けつけてきた。

彼らにしては珍しく血相を変えている。

その勢いに押されて、思わず身を引き気味にした。

それに二人とも、お勤め用の正装をしている。

何だか物々しい。

それでも、この傍らの貴婦人は微塵も動揺していない。

それどころか、まるで構ってもいないようにも映る。

いや、先程よりも気安さが薄らいだかもしれない。

表情も笑っているけど、固く、どこかぎこちない。

先程までの屈託のなさは、どこに行ってしまったのだろう。

二人を見ようともせずに、つまんだままの前掛けの紐を見ているだけだ。

「ルゼー……。ジャスリート公爵令嬢どの。このような場所ではなく、どうぞ客間へお戻りください」

地主様も目線を合わせるようにしてから、きつちりと頭を下げられた。

スレン様までもが同じようにした。

公爵令嬢？

目の前の女性は、間違いなく高貴な方なのだ。

公爵様のお嬢様というご身分の方がどうして、ここにいらっしやるのだろうか？

慌てて私も頭を下げた。

「カルヴィナ？ 古語で夜露って意味ね。レオナルにしてはやるじゃない」

跪いてうやうやしく礼をする地主様に、遅れを取ることもなく、この女性は手を差し伸べていた。

「あらあら。わざわざご丁寧に呼ばわってくださいるのね？ レオナル。それで私を子猫ちゃんに説明したつもりなのかしら？」

地主様はやや、ためらってからその白い指先を取ると、唇を寄せられた。

触れるか、触れないかという所でルゼ様が声を掛ける。

「いつも通り呼び捨てでも構わなくてよ？」

お姫様と騎士様の関係が、目の前で繰り広げられていると思った。何と絵になる二人だろうか。

感嘆のため息が漏れそうになる。

それなのに、またしてもこの胸を重くする澱の正体は何だというのだろう。

二人は完璧だった。

何というか、その。

寄り添う雰囲気、何者にも犯しがたく感じられる。

「客間にはまだ、戻りたくありません」

きっぱりとルゼ様は仰った。

「もう少し庭を散策してからでもいいでしょう？ レオナル、案内してちょうだい」

「……仰せのままに」

ただならぬ様子に早く立ち去らねばと頭を下げて、杖を引き寄せた。

「公爵様のお嬢様とは知らなかったとはいえ、ご無礼をお許し下さいませ。その、私は、これで失礼致します」

「ちっとも構わなくてよ。あら。子猫ちゃんは一人では上手に歩けないのね」

「……はい。でも自分で歩けますから、大丈夫です」

なるべく、何でも無いことのように受け流して、立ち上がろうとした。

足場が柔らかいため、少しだけよろめく。
でも、スレン様が後ろから支えてくれた。

「フルルは僕がお部屋に連れて行ってあげるから。さあ、立って立つて。ちゃんと泥を落として、お着替えしてね」

言いながら、幼い子にするように服の汚れを払ってくれた。

「リディアンナも待っているから、急ごうねえ」

スレン様は明るく促してくれているように思えた。

そう。努めて明るく、いつもの通りに。

私をこの場から遠ざけようと、この場に置いてはならないという緊張感すら漂う。

有無を言わせない、私に選択権を与えない確固とした物言いだった。

それは口調だけでは無く、私を助け起こす腕にも表れているように思う。

この二人は、二人きりで話さねばならないのだ。

そう。

二人きりで。

私だってそんな場面に、のんきに立ち会っていられるほど図太くはない。

むしろ、即刻立ち去ってしまいたいに決まっている。

こんな時、思うように駆け出せない自分の足を悔しく思う。

「フルル。掴まって」

この時ばかりは腰に回された腕に、素直にすぎる。

「スレン」

二人に背を向け歩き出すと、地主様が呼んだ。

「頼んだ」

「任せて」

そつと振り返って見ると、地主様もルゼ様も既に背を向けていた。先程から、ずっと。

地主様は一度も、こちらを見ようとはしなかった。

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

「全く！ レオナルは何だってこんなに奥の部屋を、フルルに与えたの？ って訊くまでもないか」

やれ遠すぎるだの、フルルが大人しく抱えられてくれれば話しは早いのに、とぼやきながらスレン様は付き添ってくれた。

それすらも彼なりの気使いと感じてしまうから、不思議だ。

「着替え、手伝おうか？」

「結構です」

部屋の扉の前につくと、スレン様らしくお約束の事を聞かれた。もちろん、即座に断る。

「一人で大丈夫？」

「もちろんです」

「そう。なら、いいんだ。慌てなくてもいいけど、急いでくれる？
リディアンナが待っているから」

それは大急ぎで、手際よく着替えろと言うことだろうか。
神妙に頷く。

「リディアンナ様か？」

「そう。僕と一緒にリディの屋敷に行くよ。ジルナ様も待っているからさ」

ジルナ様とはこの所、お会いしていなかった。
体調がすぐれず、寝込んでいると聞いている。

そう教えてもらったのは実は最近で、お祭りが終わった後の事だった。

何でもジルナ様は、赤ちゃんが出来て「つわり」に苦しんでおられるそうだ。

「でも、ご病気な訳ではないらしい、から」

そう努めてなんでもないように、笑って見せてくれたが、リディ

85 子猫と貴婦人と地主（後書き）

『僕は！？』

タイトルに入れてもらえなかった色男のボヤキです。

うん、ごめん。

今回のスレンはあくまで脇役だから。

ルゼ嬢の登場でばっちり波乱の予感です。

86 地主と公爵令嬢

木漏れ日の中を進む。

傍らには公爵令嬢を伴っている。

かつてならば、心踊った一時であったはずだ。

だが今は、そんな日々すらも遙か遠く過ぎ去った出来事のように思えた。

あえてカルヴィナの存在は無視したのだが、それくらいで見過ごす女ではないのがルゼだ。

エスコート役を引き受けたのも、さり気なくカルヴィナから遠ざけるため。

二人、しばらく無言で庭を進んだ。

双方、お互いの出方をうかがっている。

要は腹の探りあいだ。

示し合わさずとも、足が向かう先は自然と決まっていた。

かつてのささやかな逢瀬の順番そのままに、とりあえずの目的地は庭の奥にある東屋だ。

確かに二人きりで会話をするのには、最適の場所ではある。

そこに立ち入ってもいいのは、鍵を持っている者だけだからだ。

庭師にも手入れの際には、俺自身が鍵を渡し、作業が終わり次第返却してもらう。

貴族のしきたりなんぞに倣う気は無かったが、身分ある人を招くのならそれくらい当然かもしれないと考え、造らせた庭園だ。そういえば、ここを訪れるのはずい分と久しぶりだった。

腰の高さほどの扉を開ければ、薔薇をからませたアーチが出迎えてくれる。

だがもうとうに花の時期は過ぎている。

思えばそれ以来、ここには訪れていないのだと思ひ出す。

花の盛りの頃には大輪の、そして色とりどりの薔薇が香しく咲き誇っていた。

毎年迎えるはずのその季節も、どこか遠いもののように思えてならない。

今年のその季節、この館にカルヴィナはまだ居なかつたのだ。もし居たのならば、この庭の鍵を渡していたかもしれない。

次の花の盛りには必ず、と思う。

彼女が微笑むのは、何も咲き誇る花にだけでは無いと知っているとしても、俺はそれを望んでいた。

今は無性にカルヴィナが丹精込めて世話している、あの小さな畑に戻りたかった。

• •	
*	•
• •	○
•	•
○	• •
•	*
• •	• •
*	•
• •	○
•	•
○	• •
•	*
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	*
	• •
	•
	○
	•

「あの子猫ちゃんのこと、考えてるでしょ？」

絡めた腕を引き、わざとらしく密着してくる。

そんな令嬢に辟易しながらも、まさか振り払う訳にもいかない自分が嫌になる。

ルゼもまた、それを承知の上でやっているのだ。

ささやかな権力行使の嫌がらせ。

先ほどだってそうだ。

カルヴィナを前に、俺たちの関係を匂わせるような会話運びだった。

正直、ルゼの気性からすると「彼女らしくはない」やり方だったように思う。

公爵令嬢などという肩書きの貴婦人の割に、箱入りではないのがルゼだ。

無邪気に己の身分を高位と位置づけて、人を見下すような真似はしない。

いや。

俺が勝手に、そう思い込んでいただけなのかもしれない。

彼女を崇拜するあまり、何かを見落としていたのか。

そのルゼが、カルヴィナをこき下ろしていた。

「子猫ちゃんは一人では上手に歩けないのね」

さり気なかったが、アレはカルヴィナに対する攻撃だった。

カルヴィナとしてそう感じただろう。

少なくとも、俺は不快だった。

一体、何を企んでいるのやら。

ただ無言で歩みを止め、やんわりと東屋の方へと促した。

かつてここに並んで腰下ろし、一緒に庭を眺めたものだった。風雨にさらされた腰掛ではあるが、ルゼは構わず腰を下ろす。

俺は横に並ぶこともなく、立ったままで距離を置いた。

挑発的に微笑む女を見下ろす。

ルゼもまた、視線をそらすことなく俺を見据える。

美しい姿の、公爵令嬢だ。

かつて恋焦がれた女。

手に入れようと躍起になっていた。

自分には無いものを、何もかも兼ね備えた女性。

手を伸ばしても、そうやすやすとは届かないところで咲き誇る花だった。

ただ、それだけだったと今は思う。

「レオナル。貴方の飼う猫ちゃんは結構、気が強いからねえ。言われっぱなしじゃなかったもの。もう少し話していたかったのに、残念だわ。邪魔が入って」

そこは全く同感だ。

カルヴィナは控えめであるが、けっして大人しい性格ではない。言われっぱなしであってくれた試しが無いのだ。

カルヴィナにその気は無くとも、何かしらの形で俺は報復を受けてきたとすら思っている。

まあ、全て自業自得だと言えばそれまでだが。

「あれは物を知らぬから。何かご無礼でも働きましたか？」

「いいえ。逃げ出したいようだったけど、我慢して居てくれたように思うわ。わたくしの手を拒まなかったもの。優しいのね、あの子」

「優しい？ 確かにそうだが、こんな短時間で解るものなのか？」

「わたくしにあの子の何が解るのかとでも言いたげね、レオナル。解るわよ。貴方は鈍いから、ようやく最近気がついたのかもしれないけれど」

「確かに周りからは慕われているな。本人にあまりその自覚は無いようだが」

「そうね。でも、わたくしはあの子、嫌いだわ」

くすくす笑いながら、さらりとルゼは言い切った。

「あの子が現れてから、貴方が変わったからかしらね？」

86 地主と公爵令嬢（後書き）

『レオナル、前の女とはきっちりケジメつけとけ。』

仮タイトル、そのままの内容でした。

ドロドロ〜泥沼。

そんな始まりの予感。

87 レオナルとルゼ

かつてと何ら変わらない笑顔で、口調で、ためらいもなく言い切る女を見た。

いつかの想いはあまりに遠かった。

今、この胸を占めるのは嫌悪感だ。

この女、何を言い出すのかと腹が立つ。

無力なカルヴィナを攻撃する様子は、ただの弱い者虐めだ。

そしてそれを阻止できなかった己に対しても、憤りを感じている。

「俺が変わった？」

「今だってそうだわ。話し方からすでに距離を置こうとしているもののね」

顎をそびやかし、流し目をくれながらルゼは続けた。

「レオナル。貴方はわたくしに求婚したのよ。恐れ多くもこの、公爵令嬢のわたくしによ？ 爵位もない地方の一地主でしかなかった貴方が」

「ルゼ、それは」

「忘れたなどとは言わせない。貴方は身分の差を必ずや埋めて見せるとまで宣言したわ。そうでしょう？」

「……ああ。そうだったな」

「そうだったな、ですって！？ そんな事で済ませようというの」

取り出した扇で俺を指しながら、ルゼは笑った。

それはどこか自嘲じみっていて、言うほど俺を責めてはいないように思えた。

「貴方がおっぴらに求婚したことで、わたくしは迷惑を被っているのよ。だから、貴方も困ればいい気味だわ」

「ルゼ。あんたとは終わったと思っている。とつくに。今更なんだ？」

勝気な瞳が俺を見据えている。

そこにあるのは強い挑戦的な光だった。

まっすぐに射抜くように視線をぶつけてくる。

少しでも怯む俺を見逃すまいとしているのか。

敵と見立てた相手に敵意を隠しもしない。

ルゼのこの挑戦的な生き方は、けして嫌いではなかったはずだった。

今は受けて立つ気も起きず、ただ受け流すに止めた。

「何故？」

「あんたは婚約した」

「そうね。お父様に逆らえずにね。けれどもまだ、正式にはない」

「嫌々なのか？」

「そうでもないわね」

「だったら何をしにきた」

「貴方が悪いのよ。いつまでも、わたくしを想って努力し続けているようだったから」

「引くに引けないところまで来てしまったから、引っ張り出されるだけだ」

思いがけずに手にした立場の重責は、次々と努力を必要とされる。それに応えねば、仕事をしたとはいえない。だから向き合う。それだけの話だ。

「あらそう。世間はそう見なくてよ。それに随分なでしゃばり具合じゃなくて？ 特別な能力者でもない貴方が、神殿入りしているだけでも異例なのに。それが護衛団の総指揮者ですって？ しかも巫女王様の覚えもめでたいときている」

ふふふ、と軽く小馬鹿にしたように鼻を鳴らされた。だが気にするところでもない。

それよりも、そんな事をいちいち口にするルゼに対して疑問を覚えた。

「俺には神秘の能力とやらは確かに備わっていない。だがしかし、そういった能力に恵まれたあまりに偏った見方もしない。そう言った点において、あの集団に必要な指揮が出来る能力はあったのだろう。そこを磨いたまでだ」

「相変わらず抜け目のないこと。そうね。あそこは比較的高い能力者の集まりではあるけれども、組織としてはもろい部分も否めない。そこに事務処理能力にも優れた貴方が高く買われたって訳ね」

ルゼの洞察力は相変わらずだった。物の見方が俺と近い。

だからこそ、彼女との会話は子気味良いと感じてもいたのだ。
そこに親しみを覚えたのかもしれない。

だが、今こうして話してみると、それは同志としてだったと思えた。

「そうだな。俺にしてみたら何故、今までその点に誰も気がつかなかったのか疑問でならない。まあ、古い組織ほど訳の分からない縛りが多いものだろうから仕方がないのかもしれないが。幸いなことに巫女王様が柔軟であってくれたからだ。運が良かった」

「それでも神殿内の風当たりは強かったでしょうに」

「せいぜいジジイどもの嫌味くらいで、実害はそうでもない」

「そんな風に流せるとは思えないけど。邪魔者は排除する。それがあそこのやり方でしょ」

「だから俺は運が良かったのだと言っている。巫女王様のお力添えがなければ、今の俺は在りはしない」

「そうなのでしょうね。お噂にしか聞いたことは無いけれど、あの御方の聡明さはよく耳にするわ」

「古いものを全て否定しても始まらない。だが、新しいものを入れる必要があるとあの方は知っておられた。そこにちょうど良く、俺のような染まっていない余所者が現れただけだと仰っておられる」

「まあ。思っていた以上に先を見据えている方なのね。だったらお父様の手のひら返しも、解らないでもない」

「手のひら返し？」

「もともと王属よりも、神殿側に付いていたのがジャスリート家だったもの。うちもかつては能力者が多く出る血筋だったようだし。今は上手く均衡が保たれているようだけれど、どちらに付いたら公爵家の命運は開けるか。お父様が目を付けたのはそこよ」

相変わらずのタヌキぶりだ。

口には出さなかったが、表情には出ていたのだろう。同意したようにルゼが頷く。

[illegible]

ルゼはしばらく扇を開いたり、閉じたりしながら、黙っていた。言葉を選んでゐる。

そう思ったから、俺も黙って待った。

ここからが本題だろう。

そう察する。

ルゼは声を潜めて、口火を切った。

「そんな貴方が次代の巫女王の後見者となったら、その地位は揺るがないものとなるわ」

「何の話しだ」

「そういうことよ。ロウニア家は最初、リディアンナ嬢を候補に上げていたはず。それを覆し、今度は大魔女の娘を候補にしたそうじゃないの」

「何の事だ？」

「しらばつくないで！」

「ルゼ、俺には話が見えない」

訝しむような眼差しが向けられた。

それに臆する理由もない。

本当に、何の陰謀が一人歩きしているのだ？

事の重大さを見過ごす訳には行かない。

カルヴィナを神殿に上げる。

次代の、巫女王として。

確かに身内から巫女の王となる者が出れば、その影響は計り知れない。

はじめの頃、その案は否定しなかった。

だが今は違う。間違ってもそれは無い。

あれは俺の側に置く。

ずっと。

そう決めている。

そこに邪推を働かせた奴がいる。

俺が大魔女の娘に入れ込むのは、自分の地位を確かなものにし、公爵家に取り入るためなのだと。

冗談ではない。

事の真相を明かしてやりたい。

早いところ対処し、くだらない話しの出どころを潰さねばなるまい。

ルゼにその先を促した。

「一体、誰の企てが一人歩きしている？」

「貴方で無いと言うのなら、わたくしには解らないわ。でもね、レ

オナル。その噂はいい分と広まっているの。お父様が、貴方を婚約者の候補に加えてもいいと言い出しているくらいに」

「公爵が？」

思いもよらない事態だった。

ルゼの父親である公爵は、相当なタヌキで間違いがないと改めて認識した。

しかし俺に対する評価は、地を這うほどだったと記憶している。当然、俺のことなど、歯牙にもかけないでいたくせに今更何だという。

「そうよ。どうしてくれるのよ。おかげで、あの人との婚約は事実上白紙に戻ったわ。それなのに、貴方だけが幸せだなんて、許せる訳がない」

「改めて問う。どういう意味だ」

それには答えないまま、ルゼは微笑んで見せた。

「しばらく匿ってちょうだい」

「それは出来かねる。お引き取り願おう」

「最後まで言うことくらい聞きなさいよ」

「最後まで何も最初からあんたとは何もない。始めることすら許されなかったのだから。そうだろう？」

静かに告げる。

もう、話すことなど何もない。
少なくとも俺はそう思っている。

真正面に立つ貴婦人は何も答えなかった。

冷たさを含んだ風が、頬を撫でて行く。

「喉が渴いたわ。お茶ぐらい振舞ってくれるでしょう？」

[illegible]

それは和解の申し出なのだと受け取った。

カルヴィナの元へと急ぎたいのを堪えて、招かれざる客人を案内する。

何の感慨も無かつた。

いつそ、清々しいくらいに。

一体、この傍らとの女性との時間は何だったのだろうか、首を捻りたくなる。

お互い異性であつたからこそ、生じた幻想に踊らされてしまった気がする。

そうだ。彼女が同性であつたなら、間違ひなく同志として仲間になつていたことだろう。

それこそ、言っても始まらないが。

ルゼとて、同じことだろう。

嫌にあつさりと引いた。

もとより俺に対する執着は薄い。

自身の婚約が決まってからは、まるで連絡が無かった。

ルゼは恐らく、婚約者のことを少なからず想っている。

だからだ、と推測する。

俺にどうかしろと文句を、忠告もかねて押しかけたといった所か。

このタヌキ親父の血を引く娘は、けして本心を暴露する事はないだろうが。

[illegible]

急にルゼの歩みが止まった。

「な、」

『このルゼ・ジャスリートがザカリア・レオナル・ロウニアよりも高みに立つ』

問いかけるよりも早く、何事かを呟かれた途端、俺の足も止まっ

足だけではなく、体が動かなくなった。

咄嗟に彼女と間を取ろうとしたのだが、遅かった。

縛られた。

自由がきくのは眼差しだけだった。

精一杯睨んでも、ルゼは笑みをたたえたまま、ゆっくりと近づいてきた。

柔らかな体を押し当てられ、首筋を細い指が這う。

『屈んでちょうだい、レオナル』

抗わない自分の膝が恨めしい。

その途端、彼女の唇が額に、次いで唇の真横に当てられた。

女の柔らかさに、煩わしさを感じたのは初めてだった。

きつと腕が自由だったら、突き飛ばしていただろう。

ルゼとてそこを踏まえていたからこそ、妙な術を用いたのだと思う。

油断していた。

『ザカリア・レオナル・ロウニアを解放する』

そう長い時間では無かったはずだが、ずい分長いように感じた。

「ルゼ！ 戯れが過ぎるぞ」

「ふふ。怖い顔。ダメよ、レオナル。そんな風じゃあ、ますます子猫ちゃんに怯えられちゃうわよ」

背後に微かな気配を感じて振り返った。

だがそこには誰も居なかった。

しかしそこはカルヴィナへとあてた部屋の前だった。

もしや、まさかと視線を上げる。

見上げたバルコニーに人影は無かったが、わずかに出入りの窓が開いているのが見えた。

「ルゼ、何がしたいんだ？」

「決まっているわ。もちろん」

——嫌がらせ。

「どうしてわたくしが振られなくちゃいけないのかしら？ わたくしが貴方を振るの。そうでしょう？」

訳の分からない主張をするルゼに背を向け、駆け出していた。

87 レオナルとルゼ（後書き）

『ルゼ、居座る気まんまん』

ただで帰るもんかの構え。

せめてレオナルからは一本取りたい。

そんな意気込みです。

ルゼは頭の良すぎる女性なんだけど、そこは女らしく感情が結構先走る

っていう設定です。

88 スレンと女の子

地主様が、あの方、と……。

慌てて手すりから離れようとして、転ぶ。

「うっえ」

嗚咽が漏れた。

すごく、惨めで仕方がなかった。

痛い。

どうしようもなく、胸が、痛い。

切なさとやりきれなさ。

そして無力感。

自分で立ち上がることに出来ない。

そのまま突っ伏して泣いていると、影が差した。

「ああ、転んじやったの？ 泣き虫なんだから」

スレン様が手を貸してくれる。

確か内側から、鍵を掛けたはずでは？

でも、どうして、とは思わなかった。

今は構うところではない、という余裕のなさが本音だ。

「フルル、はい、よいしょとね」

私を抱え起こすと、当たり前のように首のリボンが解かれる。

「お着替えしようね？」

また、ごしやごしやと頭を撫でられた。

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

スレン様の手つきは思いの外、優しかった。

私も抵抗なく、されるがままでいた。

スレン様は何も言わない。

そんな私を見つめる瞳と目があつた。

深い緑。

まるで雨に洗われる森の木々のように、そぼ濡れているかのよう
に揺れて、惑う。

それは私の瞳が涙で霞んでいるせいだろうか。

「ど、うして？」

「うん？」

「スレン様が泣きそうなのですか？」

「そう見えるんだ」

そう言うと、スレン様はぽんぽんと私の頭を軽く叩いた。

「ねえ、見て見て。フールール？」

「うっわ。レオナルドの奴。痛いなあ。何だこの贈り物の多さは！」

次々と寝台に置かれて行く衣装たちに、何故だか顔を背けてしまつた。

こういう物はある。いた方にこそ……。

頭を振って唇を噛み締める。

この衣装を贈ってくれた地主様に対しても、失礼だ。

藍色の衣装は、この間の夕食の時に着た。

静かで深い夜の静寂をまとうかのように思えた。

だから心を落ち着けて、どうにか食事の時間を乗り切れた気さえした。

それきり、袖を通した事はない。

新しい物が次々、次々と用意されてしまうから。

お姉さんたちも次々と新しい、まだ着たことのないお衣装をどうぞ、と言って勧めてくる。

いつも、ためらいながら通す衣装たち。

深い藍色、薄めの空色、明るめの深緑に、薄淡い黄緑色。

色とりどりの洪水は変わらない。

でも最初のころよりもずっと、控えめな物を用意されている事くらい、ちゃんと気がついている。

どれもこれもみんな、私の心許せる森にある色合いばかりだ。

そう感じるのは、私の思い上がりなのかもしれないけれど。

そうしていくつかの候補の中で、目が覚めるような赤い衣装を当てられた。

これはいくら何でも派手すぎやしないだろうか。

目立ちすぎて恥ずかしい。

そんな気後れが表情にも表れていたのだと思う。

スレン様はニッと笑った。

「んん？ 自分で着る？ それとも僕が着せてあげようか？」

首を横に振る。

「どうして？ これじゃ嫌なの？」

「あ……。派手すぎるから」

「派手？ そうでもないと思うよ。こんなの」

「充分、派手だと思います」

「そう。この色は何の色に例えようか、フルル？」

「え？ えっと。ナナカマドの赤い実の色みたいです」

「お。いい例えだね。アレは雪景色の中でも、鮮やかに赤くて小鳥たちに存在を教えてくれているよね」

「はい」

「でも、フルルは派手すぎる何て思わないでしょ」

そうだ。

秋空にも充分映える赤い実は、冷え込んでも実りを付けてくれているのだ。

雪をかぶって赤い実は、ひととき鮮やかに映る。

確かに派手すぎるだなんて、思ったりしない。

ナナカマドはナナカマドだから、赤い。

「はい」

「じゃ、これね」

何だか丸め込まれてしまった気がしないでもないが、すんなりと受け取る事が出来た。

「そうそう。どんな時だって面を上げていなけりゃ、女がすたるよ。それに。そんな気持ちを助けてくれるような、装いつてもものがある

わけ」

そこで一つ、息を大きく吸うとスレン様は目を細める。

『ナナカマドの赤は燃えたぎる炎にも匹敵する。剣をも鍛えるあの、炎のように。それでいて七度釜戸に焼かれても燃え尽きることのない樹木。そんな色彩をまとう事に、何を気後れする必要があるだろうか。森にあるもの全ては、君の力添えになりたいと願っていると言うのに』

一息に告げられた言葉は古語だった。

きっと何らかの意味合いを持つ、言葉の並びのように響く。

その意味を問いかけようにも、ただひたすらに見つめて、言葉の余韻に浸る事しか出来ずにいた。

手渡された衣装を強く握り締めるくらいしか。

そんな私にスレン様は背を向け、ひらひらと手を振った。

「何だか、誰かさんの足音が近づいて来ているから、早くねー」
「!？」

慌てて衝立ての後ろで着替える。

急いだのと、着慣れないせいで、思ったより手間取った。

そんな時、ドンドンと扉を叩く音がした。

驚いて肩が跳ね上がる。

「はいはい、レオナルちょっと待っててー。フルルはお着替え中だから、開けちゃダメー」

そんな事をさらりと、扉の向こうに言わないで欲しい。

ドンドン・ドンドンと乱暴に扉が叩かれている。

幾分、下の方からも響いて聞こえたから、扉を蹴りつけているのかもしれない。

——スレン！ 貴様ここを開けろ！

そんな怒鳴り声もどこか遠い。

「フルル、気にしないでいいからね。でもレオナルが扉を蹴破つちやう前に、お着替えてあげて」

• •		
*	•	○
• •		
•	•	
	○	• •
•	*	
• •	• •	
*	•	○
• •		
•	•	
	○	• •
•	*	
	• •	
	•	○
	•	
	• •	*
	• •	
	•	○
	• •	
	•	○
	•	
	• •	*
	• •	
	•	○
	•	

相変わらず、扉の向こうからは大きな音がしている。

そんな事はお構いなしで、スレン様は自分の調子を崩さない。

私を鏡台の前に座らせると、白く柔らかなシヨールを肩にかける。

「うん。いいね。ナナカマドの花の色だし、ピッタリ」

それから髪を梳かして整えると、素早く香油で撫で付けてくれた。別の入れ物も素早く開けると、すくった蜜蝋を私の唇に塗る。

手の甲で私の頬を撫でて、考え込んでいたのだが「いいか。このまままで。おしろい必要なし」と言っていると、手を離れた。

「はい、出来た。ん、可愛い可愛い。……まずい。僕も、はまりそう。女の子で着せ替えゴッコ」

支度が終わると、ひょいと抱きかかえ上げられてしまった。
そのまま、歩き出す。

扉は変な軋み音がし始めていた。

「もう、泣かない、泣かない。いいこ、いいこ。フルル、ちゃんと見てなよ。レオナルの顔」

そう、扉を開ける前に囁かれた。

88 スレンと女の子（後書き）

『魔女っこのこれからの出方。』

どうした訳か、またしてもスレンが出しやばる。

スレンのセリフにご注目。

「僕も、はまりそう。」

も、って。

うん。はい。はまっています。

着せ替えゴ……？

89 地主とナナカマドの実

蹴破る寸前だった扉が、ふいにあっさりと開かれた。

「スレン！ 貴様、どういふつもりだ！」

「お待たせ」

怒りに任せてスレンの胸ぐらを掴み上げるべく踏み出せば、奴の腕の中にはカルヴィナの姿があった。

「っ！」

奴の首元に手を絡ませたカルヴィナを見た途端、頭に血が昇った。何故そこまで密着する必要があるのだ。

さもそれが当然だと言わんばかりのスレンに、怒りがこみ上げる。

大声で咎めようとしたが飲み込んだ。

怒鳴ってはならない。

頭を振り、落ち着くために大きく息を吸い込んだ。

「カル、ヴィナ」

慎重に名を呼ぶ。

よつゆ、と。

俺の名付けた名前に応えてくれる、娘を見つめた。

そつと身動き、カルヴィナがこちらを見た。

純白のショールの端から、恐る恐るといった風に。

ふんわりとした作りのショールが、カルヴィナの雰囲気により一層柔らかく見せていた。

それとは対照的な深紅のドレスが、また良く似合っている。

紅といっても鮮烈過ぎず、よく熟れた木の実のような色合いは、カルヴィナの黒髪を引き立ててくれる。

そう見込んで用意させた物のひとつだった。

なかなかその衣装に袖を通してくれる気配の無いカルヴィナに、恐らくその色合いに気後れしての事だろうかと思いを巡らせてもいた。

だから無理強いはしなかった。

だが、贈った衣装はちゃんと着てくれる。

ならばそのうち着て見せてくれるだろう、と気長に構えるように自分に言い聞かせていたのだ。

断言してもいい。

カルヴィナ自身からは選ばない類の装いだ。

どんなに周りが似合うと勧めても。

もう少ししたら冬の祭りがあるから、その日は赤い衣装をまとうのが習わしだ、と言い含めるつもりでいた。

きっと良く似合うから着てみて欲しい。

そう付け加えられたら、俺は自分を成長したと褒めてやるべきだ。

それがよりによって、スレンの手によってかと思うと複雑だった。

何を引け目に感じる事があるのだ、と自分自身に言い聞かせる。

カルヴィナが着ている物は全て、俺が贈ったものだ。
——下着も何もかも全て。

「どうお？ 僕仕様のフルル。ナナカマドの実みために、魅力的で
しょう？」

可憐さに見蕩れて、言葉を発するのも忘れた俺を、スレンがから
かう。

「僕が小鳥なら間違いなく、迷うことなく一番に口にするコト請け
合いだよ」

我がもの顔で言われても、手出しができない。
スレンの思うつぼだった。

だが、まったくもってその通りなのだから、仕方なく諦めた。

「ああ。とても良く似合っている。カルヴィナ、もっとよく見せて
くれないか？」

心からの賞賛と願いだった。

後ろ姿も充分可愛らしいが、俺を見て微笑んでくれたら完璧だ。
衣装は最近の流行りとやらで、胸元の切り返しが高めに取ってあ
る。

それが女性らしさを強調するのだそうだ。
こちらからは見えない。

「カルヴィナ、気に入ってくれたか？」

「……。」

だがカルヴィナは何も答えずに、シヨールの端に顔を埋めてしまつた。

照れているのだろう。

頬がうつすらと染まっているのが見えた。

..	*	.	o
..	.	.	.
.	o	..	*
.	.	.	*
..	*	.	o
..	.	.	.
.	o	.	.
.	*	.	o
.	.	.	.
.	.	.	o
.	.	.	.
.	*	.	o
.	.	.	.
.	.	.	o
.	.	.	.
.	*	.	o
.	.	.	.
.	.	.	o
.	.	.	.

「こちらに來なさい、カルヴィナ」

「……！」

またカルヴィナの肩が跳ね上がった。

怯えた様子のまま、こちらを窺われた。

そんなカルヴィナに、奥歯を噛み締める。

怖がらせてどうする。

幾度も繰り返してきた過ちを、学習しない自分を諫めた。

上から目線で命じれば、カルヴィナはたちまち降参するに決まっている。

それでは意味がない。

意味がないのだ。

あの日、スレンに連れ去られた時のように、自ら進んで求めて貰わねば。

そうでなければ俺の気が済まない。

それなのに、今のカルヴィナが頼りにしているのは、間違いないスレンの方だった。
何故だ。

「カルヴィナ」

努めて口調は柔らかくしたが、にじみ出る不機嫌さは隠しようが無かった。

それでも苛立ちに任せて声を荒らげることはないようにと、自分に言い聞かせた。

大声を出してはいけない。

それはカルヴィナを恐怖へと陥れる。

結果また、溝が深まるのだ。

いい加減学んだ事を、実行できずにいてどうする。

「カルヴィナ、こちらにおいで」

我ながら情けない事この上ないくらい、小さな声だった。

カルヴィナの様子は変わらない。

ますます、スレンにしがみついてしまう。

「カルヴィナ」

「……嫌っ」

「カルヴィナ？」

「嫌です。じ、地主様はあちらに、お客様をお待たせしていらっしやいますもの。私に構わずにお戻り下さい」

つんと澄ました様子で言う、カルヴィナの頬はうつすらと朱に染まっている。

「地主様。私はジルナ様のお見舞いに行くのです。ですからそこを通して下さい」

さらにそう続けられた。

スレンにしがみつकिながら、精一杯強がりと言うカルヴィナに、思わず口元を覆っていた。

——これは、もしかして。

カルヴィナの見せてくれる感情の波に、俺は期待せずには居られない。

89 地主とナナカマドの実（後書き）

『僕が存在を忘れないでよね、二人とも。』

スレン、おおいに出しゃばっている割には存在感が今ひとつ。

二人とも、お互いしか見てませんかねえ。

※ ひさしぶりに連続投稿行きます。

そんな調子で自分を追い詰めてみる。

では、また、明日！

90 邪魔者と部外者

嫌だ。

何もかもが嫌になる。

努めて私の機嫌を取るような話し方をする、地主様にイライラする。

本当は私の事を怒鳴りたいだろうに、それを抑えつけてくれている。

それくらい、私にだって解る。

彼ほどの人が、取るに足りない小娘の機嫌を取ろうとするなんて。

ものすごく、意地悪な気持ちが溢れて止まらない。

私はずるい。

地主様が大声を出さないようにしてくれる、その訳を知っている。そこにつけ込むような態度を取っている自覚はあった。

でも、止められない。

ぎゅっとスレン様に抱きついて、一息に言い放った。

「地主様。私はジルナ様のお見舞いに行くのです。ですからそこを通して下さい」

邪魔者は居なくなるから、お二人でゆっくり話し合えばいい。

邪魔者。それは私の事に他ならない。

言っていて本当に涙がこぼれそうだった。

元から私は部外者だ。

いつからこんなに、おかしい勘違いをするようになったのだろう。それもこれも全部、地主様の私への過ぎる扱いのせいだ。

そんな恨みで自分を奮い立たせて、地主様を見つめる。

視線が絡み合う。

それから思いつき顔を背けてやろうと思った。

だが先に、地主様から目を逸らされてしまった。

それくらいで傷ついてしまう自分に、もう説明がつかない。

地主様は訳が分からない、とでも言いたげな様子だった。

私にだって訳が分からない。

それから地主様は口元を隠すようにして、何か呟いたが聞き取れない。

背けられた横顔は、少し赤らんでいるように見えた。

この顔を見るのは二回目だ。

狩りに出かける前に、笑いかけたあの時だ。

あの時に向けた笑顔は、意地悪な気持ちからのものだった。今だってそうだ。

私は嫌な子に成り下がっている。

それが滑稽だと、呆れられているのかもしれない。

「……わかった」

そう呟くと、地主様は道譲った。

通して欲しいと頼んで、それが聞き入れられたはずなのに、私の心は重みを増した。

引き止めてくれるかもしれないと、期待していたのだ。
そんな淡い期待も見事に裏切られ、自分を卑しいと思う気持ちが強まる。

「じゃあね、レオナル。フルルは僕に任せて、さっさと仕事を済ませるんだね」

「スレン」

「この借りは後で返してもらおうよ」

「おまえこそ。今こそ俺に返しておけ。数々の借りを」
「何の事？」

スレン様はさらりと流して、扉の前から一步踏み出す。

「カルヴィナ。姉上の所に行ってくれるのだな。必ず、後で迎えに行くから待っていてくれ」

すれ違いざまに、地主様が言った。

その子供に言い聞かせるみたいな調子がまた、気に障った。
地主様はいつだってそうだ。

少しでも都合の悪い事になると、私の事を子供扱いをする。

「いいえ」

「カルヴィナ？」

「私、自分で何とかします。地主様の手を煩わせたくありませんから」

わざとらしいくらいに顔を背けて、私の頭を撫でようとした手を避ける。

「スレン様、お願いします」

「はいはい、お姫様。参りましょうか」

スレン様はくすくす笑いながら、軽やかに歩きだす。

地主様はその場でずっと、見送ってくれていた。

「スレン様、お願い。少しでも早く歩いて下さい」

そんなまわりつくかのような視線から早く逃れたくて、スレン様を急かしてしまった。

運んでもらっているくせに、図々しいのは承知している。

「お。いいよ。フルルに頼まれるのって気分がいいね。しっかり掴まっていな」

スレン様は快く引き受けてくれ、私の望み通り歩調を早めてくれた。

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

「あゝいいものが見られた！ 僕は満足」

お屋敷から出ると、スレン様は吹き出した。

「いいもの？」

スレン様は笑う。

そこにかいかいの色は無かった。

本当に楽しんでいるように聞こえて、嫌な感じが全くなかった。

むしろ、つられてこちらの気分も浮き立つようだった。

「見た？ レオナルのあの顔。フルルにそっくりだったよ」

「私に？」

「そう。僕にフルルを取られちゃう、っていうあの顔」

90 邪魔者と部外者（後書き）

『魔女っこ八つ当たりのち、後ろめたい。』

カルヴィナはいい調子です。

今まで感情的な気持ちにも周りにも、一線引いていたので。

そうそうく嫉妬に駆られるとね、こんなもんじゃ済まないよね。

君もドロドロして下さいな、の巻。

91 スレンと子猫

どうして私が、スレン様に取りられるなどという発想がわくのだろうか。

スレン様は私もそんな地主様と、同じ顔をしたと言って笑っている。

「……そんな事、ありません」

どうにか、そうひねり出すだけで精一杯だった。

スレン様の言葉が衝撃的過ぎて、上手く口が回らない。

頭の中に響くのは、地主様を取られると思ったという事だけだ。

取られるも何も。地主様は元々、私のものではない。

私の事を子猫呼ばわりした、綺麗な貴婦人が浮かぶ。

彼女のドレスの裾が、いつまでも目の端にちらついて離れてくれない。

考え込んで黙り込んだ私を、スレン様が馬へと上げてくれた。

ご自身も軽やかに飛び乗った。

「はっ！」

掛け声を合図に、馬が歩き出す。

「嫉妬だって生きる者の糧にすればいい。ほらあ、僕はこの通りだーかーら？　そういう想いを抱ける君らが羨ましい。心底」

また嫌味なのかと思ったけれども、そうでもないようにも伝わる。

「僕はね、君と一緒に。人の感情に非常に敏感なんだ。でも、フルル

と違うところはそれを生きる上での糧と想っているところ」

ぎゅう、と後ろから抱きしめられる。

何となく拒絶する気も起きなかったから、そのまま大人しく収まっていた。

「だからさ。フルルが醜いと嫌っているその感情の波ですら、僕にはとても……尊く響くよ。生きているって感じがするよね」

「よく分かりませんが。出来ればこんな気持ちには、なりたくありません。すぐく重苦しくてたまらない。スレン様に吸い上げて糧としてもらえるのなら、こんな気持ちを全部無かったことにして欲しいくらいです」

「気持ちって目には見えないものじゃない？ でも重さを感じたり、軽やかさを感じさせてくれたり。確かな手応えはあるけど、言葉でなんてとてもじゃないけど表現しきれないし、もどかしいっとならないよね。伝えようがない。自分の気持ちは自分で味わい尽くすしかない。それなのに、僕たちときたら他者の感情に敏感ときている。本当にしんどい時があるよね」

「スレン様でも辛い時があるのですか？」

「ええ！？ 食いつくところ、そこなの？ ひどいや、フルル！」

「申し訳ありません。スレン様には苦勞が似合わないので、つい」

「まあ、いいけどね。それよりも僕は、もっと自分の感情と戯れたらと薦める」

スレン様と他愛の無い会話を繰り返すうち、ずいぶん気持ちが落ちてきた。

落ち着くと今度は頭が冷えてきて、急に恥ずかしくなってきた。はつきり言えたから胸がすいたかと思えば、逆だった。

私ときたら、地主様に対してものすごく意地悪な気持ちのまま、それをぶつけた。

それこそ子供ではないか。

ほんの少し前の自分を、誰か止めて欲しい。

門構えだけで私を圧倒するのに充分だ。

頭を振る。

そんな自分に納得なんてするものか。

私の帰る場所といったら、森のはずなのだから。

門は開かれており、そこにリディアン様の姿があつた。

「ようこそ、カルヴィナ。よく来て下さったわ。お母様も待っているのよ！」

待ちかねた様子で、大きく手を振って出迎えてくれる。

「リデイ、じゃあまた後でね」

スレン様は私を下ろして杖を持たせると、すぐに馬へと跨った。

「スレン様はお帰りになるの？」

「そう。それでも一応まだ勤めの最中。抜け出してきたんだ。レオナルドと一緒にね」

そこでスレン様はニヤリと笑いながら、私を見て言った。

「あら。スレン様はいつもの事でしょくに、叔父様まで？ 余程の緊急事態でしたのね」

「ひどいや、リディ。でもその通り」

さり気なく切り返すリディアンナ様に、スレン様は肩をすくめて見せる。

二人は年の差もずい分あるのに、何だか対等だ。改めてリディアンナ様をすごいと思う。

とても頭が良くて、思慮深い。

物怖じせず堂々としてらして、やはり血筋による所もあるのだろうかと思う。

そこで少々、置いてけぼりをくらったような気持ちになるのは、何故なのだろう。

ちっぴり居心地悪く感じてしまう。

そんな失礼な思いが伝わってしまいませんようにと、努めて大人しくしていた。

「緊急ねえ？ そのようですわね。叔父様ったら」

「わあ。姪っ子にまでそんな風にため息つかれるなんて、レオナルってば立つ瀬なし」

「いつもの叔父様らしくは無いと感じるけども、そんな時もあるものなのでしょう？」

「まあね。いい傾向だと思う」

そう神妙に締めくくるスレン様に、リディアンナ様も頷く。

「でしたらスレン様。叔父様の分までしっかりお務めしてらしてね。リディアンナは応援しております。さ、カルヴィナ行きましょう」

「はい、リディアンナ様。スレン様、お世話になりました事、感謝いたします」

我ながら声にまったく張りがなかった。

沈んでいるのが見事に現れている。

「大丈夫だよ。何も心配いらない。レオナルは必ず迎えにきてくれるよ。ふくれっ面も可愛いとは思ってないよ。レオナルは今、我が身の春を噛み締めて有頂天のはず。フルルに嫉妬してもらえて、

やにさがっていたじゃないか！」

「ええ？」

「大丈夫。君の嫉妬なんか、ただ子猫が毛を逆立てているのと何ら変わりがない」

その程度の扱いなのか。

そしてスレン様は相変わらず、私を励ましたいのか貶したいのか。一体どちらなんだと思わずにはいられない。

リディアンナ様はといえば何も仰らず、ただただ、にこにこして
いる。

正直、何か声を掛けてもらえた方が楽な気がした。

二人で、スレン様が見えなくなるまで、門の所で見送った。

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

「カルヴィナ。少し歩くけどいいかしら？ 我が家の庭園もそれはいいものよ」

リディアンナ様は微笑むと、私の手を取って歩きだした。

91 スレンと子猫（後書き）

『長々と語るスレン。』

今、僕、良いこと言ったよね、フルル？

そこをスルーされました。

励ましているというよりも、面白がっています。

92 カルヴィナと母娘

リディアンナ様に手を引かれながら、ゆっくりと進む。

お屋敷自体は石造りなのは、地主様の所と変わりが無い。

それでも、どこことなく柔らかな雰囲気にも包まれている。

使われている石の色が、白っぽいせいだろうか。

威厳はあっても上品で、気後れしてしまうのは、あちらと変わりが無いけれど。

気取りの全くない気さくなジルナ様や、リディアンナ様から感じるものと一緒だと思う。

陽の光がたっぷりと差し込む廊下を渡る。

眩しくて目を細めてしまう。

温かさに包まれて、そこに置かれた彫像から、まるで微笑みかけてくれているかのよう。

そう感じるから、不思議なものだ。

住んでいる人の雰囲気、そのまま家に表れるものなのだなあ、と改めて感心しながら眺め回した。

その間もリディアンナ様は手を引いて、ゆっくりゆっくり私の歩みに合わせてくれた。

言葉数も少なく、慎重に。

「綺麗な女神様よね。デルメティア様よ」

そうやって時折、私が興味を示した物に、註釈をくれるくらいだった。

「はい。ありがとうございます。あの、その、ジルナ様は、お加減はいかがですか？」

「大丈夫。とても落ち着いたわ。今日は色々聞かせてちょうだいね」
「はい」

「おいしいお菓子とお茶があるのよ」

そう微笑みながら、ジルナ様が茶器に手を伸ばした。
リディアンナ様はすかさず手を出して、遮った。

「お母様、わたくしがやりますから、座ってらして」
「はいはい。リディも過保護ねえ」

諦めたように肩をすくめて、ジルナ様がこちらを見た。

「ジルナ様」

ジルナ様は記憶よりも頬がこけて、顔色も青ざめて見えた。
ずっと体調が優れなかったそうだから、リディアンナ様の心配も無理は無いと思うのだ。

「さあ、カルヴィナも座ってちょうだい。リディに任せてしまいま
しょう？」

「はい」

促されるままに隣に腰を落ち着けた。

「カルヴィナ、今日はまた一段と艶やかな。素敵。ナナカマドの赤
い実みたいよ。レオナルはさぞかし有頂天だった事でしょう」

「えっと、その、あの」

服装を褒められ、急に地主様の事に触れられて、上手く言葉が出てこなかった。

何とか返事をしようとする間にも、ジルナ様はおかしそうに笑っている。

「ふふ。綺麗になったわねえ、カルヴィナ。ほんの少し会わなかった間に、何があったのかしら？」

「そりゃあ、もう！ 色々とよね、カルヴィナ。はい、どうぞ、召し上られ」

「……ありがとうございます」

私が言い淀んでいるのを見かねたのか、リディアンナ様が代わりに答えてくれた。

すすめられるままに、カップに手を伸ばす。

これまた緊張を強いられる茶器だ。

白磁に美しく描かれた赤い実は、ナナカマドだった。

それを小鳥がついばんでいるという絵柄。

リディアンナ様が、ジルナ様の例えに気を利かせてくれたのだらう。

所々金で装飾されたそれは、小さな芸術品と呼ぶに相応しい。

おおよそ私の感覚では普段使い用の品ではない。

繊細な持ち手に絡む指先は、ジルナ様やリディアンナ様のような方たちのものが、相応しいだろうに。

先程まで土いじりをしていた私の指先は、相変わらず少しさくれている。

そっとため息を飲み込んで、器を大事に手にした。

「おいしい、です」

「良かったわ。お菓子もどうぞ、召し上がれ。ああ嬉しいわ。こうやってカルヴィナとお茶会をしたいなって、ずっと考えていたのよ」

「ありがとうございます。そう仰っていただけて嬉しいです」

ジルナ様の傍らには、編みかけの小さな靴下があった。

私の視線に気がついたのだろう。

ジルナ様がそれを私の膝に乗せてくれた。

「あんまり、こういう事は得意じゃないのだけれど、何とかね」

そう言いながら、ご自身のお腹にそっと、両手を当てる。

空色のお召し物はゆったりとしていて、お腹の膨らみ具合が目立たないようになっているようだ。

「えっと、その、お祝いの言葉がまだでしたね。申し訳ありません。ジルナ様、おめでとうございます」

「ううん、いいのよ。氣を使わせたわね。ありがとう、カルヴィナ」

新しい命を宿したジルナ様は、つわりで苦しまれたせいかな、ずい分ほっそりとして見える。

そんな風に儂げでいても、自信に溢れて見えた。

命を受け止める器とは、こういう事を言うのかと、静かに感動する。

命、命、命。

春、勢い良く枝葉を伸ばす木々によくそれを感じたが、こうやって間近で感じるものもある。

畏怖すら感じる。

先程見た、女神像が浮かんだ。

目の前に女神がいる。

彼女もまた、女神様の化身に違いない。

ゆったりと微笑むジルナ様に見蕩れてしまう。

• •	
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
• •	• •
✱	•
• •	○
•	•
○	• •
•	✱
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	• •
	•
	○
	•
	• •
	✱
	• •
	•
	○
	•

それから赤ちゃんはいつ生まれるのかといった事や、次は男の子か女の子か、リディアンナ様には分かっているても、教えないでと言っているのだ、といった話で盛り上がった。

年の離れた姉と兄に囲まれて、赤ちゃんはどんな子に育つのだろう、とジルナ様が次々と楽しそうに話すのを聞いていた。

「きつとレオナルドも、いい遊び相手になってくれると思うわ」

「叔父様なら間違いないわね」

リディアンナ様が、深く頷いて請け負った。

また何の前触れも無く、地主様の話しが出たので、ドキリとしてしまう。

「そうそう！ カルヴィナ、村のお祭りで巫女役をやったのですって？ しかもレオナルが神様役！」

「はい」

「見たかったわ、とても」

嫌な流れになってきた。

今は避けたい話題に移行していくのを、どうにか避けられないものかと、リディアンナ様を見た。

「カルヴィナも叔父様もとても素敵だったのよ、お母様」

どうやら避けられないらしい。

「少しだけ、聞いてはいたのよ。でも具合が悪くって！ もう一度詳しく聞きたいわ。ねえ、リディ」

それからひとしきり質問攻めにされて、全く落ち着きを無くした私は、あいまいに返事をするばかりだった。

リディアンナ様は心得た様子で、お祭りの事を話してくれている。私はといえbaum、ただただ小さくなって、話しが尽きてくれるのを待つしかなかった。

「叔父様がね、すごく見蕩れていたんだから。カルヴィナがあんまりにも可愛らしいから」

「そ、そんな事は……。」

「あら！ わたくしの目はごまかされなくってよ。叔父様は間違いなく、カルヴィナを真剣に見つめていたのよ。それに褒めてたわ。準備も含めて大変だったろうに、朝から文句のひとつも言わないで、カルヴィナは巫女役を勤め上げたって。頑張ったって褒めてたのよ」

「流石に私達の義妹ね、カルヴィナ」

「え？」

今、耳慣れない言葉があった。

義妹、イモウト、とは私の事を言っているのだろうか。

しかも「私達の」とは、一体何の事だろう。

「あら。カルヴィナは聞かされていなかったの？ ダメねえ、レオナルドだったら。ちゃんと知らないんだから。カルヴィナはね、」

「お母様、そのお話は叔父様が後できっと」

リディアンナ様は気を使うようにそっと、ジルナ様の言葉を遮る。

「あら、いいじゃない。カルヴィナはもうロウニア家の養女になったんだから、私達に遠慮はいらないわ。安心してこの姉と兄を頼ってちょうだいね」

「お母様」

きっぱりとリディアンナ様が呼んだ。

ジルナ様は驚いたのだろう。

口を噤んで、リディアンナ様を見つめた。

「少しお疲れになったでしょう？ お休みにならないと」

92 カルヴィナと母娘（後書き）

『ジルナとお茶会』

微妙に緊張感が漂っているぞつと。

母娘の間に。

いつの間にやら、カルヴィナさんはロウニア家の子になっていたようです。

93 リディアンナとカルヴィナ

衝撃を受けている。

思いもよらない人からの言葉は特に、無防備でいた分切り込まれてしまう。

あのあと、どうやって退出したのか、あんまり覚えていない。

ただ、リディアンナ様のあたたかな指先だけが、頼るすべてだった。

「姉と兄を頼ってね」

兄？

ジルナ様を姉と、地主様を兄として頼れと、言われても答えようが無かった。

知らず知らずのうちに、唇を引き結んでいた。

一線を引かれた気がした。

それはそれはきつぱりとした、線だった。

私が、地主様を一人の男性として見ることを、牽制する。

確かに私は持参金も用意できないし、はたから見たら地主様にとって何の利益も無いだろう。

自分の立ち位置が解らなくなるのが怖くて、必死で大魔女の娘だと言ひ募ることしかできないでいる。

何かそれで役に立てたか、と問われても首をひねるしかない。

「当然よ。わたくしだって驚いたわ」

「申し訳ありません」

「カルヴィナは悪くないわ。わたくしが怒っているのは、お父様とお母様。それに叔父様なの」

「……。」

何と答えていいのか解らず、ただ言われた言葉を受け止めた。

黙り込んだままの私に気を使うように、そっと囁かれる。

「それより、自分に対して一番怒っているけど」

どうしてリディアンナ様が、自分を責める必要があるのだろうか？言葉もないまま、首を横に振る。

つないだ指先から伝わってくるのは、怒りと悲しみがないまぜになったもの。

それは、こちらから感じようと思わなければ、伝わってくることはない想いだった。

リディアンナ様は想いを外に出さずに、自分自身にぶつけているのだ。

私はたまらなくなって、無言で抱きついた。

悲しみを一人で抱え込んでいる、自分よりも年下の少女に甘えたりして。

自分の事だけにかまけている自分が恥ずかしくて、申し訳無かった。

リディアンナ様が、息をのんだのが分かった。

でも、腕を振り払わずにいてくれた。

やがて、ゆるゆると私を抱き返してくれた。

「わたくしが恐れずに触れられる数少ない人の一人よ、あなたは。」

恐れずに触れてくれる人も。そうそういない」

——誰も自分の未来や過去など、覗かれないから。

そう、何の感情も込められずに囁かれた。

リディアンナ様がほんの少し先を視る事が出来るというのは、少しだけ聞いている。

触れた物や人から、わずかな可能性が視えてしまうのだと。

抜け出した私が港に居るのが視えたから、慌てて迎えに行っても
らったのと、少女は教えてくれた。

さらに、なるべく何でもないので、ように告げられて、それ以上は何も聞かなかった。

ただ、黙って頷いて見せただけだ。

それはどんな悲しみと喜びをもたらすのだろう。

言葉に出来ない苦悩も、きつと。

そんな想いを全て一人で受け止める少女を、ただ強く抱きしめてあげる事しか出来なかった。

.	.
*	
.	.
.	
.	o
.	.
.	*
.	.
*	.
.	o
.	.
.	o
.	.
.	*
.	.
.	.
.	o
.	.
.	.
.	*
.	.
.	.
.	o
.	.
.	.
.	*
.	.
.	.
.	o
.	.
.	.
.	.
.	.

二人で落ち着くと、リディアンナ様がお茶をいれてくれた。

向かい合せて座って、笑いあつた。

何となく気恥しさもあったし、お互いを思いやっているのだという、信頼感もあった。

それは何とも心強い、絆を結びあえた気がした。

「ねえ……。カルヴィナは叔父様の事をどう思ってるの？」

「それだけ？　ねえ、それだけなの？　お嫁さんにはなるのは……嫌？」

「恐れ多いです」

「そんな！　でも理由はそれだけなの？　叔父様の事を一番大切に想ってはいないの、カルヴィナ」

顔が一気に火照った。

さっきあれだけ触れ合ったのだ。

押しとどめようのない何かが、伝わってしまったのは明らかだろう。

でも、リディアンナ様は決めつけたりしない。

というよりも、私の言葉から確かなものにしながらっているようだった。

「私には何の財産也没有。そんな娘が地主様の隣で許されるとも、思えません」

「カルヴィナ、そんな事」

「だから私がこれ以上、不必要に近づき過ぎないようにと養女という形をとったのではないでしょうか」

「カルヴィナ！　それは違う。それは違うわ！」

リディアンナ様が立ち上がって、再び私の手を取った。

「カルヴィナ、それは違う。わたくしも何も知らされていないから、その意図は解らない。でもわたくしなりに、予測はしている。でもそれは確かではないから、わたくしの口からあなたに伝えることが出来ない。ごめんなさい、カルヴィナ。でも悪く取らないで居て欲しい。そりゃ、あなたが叔父様のお嫁さんになってくれてロウニア

家に入るものだと思っていたから、先走るようなこんなマネって、怒っているの」

そう一息にまくし立てて、私の沈みかけた心を必死ですくい上げようとしてくれた。

でもあまりの内容に、また言葉を失ってしまう。

お嫁さんって……。私が？

「とにかく。叔父様が迎えに来てくれるのを待ちましょう。全てはそれからよ、カルヴィナ」

そう力強く言い切られた。

「それまで力を蓄えましょう。そうして、叔父様を迎え撃つのよ！」

それからはリディアンナ様の言うことを聞いて、色々着せ替えをしたり、髪を編んでみたりして、毎日綺麗にするよう務めた。

93 リディアンナとカルヴィナ（後書き）

『いつの間にか養女って扱いに釈然としない、女心。』

レオナル、早く迎えに来ないと……。

また明後日方向に行きそうだから、急いで下さい。

そんな調子です。

94 地主とミノムシ

今日も、実に長い一日だった気がする。

地主様からもうこれ以上、みつともないって思われたくない。
面倒な娘だと、ため息つかれたくない。

そんな想いが私を駆り立ててくれた。

じゃあ、まずはきちんとした装いとやらから入ろうか、となった。
窮屈なコルセットも我慢した。

少しでも女らしい体つきに見せる物と差し出されては、黙って頷く他にない。

髪も高めに結い上げて、項を見せるのが今流だと言われれば、できるだけそれに近づけようとした。

他には言葉使いやら、気の利いた挨拶の仕方とやらを学んだ。

にわか仕込みもいいところだけれど、何もしないよりはマシだと思ふ。

少しでも、あの方の隣でも恥ずかしくないように、なりたい。

そんな想いを明確に口にしないまでも、自覚している自分に驚きが隠せない。

どうしてそんな思いに囚われるようになってしまったのだろう。
いつから？

思い起こせない。

世の中の女の子は、こんな気持ちに襲われているのだろうか。

・。・。・。・。・。・。・。・。・。
・。・。・。・。・。・。・。・。・。
・。・。・。・。・。・。・。・。・。
・。・。・。・。・。・。・。・。・。

——迎えにきてくれるよ。

スレン様はそう笑って請け負ってくれたが、どうだろうか。

一人になった途端に、またあの気持ちがぶり返してきた。

嫌に自分の物足りなさが浮き彫りになって、情けなくてたまらなかった。

自分は自分でしかない。

そう自身に言い聞かせては素知らぬ顔で、面を上げてみる。
だがすぐに虚しさに取り付かれてしまうのは、何事なのだろう。

自分のいたらない部分や、みつともない弱さにばかり目が行ってしまう。

そんな風に気にしてみても始まらない。

それこそ、卑屈な思いで一杯になってしまう自分が嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ。

自分なんか、本当に嫌だ。

どんなに嫌がっても自分はどこまでも付いてくる。

嫌だ嫌だと自分自身にすら繰り返されては、たまったものではないだろう。

粗末で好きになれない自分を、尊敬し好きだと思う地主様の前に晒したくない。

でも、会いたい。

矛盾する想いは募るばかりで、何かにつけては落ち込んでしまう。

そうして暗い顔を見せるのが嫌で俯いてばかりいた。
自分のつま先だけを見つめてやり過ごす。

気が付けば思い浮かぶのは、お二人の並ぶ姿ばかりだった。

綺麗だったなあ。

ああいうのを絵になるって言うのだろうか。

あの綺麗な方は私の視線に気がついておられた。
だからだろう。

私を見てにっこりと笑いかけられたのだ。

無礼だったと思ったので、慌てて頭を下げて背を向けた。
こういう時、思い切り駆け出せない自分の足が憎い。

聞けばあのお方は公爵様のお嬢様なのだそうだ。
納得だ。

公爵様と言えば、王族の方々に近いご身分のはず。
同じ女と言えど、これほどまでに違いを見せつけられると申し訳
ないと思えなくなった。

あの方こそが地主様の想い人である御婦人。

地主様は有力者とはいえ爵位があるわけではなく、努力し続けて
実力で神殿での立場を取られたそうだ。
ますます、すごいと思う。

地主様は平等なのだ。

きちんと税を収める人には加護を。

そうでない者にはきちんとするようにと促すだろう。

おばあちゃんの事を責める気はない。

人の和から外れて、何も知ろうとしなかった自分が悪いのだ。

いろいろ、いろいろ考える。ぐるぐる回るのはとりとめもないことばかりだ。

そうなってしまうともう、どこを探しても浮上するきっかけが掴めなくなる。

そうやって導き出された答えは大抵がどうしようもないものばかりだ。

本当に救いようなない事を、なぜこうも思いつけるのかが不思議だった。

我ながら卑屈極まりなくって、泣けてくる。

いくらどんなに目に見える努力をしてみても、全く無意味でしかないと感じない。

そんな事を口にしたら最後、自分自身をも無意味と意味付けてしまいそうだから、そこは歯を食いしばってこらえた。

そんな事、思っても言ってはならない。

そう言い聞かせて耐えた。

優しく教えてくれるリディアンナ様のためにも、必死で笑った。

そんな調子で迎えた三日目。

たったの二日と半分の日付であっても、私には拷問に近い長さに感じた。

それでいて、ずうっとあの日からの平行線であるかのような、長い長い時間だった。

待つ身というものは、時間の感覚がズレているに違いない。

心はあの、地主様のお庭でされたやり取りに置き去りのままなのだから。

それでいて、実際はきちんと日付も変わっている。

どうしよう。

日にちが置かれた分、頭が冷えたなんてものではない。

「カルヴィナ？」

懐かしい声に、うるさいくらい胸が高鳴った。

カーテンにくるまって、隠れているつもり。

私はカーテン、私はカーテンと意味不明に言い聞かせながら。

足音が遠ざかった気がして、ほっと息を吐いた。

と、思ったら勢い良く近づいてきたものだから、心臓が飛び上がった。

「大きなミノムシがいるな」

その後、後ろから抱きしめられてしまった。

「何か言ってくれないか？」

ミノムシですから。

ミノムシは口がきけません。

そんな意思表示も込めて、カーテンにくるまる。

だが、あっさりと砦は破られ、ミノムシは丸裸にされてしまった。

「カルヴィナ。まだ、いじけているのか？」

いじけて何ていない！

そうやってムキになってしまいう辺りが、その通りだと思える。

94 地主とミノムシ（後書き）

『ミノムシ。』

バレバレです。

隠れているつもりでも。

あー……。。

95 ミノムシとレオナル

姪に通された部屋に、カルヴィナの姿は見えなかった。

「……。」

だがすぐに、不自然なふくらみのあるカーテンが目に入る。
必死で気配を押し殺しているのだろう。

カルヴィナの名を呼ぼうとしたが、踏み止まった。
騙されたフリをして背を向け、扉に向かって歩く。

どこか張り詰めていた膨らみが、緊張を解いたせいかゆるやかに
なった。

そつと後ろをうかがうと、あからさまにホッとした様子が伝わっ
てくる。

少しからかってやろう。

そう思ったせいもある。

だが、コレは面白くないという思いもよぎった。

このまま、俺に会えずともいいのか。

会いたいと焦がれているのは、俺だけなのか。

呼吸を整えてから、踵を返した。

わざとらしく靴音を響かせながら、大股で近づく。

「大きなミノムシがいるな」

841

らしくもなく、緊張している自分がおかしかった。

たった二日ばかり会わないでいた間に、カルヴィナに何が有ったのだろう。

彼女のまとう雰囲気があるで違うように感じた。

顔を赤らめて耳までうっすら染めた様子も、恥ずかしがって身を隠す仕草も、俺を煽る意図に溢れかえっている。

「カルヴィナ。まだ、いじけているのか？」

そう尋ねたとたん、勢い良く首を横に振られた。

これはまだまだ、いじけているのだと一目でわかった。

機嫌を損ねたカルヴィナが愛しくて仕方がない。

頑なにカーテンに身を隠そうとするカルヴィナを押しとどめながら、おかしい雰囲気になってしまう。

無理やり窓際に追い詰めて、その身に付けた物を剥ぎ取る。

例えそれがカーテンであろうとも、身にまとわりつかせているのなら、衣服と変わりが無い。

隅に追い詰めて、抱きしめて、暴いて行く。

妙な背徳感と興奮が入り交じる。

愛しさと共に加速して行くのは欲しいという想い。

どうしても背の方にある寝台を意識してしまう。

ここが自室でなくて本当に良かったと思う反面、そうではない事が残念でならない。

後ろから抱きすくめたカルヴィナの後頭部に唇を押し当て、香り

を吸い込んだ。

逃れようとした身体を引き寄せる。

「カルヴィナ。あまり俺を困らせるな。男を焦らしすぎると、痛い目に合うぞ」

唸るように、そう告げる。

怖がらせないようにと振舞うのは、限度があるらしい。

心地よい日だまりの香りを再び吸い込み、首筋に口付けた。

「きゃ……あっ」

わななく唇から思わずのように漏れた悲鳴が、艶めかしい。

きつく吸い付いて痕を残してやりたい所だったが、ここは姉の屋敷だ。リディアンナもいる。

場所が場所だけに自制するが、柔らかく食みながら食いつきたくてたまらない。

このままマントにくるんで連れ出して、街まで馬を走らせて、宿にでも籠ってやろうか。

頭の中では、そんな段取りをしだしてしまう。

柔らかな膨らみを後ろから、手のひらに収めて弄んだ。

薄い布地越しの感触だけでは我慢がならず、胸元のリボンを緩めて指先を侵入させる。

「あっ！」

鋭い悲鳴が上がった。
だが、容赦はしない。

というよりも手のひらに吸い付くような肌の感触と、えも言われぬ柔らかさの虜になった。

「カルヴィナ……。何て、やわらかいんだ。それに感度もいいようだな」

わざと卑猥な言葉を囁いて、彼女が身悶える様を楽しむ。

興奮したせいか、声が掠れてしまう。

「や、やつ、やぁ！ こわいよ、地主さま、やぁ！」

いやいやと頭をうち振りながら、必死で俺の手を押し止めようとする指先を取った。

そのまま、もたれかかってきた体を受け止めて、寝台へと腰掛けさせた。

小さく乱れた呼吸を整えながら、カルヴィナに向き合う。

瞳の焦点はどこか定まっておらず潤み、唇は吐息がこぼれた形のままだ。

自分の身に何が起こったのか解らない、というよりも理解できていないらしい表情があどけなくもあり、色っぽくもあった。

左手でその頬を包むようにしながら、反対の手で項から首筋をゆっくりと撫でる。

澄んだ夜空が瞬いてから俺を見た。

「やっと、俺を見てくれたな」

そのとたん、涙がひとしずく、カルヴィナの頬を伝った。

95 ミノムシとレオナル（後書き）

『ミノムシに悶えるレオナルだぞっと。』

やりすぎた感が拭えませんよ、レオナル。

リディアンナは幼いながらも、男の目線っちゅうものを良くわかっている。

その上でのアドバイス。

リディアンナちゃん、効きすぎたみたいですよ。

彼女もまた、恋する女の子です。

96 ミノムシと地主と従者

大きな手のひらに、すっぽりと頬を包み込まれる。

のぞき込むようにしていた、目線が合わされた。

もう片方の手はゆっくりと首筋を伝っていた。

指先がゆっくりと、私という線をなぞって行く。

「ようやくこちらを見てくれたな、カルヴィナ」

ひとつ、瞬きをすると涙が伝い、零れ落ちた。

地主様だった。

また知らない男の人という顔を見せられて、私は怖くなってしまった。

さっき、地主様に触れられた場所が熱い。

そっと見下ろせば、胸元のリボンは解かれ、大きく開かれたままだった。

慌てて隠すように胸元に手をやったが、大きな手に邪魔されてしまふ。

それに加えて囁やき込まれた言葉もまた、私を追い詰めてくる。

「カル、ヴィナ……。」

またあの、掠れた声に呼ばれて我に返った。

目の前には地主様の顔があった。

近い。

だから少し、首をすくめて後ろに下がろうとした。

それを許さないように、顎をすくい上げられてしまう。

鼻先が微かに触れ合う。

吐息も、また……。

「嫌っ!!」

——パンッ!

乾いた音が響いた。

「い、ごめな、さい」

ぶってしまった。

思わず、無意識の内に手が出ていたのだ。

何てことをしてしまったのだろう。

直後、じんと痺れたのは手のひらだけでは無かった。

今まで見られた事のないような、鋭い目付きで睨まれたからだ。
体中が麻痺して動けなくなってしまう。

そこに覆いかぶさるように、地主様が寝台に両手を置いた。

「おまえが俺を焦らすから悪い。それにその格好は、誘っているの
だろう?」

そんなつもりなんかじゃない。

首を振りながら、胸元を隠すようにした。

解け落ちたリボンが掠める。

慌ててリボンを結ぼうとしたが、うまくは行かない。

指先が震えて、思うように動いてはくれないのだ。

不自由なのは足だけで間に合っている！

思い通りに行かないもどかしさに、癩癩を起こしそうだと思った。

こんなにも間近で見つめられたまま、必死でリボンを結ぼうとしている姿は、さぞや滑稽に違いない。

そう思ったら、また泣けてきた。

「……っ、うえっ」

こらえきれずしゃくりあげると、体を引き寄せられた。

「ああ、ああ！ 違う。俺が悪かった。また、おまえを責めるような事を言ったな。許せ」

泣きやもうにも、嗚咽が止まらなかった。

安心したせいもある。

地主様だ。

ぎゅうと抱きしめて包まれて安心した。

地主様だ。

もう、来ないかと思っていた。

あんまり期待してはダメだと、自分に言い聞かせてもいた。

でも、来てくれた。

何とも言えない気持ちを、どう表せばいいのかわからない。

地主様の香りと体温に包まれて、恥ずかしくなってしまう。
まだ胸がはだけたままだ。

腕で庇いながら、もぞもぞと体をずらそうとした。
そんな風に身を任せきれない私をどう思ったのか、不満そうな声
が降ってきた。

「カルヴィナ。そんなに警戒しないでくれ、と言っても無理……か」
そっと体を離されたと思ったら、地主様はリボンを結び直してく
れた。

ホッとして、少し肩の力が抜けた。
と、思ったらまた紐解かれてしまった。

「!？」

気が付けば背中を寝台に預けて、天井を見上げていた。

「ここならお前にしか見えないから、いいだろう？」

何を言われているのか、理解できなかった。
混乱したまま、自分の鼓動を跳ねるのを聞いている。
その心臓の上に、温かなぬくもりを感じて我に返った。

ここなら――。

それはすなわち、私の心臓の上だった。

「やあ！」

「カルヴィナ」

かすれた声にすら、肌を嬲られたように思えて、ただただ震えていることしか出来ないでいた――。

地主様の動きが止まった。

驚いてしまい、思わず見上げた。

よくよく耳を澄ませば、馬のいななきも聞こえてくる。

そう思ったら、控えめに扉を叩く音がした。

そつと氣を使うように声を掛けられた。

「エルさ……んう！」

唇同士をそつと合わせるようなものではなく、噛み付かれたと表現するのが相應しい気がする。

どうしたとか、怒らせてしまったようだというだけでは伝わってくる。

また、ぎゅうと抱きすくめられてしまう。

「もう少し、時間がかかる。だが必ず迎えに来るから、待っていてくれ」

そう言い残すと、地主様は去って行った。

私はといえはうけたまま、言葉もなくその背を目線で追うだけだった。

レオナルド様。

私は本当にミノムシになってしまったかのように、何の言葉も出てこなかった。

危なかった。

安堵するけど、残念な気もしてしまう。

残念――？

自分にそんな想いが湧き上がった事に赤面してしまう。

指先で唇の輪郭をなぞった。

地主様の動きを再現するように。

はしたないのかもしれない、と一人顔を赤らめる。

自分で自分の両頬を打った。

そのまま頬を挟み込んだまま、体を二つ折りにする。

恥ずかしくて、誰も見ていないというのに、何となく顔向けできなかった。

誰にという訳では無いけれど、何となく。

私は臆病者だ。

差し出されたものを受取れず、かといって拒む事も出来ずに、ただ持て余しているだけなのだから。

カーテンにくるまったまま、動けずにいた。

『いいところ？』

小さくあくびを噛み殺しながら、私も古語で返した。

『そう。レオナルのところ』

『こんな時間に？』

『こんな時間に』

くすくす笑いながら、背中をぽんぽんと叩かれた。

96 ミノムシと地主と従者（後書き）

『えも言われぬ不安に押しつぶされそう。』

どこかで予感しているだけに、言葉にできないでいる魔女っこのです。

おお、シリアスだな。

さあ、がんばって！

応援、よろしくお願い致します……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8567n/>

大地主と大魔女の娘

2011年11月24日16時51分発行